明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可　明治四十一年七月一日發行（毎月一

女學世界

第八巻第九號



博文館發行

美顔水は天下唯一の美白光艶劑なり

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今滿天下の貴婦人令嬢佳人爭ふて之を用ゐ賞賛の聲囂すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

（本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ）

▲東京市内は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す



中元と御贈答品

最も喜ばるゝ御進物品は何ぞや？

最新流行の内外百貨を取集たる三越呉服店は中元及び暑中の御進物用として特に左の品々を澤山に準備致し置候間多少に拘らず御用命奉願候

▲呉服物―白縮緬、白絽、染帯、壁御召、袴地、絽友禪、明石、透綾、上布類

▲木綿物―紅梅中形、友禪青梅、吾妻セル、絞新絹、菖蒲縮、紺絣、白絣類

▲雜貨類―帽子、洋傘、香水、石鹸、手巾、玩具、文房具、履物、旅行用品類

▲美術品―繪畫、陶器、磁器、七寶、漆器、團扇、扇子類

▲商品切手―當店の商品には總て共通にて體裁頗る宜し

デパアトメント、ストーア

三越呉服店

東京日本橋

女學世界第八巻

第九號目次



女（いの一）






1
2
3
4
5
6
7
8

(見よ)全快望む病人 (見よ)美顔望む婦人 (見よ)

●弊店用達部を利用せば何種の品でも安く品質のよき品が買はれ升●

當月中賣藥化粧品に限り手數料貳割引

(一)白色化粧品
(二)わきが薬
(三)毛はえ薬
(四)月やく薬
(五)梅毒薬
(六)皮膚病薬
(七)肺病肋膜薬
(八)胃病の薬
(九)目薬
(十)りよまち薬
(十一)化粧品各種
(十二)其他何病の薬にても

(注文用達營業の特色)

●當店は東京中にある品なれば書籍 機械 衣服裝飾品時計指環に至る迄何品にても**安價**に買ふて差上げ升

(問)何故に安く買へるか (答)僅少の手數料丈にて直接製造所に交捗して買て差上げる故で安く買へ升

(問)何故に**最大効能**ある品を買ひ得るや (答)例へば**賣藥**又は化粧品の如き其**効能**を**過大**に云ふ事多く其種又多く何れが効能あるや分知し難く廣告等を一見し効驗なき者に金錢を徒費する害を救はん爲責任を以て撰擇し**病氣**に効能多き**賣藥**或は**化粧品**を買て差上げ升

●注文注意●

賣藥申込の節は病氣の模樣發病の年月日年齡等可成委敷申込適當藥送る

●照會或は營業案内申込切手參錢入の事

●送費料顧客のふたん

●注文以外の相談は切手六錢封入せされば返事せず

●送附其他秘密を守り自己の病を他人に知らるゝ事なし

●注文用達手數料拾圓以下六錢貳圓以下價格壹圓に付金八錢

●拾圓以上十錢切手貳割增し

女(いの三)

東京神田竪大工町 丸二商會郵便注文用達部 (振替貯金口座壹四参壹九番)



衛生家必携懷中良藥
ゼム
THE GEM
姫達御許へ
七夕祭る月としいへばいと優なれど、七月は暑さ最も恐ろしき月に有之候。殊に學期の試驗控へ給ふ學舍の姫達など、如何御惱みあらせられ候やらん、御察申上候。かゝる時よ、不肖「ゼム」こそ姫達が最も忠實なる友に候なれ。文机の前、氣倦み頭腦疲れ、頭痛氣鬱等感じ給ふ折、通學の途、息切れ身勞れ、發汗渇き等覺え給ふ節、花の脣「ゼム」數粒を含ませ給はずば、爭でか精神甦り給ふべき。實に姫達が忠實なる友は唯「ゼム」のみに有之候へば、猶一入の御親昵賜り度くて斯くなむ。
ゼム定價 七十五粒入十錢 四百粒入五十錢 容器ゼム百六十粒入廿錢 九百粒入一圓二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(いの四)

池畔



宮崎與平筆



千代田白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新原料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶卅五錢 小瓶二十錢 水製 廿五錢）
香油（大瓶卅五錢 小瓶廿五錢）
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

造花材料

器具並半製品

●刺繍用器具 並に材料

●袋物器具 並に材料

●摘ミ細工 壜細工 材料

●刺繍、摘み細工、日本畫用 として特製せし 白無地絹張團扇

此切取線を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す（女學世界）

切取線

東京市本郷區弓町二丁目 倉持商店

當今一番よくきく月ざらへは何か

●諸孃姉方に急告す●

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極ず各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とにより普く特効藥を蒐集し直接大醫に係ると同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ケ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歲に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

理想的最良藥

改良月ざらへ 女月丸

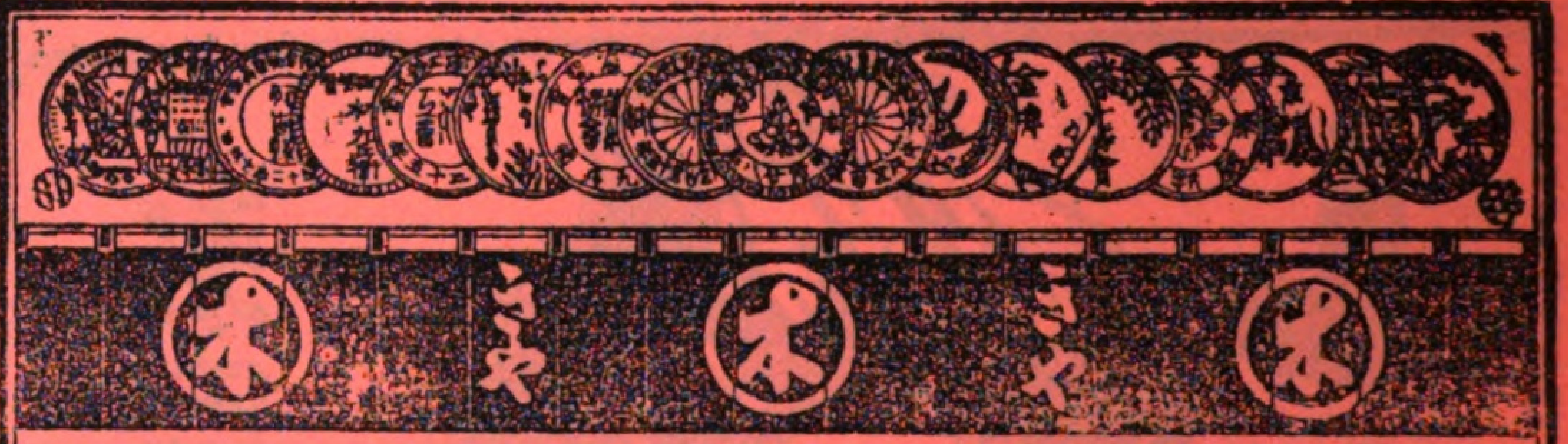


藥價 一週分 六十錢 二週分 一圓十錢 特製 四週分 二圓廿錢 六週分 三圓卅錢 送料各四錢宛

●本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

調劑本舖 東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地 小宮愛生堂

女（ろの二）



美術
漆器
蒔繪

御茶道具 ぜんわん 家具 其他 [illegible] [illegible]杯 製造

めづらしき品陳列場設置有之候間御隨意に御縦覽多少ニ不拘御用向被仰付度偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋區室町貳丁目

木屋本店

林九兵衛

電話本局（九百九十七番 千七百十番）

電信略名（キ 九）

根治確証

わきが

新治療 ラピヨシン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淸驅逐し悪臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

原名 ベクネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベクネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやした人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

色の白くなる

品効 ハントコロン浴液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし徐に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくさらい

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば毫すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるもたやすく下る身體に害なく月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓參拾錢小包料拾貳錢

專賣 東京神田小川町三十九

オリエンタル藥舘

電話下谷二五三五

女（ろの三）


乳白化粧水
レート
乳白化粧水レート
は皮膚を美しく脂肪の過多と過
少とを加減する唯一の化粧水で
常用すると日に焼けたりニキビ
ソバカス其他吹出物を防ぐ上に
奥床しい香氣を放つので醫藥の
博士大家が其家庭で賞用せる夏
季必需の化粧品であります
定價參拾錢　五拾錢　壹圓
販賣店は到る所の和洋小間物化粧品店及賣藥店にあり
東京　平尾賛平　大阪

女（ろの四）

ほたる



河崎蘭香筆

醤油醸造界の一大革新

最良醤油



最上醤油 ヒシニホン

最上醤油 フジニホン

天下一品 マツニホン

◉資本金壹千萬圓

釀造元 日本醤油釀造株式會社

東京深川區小名木川通　電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

特色

製造清潔
品質佳良
黴を生ぜす
價格低廉

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醤油を釀造販賣す

特色

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町 合資會社日本醤油東京販賣所　電話浪花「長」一四六番

其他 東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

女(はの一)

懸賞文學雜誌

●毎月壹日定期發行 増刊四回臨時二回 ●口繪彩色寫眞外誌友面影數頁皆美麗 ▲大判百廿頁挿畫澤山挿入



▲安いと 天下に敵なし

價 一冊送共拾壹錢半 年分壹圓五錢 壹年分金貳圓 ●臨時増刊に限り例號二倍

●第四年十號 ▲▲▲▲▲七月一日發兌

内容 ○美文○お伽噺○脚本○和歌○小説○日記文○新體詩○新論文○短文○俳句○實用文○新歌謠○文壇餘興○學校生活(以上懸賞募集)其他名家短篇及び英文○女醫顧問○誌友倶樂部

●第四年十一號 第三定期増刊 美人草 七月十五日増刊 價送共拾壹錢

七月號には第二臨時増刊「文壇の光」
――(大懸賞傑作詩文募集の方法あり)――

發行 東京京橋大鋸町 振替壹七貳九番 女子文壇社

大賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 上田屋 至誠堂 良明堂

◉七月一日發行第五卷第七號

青年雜誌 ハガキ文學

▼要目▲

◎口繪寫眞版「狂瀾怒濤」「誌友の面影」木版色刷「平凡」等其他挿繪數面◎讀者餘興として書探しを附す

毎號懸賞募集す 青年投稿家奮て寄せられよ 何人と雖も投稿は大歡迎す

▲壹冊金十錢郵税一錢▲七冊前金郵税共七十五錢

發行所 東京小石川 日本葉書會

賣捌 日本全國各書林

女(はの二)

松方侯爵序（自筆の假名文）

橫瀨鶴南氏跋（筆法傳說）

天知。星野愼之輔君著

新式 速成書法講義 假名書き之部

和本仕立二百頁餘
木版手本數十頁
正價九拾五錢
送料拾錢

社會に好評を博しつゝある星野氏習字の講義出たり、同氏多年の考案、習字教法の改良、秘傳の公開、千蔭流假名の速達法等を最も平易に口述せるものにて、秩序的に一々手本を附して其習方を說き、一字の組立、一行一列の配合、墨繼法より終に書翰及繪葉書等の書方を敎ゆ、其親切にして吝まざる事未だ如斯著書あるを知らず、謹厚なる松方侯爵が劇賞の聲を漏されたるにても其價値を知らる女學生諸君の座右には特に缺く可らざる良書也

發行所 東京丸の内 報知社出版部

大賣捌 東京堂、上田屋、至誠堂 東海堂、新橋堂、北隆館

女（はの三）

造花原料

ハ東京市九段坂

吉住商店に限る

営業種目
造花器具
造花材料
造花及半製品
造花用葉類
造花装飾用達
摘細工材料

新店の特色
待客之親切
品質善良
價格低廉
出荷迅速

営業用御注文の方ハ東京市九段坂
吉住商店宛申込まるべし

於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醤油

HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN

宮内省御用達

千葉縣銚子港 田中玄蕃醸造

鶺と女郎花



川端玉章筆

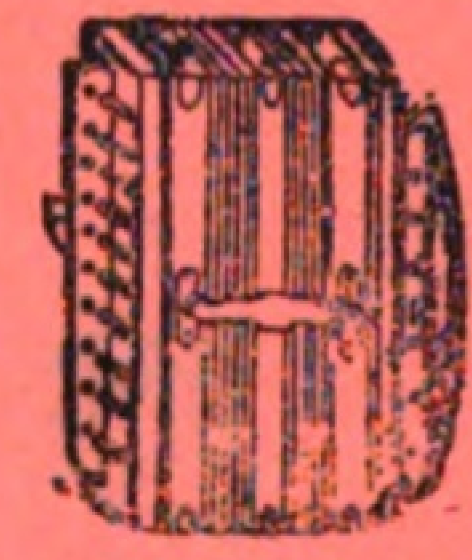
興津



大下藤次郎作

舶來

手風琴



金参圓卅錢以上

金拾八圓迄

新着荷



三十二圓

四十圓

五十八圓

六十圓

七十五圓

八十五圓

以上二百五十圓迄

各種

無師獨奏

紙腔琴



上製 金拾六圓

中製 金拾二圓

小形 金六圓五十錢

東京博覧會一等賞牌

西川風琴

◎舶來「バイオリン」新荷着



第一號 十八圓

第二號 十九圓

第三號 二十一圓

第四號 二十八圓

第五號 三十三圓

第六號 三十八圓

第七號 四十五圓

第八號 五十圓

第九號 五十八圓

第十號 六十八圓

以上 四百圓迄各種

箏曲

◎バイオリン樂譜（郵税各二錢）

松風 正價金廿五錢

椿盡し 正價金三十錢

江の島の曲 正價金三十錢

和洋バイオリン



東京勸業博覧會に於て

宮中御買上の光榮を賜ふ

附屬品各種取揃有之候

和洋樂器大販賣所

十字屋樂器店

東京市京橋區銀座三丁目二番地

電話新橋一二五九

振替口座七一五八

東京博覧會一等賞牌

西川洋琴

◎獨逸製「ピアノ」新荷着



第一號 三百五十圓

第二號 四百圓

第三號 四百五十圓

第四號 五百圓

獨逸ブランパッパ會社製

金五百五十圓

金五百七十五圓

金七百五十圓

其他各種

樂隊用

吹奏樂器



バス、バリトン、テナー、アルトコルネット、クラリネット、外各

箏曲

うすの聲 正價三十錢

根引の松 正價四十

替手六段の調 正價十

御國の榮 正價廿

女（にの一）


◎東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
◎山葉製オルガン（金拾八圓以上）
ピアノ（金參百卅圓以上）
◎鈴木製ヴァイオリン（金貳圓以上）
◎獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）
オルガン（金參百五拾圓以上）ヴァイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器絃樂器各種
◎舶來樂譜
◎獨乙國製樂器
新荷着
目錄御入用の節は往復葉書にて御申越次第御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四九一番

女（その二）

女子高等師範學校教授 飯盛挺造
女子高等師範學校教諭 近藤耕藏 同編

物理近說

●挿圖百六十六 ●總頁數二百十四
●印刷鮮明製本堅牢 ●正價八十五錢 ●郵税八錢

物理の學は其論する所皆吾人日常の生活に緊切なるもの其理義動もすれば高遠に馳せ艱澁に陥る此書は平易の文卑近の例を以て最も容易に斯學の大意を會得せしめんとの希望より成れるものにして殊に高等女學校及稍之より高き科程の教課及參考に適し仍は獨學研習の好資料たり全篇の記述簡易明瞭にして爾かも物理學最近の發見は舉げて漏らさず從前類例少なき良書なり今回刊成り發行す。

發行所

東京日本橋區通二
電本 二八番
丸善書店

東京本郷湯島切通
坂町(電本一三〇三)
南江堂書店

意匠登錄

登錄商標
玉おしろい
雲井

定價瓶入 金貳拾錢 同曲入 金拾五錢 金六錢

この玉おしろい(雲井)の儀はへちまの水にてよく晒し玉に製したる白粉へ化粧料の藥品と龍腦麝香の芳しき香を加へ候故顔の皮膚を清く艶を出し其他御顔一切によろしく腫物を防ぎ候等實に類なき御重寶なるおしろいなり

御用法は常のおしろいの如く水にてときて御使用相成候得ば麗しく相付申候

東京市京橋區銀座三丁目
松澤八右衛門
(電話新橋特五百二十四番)

賣捌は各地小間物店賣藥店にあり

簞笥用匂袋

壹組 金壹圓
金五拾錢

遠國は小包料金十錢御增添へ御注文願上候也
●東京市京橋區銀座三丁目 松澤商店

(女にの三)

松

樂界に於ける最高評の樂器

山葉風琴

金拾八圓以上
金參百五拾圓迄各種

◉樂譜用紙、樂譜帖各種◉

新刊書

文學士 吉丸一昌先生歌章擔任
北村季晴先生編纂

中等音樂教科書

（菊判洋裝、製綴堅牢）

卷壹既刊定價金四拾錢郵税金六錢
卷貳既刊定價金四拾錢郵税金六錢
卷參發行定價金四拾五錢郵税金六錢
卷四續刊

本書曩に卷壹、貳を發行せし以來樂界に於ける多大の稱贊を博し各府縣の師範學校、高等女學校等の教科書として續々採用の榮を蒙りつゝあり而して今や**卷の三**を上梓し倍々其眞價を發揮せんとす

山葉洋琴

金參百參拾圓以上
金千參百圓迄各種

新刊書

東京音樂學校教授 島崎赤太郎先生閲
福井直秋先生著

初等和聲學

（洋裝頗ル美製本）

定價金六拾錢
郵税金六錢

懸賞當選（文部省檢定濟）發明唱歌

定價金五錢　郵税四册迄貳錢

鈴木ヴァイオリン

金貳圓以上金百廿圓迄
弓金七拾錢以上各種
箱金壹圓五拾錢以上各種

◉音樂原料輸入品各種◉

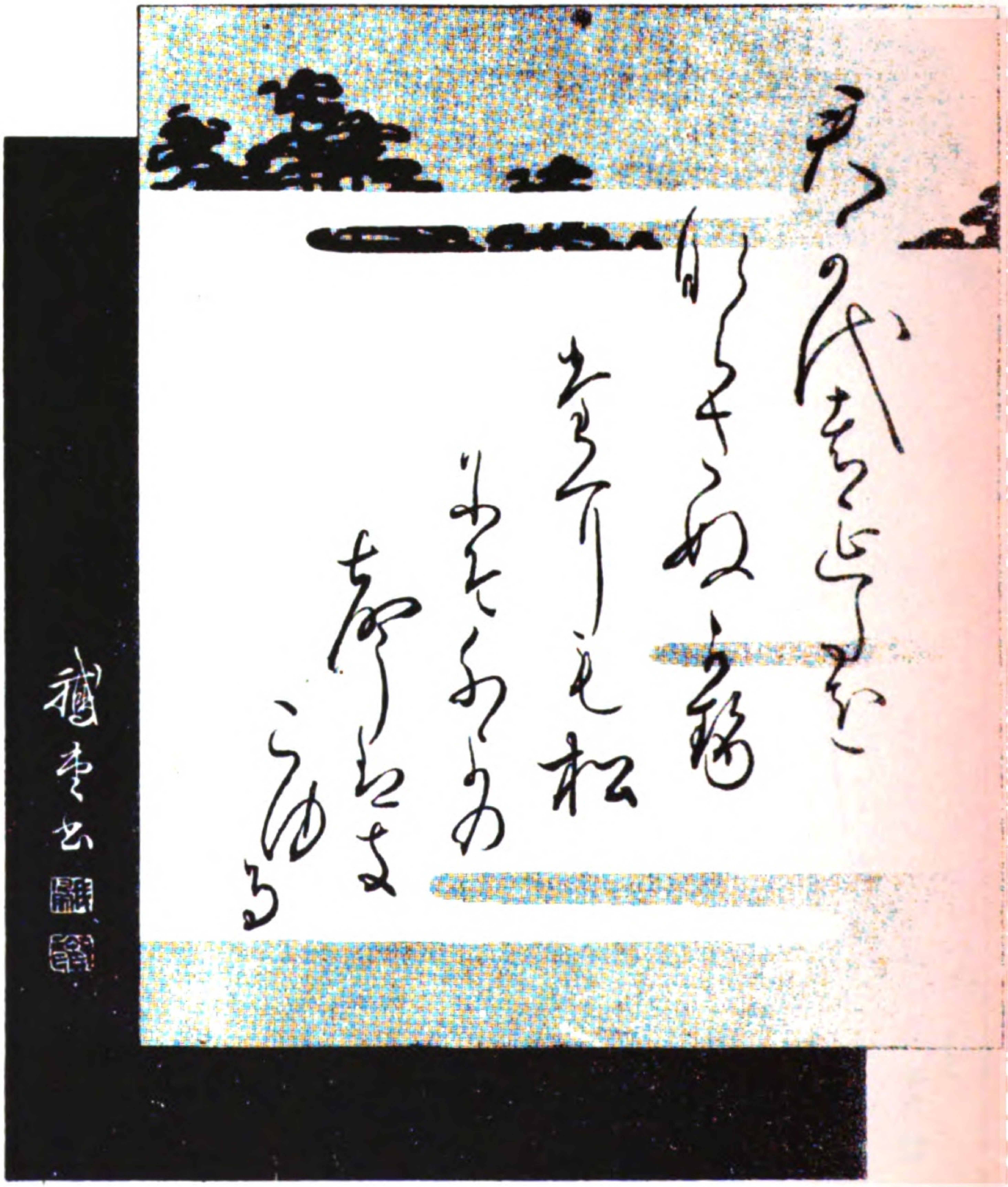
(その四)

弊店は以上の外舶來洋琴風琴、ヴァイオリン樂隊用吹奏樂器、手風琴、ハーモニカ及其他西洋樂器各種並に和洋の音樂書を販賣し階上階下には各種の樂器を陳列し最も叮嚀懇切に各位の御需めに應じ候に付陸續御來店御購入の程希上候猶ほ郵劵貳錢御送附あれば詳細なる目錄進呈仕候



（ピアノ、オルガン調律修繕應需）
新設電話新橋四八八〇番

東京市京橋區竹川町十三
合資會社 **共益商社樂器店**
電話新橋五二九番
振替口座壹五八〇



甜瓜



河崎蘭香筆


營業案內御入用の節は此の切取
外に郵劵十錢添へ御申込を乞ふ
美
造
術
花
材
料
發賣御案內
實用新案登錄第七九七八號
モールスシホン
最も嶄新奇拔なるもの一見淸凉を覺へて三伏
の暑さも忘るなるべし
天野卯兵衞商店
東京橫山町壹丁目十六
電話浪花一六四三
振替口座四九七〇

（ほの一）

女（ほの三）

II

誰でも出來る暑中の娯樂 ● 御婦人方の智慧くらべ

金壹千圓の大懸賞

專門大家の發明されました「大學白粉」は發賣日猶淺きにも拘りませず一般御婦人方の大高評を博し御愛顧を蒙りました其御禮として今回誰樣にも出來る最も面白い趣味のある左の大懸賞を催して御婦人方徒然の御慰みに供する事にしましたから左の問題を御答え下さい。

大學白粉を愛用の御方は
御運の善いお方へ

何も六ケ敷事はありません
壹千圓の物を進呈いたします

問題

●全國中何處の化粧品小間物賣藥店でも賣つて居ります大學白粉の函の外側六面全體に●**大學**と云ふ文字が幾つと又た●**花**の繪が幾つありますか「はがき」に書て被下い夫れと此●廣告を御覽になりました「雜誌」の名を書いて下さい序でに大學白粉を御買ひ下さいました店の名と町名とを御書添へ願升

●解答用紙は郵便はがきに限り升

●解答の早い御方には德があり升先着の方三千人へは抽籤に拘らず賞品の外に御婦人方になくてならぬ(化粧秘訣)と云ふ美麗な本を差上ます

●解答の〆切は**八月十五日**

賞品

一等	ダイヤモンド入十八金指環(一人)	價格	百五十圓
二等	婦人持十八金側時計(二人)	同	百二十圓
三等	東京製桐衣裳箪笥(二人)	同	六十圓
四等	紹縮緬羽織地(二人)	同	三十圓
五等	婦人用流行洋傘(五人)	同	三十圓
六等	洋式化粧用鏡臺(五人)	同	十五圓
七等	新柄浴衣地(三十人)	同	四十五圓
八等	博多織伊達卷(五十人)	同	五十圓
九等	絹ハンカチーフ(百人)	同	五十圓
先着賞品	化粧の秘訣(三千人)	同	四百五十圓

●解答の「はがき」は東京、大阪有名の新聞社立會の上東京市日本電報通信社に於て最も公平に廻轉抽籤機を以て抽籤致し升

●當籤者は八月廿五日以後新聞又は其他の方法を以て發表致し升

●解答申込所左記御便宜の所へ御申込み下さい

大學白粉發賣元　東京京橋區尾張町一四　大阪東區高麗橋五丁目　**矢野芳香園**

綠蔭



女子共立會洋服部小集



毛髮を黒く長くふさくくする
椿油にて精製したる
ランラン香油

女學世界愛讀者に限り本店は一割引



色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる
ランラン化粧水

〜〜兩種共一瓶定價各卅錢送料八錢づゝ〜〜
（賣捌所は全國到る處にあり）

毛髮の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衞生大家及び毛髮を大切にせらるゝご婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランランオイルは最も純良なる椿油に毛髮の營養に必要なる藥劑を加へロースバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髮の助育を專一としたる香油也

大阪西區新町通三丁目
發賣元　福田源次郎商店
電話西千六百壹番　振替口座六〇八六番

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆樣のご承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あること發見せられ醫學大家の盛に賛評せらるゝ所となりました

ランラン化粧水は此配合に困難なる牛乳とレモン液とを最も完全に調配したる最新最良の美顏劑にして色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日燒け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

女（への一）

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

(藥價)一劑四十二錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入美容料

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製二劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は　並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥　**專賣元**　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢　頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢　着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増のこと

以上貳藥　**專賣元**　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**　(電話下谷五四六番)

女(への三)

廿

本品は多數のミルク中に最も乳酪に富む



全國到る所の洋酒食料品店
及有名なる藥舗にて販賣す

女(への四)

米國の夏期學校



北米マツサチユーセツト州ノールスフイルドに開催せるムーデー氏の夏季學校
（櫻井ちか子女史寄贈）

慈愛



博文館寫眞製版所製版印刷

消夏の好伴侶

◎橋本邦助装書
名所はがき **海**
一輯各六枚組
定價各十五錢
第一輯　大磯之部
第二輯　江の島の部
第三輯　靜浦の部

◎佐藤生巣装書
名所はがき **興津**
六枚一組
定價十五錢

◎佐藤生巣装書
名所はがき **逗子**
六枚一組
定價十五錢

◎佐藤生巣装書
名所はがき **葉山**
六枚一組
定價十五錢

◎佐藤生巣装書
名所はがき **鎌倉**
六枚一組
定價十五錢

◎橋本邦助装書
名所はがき **箱根**
六枚一組
定價十五錢

◎大谷庸装書
名所はがき **甲信名勝**
六枚一組
定價十五錢

名所はがき **日光**
上下各十枚
定價各廿五錢

富士三景
三枚一組
定價六錢

東京名所
自第一輯至第六輯
各五枚一組
定價各十錢

發行元　東京小石川　日本葉書會　◎　發賣元　東京本町　博文館

女(との二)

見よ讀め

最近絶好の新療法 醫界空前の大成功

從一位侯爵久我閣下題字、腦神經專門醫學士常持先生述

腦神經衰弱ヒステリー療法

事業家、學生、試驗前の無理勉强其他過度に精神を勞し故なく煩悶を事とする腦神經衰弱ヒステリー患者の救命主は即ち本書也

送費貳錢送れ進上

▲施本所 東京京橋弓町二十二番地 弘濟院

通信教授 **產婆學講義錄**

目下會員募集中

規則見本要郵券三錢

東京四谷區內藤町一番地

東京產婆講習會

新學期開始 毎月一回 六ケ月修業

本廣告切取り申込者に束修を半減す

博文館發行圖書陳列所

館內に設けあり

◉**圖書目錄** 御入用の方は往復葉書で御申込次第直ちに送呈仕候

東京日本橋區本町 博文館



◉佛國土產の最新白色新劑

色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵劵二錢送れ美容のしるべ呈て敎ゆ

東京市東兩國小泉町二十七番地 愛隣藥院

秘訣 リウマチス全治

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵劵二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑 河奈とめ女

女(との三)

七百圓の懸賞文藝を募集す

弊園製造の『御園白粉』が海內無比の盛運に向へるは品質佳良の故とは申ながら偏へに世の眷顧厚きに因るなり。弊園は聊か文藝に寄與して此厚き眷顧に酬ゐるの微意を表せんとし玆に總額七百圓の賞を懸けて狂歌、狂句、情歌の三種を募集す。（應募者は女學世界の廣告に依ると付記せらるべし）

應募規定と條件

一、內容　狂歌、狂句、情歌以上三種とも御園白粉及び御園各種化粧品の品名を讀込むか又は暗に其特長効能等をほのめかすも可なり是を第一の條件とす。但し品名特長効能等を明瞭に御承知なき方は白粉其他御園化粧品小箱の中に封入せる能書を一讀されよ。

一、制限　投稿用紙は郵便葉書或は葉書同形のものを用ひ最初に作の種類を見易く書し一枚に一首三句までを限りとす、尤も一人にて三種の應募をなすは隨意なれど一枚の用紙に異種のものを記し又は三句以上を認めたるものは總て沒書とす。

一、投稿宛所　は東京市芝公園第九號地胡蝶園懸賞文藝係とすべき事、應募者は住所氏名を必ず明記せらるべし。

一、選者と賞金　下記の當選員數は各種を合せる數なり即ち一等三人とあるは狂歌狂句情歌に各一人と云ふ事なり二等以下是と同じ。

一等賞	金參拾圓	三人
二等賞	金貳拾圓	六人
三等賞	金拾　圓	九人
四等賞	御園香水代價參圓	七十五人
五等賞	小說伯爵夫人一揃	百五人
	田口掬汀先生著代價一圓六十錢（上田屋發賣）	
六等賞	小說心の影	百五十人
	柳川春葉先生著代價七十五錢（今古堂發行）	

狂歌選者　黑田撫泉氏——伊坂梅雪氏
狂句選者　柳川春葉氏——伊原青々園氏
情歌選者　中內蝶二氏——石橋思案氏

一、締切と發表　締切は本年八月廿日限り、發表は本年九月廿日以後、當選作品は時事新報、萬朝報、都新聞、每日電報、報知新聞、國民新聞、東京朝日、大阪每日、大阪朝日、新愛知、名古屋新聞、福岡日々、河北新報、北海タイムス等に揭げべく賞金及び賞品は揭載同時に贈呈すべし。

女（との四）

女子英學塾卒業生



（長谷川寫眞店撮影）


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又)コ八
振替口座七八〇七
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、帯留、ブローチ、手釦、紀念品一式
最新の流行品目録郵券六銭封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

女(ちの一)

文藝倶樂部臨時增刊

第十四卷第拾號

講談十八番

本誌曩きに「落語十八番」を出だし、江湖の大喝采を博したれば、今回は左記現代講談界の驍將に各自得意の讀物を口演せしめて一卷と成す。其の趣味に富みて面白さ限りなきは、恐らく古今獨歩なるべきを信ず！

洋裝菊判紙數三百廿頁
正價金廿五錢
郵稅（本號限り）八錢

七月十五日發行

本誌目次

東京　博文館　本町

女（ちの二）

萬朝報曰く婦人世界は日本雜誌中部數第一也と

記事有益

婦人世界

體裁優美

七月一日發行 毎月一回 三卷第八號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊分郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎女家庭教師の實歷談 内村留子

◎英語の上達する法 女子英學會主任 藤生貞子

口繪

△名家の令孃△新婚寫眞△一條公爵夫人△海水浴△彩色石版畫△愛國婦人會總會△令孃團欒の圖…

▲實驗上より見たる女學生の運命判斷……三輪田元道

▲他家を訪問して不愉快に感じた事……ドクトル夫人 川瀨富美子

▲教師が女學生より受けたる教訓……日本女子商業學校學監 嘉悦孝子

▲斯くの如き育兒法は必ず失敗す……清風生

▲多年私の實行せる有益なる讀書法…女子高等師範敎諭 後閑菊野

▲姙娠中手足の水腫は如何に注意すべきか……醫學博士 榊順次郎

▲夏季に於ける牛乳とミルクの注意……醫學博士 加藤照麿

◎弦齋夫人の料理談 松魚生り節の料理

◎軍人の妻としての二十年間 大將夫人

懸賞

文藝◎昔話◎笑話◎習字◎頓智談◎繪探し其他

▲男女結婚論 見合は必ず三度せよ 誰が縁談を決するか 婿は如何に擇むか……村井弦齋

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番） 賣捌全國書店

女(ちの三)

女(ちの四)

手藝の實習



大日本高等女學會棉細工の教室（記事參照）


畏くも
内親王殿下御用
高等美顏
無鉛毒薄化粧
フエスクリーム
おしろい
價三十五錢
東京日本橋區本町二丁目
チエリーオイル本舖
高橋初次郎製

女(りの一)

少年世界臨時増刊

歸省みやげ

七月十五日發行



全一册洋裝菊判
正價金拾錢
郵税(本號限り)四錢

歸省は學生の怡樂、平素勤學の報酬也、一年相見ざりし故國の山河に接し、懐しき弟妹朋友と歡笑の裡往を談じ來を語る、或は怒濤打ち寄する磯濱の邊、蟬聲喧しき林池の畔に遊び、或は萬丈の飛瀑に浴し清涼の窓下に嬉戯す天眞の樂土此快にしかず、本書はかゝる間の消息を記述すること詳密、表紙の美口繪の麗は言を俟たず、汽車の窓に筆を起して、村境の見送りに局を結ぶ、正にこれ一篇の詩、讀者は自ら書中の主人公となりて、無量の感懐油然として起らん、若し夫れ小波氏の『錦の袖』に至りては、故郷に飾る錦を主題として構想絶妙に、少年讀者の美文數百篇、亦燦然光彩を放てり

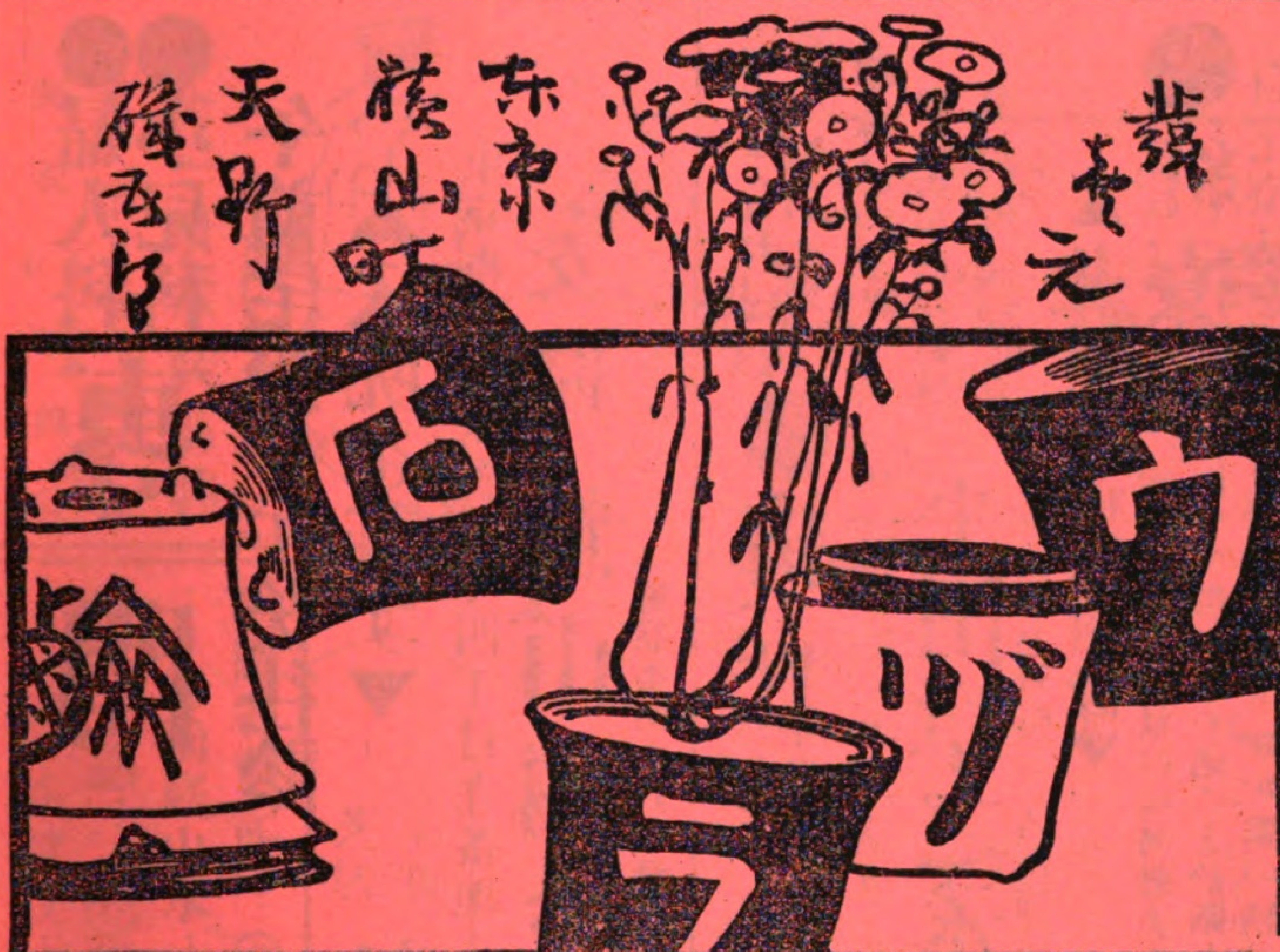
▲表紙(お迎ひ)…懸賞書　▲口繪(おみやげ)…片山春帆
▲寫眞版(故郷の山川)…八頁　▲歸省の樂(數百篇)…少年諸君

○お伽芝居 **錦の袖**　大江小波君作　武内桂舟君畫

◎歸省前記……◎歸省後記……◎當座日記……◎わが家……◎函庭山水……◎採集と詩……◎東京みやげ……◎歸省十感……◎學校圖書館……◎試膽會……◎我が郷……◎戸外競技……◎其他數十項……

東京本町 博文館
營用電話二六二〇番　振替貯金口座二四〇番

女（りの三）



婦人の毛髪は如何にして黒く長く且つ光澤を出さしむべきか



御婦人方の髪の毛を如何にせば烏の濡羽色の様に黒く光澤あり且つ長く房々とすることが出來るでしようか。之にはどうしても毛髪の營養となるべきものを用ひなければなりません。そして毛髪の營養となるべきものは何であるかと申すと純粋の椿の油で精製しましたビユテーオイルが一番よろしいのであります。之れは村井弦齋先生が曾て婦人日常生活法に詳しく書いてありますから諸姉が疾くに御承知の事と思ひます

價は壹罎四拾五錢（送料八錢）で少しく高い樣で御座いますが御婦人方の毛髪を黒く長く光澤ある樣に致すのには此のビユテーオイルが我國で一番よいと云ふことは確く信じて居ります

女學世界愛讀諸姉に限り特に定價の五分引にて差上可申候

東京市日本橋區蠣殼町
水天宮前象印齒磨本舖
安藤井筒堂

日本橋區堺町
井筒屋

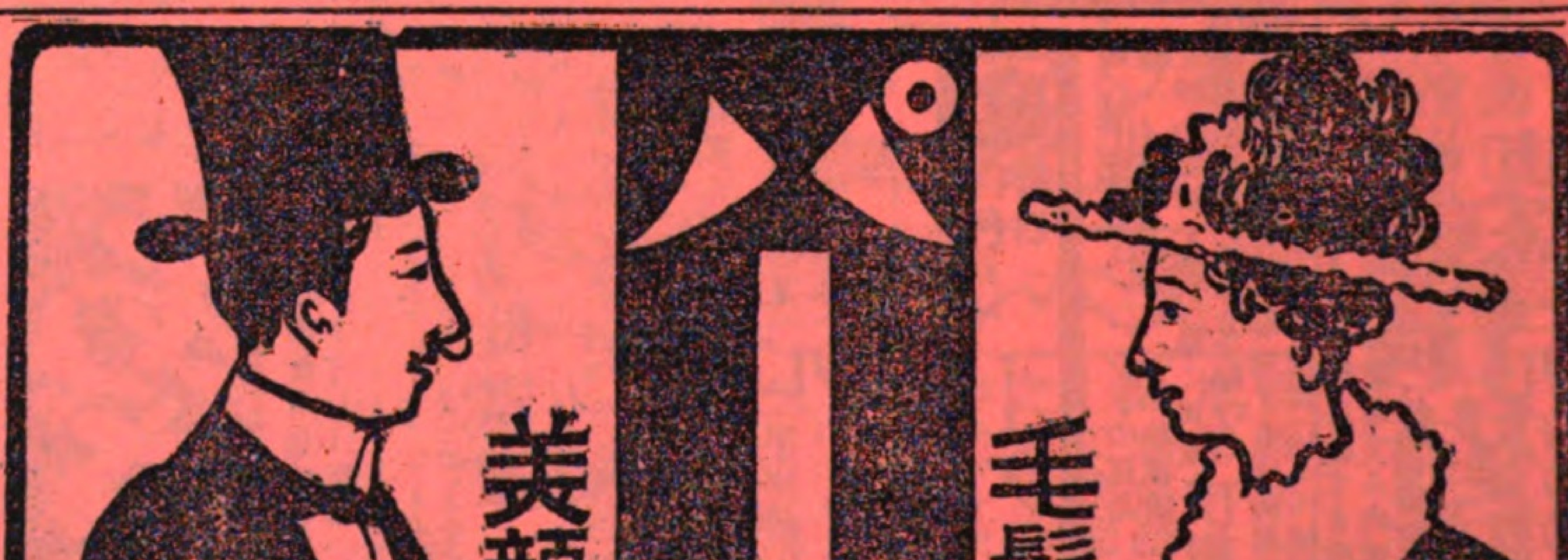
女(りの四)

理想の小供服



松江美佐子女史嬢


懐中要藥
清心丹
清心丹特有の効能は常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
登録商標
高木
東京市日本橋區元大阪町八番地
本舗 髙木與兵衛


パール
美顔料
毛髪料
コールドクリーム本舗 東京濱町 平民分店

女(めの一)

世界唯一 **麻病消渇の根治新薬**

痳滅(りんめつ)

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範薬なり、本劑はありふれたる普通の賣薬と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新薬を主劑とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新薬に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず奮て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息薬と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ薬價不廉なり用薬者豫め之を諒せよ薬價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

梅毒根治新劑

本劑(薬名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛經營の結果成功したる最新最良の薬物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効新薬なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。著毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**すること確證す從來醫療賣薬等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ 薬價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送薬す郵便切手代用貳割增しの事

有効無害 奏効確證 やせる薬

壹劑分薬價料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓拾錢 着金即刻送薬す

本劑は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ひて害なく身體美容となり程よくやせる特効薬なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき奇効を知られよ

世界無比 最新發明薬

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日 目に必らず美麗に除去

するところ**保險附** 新發明薬にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて**痕跡**を殘さず天然の**美質**を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新薬也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適當する薬を送付すべし價は各壹劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢ゟにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用す)着金即刻小包郵送す

以上四薬 **專賣元** 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館薬房**

白色特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々饒辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白く**し、**粗糙質**を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは舘主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を眩着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

輸入一手 **專賣元** 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館薬房**

男女學生の好讀物

綱島梁川遺書

寸光録

箱入頒美本
金壹圓貳拾錢
小包料金八錢

内容
寸光集
隨感錄
梁川隨筆
枕頭雜筆
病間日記

薄田泣菫新作

落葉

定價八十五錢
小包料金八錢

内容
戀愛觀
兩性觀
人生觀
藝術觀
懺悔録

薄田泣菫
薄田二鶴
合著

新書翰

頒美本
價四十五錢
小包料八錢

新時代の新書翰は如何に草すべきか。本書は幾多の趣味ある而して簡潔なる筆によりて之が實例を示せり。男女學生に缺くべからざる寶鑑たるは勿論單に讀物としても趣味津々一讀巻を掩ふに堪へざらしむ

東京市京橋區南小田原町
獅子吼書房發兌
振替貯金一五二七〇



らい病

此のらい病薬は數種の有名なる癩病治療薬を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新薬を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新薬なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二薬を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる薬品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣薬に非ず

チノサール　一ヶ月分　貳圓
複方チノサール　一ヶ月分　參圓

●醫師は癩病者を診察せば届出る規則なれど薬劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舗　醫科大學卒業薬劑士　從七位勳六等　三河國碧海郡刈谷町益世館薬局主　中島龜之丞鑑製

女(その三)

最上醬油　キハク印

釀造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハク又キハク

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

は欧米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き藪が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する賣審丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハッポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

•••••••••••••取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

本舖　醫科大學卒業藥劑士　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●

東京市
本郷六丁目赤門前　瓜生藥局
麹町區紀尾井町三　齋藤藥局
日本橋檜物町十八　龜田藥局
京橋區八官町八　野田藥局
神田淡路町二の四　森田藥局
芝田町四の一ノ二　加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二　岩本支店
赤坂田町四の一　竹內藥局
同青山北町五　四井藥局
本所吉岡町廿五　小島藥局
四ッ谷大傳馬町二　永野藥局
高松市片原町　新明藥局
堺市大寺南門東入　一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角　福知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り　安江洋反物店

大阪市平野町二　丹平商會
丸龜市本町　櫻井藥局
名古屋京町三丁目　飯田藤七
同　同　同　荒川長太郎
同鐵砲町三丁目　谷田藥局
神戶元町一丁目　西村閑史堂
廣島市橋本町　萬代藥局
神奈川青木七軒町　水崎藥店
仙臺市新傳馬町　櫻井藥局
岡山市橋本町　加藤藥店
弘前市下土手町角　菊地藥店
大津市菱屋町　磯崎藥局

赤十字社の總會



日比谷公園にて開催　（佐藤華江氏撮影）

女（その一）

中學世界

學事顧問

定期增刊

▲我輩は學事顧問官である。我輩の頭腦には、視學官達のやうに教育學や學校制度の智識はないけれども、現在生きた學海の事情なら、此道の古狸丈に、何でも來いである。▲凡そ、多望なる現代に生れて、コンマ以上の人間となるには、一度はそれ〲專門の學校の關門をくゞらねばならぬ。或はまた、獨學や夜學で立身しやうとするにしても、其所にはまた何等かの方法がある。▲併し乍ら、年々中學や小學を出る學生諸君が、只高等の學校へ這入る事のみは知つて居て、肝腎の道筋を知らぬのが如何に多い事だらう。▲この一冊は、實に職の爲めに飽く迄忠實で、勞力を惜まぬ我輩が、學海の中央で途方に暮れたり、波止場に立つて遙かな彼岸を茫然と矚めたりして居る人に對し、豫ての企畫なる念入の贈物である。

六月二十五日發行

全一册洋裝紙數二百四十頁

水彩畫、石版、寫眞版十數頁挿入

正價金貳拾錢郵稅(本號限り)六錢

博文館發行

東京日本橋本町三丁目八番地

振替貯金口座第二百四十番

▲最近學海事情

▲就學問題の解決

▲各種の目的▲特別の才能嗜好▲方向の撰定▲境遇と周圍▲學費の計算▲修學年限▲學生と誘惑等の問題

▲學校入學方法

▲高等學校▲高工▲高商▲高師▲海陸軍▲商船▲水產▲外語▲醫學專門▲農學▲農林▲美術音樂高等各官立學校▲各私立大學案內▲各種の高等豫備校

▲語學數學の特別準備▲勞働學生志望と米國の諸學校▲講義錄の話▲夜學中學校

▲學校卒業と就業

▲各學校卒業生現況▲實業方面▲醫學界▲教員官吏▲操觚者▲海員▲農業界

▲學窓生活

▲學生衞生十二ヶ月▲學生々活の經濟法▲寄宿舍▲下宿生活▲淸新なる娛樂の各方面▲夏季休暇の利用法

田口掬汀新作



口繪　渡邊審也氏筆
着色版コロタイプ刷

裝釘　平福百穂　結城素明二氏
表紙金銀箔五種模様

前編發行　大冊舶來紙刷
定價金八拾五錢　送費金拾錢

發行所　東京府荏原郡入新井村　不振會

▲時　は明治四十年の梅散る頃より菊日和の天長節頃までの事

▲場所　は東京を中心にして南は大磯北は奥州白河に至る間

▲事件　は舊物を破壞せんとする新思想と在來の思想との爭鬪

▲人物　は現に諸君の周圍にありて諸君と倶に世に活動する實在の人間

▲讀物　は是に依て混沌たる現社會の奥の奥まで知り得るだらう

發賣元

東京神田表神保町　上田屋

同區同町　東京堂

京橋區中橋廣小路　梁江堂

女(るの三)

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雑誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大判三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は専門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◉詳はしい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺(電話本局三千四番)

大日本淑女學會



七月（文月）

行事＝二日半夏生。七日七夕。昔は此日牽牛織女の二星を祭ると稱し供物を献げ詩歌を連ね抔して家庭の樂事となしたり。此月淺草觀音四萬六千日參詣人群集す。十一日より諸學校官衙暑中休暇。十二日精靈棚の供物など賣る草市立つ。十三日于蘭盆。此日より十六日まで盆と唱へ家々魂棚を設け供物をさゝげて祖先の精靈を祀り墓詣す。地方には今も猶盆踊あり。川々には河施餓鬼あり。又中元の祝儀とて親戚知己の間に進物の贈答あり。十六日閻魔の賽日男女雇人の藪入。二十日土用入。土用中衣服、什器・書籍の類の虫干をなす。

季節＝「小暑。」「大暑。」梅雨漸く霽れて炎威將さに熾ならんとす。衛生上最も注意すべきの時期なり。

家事＝一年中最も病人の多きは此の月なり食あたり。腸チブス、流行感冒等概ね此の頃の陽氣につれて襲來すべければ、飲食物に注意すべし。別して小兒ある家々にては生水を飲まさぬ樣氣をつくべし。又入梅中は冷溫常ならず、爲めに寢冷などする事屢々なれば夜氣に注意すべし。

食品＝鯨の味噌汁、水飩、胡瓜揉み、松魚の沖鱠、きはだ鮪の刺身、茄子の鴫燒、鰻の蒲燒、枝豆、玉蜀黍、桃。

遊楽＝都門納涼の地は角筈十二社、目黑、王子、芝浦海水浴、地方にありては相州逗子、大磯、興津、松島、嚴島、二見浦、堺濱寺、須磨、舞子等。

日曜＝五日、十二日、十九日、廿六日。





家庭破滅の原因

假面を剝げる人生

控訴院判事　今村恭太郎

私は多年裁判上の經驗から、知らず識らずの間に家庭や社會の暗黑面を多く見ました。イヤ世の中は裏に裏があるものです。私の長く携はつてゐた、又現に携はりつゝある職務は刑事の方で、おのづから人倫上家庭上の事を調べる事が多いのですが、成程、證據書類の表だけ、又は原被双方の言分の表だけを見たのでは分りませんが、深く前後の關係を辿つてよく〳〵調べ拔いて見ると、案外な處に怖るべき魔物が潜んでゐることを發見します。兎角に此の世の中に表面上の交際、即ち朋友、親戚、知人間の平生の交際といふものは、それは清潔なもので、その表面を見ただけでは、人間の(假面を剝いだ)眞相といふものは決して分るものではありま

せん。私なども此の普通一般の世の中の交際だけしてゐたらば、到底も這麼裏面は分らなかつたゞらうと、つくづく思ひます。友人だ、知己親戚だと、清潔な顔をして言つてをりますが、一皮剝いて了ふとそれは〳〵随分なもので、四十八手の裏表、虚々實々の陷め合ひ競り合ひに日もこれ足らぬ有樣、教育、財產、名望共に缺くる所なく、華美やかな、壯んな、人の羨む家庭の內部に飛んでもない醜事が潛んでゐるなどは珍しからぬ事です。

で、いろ〳〵な事件を扱ひ、いろ〳〵な裏面を觀てゐる間に、最も怖るべきものが二つあつて、これが家庭の紊れ破れてゆく禍根だと氣付いた事があります。

戰慄すべき貼札

その一つは外でもありません「同居人」といふものです。これが最うあらゆる家庭紊亂の禍の種であります。やれ姦通とか私通とか財物上の關係とか、種々雜多な紛紜を起して、夫が爲めに家庭が滅茶々々になつてゆく、その事件の中には必ず同居人といふものが居る。同居人といふものは實にあらゆる意味に於て家庭を毒害するものです。

かの男三郎おそゐの事件なども適例ですが、また私の扱つた事件に係ういふのがありました。何でも本鄉邊りに住つてゐた家族で、母親と娘二人——元來近縣の者で、鄉里には父親がちやんと在るのですが、姉妹を學校へ入れるに就いて、母親が一緒に出て來て、一家を持つて其處から通學させてゐたのです。處が女三人は不用心でもあり、室も空いてゐるからと言ふので、一人の帝國大學生と稱する男を同居させたのです。實は大學生でも何でも無かつたのですが、全然瞞着されて、さう信じきつてゐたのです。その内にとう〳〵姉娘と關係

が付いて了つた。けれども帝國大學生ではあり、といふ樣な考で、母親もまあ〳〵仕方無いと見ぬ振をしてゐるうちに、やがて妹娘も又傷つけられて了つた。のみならず漸々と最うひどい事になつて來て、娘達の衣服は質に入れられる、その家の名で借金は拵へられる。つまり娘二人を傷物にされた上に、財產までも滅茶滅茶にされて了つた――

これはホンの一例で、同居人といふものが其家の妻に娘に夫に家族の者に及ぼす關係は、實に千樣萬態で、そして千樣萬態の禍を釀してゐる。往來を通ると「貸間あり」の貼札が直きに私には眼に着く、そして何時もゾッと戰慄を感ずるのです。あゝ此の家庭も亦大破綻を起されるであらう。僅かの室代を得てそして終生拭ふべからざる汚點を家庭に塗り付けられるか、と坐ろに氣の毒の感じに堪へません。

破裂の順序

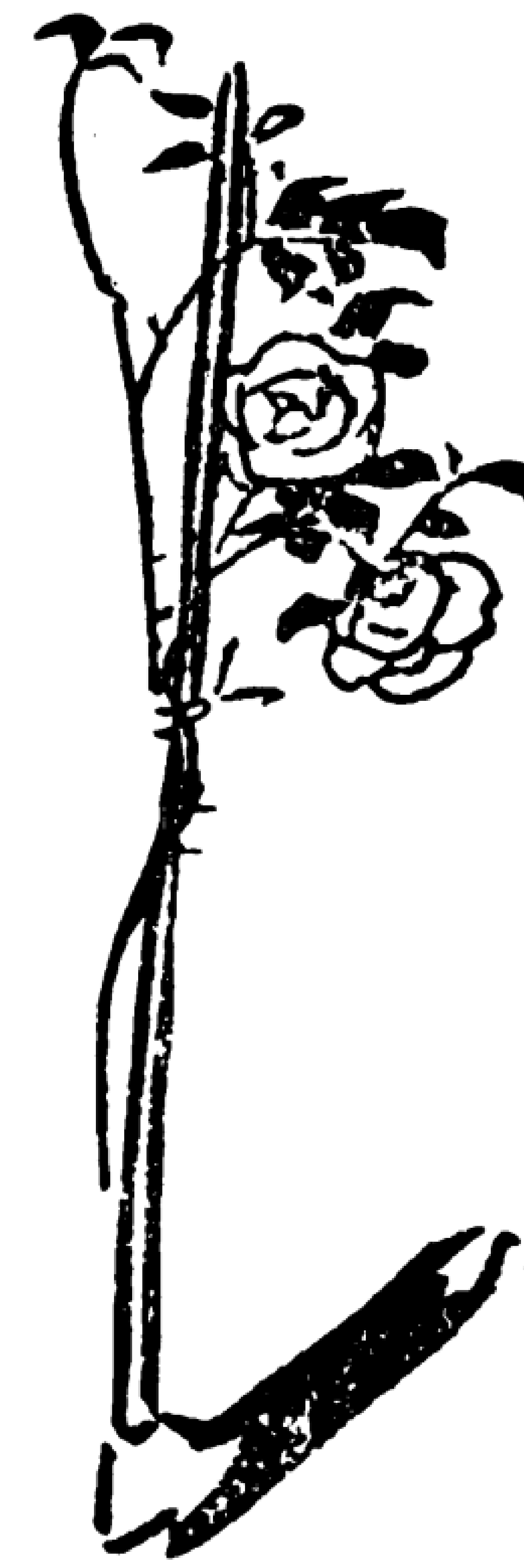
さて今一つは幼い子供を殘して父親が亡くなつて了つた、と恁ういふ家庭が又殆ど破裂を免れません。そして不思議に破裂の順序が定まつてゐて、まづ家庭が二つに裂れるのです。即ち亡くなつた主人の父母兄弟と、其の亡主人の妻即ち未亡人との間に衝突が起る。それで最う家の内は始終紛紜が絶えない。小感情小利害の爭ひを日夜やつてをる。子供の敎育が無論善くいかない。その子供などから又衝突が起る。家庭は常に暗い雲に鎖されて了ひます。

さて紛紜が愈々嵩じて來て親族會議となる。これが又決つと二つに裂れる。即ち未亡人派――姻戚の人々と、其の家の派、即ち親族の人々との鬩り合ひとなる。又よくある事で、その間から決つと自分の腹を肥さうとする親族が出て來る。さあ恁うなつて來ると最う始末にゆきません。果ては裁判沙汰になつて、法廷で血で血を洗ふ喧嘩をやる。その裏面を覗いて見ると實にひどいもので、恁麼事をさん〴〵やつてゐる内に、其の家庭は最う全然破滅です。日露戰爭後、戰死者の遺族が多く出來たと同時に、この種の紛爭が非常に多く

出來て、裁判に上つたものが夥しくあります。前に申した同居人事件の多いのも、一つは遺族の多くなつたなどにも因りませう。兎も角も這麼事から、見す〳〵家庭が汚れて壞れて行くのは慨かはしい次第であります。

されば世の主婦たり母たる婦人に此の二つをくれぐれも注意して戴きたいものです。夫に先だたれるといふ事は、これは防ぎ難い運命ではありますが、同居人の事などは斷然と自分で避ければ幾干も避けられる事でせう。一個人の家庭の上から考へても、社會の進歩の上から考へても、これこそ實に禍ひの種であります。（談話筆記）





出來損ひの子を作る家庭

留岡幸助

親の愛と日光

世間では不良少年々々々々と唯その常人のみを彼是いひますが、實は親——殊に母に半ば以上の責任があると思ふ。子供が親の愛に沐浴せねばならぬ事は固より言ふまでもありませんが、私は親の愛といふものは恰ど太陽の光のやうなもので、強過ぎても弱過ぎても不可と思ふ。植物の發育などに光線が乏しくては無論いけないが、又餘り強過ぎても芽の出たばかりの若い植物などには宜しくない。これと同じく親の愛が薄過ぎては無論困るが、又餘り度を過して、所謂愛に溺れるやうになつてはならぬ。

祖母さん育ちが惡いといふのも其處で、固より祖母さんが無くてはならぬものであるが、子供の爲には兎角愛の溫かみの強過ぎる憂がある、世の母親達が又多く其處で失敗するのであります。

近い例が私の（家庭學校に）引受けてゐる少年で、何うかして家へ逃げ歸ると、大抵まづ叱る母親はない「よく來た」と喜んで、湯にでも入れる、御馳走をするお小使をやる、さうして一晩泊めておいて、翌日何とか言つて返して遣す。父親は隨分嚴重にする人でも、母親がそれだから仕方がない。「子供も困るが貴方の處のお母様にも困る」と能く父親に言うてゐる次第です。

教育も地位も相應な良家の子が不良少年の群に投ずる。夫は友達の誘惑もありますが、根本の責任は大半母親にあります。

上流の本城明渡し

そして危險なのは上流の家庭である。主人は何れ公の職務を帯び公の事業に携つて不在勝ちな上に、夫人が又慈善事業とか婦人會とか言つて朝から晩まで外出してゐる。不在は雇人任せになる。子女は雇人――下女部屋や馬丁部屋などに立ち入つて、無遠慮無作法な事を見聞きして、その惡影響を受ける事は夥しいものである。

主人や主婦が在宅の時でも、子供は得て下女や馬丁から、惡い事を覺え勝ちなものであるのに、兩人とも不在となつては後の惡感化は寒心すべきものであります。上流の家庭へは隨分種々雜多な人の出入があつて奢侈、ハイカラ、輕薄、さまぐ\の惡影響を受ける事も事實であるが、然しこの雇人から善からぬ事の感染するのが、所謂獅子身中の蟲で怖るべきものであります。けれども親の目が届いてゐれば然う大變な間違ひも起らぬ譯で、要するに兩親――殊に母親たるものが家庭をお不在にして出歩いてゐるが禍の根本である。

固より社會の進むに從つて、婦人が公の事業に關係るのも結構な事ですが、それは家庭を十分注意した上の事である。婦人の本城は何うしても家庭である。

その本城を敵に明け渡しておいて、社會事業だと言つて飛び廻つてゐたのでは仕方がない。これが上流家庭に不良少年の出る最大原因であります。

家庭輕視の風

此間の萬朝報に某米國婦人が久し振での歸國の感を載せてありました。「久しく日本にゐて偶々歸國して見た處が、すべての事が大變專門的になつてゐるのに驚いた。そして其の結果妻君といふものゝ仕事が大變無くなつて、唯ぶらぶらして遊んでゐる人が多い」と。幸にまだ日本はそれ程になつては居らないが、然し注意せぬと家庭が漸々崩れてゆく樣になりませう。蘇

格蘭エヂンバラ大學のブルースといふ學者が、その著書中の「家族」の章に斯う言つてをる。英吉利に於ても漸々に家庭の興味といふものが忘れられる傾きで、人々は娛樂を家庭で取らずに倶樂部で取る。日が暮れると家を出かけて倶樂部へ入り込んでゐるといふ風になつて行くと。どうも斯う娛樂を倶樂部に求めて家庭を疎かにするやうになつては、子供の敎育は困難になります。歐洲中最も家庭を重んずるといふ英國ですら此の通りである。西洋では一般に斯ういふ傾きがあるのを見るにつけても、日本婦人が家を外に出歩くのを何ういふものかと思ふ。

米國などではフラットの組織が流行してをる。成程便宜には違ひない。一軒の二階――其處に幾室もあつて幾家族も住んでゐる。そして鍋釜などを共用に、煮焚などを共通にしてゐる。經濟的ではあらうが然うなつたら子供などが、我は何の家族に屬するといふ意識も明かでない樣になり、親子の愛も從つて冷淡になりはせぬであらうか。子供といふものを、此の父と母とに與へられた以上は、温かい家庭でそれを育て上げるが大切な役目でありませう。家庭を輕んずる思想は實に禍の本である。

Own home.

英吉利で有名な社會改良家のサッターといふ婦人はブリテンス、チッキスト、キャンペーンといふ書物を著して、頻に獨逸のエルウエルヘルド制度を英國に應用して、そして貧民を救濟したいと申してをる。その制度のお話は省きますが、つまり貧民や其の子女の惡くなるのは、主に彼等には家といふ觀念が無いからで然しそれも無理はない。實際彼等は一定の家を持たないのだから……、されば先づ彼等に家を與へよ。そしてまづOwn house（我が家）といふ觀念を持たせよ。その後に於てこそ初めてOwn home（我が家庭）といふ觀念も起つて來るので、此の家庭といふ考が出て來ねば貧民はとても救はれない。家がなければ家庭といふ心持が無い。家庭といふ心持が無ければ、人間の尊いも

のだといふ觀念も無い。されば貧民や其の子女を救ふも全く家庭の力であります。

惡友の怖るべき實例

先頃も鎌倉の方の警察署の手に一人の不良少年が捕へられた。それを私の家庭學校の方へ引受けて與れないかと照會がありましたから、事情を聽いて見ると徒黨があるに違ひないと思はれるので、それを先づ調べて貰ひたいと言ふと、警察では其麼でも



無からうといひます。「イヤ必とあるに違ひないから」と強つて調べさせた處、果して橫濱界隈へかけて、都合十七人の徒黨があつた。多くは相當の良家の息子です。捕へられたのが、何をやつたかと言ふと、女子の關係で、鎌倉の某家——立派な地位ある者の——孃の、十六歲になるのを誘惑して、逗子邊りへ連れ出して樂んでゐたのです。で、警察で孃の親を呼んで話すと、親は少しも知らない。「私の孃に限つて決して其麼事はありません」と確く言ひ張る。それ

ではと動かない證據を見せた處、もう何とも言ひ樣はない。母親は實に其の場で泣いたといふ事です。

娘の母親の泣いたのも實に無理ならぬ事。それと同じく其の少年の親も如何に歎いた事でありませう。何せよ十七人もある内に入つて了つては、脱けようとしても容易に脱けられもせず、惡感化は日に〳〵夥しいので、これ等は何うして可いか、手の付けようにも困るのであります。

學校を頼み過ぎる

私は元來學校教育に最つと家庭的趣味が入らねば、眞正の教育は行はれぬと思ふ。女子大學の寄宿舍は家庭的だとか言ふ事です。が、私は十年以前から此の家庭學校をやつてをる。勿論妄りに人を殖さうともせず世に廣告しようともしなかつたが、然しその遣り方は全く不良少年を感化改善させるのに、それを家庭的の生活、家庭の味に浸して、それによつて救はうといふのであります。それが爲には我が家庭を擧げて彼等と共にするのでなくてはと思ひ、私の子女を彼等と立交らせておくといふ冒險をも敢てしてをるのです。

つまり家庭でなくては眞正の教育は出來ぬと思ふからです。昔の塾といふものからは、割合に其の師に感化された立派な人物を出してをりますが、それは塾に家庭的の味があつた故と信じます。今の學校教育には何うしても然ういふ事は望めない。私は家庭主義といふものが、必ず將來の教育の基礎になるであらうと思つてをる。けれども現今さうでない以上は、世の親たるものは、子女の人物養成は家庭でせねばならぬと覺悟して十分盡さねばならぬのであります。

然るに世間の親達は餘り學校を頼み過ぎる。「教育は學校でやつて呉れる」と思つて、一切任せて面倒拂ひをした積りでゐる。これが又出來損ねを製造へて了ふ一原因ではありますまいか。(筆記)

婦人自殺の流行



中村鈴子

近來は新教育を受けたる婦人が厭世の極、自殺すること毎々御座いまして、誠に物騒千萬な事でございます。是れは却々の大問題で、私共が輕々しく語るべきでは御座いませんが、ちよつと管見を述べて有識の諸姉が御參考の一端ともならば、默つて居るよりも増しかと存ずる迄で御座います。申す迄もなく我國の現代は過渡期でございますから、殿方でさへ隨分厭世に傾き易いとの事を承はつて居ります。況して身體も精神も殿方に較べて薄弱な婦人方が、往々悲觀病に罹られるのは、道理千萬な事と存じます。

▲貴賤混合の教育

昔は貴賤貧富の懸け離れた子女を一堂の下に集めて教育しませんでしたから、互に見知る機會もなく全然異人種のやうに思つて居ました。それが今では貴賤貧富を隔つる垣を取り除けて了つて一堂の下に教育して居ますので、階級觀念を打破しつゝあるのは、誠に壯快な事で御座いますが、一利一害は何事にも免れ難いものでして、之に伴ふ弊害も却々恐ろしいので御座います。學校に居る間こそ互に身分を忘れて心易くして居ますものゝ、一たび學校を出て了へば矢張り階級があるので、教師の目に映じたる優等生も並等生もあらばこそ、學問が出來ようが、品行が宜からうが、貧乏人の娘は指を啣へて社會の片隅に屛息し、學校の成績左程に宜しからざりしにせよ、貴族や富豪

の娘は婿擇びも思ふまゝに出來、交際社會にも横行濶歩し得らるゝので御座います。

これは殿方にもある事でせう、けれども、殿方には貧乏して居ても親臑黨には負けないぞ、と云ふ瘠我慢があるから、左程クヨ〳〵爲さらぬが、婦人方は其處になると餘程弱いので御座います。

▲迷信を棄て眞信を得ず

昔の婦人は科學的智識が皆無でしたから、迷信に充されて居りました。九星だの卜筮だの稲荷樣だの荒神樣だのと、迷信によつて禍を避け福を得らるゝものと定めて居りました。それですから、今年は厄年で貧乏して居るが、來年は運が向いて來るに相違ないと云ふ風に、當にならぬ事でも何でも、兎に角當にして稼いだので御座います。稼ぐに追ひ付く貧乏なしで、迷信を頼りに働いたのが、迷信通り幸運を招いた例は幾何もあるのです。所が新教育を受けられた姉妹方には、此迷信が無いから、當にならぬ或物を當にして働くと云ふ氣になれず、さりとて眞の信仰もないから、安心立命と云ふ段に至らないで、悶え苦しまるゝので御座います。

▲主我と献身の間に迷ふ

昔は女の手一つで、多勢の子女を育てたり、多勢の弟妹を育てたりすれば、子女や弟妹が成人して後、非常に恩に着たものですが、今では長者が幼者を養育して教育するのは當然の義務であり、幼者が長者から養育され教育されるのは當然の權利と云ふ思潮になつて居ります。ツイ先頃の話ですが、永年二弟の世話を致した婦人が、高商卒業の二弟に向つて、「今まで汝達の爲めに私は何位苦勞したか知れないから、今後は私に樂を爲てお呉れ」と申しました處、二弟とも ハ、、、と高笑ひして、

『姉さんは時節後れだ、今時親兄弟の犠牲となるやうな考へで勉強して居る者はありませんよ』と申したさうです。これは極端な例なので、是れほど露骨に申す者は滅多に御座いますまいが、今後の子弟の心情を洗つて見れは大抵此通りですから、昔のやうに老後は子女や弟妹が親切に世話して呉れるだらうと思つて居られると、早晩悲觀病に罹られるので御座います。世の中が進むに隨つて、半主我半献身と云ふやうな暢氣を許さない事になるのですから、主我ならば純主我と爲り、献身ならば純献身と爲り、後で愚痴を言はぬ用意が肝腎です、後で、相當の報酬を得やうなぞと考へて子弟の世話を焼くのは、厭世の種蒔で御座います。



▲人を信じ過ぎる事

人を疑ふと云ふことは宜くない事ですが、深く疑ふと云ふ程度に至らず、只だ輕々しく信じないと云ふ位は、常識ある婦人の思想かと存じます。元來人を信じ過ぎると云ふことは、經驗のない婦人に多いことで、それが爲めに不慮の災難に罹ることが毎々あるのです凌辱や詐僞のやうな極端な災難に遭ふことは例外としても、委托金を費消されたり、秘密を漏洩されたりする位は隨分あるでせう。彼の人は金錢なぞに目を吳れる人でないと確信して居ると、其人が富豪に愛相よく交際するのを見て世の中を悲觀し始めます。彼の人は醜業婦の酌で酒飲むやうな人でないと確信して居ると其人が待合の宴會に列なつたのを見て心情の權衡を失つて了ひます。斯う云ふ事が幾度も重なると厭世になるので御座います。

▲嫁入時を失ひたりと思ふ事

我國の習慣として十七八歳から二十三四歳までを婚嫁年齡として居ますので、二十五六歳になつて嫁入しない婦人は、獨身主義者でない限り多少厭世の氣味を帶びて來ます。併しこれは周圍の狀況に因ることで周圍の人が婚期を失つた〳〵と騷ぐと本人も其氣になつて鬱ぎ込み、三十歳と爲りたりとて後れしに非ずと周圍が言つて居れば、本人も其氣で身嗜みを怠らぬから、事實に於て百年娘たるを得る次第で御座います。

▲自覺心の缺乏せる事

殿方は自信自尊の念が強いから、世間が實力だけに買つて吳れないとか、上役が實力だけに用ゐて吳れないとか、天に對し人に對して不平を起されるのですが婦人方は昔から階級觀念に支配されて居ますから、世間に反抗するやうな、上役に對し不平を持つやうな傾向は少いのです。人から駄目だと言はれると駄目なやうな氣に爲り、人から無能だと言はれると無能なやうな氣になるのが多いので御座います。

不平を起しだり、反抗したりするのは、女らしからぬ事ですが、何事も世間から仕向けられた通りに爲り、催眠術にかゝつた樣になつて居るのも自覺心の缺乏を意味して居るのです。それが白痴ならば厭世にならずに濟みますが、白痴でない限りは厭世とならぬ譯に參りますまい。

▲容貌の醜なる事

容貌の醜美は、先天的で如何とも致方ないもので御座いますが、美人は何處へ出ても氣後れがせず、醜婦は何となく尻込する氣味が御座います人中で一歩進むのと一歩退くのとは大した相違でも無いやうですが、後に居てさへ人目に付く美人が前に出て居るのですから、誰しも先づ、美人を相手に致します。之に反して醜婦は前に出て居るだけでも僭越と思はるゝ位ですから、後に引込で居れば誰も取り合ひません。ソコで誰からも相手にさるる婦人は追々責任ある位地に立ちますから、餘程の馬鹿でない限りは立身することが出來ますが、取り合はれない醜婦は、無責任の位地にばかり居りますから、美人と同程度の智慧があつても立身するに餘



程六ケしいので御座います。立身の出來ないやうな容貌に生れたのは、無論厭世婦人となるべく生れたやうなもので御座います。

去りながら多くの美人が容貌の爲めに運命を飜弄されて居るのを見れば、醜婦の運命は岩石の如きもので、風船玉のやうに空高く飛び颺れないだけの事です。暴風や驟雨に吹き飛ばされたり、敲き破られたりせぬのが、寧そ幸福だらうと存じます。

▲厭世に陷らぬ方法

厭世病に入る道は幾筋もありますが、其精神の根は一つです。他でもない天が自分に向つて吝嗇であると思ふに過ぎないのです、何故、天が私に向つて斯様に何も與れないかと怨んで居るに過ぎないのです。それですから、之を反對に解釋して、天が自分に向つて何も與れないのは、自分を惡んで與れない譯ぢや無い。愛して居るから與れないのである。自分のやうに弱い者が、美貌を與へられたら美貌の爲めに墮落するだらう、早婚したら早婚の爲めに墮落するだらう、爵と富とある家に生れたら爵と富の爲めに墮落するだらう、主我心が強ければ主我心の爲めに墮落するだらう、經驗があつたら經驗の爲めに墮落するだらう、迷信があつたら迷信の爲めに墮落するだらう、天が自分に何物をも與へないやうであるが。

墮落を與へない限りは、自分の生命はあるに相違ない、自分の命がありさへすれば、何事でも出來るに相違ない、架空誇大の事でさへなければ、必ず出來るに相違ない。斯様に考へ直せば厭世の雲霧は何處へやら消え失せて、身體も精神もすが〳〵しくなられる事と存ずるので御座います。

子供に及ぼす母の感化

◎母の責任　永い間の經驗によつて見ますと、世間で所謂惡太郎と申す者も、始めから決して惡太郎で生れたのではありません、畢竟子供を惡太郎にしたのは、其の母が矢張惡太郎であるからなので、女だからお惡とでも云ふべきでせう。

◎子は母の寫眞　子供は全く母親の寫眞とも云ふべきもので、善惡共に母の感化を受けるものです。獨り母の寫眞のみではありません、家庭全體の模樣も子供の言行の上に歴乎と映ります。俗に似たもの夫婦と申して、夫が一こくならば妻も一こく、夫が腹立ちつぽければ妻も短氣なのがありますが、これは始めから似たものでなくて、自然に感化されたものです。他の家を訪問した時などよくその家の模樣を注意して御覽なさい、時候の挨拶から用向の述べ方、歸る時の挨拶迄、主人と細君と同じ事を云ふのがあります。夫婦の間柄でさへ斯うです、況して其胎内にやどらせ、産んでから後は晝夜抱きかゝへて、寸時も傍を離さない子供が、母に似るのは當然のこと、子を産んで母となることは易いが、完全に子を育てゝ母らしい母となることは洵とに難かしいことであります。我子を惡太郎にしたくないと思はるゝ母親方は先づ自分からして日頃の言行を愼まねばなりませぬ。

◎子供と兩親との關係　或家に四人の子供があつて、上の二人は女、下の二人は男の子でしたが、その長男の方は三つ四つの時分から一通りならない腕白ものであつたのに、どうした譯か、十一二になると急におとなしくなつて、兩親もその變り方に驚いて居ますと、十五六になつて又急に亂暴ものになつて、兩親もホト〳〵持餘すと云ふ有樣でしたがよく〳〵前後の關係を注意して見ますと、畢竟他の子供の出來た時分には、家庭も平穩、兩親の心も平和であつたが、長男の生れた時分には家庭も平和でなし、兩親の關係も圓滿でなかつたと云ふことが分りました。

◎父と母との寬嚴　兎角父は子に對して嚴に失し易く、母は又寬に失し易い、併し母が餘り慈愛に過ぎるのは、父が餘り嚴し過ぎるからの反動とも云つたやうなもので、父が餘り八釜しいと、母親は父上に内證ですよと云つたやうな工合になる、斯うなると子供は父にさへ知れねば何をしてもいゝと云ふ考へで、母を甘く見くびつて自然我儘をする、これが大變な間違ひの基で、遂には姉さん達は勿論のこと母の云ふことも聞き入れなくなつて、手の附けられない子供になつて了ふ、斯う云ふ習慣がつくと、食事の時でも一家睦まじく膳を圍むと云ふやうなことも出來ず、何はいや彼は嫌ひと云ふ氣儘が出て、遂に母親の口から、嘆聲を放つやうになります、母自から其責任を自覺せねばなりませぬ。（愛國女學校母の會にて原胤昭氏談話の要領）



子女墮落の第一步

救世軍中佐　山室軍平

◎寄宿舍生活の危險

子供を養成損ふ原因はいろ〳〵ありませうが、私の第一に氣附いてゐる事は寄宿舍です。どうも寄宿舍生に餘り早く入らせてあるのを見るに、多く思はしい結果を得ない樣です。私なども寄宿舍に居つた經驗があります。それは宗教的の學校のものでしたが、其の頃から此の疑を持つてをりました。今は男女種々な學校があり、從つて種々な寄宿舍もありますが、早く寄宿舍に入る事によつて何方かと言ふと善くない影響――假令其の事が惡い事でないにしても、其の子供に取つては毒になる樣な、其の性格を傷ふ樣な影響を何うしても受けます。どうも寄宿舍生活は何うだらうかと疑つてをつた矢先に、ブース夫人の寄宿舍論を讀んで其の極力寄宿舍の弊を言うてあるのを見まして、愈々成程と思つたのであります。

家塾なども同じ事。又知人の處へ監督を托するのも略同じ事です。寄宿舍や家塾は固より、よし知人の處へ托したので、そこの主人は嚴正な立派な人でも、どうしても親身の父母が氣を附ける樣には行かないもの。又行かない筈のものです。つまり子供といふ者は親身の親に養はるべきもの。宗教的に申せば子供は父と母とで敎養すべく、神より托されたものでありますそれを面倒だからと言つて、勞を厭うて、他人に預けて敎養させようといふのでは、好結果の得られよう道理がありません。寄宿舍へ入れるにもいろ〳〵の事情がありませうが、一つには面倒を省くといふ心が潛んではをりますまいか。聊かでも然ういふ怠け心が交つて居たらば、それが抑誤の基であります。

◎耳よりも目

古い言ひ方かも知れませんが、子供は耳へ斯うせよと言ひ聴かされる事よりも割合に親のする事を目で觀てゐるものです親が酒を飮んでおいて子供には害があると禁じ、親が嘘を吐いて辯疏をしながら、子供には嘘を言うてはならぬと命じ、親が人を罵つておいて子供の惡口を戒め、親が人を毆つておいて子供の喧嘩を禁ずる。これでは到底利目のある理由がありません。まづ親の實行が先であるが日本の家庭ではまだ此の邊が善くなつて居らないと思ひます。平凡な事の上に缺



陥が夥しいので、別の奇策妙案を待つよりも、まづ此の平凡な事の實行が肝要と思ひます。

◎母親の尊さ

私の種々の實驗——出獄人や醜業婦を取扱つた實際——から申すと、子女に取つて第一に尊いものは母親です。墮落した子女といふものは大部分は早く母親に別れたものです。で、母親の愛に浴する事が出來ず、親切な注意監督を受ける事が出來ぬ處から、心にも行にも隙が出來勝ちになつて、不覺墮落の淵へ足を踏み込んで了ふのです。どうしても實の母親ほど子供に取つて大切なものはありません。もし又實の母親があつて、それで猶子女が墮落したと言ふならば、それは必と母親が偏愛か何かに陥つて、その子供をよく扱はなかつたに違ひありません。僻むとか、萎縮けるとか、亂暴になるとか、さういふ惡癖は多くは偏愛などが生み出だすものであります。偏愛が實に宜しくない事だと思ひます。

◎ブース夫人の第一秘訣

ブース夫人は八人の子供を持つたお方で（内一人は病身の爲め活動が出來ませんが、他は）悉く成功して立派な活動家になつてをります。ブース大將の事業といふものは、餘程まで其の子供の力だと言へる程、皆よく活動いてをるので、一人の娘さんなどは、アメリカに於ける救世軍總司令官の妻として、夫を助けて大活動を致してをります。

さて怎樣な成功をどうしてブース夫人が得たかと言ふ事を、かの「評論の評論」のステッドが論じてをります。其の第一箇條に、子供を自分の物と考へぬ事。これがブース夫人の成功の第一秘訣だとあります。我々から申せば子供は神樣からの預り物で、決して之を自分の所有物の如く心得て、恣に取扱つてはなりません十分尊敬すべきものであります。子供を尊敬する念が足らず、又神樣からの預り物だから十分完全に敎育せねばならぬといふ義務の念が足りませんと、何時か知

らず自分の我儘から子供を叱つたり無理壓制をしたり或は爲すべき注意監督を怠つて打棄ておいたり、種々の誤が出て參ります。然るに「神樣からの預り物！」と思ふ。この觀念が子供を尊重させる事になり從つて其の敎養に成功する基となるのであります。さすがにスチッドはブース夫人をよく見たと、私なども全く同意であります。

◎第二の秘訣

スチッドの論には八箇條が擧げてありますが、右の次に第二個條として、子供等自身に、「自分は詰らぬ者ではない。世間に善い事、有益な事を爲すために生れて來たものだ」といふ觀念を早く持たせた事。これが又成功の一大原因であつたと申しました。所謂英雄豪傑――えらい者にと言ふ意味ではなく、善い者に、世間の益になる活動をする者に生れて來た。といふ觀念を子供に早く注ぎ込む。すると此の考が子供自身の自重心を促して、よほど自ら惡い事に遠ざかる樣に、これが其の子供の心軸になつて其の子供を進めてゆく樣になります。

二十世紀は兒童の時代

誰かゞ申しました樣に、十九世紀は婦人といふものの力が認められた時代、二十世紀は從來侮られて居つた子供といふものゝ尊貴を認めらるゝ時代かも知れません。實際然ういふ傾きも見えますし、又眞に然うなつて欲しいと思ひます。子供を自分の私有物と考へぬ樣になれば從つて野心の犧牲や便宜の犧牲にされぬ樣になつて行きます。日本の家庭などはまだ此の點に非常に遺憾があると思はれます。どうか子供を尊い者であると思ひ、決して疎かに、我儘に、犧牲に取扱はぬ樣になれば、最つと〳〵光ある善い子女を養成する事が出來ると信じます。（談話筆記）

婦人自活の眞義

安部磯雄

今日は女子にして自活の方法を講ずる人が餘程増加して來ましたけれども、これは多く資産の乏しき人や或は將來結婚することの出來ぬ樣な人に限られて居るので、中流以上の人や、普通以上の容色を備へて居る人は殆んど無頓着である樣に思はれます。隨分世の中には女子が職業を爲すことに反對する人もありませう夫婦共稼ぎは嫌ひだ、といふ男子も少くないでせう。資産家の眼から見た時には女子に職業を習はせることを賤しく感ずるかも知れません。然し此等は實に飛んでもなき間違だと思ひます。私の信ずる所では女子に自活の力さへあれば宜いので、何も夫婦共稼ぎする必要はないのです。婦人の地位を高めるには斯くして經濟上の獨立を與へるのが一番の近道かと思ふのです。のみならず家庭に在つて夫を助くる場合には女子が自ら職業を爲すの必要はありますまいが、若し不幸にして夫に先立たれ、或は離縁せらるゝ樣な事があれば、先づ起つて來るのは生活の問題でせう。此場合に自己の手腕で衣食することの出來る女子は、あらゆる困難に打勝つことが出來るのです。右は資産のない女子にのみ言ふべきことであるかといふに、決して左樣ではありません。如何なる貴族富豪でも其娘を教育して獨立の生活を爲し得る程にして置くことは必要であります。

同じく結婚をするにしても、自分には獨身生活を送るだけの能力はあるが、然しあの男子は適當なる配偶者と思ふから結婚をするといふのと、自分には獨立生活の力がないから是非共男子に依頼するより外はないと言ふて結婚するのとは大なる相違があるではありませんか。少しくどくなるかも知れませんが、茲に男子の例を引き來りて今一層これを明にしたいと思ひます。彼の宗教家といふものが何うして墮落する樣になるかと考へますに、昔は豪い人物が宗教家になりま



した言ひ換ゆればどんな、職業や事業をやらせても充分に成功する様な人が自らを犧牲に供して宗教家になりました。然るは宗教が盛んになつて宗教家が安樂に生活が出來る様になると、今度はつまらぬ人間が宗教家になります。政治家、實業家、教育家になるだけの腕はないが、兎に角坊主になれば衣食には困らぬといふ様な考へを起す横着者が出來るのです。宗教の如きは最も高尙なるものでありますから、他の事をやらせても人並以上に出來る様な人を宗教家にしたいものです。女子が家庭の主婦となるにもこんな考へを有つてもらひたいのです。とても獨りでは食へないから結婚でもして夫に養つてもらふといふ様なことでは、女子の地位は益墮落する外ありません。

女子が妻となり母となるのは恰も男子が宗教家や政治家となるのと同一であつて、なるべく高尙なる考を有つて欲しいのです。自分は他の職業にて充分金儲けは出來るけれども、國家の爲を思ふから、これを犧牲にして宗教家となり政治家となるのであると言ひ得る男子があれば實に立派なものでありませんか。私は女子が妻となり母となる時にも此位の見識を

有つてもらひたいのです。若し此考がなければ貴族富豪の娘と雖も一の高等下女に過ぎません。

今日でも女子は男子に養はるゝものであるといふ思想が餘程勢力を占めて居ます。これは全く女子に獨立生活が出來ないためでありますから、將來は必ず何等かの職業を習得して此誤れる思想を破つて貰ひたいのです。女子に獨立するだけの力さへあれば、たとひ自ら一錢の金を儲けずとも決して男子に威張らるゝ氣遣はありません。皆さんには氣が附いて居るか何うか知りませんが、女子が男子に嫁する時に隨分多くの金をかけて支度をなすのは如何なる譯であるか考へて御覽なさい。女子も相當の教育費を要するのですが、尙ほ其上に莫大の結婚費が要るのです。元來男子が女子を貰ふのですから、男子が一切の支度費を引受けるのが至當ではありますまいか。然るに女子の親が教育費から結婚費までを負擔するといふのは、娘を男子に與へて養つて貰ふのだといふ考へがあるからだと思ひます女子は何時までも親に養はるゝ譯にゆかないから、年頃になれば男子に嫁して彼に養つてもらふのです。親の方では其後娘を養ふ義務がなくなりますから、そこで恰も厄介物を片附けた質の積りで立派な支度をしてやるのです。されば娘の結婚費を親が負擔するのは娘に自活の力なきことを證明するものと言ふても差支はありますまい。若し女子に何等かの職業がありましたならば、結婚費や支度料は男子で負擔する樣になるのは明です。群馬縣の如き養蠶の盛なる所に於ては男子の方で殆んど支度料の全部を負擔するといふことですが、これは全く女子に獨立生活が出來るからであります。是を以て見れば自活の出來ると否とは婦人問題を解決するに大なる影響があると言はねばなりません。



生活の金針

◎今日社會一般の傾向は益々奢侈に流れ、質素生活を營む者は却つて社會から嘲笑を受けて居る、一個人にしても一國にしても、人間は何時何んな病氣や災難に遭遇するか解らぬものだ、食ひたい物は食ひ着たい物は着て思ふ儘の生活を爲たならば困難な場合を凌ぎ得ぬ許りで無く我國の將來を思へば實に危險千萬な話だと思ふ。

◎生活上の質素簡單を以て非常の場合の準備をする事は社會の上から見ても必要であるが、單に質素生活と云へば封建時代の樣に粗衣粗食するものと誤解されるが、今日は腦髓を使ふ時代で、身體の健康を量るのが肝要であるから身分不相應で無い限りは滋養物を食はねば爲らぬ食物の不良から生ずる惡寄は血氣な壯年時代には分らぬが四十歲以上に爲ると充分な勞働が出來なくなり隱居生活をせねばならぬのは自然の結果であると思ふ。

◎日本人には肺病患者の多いのは何う云ふ譯だかと云ふに、家屋の構造が惡いからである、我國では一つの部屋に多人數が雜魚寢をする事を何とも思はぬため是等が病菌の傳播する第一の原因で、質素生活を唱ふるからとて、狹い住居に跼蹐する事は勸めぬ、家屋は出來るたけ廣い間數の多い處を擇ぶ方が能い、そんなら何う云ふ方法で質素生活を爲るのかと云ふに、衣服の節約が一番だと思ふ

◎日本人が一番質素に爲易いのは衣服である、然し如何に粗服を關はぬからとて、地位や名望の高い人が勞働者の樣な姿で居る事も出來まいが一體日本人は衣服が法外に贅澤である衣服の汚いのは社會に頭が擧らぬ樣に思つて居る者が多い、殊に婦人の如きは如何に學識や德操の高い者でも立派な衣服が無ければ交際場裡へ出られぬ樣に考へ亦事實上人から輕蔑される狀態で、地位の低い者は勢ひ衣服で社會に頭を出す氣に爲る。

◎我國では三十圓の月給取りが百圓の時計を有つて居る例は珍しく無い、衣服の奢侈は罪害を犯さしめる間接の誘惑で、青年男女を墮落せしむる導火である、自分が或る地方へ演説に行つた時、ニツケルの時計を持つて居ると新聞で笑はれた事があるが是れで見ても世の中が何處までも體裁を衒ふかゞ解るだらうと思ふ。

◎人間は社會的の動物で成るべく人と交らんとて、智識を研かんとするのは好い事であるが、日本人は外國人よりも交際費が多く、內容は極めて輕薄である、之れ一つは日本人は談話的交際を厭ひ飲食物交際を好むからで、人を訪問するに土產物を持參せねば義理を缺く樣に思ふ裏面には海老で鯛が釣り度いと云ふ野心もあるのだ。（日本弘道會の紀念會に於て文學博士中島力造氏所說一斑）

ing water if more is needed.

Remove the Scum when it first begin to boil.

Allow about twenty minutes for boiling for each pound of meat.

The more gently meat boils the more tender it will be.

肉を煮る心得

生肉を沸湯に入れて煮れば、外部が縮り、内部の汁が肉に留まります。夫れ故ソツプを作る目的で肉汁を出さうとするには、冷水に入れて煮ます。凡て鹽肉を煮る時は煮える間に鹽が出る樣に冷水に入れて煮なければなりませぬ。

肉を煮る時は、絶えず湯を煮立せ置く事が必要であります。何故なれば、火が途中で消えて一時其沸騰が止む時は、肉が水分を吸ひ込みますから、終りまで同じ位の火度を保つ事が必要です。

若し加湯をする時は、必ず沸湯を用ひればなりません。又肉をうでる時には、煮立て始めた時泡が出ますから、其泡を取除ければなりませぬ。

肉をうでる時には、肉一斤につき凡そ二十分間位の割合に文火で煮れば、肉は柔かになります。

WASHING WINDOWS.

Dissolve a little washing-soda in the water if the glass is very dim with smoke or dirt. Do not let it run on the sash, but wash each pane with old flannel; dry quickly with a soft, clean towel, wiping the corners with especial care. Polish with soft cloth, or newspapers rubbed soft between the hands.

硝子窓を洗ふ法

若し硝子が煙又は塵の爲めひどく曇める時は、水の中に少し許りの洗濯曹達を溶し、其洗汁が窓框に流れかゝらぬ樣に注意してフランネルの布で一枚づゝ洗ひ、手早く手拭を以て角々を殊に注意して水氣を拭き取り、後軟き布片又は柔かに揉みたる新聞紙にて磨きます。

TO CLEAN KID GLOVES.

Take a flannel rag; rub on soap and dip in milk, wetting lightty; rub the glove while on your haud.

皮の手袋の汚れを取る法

先づ手袋を手にはめ、フランネルの布片を指尖にまき、石鹼を擦りつけて之を一寸牛乳で濕し、靜に擦りて汚を拭き取ります。全部が綺麗になるまで度々布片を取り換へて拭くのです。

櫻井女塾の夏期講習會

來る八月一日より同三十日迄の間、本郷區彌生町三番地の同塾に於て、夏期講習會を開く、科目は英語及び西洋料理の二科なるが、英語は、女學校在學中の者、或は既に卒業したる者等、幾分か其の素養ありて、尙ほ實際的の修養を爲さむとする者の爲に、成るべく簡易なる書に就て敎へ、西洋料理は、之に關する一般的の智識を得せしむるを主とし、其の講習を終ふれば、其後は書物を讀むのみにても十分獨りでやり得るやうになる由にて、併せて食卓上の裝飾、禮式等をも授くと云ふ、而して敎授時間は兩科とも午前七時より同十時迄とし、會費は英語が三十日間每日開きて金貳圓、料理が卅日間に十回開きて金參圓、申込は成るべく速きを要すと。

簡易西洋料理

英語專門 櫻井女塾長 櫻井ちか子

POT ROAST OF BEEF.

Place meat in kettle over good fire, brown on one side, then turn and brown on other, then add one pint of boiling water, cover and cook slowly fifteen minutes to every pound of meat; add salt when the meat is half done. After the water evaporates add no more as there should be fat enough to finish cooking the meat.

鍋ロース

肉を深鍋に入れ、强き火にかけ、兩面を薦色になる迄燒いたる後、沸騰湯三合位をつぎ込み、文火で肉一斤につき十五分間、二斤なれば三十分間の割合にて煮るのです。肉が半ば煮えたる時に鹽を加へ水が蒸發したる後は水を入れずとも其肉から出た脂で燒けます。

(注意) 肉二斤位なれば三合の煮湯を用ひ肉の多少によりて凡て加減するのです肉の煮えたる後に肉を取り出して、鍋の内にある脂の中へ沸湯をつぎ込み、うどん粉を少し入れて作りたる汁を前の肉にかけるのです。

PEACH SURPRISE ICE.

Into one quart of chopped peaches stir a cupful of water, one pound of sugar, and the unbeaten whites of five eggs. Turn all into the freezer any grind until firm. The dasher whips the mass into a delicious, frothy "surprise". You may use any fruit you choose in the place of peaches.

桃の即席氷菓子

細かに刻みたる桃四合位に、水一合と砂糖百二十匁と玉子の白味五個(泡立ざるもの)とを交ぜて、其れをアイスクリーム器の中に入れ、固くなるまで廻すのです。アイスクリーム器の中にある混ぜ棒が其混合物を打ち雜ぜて甘き氷菓子を造ります。桃の代りに他の果物を用ゐても宜し。

(注意) アイスクリーム器のない時は同じ材料少量を深き丼に入れ置き、別に桶の中に細かに碎きたる氷と鹽とを攪き交ぜて入れ、其中に前の丼を据えて玉子泡立器を以てよく泡立れば、一寸間に合せの氷菓子が出來ます。

RULES FOR BOILING MEAT.

All fresh meat should be put to cook in boiling water, then the outer part contracts and the internal juices are preserved.

For making soup, where you want all the juices extracted, put on in cold water.

All salt meat should be put on in cold water, that the salt may be extracted in cooking.

In boiling meat, it is important to keep the water constantly boiling, otherwise the weat will absorb the water. Be careful to add boil-



姿見かゞみ

大町桂月

◉動物にありても、男性よりは、女性の方が長命す。これ女性は、子を生むの役目あるを以て也。人間にありても、亦然るが如し。

◉人間にありては、男性は社會に奮闘するを以て、精神上、身體上に無理をすること多く、從つて命がちぢまるべし。家庭の天地は、波瀾あれども小也、苦悶あれども、微也。壯年にして、母親を有する人は多けれども、父親を有するものは稀也。

◉男の子は母親の氣質をうけ、女の子は父親の氣質をうくるとの事なるが、余の知り居る範圍に於て之を檢するに、十中七八は然るが如し。女が父親の氣質をうくるなれば、男の子は、外祖父の氣質をうくるわけ也。現に余の身に就いて考ふるに、多く母の氣質をうけて居るやう也。母は毫も外祖母の氣質をうけずして外祖父の氣質をうけて居るやう也。三四代以來、我が家に飲酒家なし。外祖父は、大に酒を好めりとの事なるが、われ、幾分か其氣質をうけて居るやう也。

◉板額とは、有名なる醜婦にして、女の豪傑也。其捕虜となりて鎌倉に來るや。足利義氏、勇士をうませむとて、之をもらひうけむとは、よい分別也。されど知らず、如何なる勇士をか生みけむ。

◉世に賢母とも云はるゝ人は、必ずや、男まさりの氣性を有す。單に男まさりの氣性なら、そんじよ、そこらの井戸端にも多かるべく、今の海老茶袴つけたる人にも多かるべし。されど、賢母は、その男まさりの氣性をつゝむに、智を以てし、分別を以てし、禮義を以てし、雅量を以てす。これ賢母と悍婦との分るゝ所以也、醇化と山出しとのわかるゝ所以也。

◉學問と人格とは別也。又學問と智慧とも別也。今

の高等教育をうけたる女性には、男まさりの氣性あるもの多し。されど、人品は山出し的なるもの多し。かくては、井戸端會議に花を咲かす嚊大明神とさまでの差別もなかるべし。

●大賢と愚とは、相接近す。親孝行をするものは、山間の好人物に多く、また聖人君子はみな然り。中途はんぱの凡人、小才子は、よくこゝに至る能はざる也。

●水町大藏次官、この頃親の病氣看護と稱して、官を辭せり。他にも理由あるは無論なれども、その孝養は、恐らくは虚言にあらざるべし。以て、日本國民に孝行の觀念のなほ盛なるを見るべし、これ恐らくは、今の西洋には、その例あらざるべし。



●西洋の家庭は夫婦本位也。日本の家庭は、親子本位也。夫婦本位は、まだ動物をさること遠からざるの域也。親子本位とまで進みて、道德の程度、一段高まれる也。げに、孝は百行の本也。孝の觀念なきものは、亂臣賊子也。

●賢母的女子は、男まさりの氣性あれども、よく姑に事へて孝養をつくす。山出し的の女秀才は、こゝに至る能はず。なまじひの學識は、たま〳〵其鼻を高くするに過ぎず。其鼻高うして、益分別がつかざる也。

◉節婦は、概して不愛嬌なるもの也、淫奔の女は、必ず愛嬌よし、酒宴の相手には、淫婦的の女が面白しにぎやか也。家庭の生活には適せざる也。

◉女性は概して男性よりも主我的也。故に女は、己れを愛する者の爲めに粧ふと云へり。かくて、よく其節を二にせざる也。節操は女の一面也。愛嬌も、亦女の一面也。愛嬌と節操は、兩立するもの也。女に、愛嬌なきばかり、人の氣持を惡くするもの無し。愛嬌とは、人に對するの禮也、節操とは、己を持するの道也愛嬌と節操とを混同すれば、男性に對して、博愛となる。淫奔とは、即ちこの域也。

◉この頃、哲學の書を著はせる女秀才にして、自殺したるものあり。古今、女子にして詩なり、文なり、畫なりに名を成せるもの多し。されど、哲學の書を著はせるは、他に殆んど其比を見ず。すべて、吉凶禍福は、普通一般の人間に云ふべきことにして、藝術の士は、吉凶禍福以外に逸出せざるべからず。否、窮して却つて其藝益〻進む。天才ありて、自から藝術家とならむとするの女子は、云ふも更なり、藝術の士の妻たらむものは、よく〳〵此理を覺悟せざるべからず。然らざるものは、人生は暗黒なるべし。

◉女が男まさりなるも、智あり、分別あり、禮義を身解すれば、毫も差支なし。たゞ、なまじひの男まさりの氣性ありて、智なく、分別なく、禮義なくば、所謂山出しとなりて、眞の幸福は得られざるべし。

◉子に甘すぎて、子を馬鹿となすは、普通一般の母親也。賢母は然らず。必ずしも、男の子が母の氣質をうけずとも、母賢ならば、子必ず賢也。

◉西洋にては、夫婦本位也。散歩にも、旅行にも、夫婦相共にして、子は、のけ物也。路上をはゞからず接吻したりなどして、動物の域に近き西洋人には、子は邪魔物なるべし。親既に子を邪魔にす、子に孝行の念なきも、自然の勢也。

◉男と云はず、女と云はず、人は社交の動物なれば人に對しては、禮容なかるべからず、禮容の本意は、清潔にあり、美麗にあらず、即ち人の氣持を惡くせぬ

やうにと力むべき也。髪をみだし、垢の附たる衣服を着、目に目やにたまり、歯に歯ぐそつき、口がくさく脇臭がくさきなどは、人の氣持をわるくするものなり。おしやれは、山の神も之を爲す。禮容を身解せるたしなみあるに至りて、はじめて、中等以上の婦人也。

◉禮容のもとづく處は、心にあり、形にあらず、人に對して、心にいやな感をいだくものは、如何に形をうや／＼しくするも、眞に禮容を身解せるものにあらず、人は必ず氣持を惡くすべし。請ふ、小我の念とはなれよ、人を馬鹿にし、厄介にのみ思ひ、妄りに嫌ふやうな、小さき腹の人にては、根本的に、禮義はわからざるべし。

◉今の家庭に乏しきは、孝の觀念也。佛教の如き、耶蘇教の如き、理論の上には、孝を否定するものに非ず。されど、實際には、孝の實行を促しては居らぬやう也。

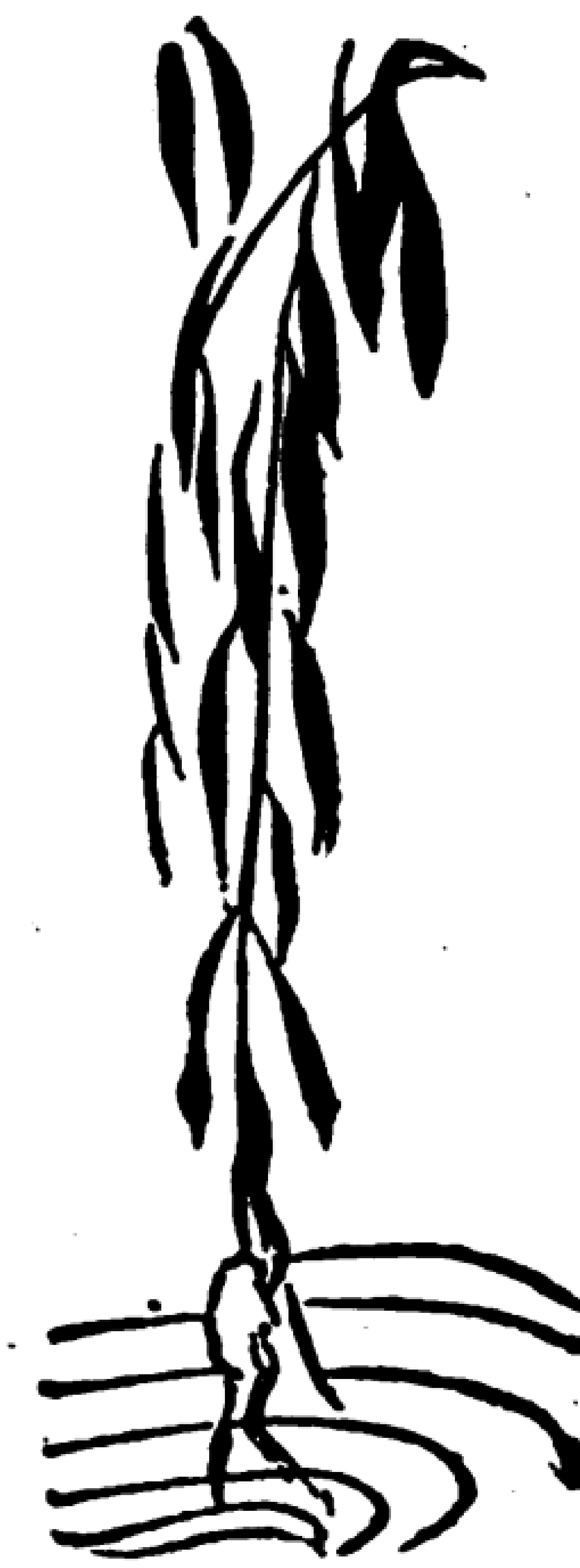


靴と下駄との得失

◎護謨靴と皮靴――靴の爲めに足部を冷却するとは諸病の原因になるとて、近來醫術界では非常に八釜しく言つてゐます、大人は兎も角小兒には一層注意を要することです、體温を保つ上から云へば、皮靴の方が遙に護謨靴に優つて居り、外部の水氣を誘導しない點に於ては、護謨靴の方が皮靴に優つて居ります。全體皮靴は晴天の時若しくは室内用として穿くべきもので、又護謨靴は專ら雨天に歩行する際に、二つ重ねて皮靴を下に護謨靴を上に穿く時に用ふるものです。

◎一足の靴より寧ろ下駄――護謨製のと皮製のと別々に二三足もあれば濕氣に遭ふと直ぐに他の乾燥た輕い靴と取替へて穿くことが出來る故申分なしですが、學生の中には年が年中一足の靴で過す方がある、此大事な僅つた一足の靴がうまく足に合へば兎に角、一時經濟的な所から古靴屋に行つて古靴、而も足に合はない窮屈な物を買つて、我慢して穿いて居ると、甚く足の發達を妨げます、それも晴天の日なら差支ないが、降雨の日には道路の惡い爲に靴が濕つて靴足袋まで冷たくなる、尤も歩行中は假令靴が濡れてゐても足部の血液が絶えず循環して居る爲め、別に故障はないもの〻、椅子に腰かけて居る樣な靜止の狀態にある時は、足部の冷却から非常な危險を惹起します、故に他に一足でも掛換があれば結構ですが、唯つた一足の下等の靴を穿く位なら、寧ろ下駄の方が日本人には宜しからうと思ひます。

◎靴の製法と下駄の効用――日本で出來る靴は少し製法が拙くはないかと思ひます、一概には云へませんが西洋出來の物と比べて見ると、日本製のは足の格好に合はない樣で、殊に女學生の靴と來ては無暗に踵が細くて高くて、側で見てさへ轉びさうです、斯樣な靴は足を損ねるに違ひない、之に引きかへて日本の下駄は日本特有のもので、他國に類のない文明的の履物であります、ソレに下駄は便利で餘程經濟でもあり且つ又た足の爲には第一等です、日本の下駄は靴の樣に周圍から拘束を加へませんから、足の發育を妨げるやうの事なく、又下駄は靴より高いが爲め、容易に濕氣に冒されず、稀に濡れても絶えず空氣が通ふので直ちに乾燥しますから、足の病氣もなく、身體の爲には大層頁からうと思ひます、日本人は這麼實な物を穿き馴れて居るのですから、袴を着けたからとて強ひて靴を穿くには及びますまいと思ひます。(ミセスファーデー)



女文豪が活躍の面影

（一葉女史が事ども）

三宅花圃

元祿風の才人

私が夏子（一葉女史）を初めて見たのは、歌子先生の處でした——中島歌子です。一葉さんは殆ど全く歌子にばかり學んだので、他には師と申すべき人はございません——其の時は夏子が師匠の許に塾生のやうに入つてゐたのでした。或時私と同伴の一婦人と、二人連れで歌子先生の處へ參りますと、其時お茶や五目鮨の饗應に預かりましたが、その通ひを見知らぬ婦人がするのです。私が其の時十七歳と記憶てをりますから夏子が二歳下で十五歳の折です。「今まで知らない人だが……新らしく來たのかしら」などと思ひながら見てゐますと、髮などを惡う——變つた結び方にして、（一つは髮が薄かつたからでせうが）そればかりでなく起居擧動も何となく變つてゐて、ぢきに「元祿風」といふ様な感じが起りました。「まあ祇園のお梶とでも言ひたいやうな人だ」と思つてをります——その内にお鮨も戴いて了つて、ふと同伴の婦人が其皿の文字を見て、「清風徐來水波不レ起が書いてありますね」と私に申しますと、恰ど茶の通ひに出て居た夏子が、それを聞くと其の赤壁之賦の後の文句を、茶を注ぎながらペラペラと讀み初めたぢやありませんか。一寸氣取つたやうな風をして……。「おや變つた人だ」と思ひながら聽いてゐますと、とう／＼ペラ／＼と讀んで了ひました。「知つてゐるにしても其麽場合にペラ／＼やり出さなくたつてい丶に……。それでもまあ知つてゐるだけは感心だわね」などと、同伴の婦人と話し合つた事で

したが、なにせよ其頃の夏子は才氣が溢れて止められぬと申すやうな風でした。

人をハメて笑つてゐる

其の翌年か翌々年の事。頻りにあのコックリ様といふものが流行つて、それを又歌子先生が大好きで、講義や歌の會などの濟むのを待ち兼ねる樣にして、ぢきに持ち出して一同で致したものです。すると又それが不思議に夏子の都合の善いやうにばかり動くのです。歌子先生もそれを不思議がつて――と申しても信仰しきつてをるのですから、「不思議だ」〳〵と内心に驚き信じてをつたのです。「ハテ變な事だ」と横の方で見て居ますと、何の事、それは夏子が知れないやうに動かしてをるので御座いました。で、後々には其の事を先生に話しましたらば先生も悟つて、「それだもの！彼女には最う呆れ返つて了ひますよ」と申して、それきりコックリ樣は廢めて了ひました。何でも才氣の迸るに任せてやつたので、人を一寸から陷穽て置いて、傍で見て笑つてゐるといふ風でした。後には漸々謙遜な風になつて參りましたが、其頃はまだ若うございましたので、鋭鋒の露はれるに任せたのでせう。

其麼風でしたが、歌を作るのは遲い方で、他の人が十首詠む間に漸う一首位なもの。練る質なのでございました。それが眞正の名人氣質で善いのでせうが……。で強ひて早く作らせると兎角分らぬ歌が出來ました。そして洒落などの分らない人で、鳥渡洒落れて見ましても一向通じないのです。兎に角變つてゐましたね。

銘酒屋に住む

十四五歳から歌子先生の世話になつて、塾に居たり又家から通つたりして居ましたが、其初は家は品川の方。後に父を失ひ、住居も轉じました、最う頻りに作をする頃は根津に居りましたので、其家がもと銘酒屋をした家でした。傑作「にごり江」のお力は直ぐ隣りの銘酒屋の女で、それをモデルにしたものです。家は銘酒屋がかりで御座いませう。それに女ばかり

の世帯——男の兄弟もありましたが厄難で勘當の姿でしたから、母親と夏子と國ちやんといふ妹と三人きりの女世帯。それに夏ちやんが又お世辭がよくて、宛然待合のお神様のやうだなどと申された位でしたから自然行き善いものと見えまして、始終男の書生が遊びに行つて居りました。今の馬場孤蝶さんだの、島崎藤村さんだの、其他いろ〳〵の書生さんが入り變り立ち變り入り込んで居たもので、稀には薩摩下駄が土間一杯に、足の踏場もない樣に並んでる事もあつたほど。近所では書生さんばかり入り込んでる變つた家位に思つてゐた事でせう。

さう美麗な、といふ程の人でもありませんでした。けれどお世辭の實にいゝこと、それは最う人を逸さない——客待遇の實に上手な人でした、拔目のない、氣のおけない、まあ下町風と言つた樣で、何か恁う人に摺り付くやうにして物を言ふ、といつた風でした私などよく「夏ちやんの處へ來ると何だかお茶屋へでも來たやうだ」と申した位。這麼風に上手でしたから行く方も行き易く、自から人を惹き付けたので御座いませう。

惹き付けたと言つても別に怪しい意味はないので、隨分私などに書生さん方を皮肉に批評してをりました。元來よく皮肉な觀察、皮肉な評をする人でした。一寸申し落しましたが、隣りのみならず一體に根津は銘酒屋などの多い處です。で、「にごり江」を書いた頃でしたが、夏子さんが恁ういふ歌を詠みました。

なか〳〵に選まぬ宿は葦垣の
あしき隣りもよしや世の中

哀れなる生活

隨分苦しい生活を致したので、それを考へると可哀相な思に堪えません。もう少し生活に苦しませなかつたら、如彼夭折(二十五歳歿)も致さなかつたでせうし最つとまだ暢びてゆけましたらうにと眞に可哀相に存じます。店に荒物を並べて賣りましたので、根津からまだ夜明前——眞暗な内に家を出て、神田の田町まで

買出しに行つて、歸つて來る頃は既う午前十時にもなる、といふ樣な事をよく致したさうです。さうして疲れた身體で又考へたり筆を執つたり致したのでございます。

元來幼少の頃から樂な生活ではありませんでしたが父が歿し、さて男の兄弟が頼みにならなかつたのですから氣の毒なものです。終ひには身體を大層惡くしまして、「どうも不可、不可と」始終申してをりました。或時私の處へ參つての話に、博文館の「通俗書簡文」を書くのが急しくて、殊に身體の惡い處だから一層困る。あれで又大變身體を惡くしたなどと、申してをりました。眞正に最う少し暢然した生活をさせて遣りたう御座いました。

僻める感情は幸か不幸か

かうした逆境の人でしたから、妙な僻んだ感情を持つて居りました。歌子先生の處に居つた頃から、いろ〳〵の人の事をいろ〳〵に申してをりました。例の皮肉な觀察は宜しうございますが、中には誤解や僻みやに思はれる事も尠なくないのです。先生に對しても同樣で、先生の方ではそれは善くしてやるのですが、何うもそれに不足でした。病中も無心を申してやると先生から十圓參りました。「先生に願つたら十圓……」と然も不平らしく申しますから、「夏ちやん、それは貴方よくない」と申したのですが、後で分つて見ると、其十圓は先生が衣服を入質して調達したものでした。

けれども一方から考へますと、かういふ僻んだ感情が却つて作の上には善かつたのかも知れません。拗ねた僻んだ感情や觀察が、あの人の小說には總てに見えて居りますので、それが又あの人の作の傑れた所ですさすれば僻んだ感情や觀察力を作つた逆境も、強ち呪ふべきものではないかも知れません、固より生來の天才が主で御座いましたらうが……

よく泣く人

夏ちやんは又實によく泣く人でした。何かといふと

「私恁う思ふ」とか「何う思ふ」とか言つてはよく泣きました。あんな勝氣な人でゐながらそれはよく泣くのです。ひどく張のある人が却つてひどく泣く樣ですね。
恁ういふ事がありましたよ。私が三宅へ參つた當座の事。私の父は隨分全盛に致してをつたので私などもまあ華美で御座いましたが、最うこれからは貧書生の生活ですから、鹽原多助の妻といつた樣な心持にならねばと考へまして、私が生來初めて双子の衣服を着たのです。すると夏ちやんが尋ねて來て、私の服裝を見てわい〱泣き立てるのです。這麼服裝をするやうになつてお可哀相だと申すのです。まあ恁ういふ風に實によく泣く人でした。

モデルに尾行

隨分思ひ切つてゐましたね。往來でも、此の人をモデルにしたいと思ふと、何處までも其の人に尾いて行つた事は度々あるさうです。元來自分の周圍の人――塾の婦人たちをもよくモデルにしました。注意して見ると直ぐ分るのです。「ハヽアあの方を描いたな」と思つてゐると、「私あの人を描いちまつたのよ、見て下さい」などゝ自分でも申しました。で、途中から誰かに尾行しながら、いろ〱の事を思ひながら行くと、彼方の人が横町へ曲つて了つたのを知らずに通り過ぎてふつと氣が付いて見ると既う影も形もなく、全く其人は何處かへ消えて了つてゐる。自分ながら化まれた樣な氣がした。などゝよく話しました。
作が初めて「都の花」に出たのは私の紹介でした。それを非常に喜んで、「あの時の日記をそれは面白く書いてありますのよ。今は私お禮を申しません。何時かあれを見て戴く」と申してをりましたが、遂にまだ見る事が出來ません。

戀

男との交際は澤山ありましたが、まあ皮肉評をする方が多くて、戀に落ちた事は遂に無かつた樣です。半井桃水さんとはよく往來がありました。そして半非半

井とよく噂が口に上りました。私此間の晩に行つたら牛井さんが臥てゐたとか何うとかで、私蒲團を最う一枚懸けてやつたとか何うとか、そんな事をずん／＼話すのです。「貴方そんな事を滅多に話すものぢやありません。人に何とか言はれますよ」と申した事でしたが誰にでも牛井さんの噂をずん／＼するものですから果して評判に上りました。「わるく噂もして見たいつて、あの都々逸はなか／＼穿つてるはね」など丶申したので私も大笑ひして了つた事などもありますが、這麼事をあんまり關はず言ふものですから兎角の噂も起つたのでございませう。

　發する折の語を申してお終ひに致しませう。「私が死んでもナニ裏の豆腐屋のお爺さんが死んだも同じ事だから、別に騷がない方がよい」と申したさうです。語の裡に却つて抱負が見えてをりますので、この心が作に努め力めさせた所以でございませう。（談話筆記）





虚榮に憧がる る婦人の心

玄　妙

不圖思ひ付いて何が最も私共の不愉快を感ずる事なんでせうと、嘗て友に聞いた事があつた。然うねと友は例の美しい眉顰めて、有り體に申しますとねと、輕く微笑みながら、徐ろに口を切つて、誰れやらが自分より少しでも容色の立ち勝つた女に出會すると、其の不愉快いつたら無いと申しましたつけね、然うよ、眞實ね、女子は誰れでも然うに違ひないと私は存じますのよ、無論、其れには容貌ばかりぢやあ無くつて、所有婦人の身に附屬いて、私共が他と比較し得可き總べての點に於てなんですの、其れが多少にも他に優れて居る箇所を見出だす事が出來ると、同時に其の痛快さつたら無いぢやありませんかと。

敢て自惚れるぢや無いけれど、他外の御婦人方は知らぬ事、自分には斷じて然うした淺間しい考へは持つて居らぬものと定めて、心竊に友の下ら無きを笑はずには居られなかつた。

艶な春雨の夕暮れ、友と兩人、上野の花見歸りを新宿行に小川町で乘り換へたのであつた。日曜日を雨の黄昏近し、自分等を合せて漸う七八人の中程に相向かひとなりて、

一人は着流し

一筋二筋は後毛も翻れて、衿足の其の淸さ、片裙少し端し折りの、緋紋縮緬は長襦袢美しう見せ、一人は茶色コートに此れも二十歳ばかりの綽約たる美人、何れ劣らぬ杜鵑花の血に紅う燃えてのみ、唯野の草の幽に可憐らしき自然の裝ひ無きこそ物足らぬ、喋々喃々と四邊憚からぬ英語交りの放談に、我れよりも先づ友

の方が餘つぽど恐縮の體にて、隅つこに小さくなつて固まつて、居れば遠慮も無く高らかに笑ふ毎に金齒の見ゆるさへあるを、着長しは況していけ高慢らしく、人も無げなる言語擧動一々癪に障つてならず、圖と立ち上りて大路の暗夜を透かし見ながら、彼の此處で降りちまひませうかと友に云へば、着流し邊に人の顏見歸りて、あらあ、ちよいと貴女、私のり過ぎちやつたわと、お人品にも障る程の周章て方してあたふた下車せし後姿を見送りて、怎う？と友は莞爾。

いゝ氣味なのね

と耳元近く囁く。エッと我れにもなく胸塞がる心地の息が喘んで二の句が續げぬ。何と云ふ不器用さ、私は私の心の下賤しさを友に見破られた樣な氣がして、友の手前恥かしくてならぬ、假りにも他人が乘り過ぎたと言つて少からず迷惑して居るものを、迂詐にも氣の毒なとは思へぬのみか、いゝ氣味——と迄は、或は明かに意識しても居なかつたであらうけれど、寧つそ其れに由つて、何か知ら、自分の蒙つた侮辱の幾分を癒やし得た樣な……、友には彼れ程つけ〲と皮肉に出られながらも、例の饒舌漢、流石に此れに對して適當な辯明は與へ得なかつた。

ほら、ね、ホ……いゝの、矢つ張り女なんですものねと、友は他意無げに笑つて、先日の彼れ、畢竟其の時私が貴女にお答へ申し上げた、彼の談しの生きた續篇なの、ねえ貴女、此れが所謂はかない、

女子の虛榮心

からの反影とでも云ふんぢや無いのと、思ひ入つた樣に深沈と言ふ。

成程此處だな——と聊か合點が行つた。何も虛心平氣に超然と構へ込んで、悟つて仕舞へば野山の花薄、蟋蟀鳴かした事もある昔思ひ合すれば、美なりと云ひ醜なりと言ふ、お多福元より憂ふるに足らず、出額必ずしも悲しむに當らず、人前作りの紅白粉も、時には寐卷着の亂次うてだに、他人樣と顏合せねばならぬ事

もあるべし。兎角喉元三寸過ぐれば何でも無い事に、唐茄子が食べ度いの薩摩芋が頂き度いのと、一食物に迄意地汚う贅を言ふ我れ〳〵人間の甲斐なさには、無い袖振れぬ四ッ割り紅絹の終氣が退けてならず、恨までもよい人が恨めしくもなり、惡くまでも宜い人が惡くらしくもなる。怎うせ味噌の味噌臭からぬ味噌はなければ、貴婦人よしや貴婦人がらうと、別嬪如何に別嬪がらうとも持つて生れた女子の果報元來此方の關係つた事にはあらぬものを。夏高樓の欄に靠れて、榮華の夢に誇る。

紹友禪の振袖

にのみ、月は三五の影美しう照るものかは、暮れて

博多帶地。芭蕉に薔薇（三越立案）



は小田に蛙の聲も聞かん、伏屋の軒に夕顔の花ほの白う咲きて、襤褸男の懐にも、涼風自ら心の儘なるべし、人間生れて何の吝臭い、お手が拍つたら其れ銚子肴と云つたら其れ美婦と迄惡う了簡せずもあれ、吹く時は宜べ騷がしき山風も、吹かぬ時には吹かぬものなり。天地廣闊光風霽月、其の塲に到つて見苦しい、何の醜態我が身ながらつく〴〵愛想が盡きて、涙の翻れるほど、其れは實際口惜しくも腹立たしくもあつたのであつた。けれど、此れは自分ばかりでも無いらしい、友は婦人の誰れにも斯うした弱點は必ず有つて居るものだと白狀した。而して我れ〳〵の罪と云ふ罪、惡と云ふ惡、悔いも悲しみも喜びも嬉しきも、人間七情の流るゝ處、泣くとも笑ふとも心々の世は面白さ、誠に此れあれば

こそ平坦な人生をして、趣味あり變化あり波瀾あらしむる理由なんで、古今の治亂興亡盛衰、卑近ては亭主女房に對して、大に鼻の下の延ばし甲斐あらじと云ふも、必竟此處等の方寸に基くんではあるまいかと迄、何故か友は、頗る眞面目に説明して居つた。

其れから三日措いての朝例の友、何時に無く亂れ髮でふらりと見えた。這麽にまあお早く、一體

怎う遊ばして

と聞けば、些つとばかしね、貴女に相談があるのよと妙に濟まし込んで、今度此の度、愈々私も結婚しちまひませうかと存じましてと頰も紅めず、切り口上の至極沈着き拂つて、新郎の君當年老つて四十と五歳親仁の親父盛り、第一がお金持ちで禿げ頭で、先妻の兒供が三人迄あつてねと、可笑しらしくも無く口元で笑んで、ホヽ矢つ張り私も慾張つてますのさと、人事の樣にはしやいで言ふ。餘りの事に聊か煙に卷かれたる體にて、默つて不得要領に扣へて居れば、だつて私、事つそもう五月蠅くつて足まらないんですものと、流石に言ひ譯らしう。

つと立つて坐作ひ訂して、いくわ、些つとも私介意やしないわ、初婚の御前が然かも其の君さで、あんまり粹興が過ぎ樣ぢや無いかつて、昨夜も母は泣いて言つてましたけ、けれど貴女、母なんかの申す樣に、高がへつぽこ學士位の處へ嫁つた日には、お客樣の來らしつた時に等御酒の一杯も差し上げ樣たつて、第一無けなしの財布からして檢査めなくちやならないわ、其れではね、餘り情無いわ、成程繼子があつて惡いと有仰るか知らないけれど、貴女方の樣に然うして、姑さんや小姑さんなんかゞ揃つて居らつしやれば矢つ張り何方道變つた事ないと私は考へるのよ。其れにもう相手が

いゝ老翁さん

ですもの、生強若い所夫を持つより幾ら始末が能いか知れない事よ、眞實さ、斯うは見えてもね、二十

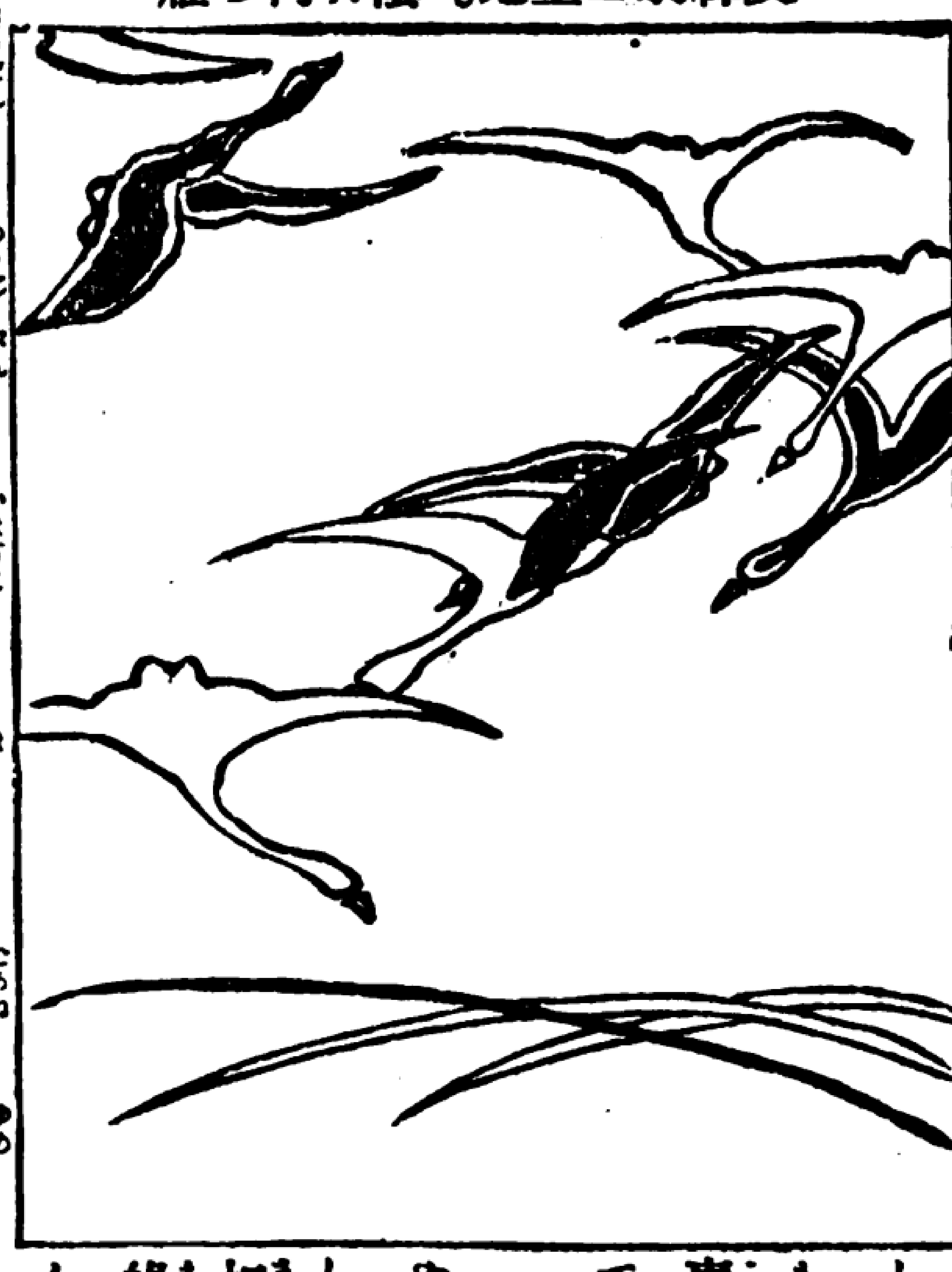
三じやあ少々老爺さんには勿體無いわと、饒舌る丈獨りで饒舌つて爽膽した樣に、怎うしたんだか、昨夜は徹夜眠れなかつたのと、つまらなさ相に生欠伸して、でもまあね、何よりかお金が澤山あるんだつてますから、此れからは此間の電車の中の樣な、彼樣口惜しい〳〵思はしなくつてもいゝのと、斯かる女には能くある癖の、得意の眉上げて誇らしう笑む。

元來定見の無い自分には、無論是とも非とも考へ得ぬけれど、聞いて見れば何れも此れも牡丹餅棚に載つかつて居さうな甘い相談に、噫自分にも今少し早く友の樣に氣が附いたら、彼樣貧乏男を亭主に奉るんぢや無かつたに等と、今更後悔の念聊か動く。併し其れも運ならば詮方なしとして、一生を世話女房に甘んじても居れど負け惜しみの強い友は終々虛榮の犠牲となつて、月の始め目出度く玉の輿に乘つたと云ふ事だつた。

此の頃不圖去る處で出逢つたので、什麼？敷けて？と無遠慮に聞いたら、其れあもうねと、令夫人頗る曖昧な事を言つて、ぷいと横を向いて仕舞つた。

世の中は何が幸福になるのやら、見れば虛榮に滿足を得し筈の友が、思ひなしか夏寒相な肩の細り。兎角糠味噌に緣の近い自分は、相變らず能く肥滿つて能く饒舌つて、肱を曲げての轉寐の夢にも、樂しみ自ら此の中にありと空嘯いたものだ。

友禪羽二重地。蔭日向の雁





祖母本位の家庭

加納ゆかり女

◎氣高い令孃●●●●●

雨の日は紫の合羽、お晴天ならば蝦茶袴を裾短かに、黒モスリンの本包を左手に右は幼い令孃の手を曳いて朝七時、牛込は砂土原町のダラ〳〵坂を下りて來る十七八歳の氣高い女學生。

服裝はさほど立派と申すでもなく、別に華奢なリボンをさしたり白粉でお扮裝していらつしやると云ふのでございませんのに、天性の美質と副して、女らしい靜容に、心ある人ならば思はず顧みて其ゆかしい姿容を感心するに違ひございません。あの表情とやら申して、横目をお使ひになる方や、ツンと濟まして擦れ違ひ樣プンと香水の匂に心ときめかせる樣な派手は御座いませんで、路の左り側を正しい姿勢で側眼もふらずに靜々と、電車の中ならば、自分はよしんば立つてゐても人に先づ席を讓ると云つたしほらしい風。〇〇女學校の模範生で田村靜子孃と言ば御存じの方もありませう。小歷が某雜誌に記載されたこともございますから。品行正しく學問は無論優等、其れに先生生徒の評判もよくつて眞面目な女らしい、實に見上げた方ですが、私が茲で御紹介申上げようと存じますのは其御家庭なのでございます。

◎怒り顏を見せた事なき女中●●●●●●●

お家は牛込の砂土原町。

お父樣は某會社の副社長をして居らつしやるのですが、女中一人お置きになつた丈けで極く質素な御家です。御家内は祖母樣に、御主人夫婦、靜子孃を頭に中學の二年かの弟さん、尋常二年の妹樣の六人で、皆其れは其れは好い方ばかり。

まづ樫の老木の被ひかぶさつた冠木門を這入つて、両側から夏木立に抱かれた石だゝみを行けば、チリンと鳴る格子戸で。

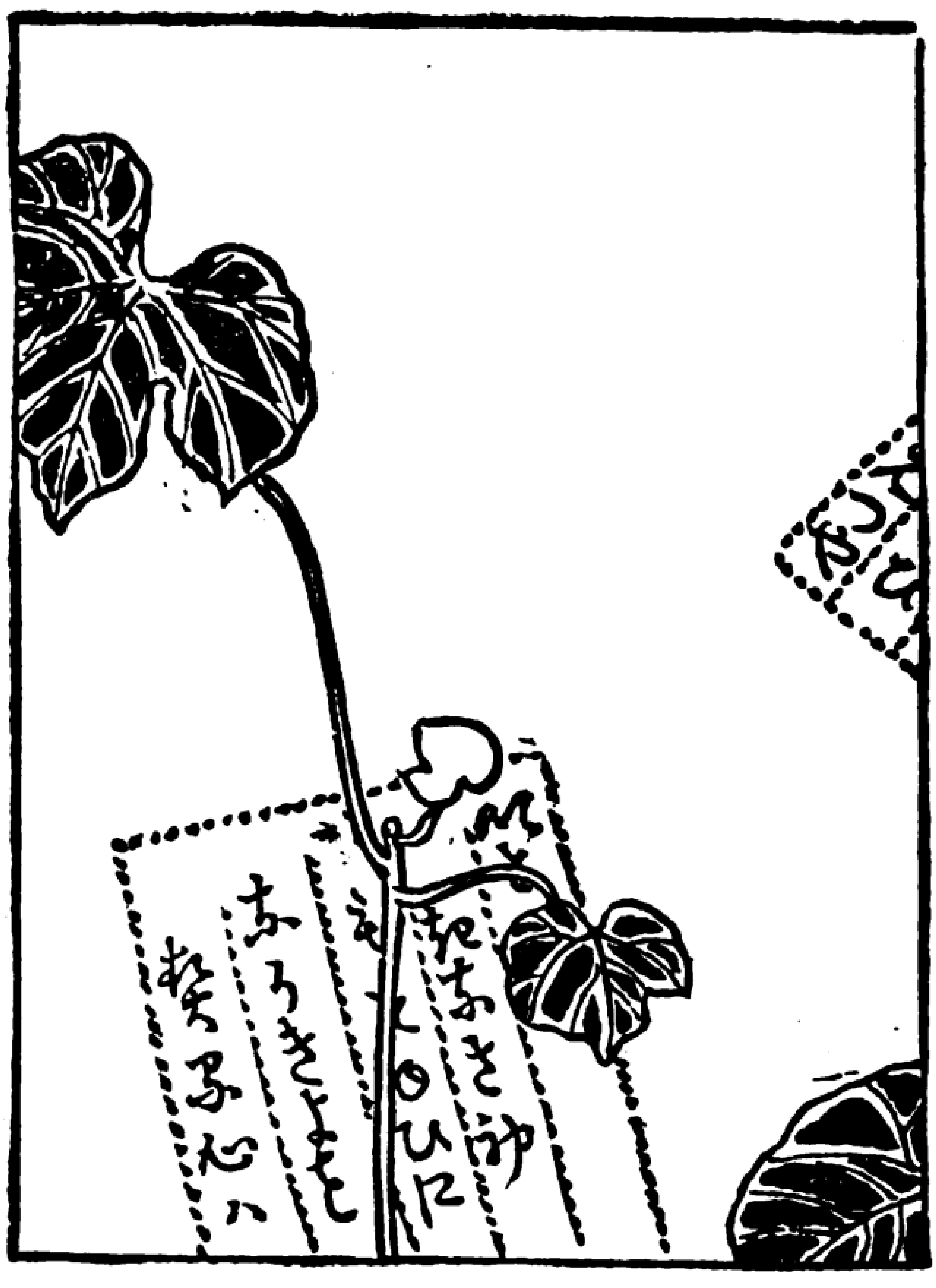
「御免。」と音なふまでもなく愛嬌の好い但し肥切つたお春さん……女中の名……が直ぐ陽氣な顔を出して

「呀、入來まし。」と太い手を優に突くのがお定り。其中に夫人が莞爾と出て來られ、廊下を行く時分には祖母様が眼鏡をはづし乍ら、

「屋外は如何ですね。随分お暑いでせう。」

とこれもにこ〳〵と現れていらつしやる。これは誰人が行つても左様で、始めての人が行つても決して待たせたり、主人丈けとか主婦丈けとかゞ面會することは殆どなく、事務用で來た人だの、特別に主人に面會したい人などは別として如何なる來訪者もこの暖い眞情のこもつた家庭に抱かれるのでございます。殊に女中が誠に工合の可い女で、これまで一度も怒り顔を見せた事は無く、何時も愉快さうに莞爾々々として居て、時々坊ちやんのお友達なんかゞ來て随分亂暴な口を利いたりしても、顔の線一つ動かさず子達にも極めて親切なものでございます。

裾模様。桐壺　（源氏物語）



　何日でしたか、無頼漢だか何だか物騒な男が二人連れで押し掛けて參つた時なども、例の笑顔で物優しく應對したものですから、云ふ可き事も云はずに歸つて去たと申します。

　其の癖仕事好きで日がな一日テンテコ々々々々と働

いて、最も規律だつた家庭ですから無意味な用事に追ひ使はれる樣なことは少うございますが、寸時の間も手を休めるといふ事は致さず、月二回の休日さへも遊びに出た事は三年このかた殆どなく、正月は早稻田の實家まで歸る丈けだといふ事で御座います。これはもとより生れつきなりまた此の女の母親もよく出來た女に違ひございませんが、一つは田村家の暖い、健かな、活きた家風に感化された處が多いだらうと思ふのでございます。

◎自分の事は自分で始末する子供

主人夫婦は、極く平民的で女中なども決して世間にあるやうな「雇人だもの」とて人格を無視した如うな扱ひはなさらず、一日の仕事もチヤンと時間を定めて夜分もお湯がある日の外は夕食後から就眠時まで自由にしてあるやうでございます。臺所も瓦斯で物を煮燒きするやうになつて居りますから、清潔でもあり、時間の經濟になる事は夥しく、始終手が空くと見えまして、古い風呂敷に迄も奇麗に糊を附けて女中部屋に疊んでありますし、板の間もツル／＼と光らせて、炊事場の窓はガラスになつて居ますが凡そ曇つて居た日は見た事がありませぬ。

斯う云ふ風に家の中は極く清潔で、母屋から湯殿、隱居所、便所に至るまで何人に見せても恥かしくない位。玄關脇の子達の書齋は必ず三人で始末をお附けになるのださうで、いつも机上の白磁の瓶に挿てある四季いろ／＼の草花は、皆の手に成つた庭園のもの、手製の造花、學校で稽古した繪畫等は壁に飾られてあります。

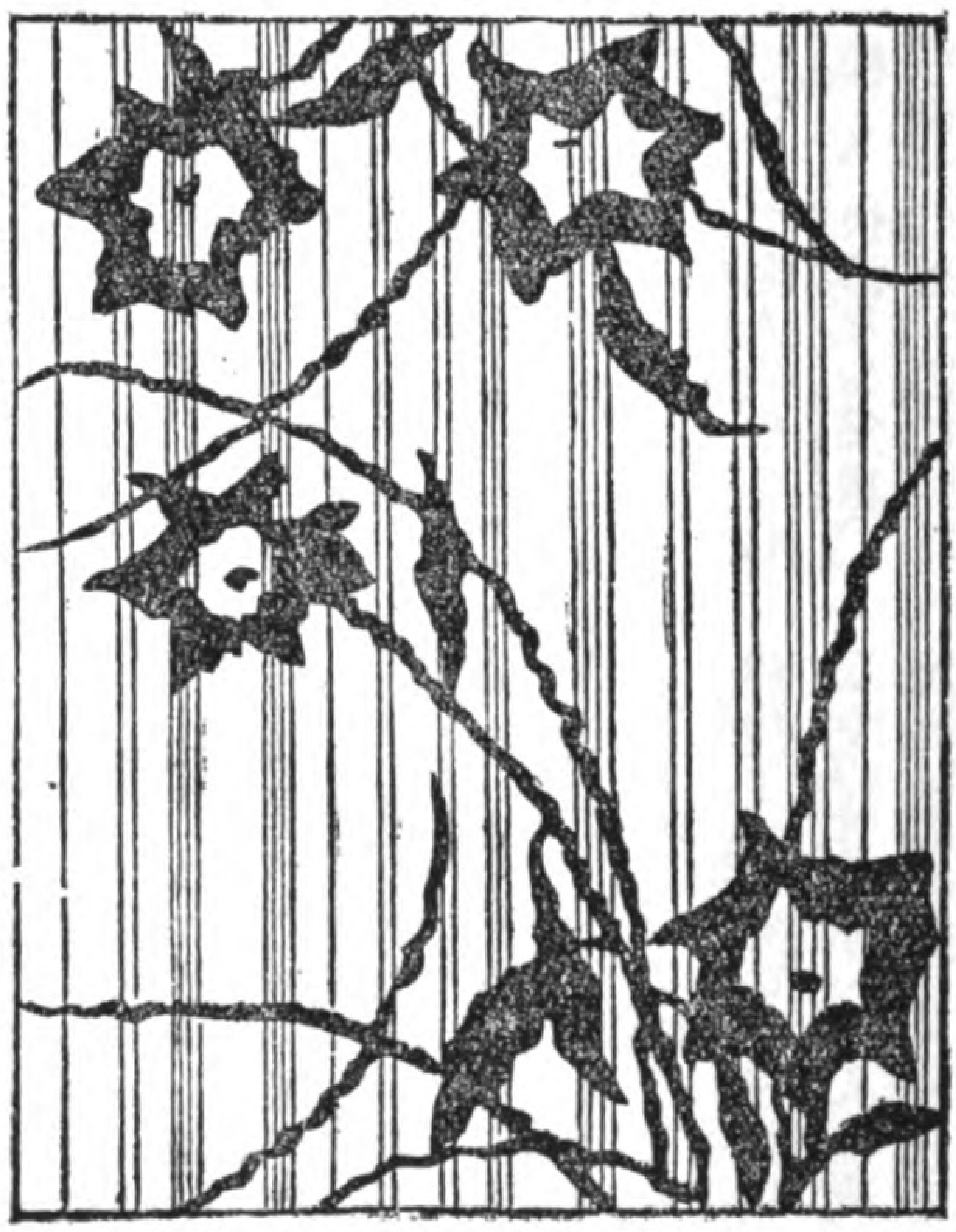
子達の教育は嚴といふよりも寧ろ放任主義で、比較的自由の樣に見受けますが、新らしい教育を受けた夫人は飽くまで自治といふ事をやかましく云はれるやうで、靜子孃なども十三歲位の時分から肌着は勿論、自分のものは着物まで婢僕の手を勞はさず、糊着けまでさせられたさうです。併し姉弟はどこまでも助け合ふ樣に、幼い令孃の頭髮を姉君が結んで遣れば、復習は中學のが見て與へるといふ風になつて居ますとか。

御主人は物事に餘り八ヶ間敷く謂はれない方で、總てを祖母樣なり夫人にまかせつ切り、職業柄に似ず呑氣に始終面白いことを云つては笑はせるといふ風ですから社會で好いばかりでなく、來客などの評判は最もよく、子達は大好きな祖母樣の次に慕つて居られる樣でございます。

◎なつかしい祖母さん

所でまた祖母樣といふ方が實によく出來たお人で、お生れは關西の某藩の御家老、品の良いしとやかな御樣子に似ず、何でも新らしい空氣を吸はう〳〵とお考への樣子で、新刊雜誌なども家庭に關するものは始終お讀みになつて應用せられ、子達の敎育などは一寸新婦人の机上の空論では及びもつかない妙手でいらつしやるので、却々良くいつて居ります。第一樂天家の大層さばけたかたで書生可、女學生可、子供可といつた風ですから參つた者もまことに居心地がよく、なまじつか厭に濟ましたお友達なんかと話てるよりずつと面白うございます。其れに趣味が多方面で、お料理、琴曲、繪畫などは黑人でいらつしやるからでもありませう。また、妙に土いぢりがお嗜好で、隱居所の裡にある小さい菜園には今頃ならば豌豆、大根などが餘り感心のできない瘠せ姿でションボリと行列して居ますのも愛嬌でございます。

中形浴衣地



夫人などに對しては感心して了ふ程御優しいのですがたゞ家內の方にばかりでなく、凡そ如何なる身分の卑しい人にでも其れは親切ですから一度この家庭に足を入れた人は、胸の奧に深

く深くこのなつかしいやさしい祖母樣の面影を刻みこんでしまふのでございます。

從來姑といつたら嫁をいびるもの、老人といつたら僻根生が强くて頑固なもの、といふ觀念が先入主となつて居た私は、この家庭に出入するやうになつて實に意外の感に打たれました。臺所の隅々にまで形容のしがたい暖みが行き渡つて居るのですもの。

まことや、老人の美しい涼しい心を持つた程氣高いものはなく、老人のうまく舵を採られる家庭ほど幸福なものはございますまい。

◎信せられる親と信じる子●●●●●●

斯の如うに、老人臭くなくつてそして老人のやさしみがある情ぶかい進取的の祖母樣と、快活なお父樣、文學の嗜のある賢したお母樣、謙遜で活動の權化ともいつつべき女中等の手によつて、梢を撫でられ、滋養ある液を注がれ、光を仰ぎ、厭ふべき害蟲は除かれつつ延伸丈けのびんとして居らつしやる子達は、自然にテキパキとした、無邪氣な、女は女らしい男は男らしい、爾して何處かに趣のある勉强家でございまして、靜子孃はじめ弟樣、妹樣達が學校で優等生であるのも決して偶然の結果ではないのでございます。

御主人はよほど重要な社用の他は、外泊せられた例がなく、地方へでも出張せられた時だの、一寸宴會だのゝ歸りには必つと何なりと家内中へ土産を買つて來て喜ばせるとか、差つかへの無い範圍に於て旅行先の模樣、出來事などを例の愉快な調子で以て女中にまで話して聞かせるといふ風ですから、皆が信じ切つて居られるのです。

ですから、子達なども世の中の有りとし有るお父樣の中で、我家のお父樣位正しい人はなく、面白い人はなく、尊敬すべき人は決して無い！と思つて居らつしやる樣です。

祖母樣、母君に對しても無論同樣で、ずつと以前二三年も前になりますが、祖母樣がお病氣で如何と見えた折などは幼い人達が大層心を痛めてゐられる樣子でしたが、某日母君が便所に行かれると壁の所でヒソヒ

ッと話聲が致しましたさうで、ふと何心なく耳をお立てになると靜子孃の聲で、

「だけど祖母樣のお爲めですもの」とキッパリいはれたのです。すると弟樣の方は其時少し弱つていらつしたのが。

「先生は迷信は不可と仰つたけれど……姉さんがかまやしないとおもふならば僕だつておまゐりする。お祖母さんをどうぞ丈夫にしてあげて下さいつていふんでせう。」と其れから朝早く跣でおまゐりするものだとか、お賽錢は貯金ですれば可とか、いたいけな相談をしてゐらつしたと云ふことです。

凡そ子供が祖父母なり親なりを信じない程恐ろしい結果を來たすものはございませんでせう。學生なんかの墮落して居る人を見ますのに大抵、親を信じない人、又信じ難い親を持つてる人が多い樣でございます。





令孃日記

金盞花

▲十一日、土曜、晴れ。

昨夜は雪月花を一時に見たよ、なんて讓様は云つて被居る、詰らない洒落だわ那麽事。と私が云つて朝つから騒いで居ると母様に何ですねえ那麽に騒いで、菊さんも靜かになさいと、叱られて了つた。今朝から好い天氣で、庭にはまだ雪が悉皆り殘つて居るが往來はもうカラカラで御座いますよ、と女中が云ふ、庭に雪が殘つて居るとは思はれない暖たかさ。私は羽織を脱ぐ。今日で四日目のお島田、少し鬢の毛が頬に零れかゝつて、前髪も惡くすると分け目がぐぢや〳〵になり相でも、私は却て結び立てよりも此の方が風情があつて佳いと思ふ。まだお島田に結つてからお友達には誰樣にも逢はないからよかつた、と思つて居ると、先日の歌舞伎の時に到頭康子さんにお目に懸つて了つて極が惡かつた事、而したら直ぐに宮下さんは電話で、あの貴女お島田にお上げ遊ばしたつてねえ、お目出度う。なんて冷かされて了ふ。眞實に誰かお島田にでも結はふものなら一大事のやうに思つて被居るわ、皆さん。

お化粧りして鏡に向ふ。ダークブリユーとか云ふ色の半襟に、着物は母様が華派だ〳〵と仰在る節糸のを着た。紫地にあらい矢絣のだから母様はもう私には華派だと仰在る、だつて母様同じ級の方にだつて私よりもいと〳〵華派作りな方は幾等でも有りますわ。私だつて未だ漸と廿歳なんですもの、然う〳〵恰でお婆さんが着るやうな細かいの許り着ないでも佳いでせう？と何日も云ふ。私が未だ廿歳ですもの、と云ふと、母樣はもう廿歳だからね、と仰在る、何だかまだと云ふのともうと云ふのとが同じ廿歳でも大變な相違が有る

やうに思はれて、私は眞實にイヤになつて了ふわ。帶は夫れでも友禪の薄色ばつかり使つたのをしめて、鏡に映るのを見ると大變に今日はお化粧りがよく出來て嬉しい事、指環は紅寶石入りのを一つ箝めて居る。金剛石入りのは他處行きのとしてある。然う鬢のほつれを五月蠅いと云つた風に、掻き上げるやうな眞似をしてみると紅寶石がきら〳〵と晃めいて指が馬鹿に奇麗に見える。今日のやうにお化粧りが好く出來た時に彼の宮下さんの宅へでも行かうかしら、と思ふ。でもお島田で極が惡いけれども。眞實に宮下さんちやアお兄様が大學出の方で大變にお口の惡い處に持つて來て輝子さんもあの通りの活潑だから憎らしい程口が惡くつて。私なんぞ頭から冷やかされて了ふわ。一寸電話で御都合がお宜敷くつて？お宜敷ければ私之からお話しに上るわ、と掛けて見ようかとも考へたがでも一旦母様に伺つてからでなければ不可ないと思つて母様の



お出で遊ばすお茶の間に行く。母樣はお獨りで新聞を讀んで被居つたから長火鉢の向ふへツッと坐つて故意と默つて居ると、「何か用かえ？」と仰在る。

「否、別に。」と一寸云ひそゝくれて了つて、

「母樣眞實に羽左衞門のは宜う御座いましたねえもう一度行つて見たいと思ひますわ。」と話は何日の間にかお芝居に飛んで了ふ。

「なか〳〵上手だからねえ、だが一つ芝居を然う幾度も行つて見たつて詰らないから又此度變つてからでなければ。」と母樣は私の話しには些少も氣乘りのなさらない御樣子。切角伺ひに來たのにと思ひ乍ら。

「ねえ母樣彼の時の康子樣の御召しは佳い色でしたねえ、私のも此度彼あ云ふ色のにして下さいましな。」とつい云つて了ふ。宮下さん行きが何日の間にか飛んだ處に外れて終つたと自分乍ら可笑しくなつて、まア慾張りな事を云つてるわ、と心で——自ら笑顏になる。

「菊さん那麼事を云つて居ないで今日は先生の來る日だらう。些少浚つて御覽なさい。お前は些少も浚はないから切角何年も習つてもズン〳〵後から〳〵と忘れて行つて何の役にも立たないぢやないか。之からさらつて御覽。菊水は上つたのかい？」

「否まだ、でももう直きでせう。」

「花（女中の名）にでも命令けて箏を持つて來さして彈いて御らん、先日鈴木さんへ行つた時にお前のお友達とか云ふ何とか云つたつけ……そう〳〵那美子さん。彼の方が廣瀨中佐のを彈いたがなか〳〵上手だねえ。聲も細いよく透る佳い聲だし。」

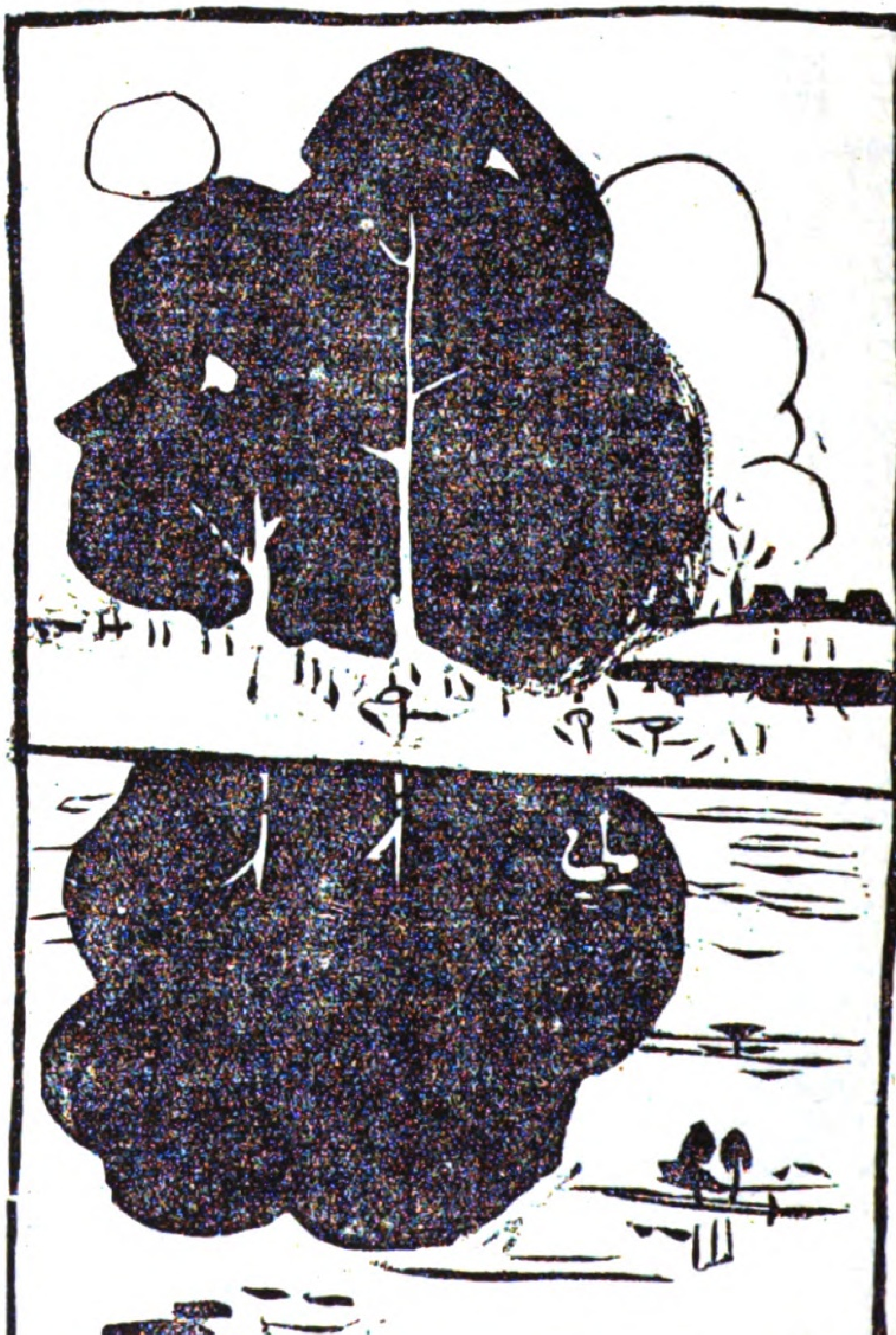
「私は箏なんぞよりピヤノの方が餘程佳いんだけれども……。」と小さい聲で母樣に聞えない程に云つて此度は大きく。

「ねえ母樣私清元が習ひ度いんですがねえ。下品でせうか。此の間あの安名を聞いて眞實に佳いと思つたんですもの。」

「菊さんのやうに唄はなければ清元も常磐津も無益ですよ。」

「あら唄ひますわ。」と私も口惜しくなつたから一生懸

命になつて辯解すると、
「唄ふと云つた所で少さい恰で聞えるか聞えないやうな聲ぢやだめですよ。一つ今日は大きな聲を出して御覽、花や。」とお呼びなすつて、到頭花に琴を運ばして私の前に置かれる。私はもう厭で泣き出し度いやうな氣がして居ると花が爪箱と一緒に歌子さん（私より學校では一級上だつた方で、今度私の嫂様となる方、私とは大の仲よし。）の御手紙を持つて來る。
「母様歌子さんが明日か明後日か本郷座へ行かないかつて仰在いますわ。恰度よう御座いましたねえ。歌子さんの御家ぢや御兄様と歌子さんとお二人限りでお母様は被來らないんですつて。母様も被來いますか。」



「私は奈何も新派は見たくもないからね。」
「ぢやア私は行つても佳いでせう。」
「さあ、お前一人ぢやア兄様も行くだらうが。」
「えゝ兄様は無論！」
「まあ那麽事を云はないでお彈きなさい。」
止むを得ず私は四段砧を彈いた。

午後から先生が被來つておさらひやら習ふのやら半日琴の前に坐らせられたのには閉口、晩御飯召食つて先生はお歸り。夜は私一人、お友達の處へ手紙を二本かく。十時に寢る。

▲十三日、月曜、雨。

今日は朝から珍らしくお裁縫をする。庭の櫻桃は一番早く咲いたのでもう葉が好い加減に出て居る。斯う云ふのを春雨と云ふのかしら。細くシト〱と降りつづく、然う寒くも無く恰度佳い時候。斯う云ふ風に私一人私の部屋で殊勝らしくお裁縫でもして居ると奈何しても話對手が無いから種々の事を考へ出す。

「昨日宮下さんへ行つた時の話や鎌倉に行つて居る私の親友の——八重子さんの事を特に思ひ出す。私が種をまいて夫れは〱丹精した匂ひ菫が此頃やつと咲いたのでそれを押花にして種々と氣取つた文句を添へて手紙を上げると、涙を滞さない許りのやうな御返事。奈何して彼な優しいのだらうと思ふ、八重子さんは肺病で學校も中途で止してお了ひなすつた、眞實にお氣の毒な。私のやうなピン〱した體に一日でも佳いからなり度いと好く仰有つたつけ。肺病で鎌倉へ轉地。第一それからして小說的だわ。夫れに失戀と云ふ小說らしい事實が有るんだから餘計小說らしい。美人。耶蘇教徒、何だかもう悉皆り小說だわ。夫れにしても男の方は何と云ふ酷い方だらう。彼麽氣の優しい方だからこう御自分一人の胸に疊み込んで靜然と我慢して被居るのだわ。僅かに私丈に其の苦痛を洩して——あの時は大變にお泣きなすつたつけ。でも其の方を恨むおやあ無く基督の所謂汝の敵を愛せ、と云ふやうな行爲は私には到底出來ないわ。恨む處か私は却て幸福になるやうに祈つて居ますと。云ひ乍ら火鉢の緣に倚り掛つて、低向いて、瘦せた手に、火箸で灰に幾度びも幾度びもラブ、ユア、エチミー。と書いては消し〱。涙が長い睫毛を外れて、ホロ〱と灰に落ちる。火鉢の傍に手擦れた聖書が置いて有つて私が來る少し前迄大方讀んで被居つたのだらう。と思つて。

今でも夫れを思ふとお氣の毒で眞實に私は何でも八

重子さんの御手紙には泣かされるわ。もしも夫れが私だつたら寧そ思ひ切つて何か酷く恥でも掻かして遣たいと思ふ。人事乍ら私は口惜しい。

夫れから宮下さんの御話し、もう私の級の方は大抵お嫁きになつてねえ。まだ嫁らつしやらないのは貴女に私に後四五人よ。なんて厭やに嘆息がましく仰有つた。私は何だか變に聞えたので、ぢや貴女もお早く御結婚なすつたら佳いでせう、と云つたら。厭アチエツて眞赤な顔をして被居つたわ。眞實に妙だわ。嫁いた方が皆がそれぐ\意外な處へ被入るので不思議だ、私達と同じやうな、儲に學校の成績なんかも餘りよくない方が、何々子爵世嗣夫人とか、何とか商會の夫人とかへ被入る。伯爵夫人にお成りなすつた方もある。何だか人の運つて妙なものだと思ふ。運は自分で作れると云ふにしろ、豈夫何ぼ何でも伯爵や子爵の家へ押掛けて行つて居坐る譯にも行かず眞實に人は持つて生れた運と云ふものが有るのかしら？ぢやあ私は……と思ふと妙な心地になる。全然自分の末來は眞暗で之から先は奈何成行くか分らない。一寸先は暗の世とは好云つたものと思ふ。別に人の幸福を羨



む譯ではないけれどもまあ彼麼人が……と思ふと些さか口惜しいやうな氣がする。何も虛榮心とか何とか七難しい理屈をつけて云ふ事も無いが、誰でも好い家へ嫁たいのは當然で、ソレが失敗に終つた人の泣聲だと私は思つて居る。但し私一人の考へ。

　だけれども又一寸權式ぶる譯でもないが、唯寫眞を見た許りで強いて欲しいとか云はれる嫖致好みの方に貰はれる人は、何の誇も何にも無く藝妓や何かと同じぢやないかと思ふ。と云ふと大變にお差障りが出來て失禮に當るかも知れない、けれども私は然う思つてゐる、乾度那麼方には、晶子の短歌で、間違つてゐるかもしれませんがたしか。

　肩を垂れ裾にそよぎし幾尺は
　　王の手にさへ觸れさじと思ふ

と云ふ歌の心は恐らく分らないだらうと思ひますわ。で其樣方は恰で一時男の玩具になるのに過ぎないやう、なもので、それを知らずに世間で騷いで、ヤレ出世だとか幸福だとか云ふ呼聲におどかされて嫁く方がありやしないかと思ふわ。が之は私の勝手で、まあ早く云へば之も泣き聲のお仲間かもしれないが一寸から云つて見た許し。這麼事を考へ乍ら時々庭を見るとまだ雨が止みさうにも無い、終日降るのかしらと氣が鬱々して了ふ。海棠の蕾が薄紅く膨らんで奇麗、成程美人に譬へる丈の價値はある。なんて生意氣な事を思ひ乍ら、一つ春雨の歌でも作らうかしらと何日に無い優美な心が出たので我乍ら可笑しうなる。

　兄樣のお部屋では兄樣と讓樣（小さい兄樣の事丈奈何云ふものか皆んな名を呼んでゐる。）達の笑聲が聞える。乾度又謙ちやん（弟）を揶揄つて被居るんだらう。助太刀に行つてやらうかとも思つたけれどもまア〳〵と止して了ふ。袷も、直きに出來上るのだから、出來上つたら行きませうと思つてゐると又イヤに針の運びののろい事。這麼に下手かしら。と自分で自分を疑ひ乍らヂレ〳〵する。

　「菊さんピンポンでもしやうか。」と讓樣が被來つた。私とは二つ違い。私が女一人で、後は三人とも男の兄

弟、上の兄樣が二十五、讓樣が廿二、弟が十八。で三人は佳い工合に二つ宛違ふ。讓さんは中丈の私見たいに肥つて居ないから恰好が佳い。私は故意と勉强家ぶつて低向いた儘せつせと顏も上げずに針を運ばせ乍ら、

「今日は一生懸命なんですもの。」

「馬鹿にしてらア、平常は始終遊んでるくせに。さアお出でよ。」

「だつて讓さんは猾いんですもの。何日でも落しといちや數を誤魔化すからイヤ。」

「イヤに勿體振るね。生意氣な。」

「ほゝゝ夫れよりも讓さん此度又鳥打ちに出かけると佳いわ、洋服や何かばつかし氣取ても肝心の鳥は——讓さんたしか雀が三羽ね。」



「失敬な！鳩ぢやないか。」

「あゝ然う／＼鳩が一羽はいつてたわね。夫でも大變な獲物のお心算だから振つてるわ。だつてあの鳩は銃砲の丸の當つた跡が無いから大方買つて被來つたらうと云ふ評判よ。」

「誰が那麼事を云つたい、失敬な奴だ。菊さんだつて彼の時は鳩を三羽にさ、夫れから——。」

「嘘言ばつかし、夢なの。夢の話？」

「口が惡いなア、兄樣の御仕込丈あるよ。」

と讓さんは笑ひ乍ら睨む。

「今日は眞實にしないのよ、兄さんや謙ちやんとなさいよ。けふはだめ。」

「兄樣なんざア對手にならないもの。」

と威張つてゐる。私は到頭せず了ひ。其代り袷は縫い上げる。

灯をつけて小説後の不如歸と云ふのを（お友達から借りたの。）讀む。窓を啓けてみたら外は眞暗ら幽かな雨の音が、木の葉に囁やくやうに思はれる。灯を消して寐たのが十一時——。小説の爲に遲くなつて了つた。



英國女學生の寄宿生活

◎多年英國に留學し、牛津大學の聽講生たりし長谷川キヌ子女史は、同大學女學生の情況を語りて曰ふ、學生は悉皆寄宿生で多きは九十名少きは三十名位團體生活をして居ます學生の年齡は滿十八歳、中に高等女學校の教員を七年もしたといふ三十位の方もお在でゞしたが先づ通常廿一から二三位の年配の方が多いやうでした。

◎專攻科目は史學、英文學、近代語學科の方が多い樣ですが日本と異つて文科法科等の分科に分れて居ませんから何の講座を聽くのも自由です寄宿室は大抵一人に一室中には又二人で一室にお居の方もありましたが其は眞の數へる位でした、日本の女學生との比較ですか放任主義といふ程でもありませんが日本の女學生程嚴格ではありません其れといふのも寄宿團體に居る者は斷じて間違の無い者と信用されて居るからです、ですから夜の外出とか男學生からお茶の御馳走に招待された時等は監督の許可を得ますが晝の外出は氣儘勝手で厶います。

◎元來日本の女學生に比べて活潑で且運動といふ事を重んじますから夏はテニス冬はホツケーを盛に競技します外にボートも巧みに漕ぎます、又晝食後散歩に出まして今日は三哩歩いて來たとか、五哩歩いて來たとか申して居ますが、遊戯の競爭等は却々盛に行はれまして、美はしい聲々に聲援致します樣、迚ても日本では見られません。

◎寄宿の費用、は年に九百圓から千圓位男學生ですと朝食は自分の室で喫べることが出來、又料理人を連れて居る人、貴族的生活をなすつて居る方とありますが一般に女學生は三食共食堂で喫飯致します朝は七時に起きますが其前に女中が室々へお湯を持つて參りますし、又起床の鐘が鳴ります、授業は大抵九時に初まりますが總じて不規則で時間と時間の間の休みが多い樣です、だが大抵一時迄ありますから晝餐は一時半頃にして其から五時過は自由に遊ぶのです、而して晩餐は八時で五時から八時迄は誰方も、ミツシリ御勉强されます。

◎男女學生の交際は自由の樣で又嚴格です、よく四時から五時の間にお茶を煎て互に招び合つこを致しますが、といつて牛津へ來てから顏馴染になつたものは、交際が出來ぬ事となつて居ます、即ち家庭から知合て居る者でないと、自由に往來が出來ないのです。

◎學生の服裝は派手でもなし先づ中庸を得た服飾で厶います、加之一般が平民的で能く日本の女學生にある樣な、家庭が苦しいに拘はらずお友達に對して肩身が狹い等とミ、エを張つたりなさる方は厶いません、一學期中二枚の衣服しか出來ない時には必ず其で通しまして決して恥ともしませんし、又害にも致しません。



日用品研究の趣味

設樂松嶺

日常生活の上に使用する實用品、膳椀、皿小鉢の類を始めとして床の間の裝飾品、茶器、玩具さては敷物、衣服、手廻りの品、其外あらゆる家の器物はいづれも皆諸國の物產——即ち特種の名產を集めたものでそれに就て一通りの知識を得ることは家庭教育上に必要なることでありませう、それには漫然と器物を使ひ放し、置き放しにせず、その品物を丹精して夫を時々陳列して由緖を調べて見るのが私の申す家庭博覽會の主意であります。

同じ帶地でも、支那の繻子と日本の繻子とは品格がちがひます、同じ日本の出來でも京都と桐生足利とは工合が違ひます、又絹織物でも佛國製はどこやらあかぬけがして上品で意氣な肌合がありますが、すぐ隣りの伊太利製はどうも、眞似が出來ない所詮「まがひ物」は本場製と同じに出來ません。是れ產物は國民の特性で氣質、風習、進步は明かに產物の上に表るゝからです、一寸農商務省の陳列場に行て見ても、加奈多は加奈多らしく、支那は支那らしく、所謂「らしい」所があります。少しく注意して產物を觀察すれば、佛國の化粧品は佛國の寫眞、獨逸の學術器械は獨逸の寫眞で、つまり國民の品位は產物で代表さるゝ者といふても宜しいでせう。

國家の實力は兵力と富力との平均に發達することでいくら兵備が盛でも富力が乏しいと「空腹の人」のやうに充分の働きは出來ませぬ、で富力の元は實業、實業の發達は善良の產物を廉價に、多數に製造することです。現今英國が富强を以て世界に誇るのは、殖民地から安價の原料を持つて來て。豐富の鐵で精良の器械を作り、良質の石炭を燃し、得意の熟練で以て善良の品

物を多數に廉價に作り出し、これを世界各地に賣擴めるからであります、かやうに產物を改良增加しようとするならば、專門家は勿論ですが、國民が皆產物に無限の趣味を持ち、それを鑑別する眼識が高くならねばいけませぬ、されば自然に粗惡下劣の產物は製出せぬ樣になり、又作つても買手がないから。つまり進步發達するわけであります。

產物を知るのは、實業敎育の初步ですから、他の國民敎育と同じやうに家庭から初めるのです。家庭の感化は極めて強力なものですから、產物を集めて之を見これを弄ばせたなら、自然とその趣味を解するやうになるのであります。

子供は翫具を飛び上るほどに喜びますが、それにも增して美しい織物を娘さん達に見せたならばそれこそ猫に鰹節、その嗜好心を利用するのであります。即ち品物についてその產地や、模樣や、直段などを知らせます、彼の混濁玉の如き陶器や、彩色花の樣な漆器などは、之を見、それる用ふるにつけ、どんなに美しい感情が起りませう、從て家庭の趣味は一段と深くなるのであります。

一體日本の風習では古物癖が却々多くて、千利休の茶器とか、足利時代の漆器とか、千萬金を投じて集める人々が多いやうだが、古物は高價で、それにあやしい物が多いから、夫よりもむしろ現代の進步した出所の正しい物を集めた方が、僞物の憂なく且つ現代の生活がわかり、況して後世子孫の代に至つて當時の生活を想像するの料となりませう。その上實用的で趣味が多いから、この方法が一番よろしいです、試に主客對座の間、相馬の茶器に宇治の玉露を煮、埋木細工の盆に載せ、宮島細工の茶臺を用ひ、その側には琉球の皿色漆器に到來物の日光羊羹を盛り、津輕塗の箸を添て「一つ召あがれ」などゝすゝめたなら、配合の面白さ來客はどんなに愉快でしよう、殊に主婦の嗜みも察せられて一しほ奧床しいではありませんか。それで一室の中に北は靑森から南は琉球に至り、日光と嚴島の好風景を添へ、誠に一つの活きた地誌で、坐ながらにして

千里の風物を知るの料となり心も廣く體もゆつくりとする心持がする樣になります。從て自然家の品位も高まり敎育と實用と裝飾と一擧三得となるのであります。

然らばその産物の蒐集は如何すればよいか、一口に産物といつても其種類は實に千差萬別で、家庭の餘業として集めるには容易ではありません、けれど一時的でなく、永久的の心掛を以てすれば自然に集まるものです、就ては家庭の主宰者たる主婦が兄弟、朋友、親族の關係を利用して、その地〳〵の土産物の贈答をなす如きは最もよき方便で、それには成るべく其土地の産物を用ひ、又は旅行先で買求めるなど、其順序は最もよい工風です、そしてなるべく平民的に費用を多くかけぬ樣にするのが肝要です。此考を以てすれば何處の家庭でも數年を出でずして東西數百里の各地の品が集まりませう、そして一棹の簞笥には少くも二三十の工藝品があり、茶器、蘭具は勿論土瓶鍋釜の世帶道具から衣服調度に至るまで、さま〴〵を集めて後には家庭に一大博覽會産物陳列所が出來る事は請合です。

産物を集むると共に一方ではその扱方です、何事をするにもその道具知識が不充分であると折々不都合が起ります、器物などはよく知れば知る程面白味が多いから、婦人方には是非共産物に就てその産地、品質、特徴、用途などの研究がありたいものです、專門的のものは却々ですが、せめては普通の品だけでも知つてほしいのです、尤小兒の敎養から家事、衞生、經濟、僕婢の使ひ方まで、一身に引受けたる婦人のことなれば其多忙御察し申ますが、少しく注意したなら此位の事はさして難かしい事でもありますまい。さうして藏の中に秘藏しないで産物を實用的にして、日常兒童にも見せたり使はせたりして、折にふれ說明したならば自然に知識を得るに至るでせう。

そして其話ぶりは餘り窮屈でなく、器械的でなく、自然に對話風に、爐邊の閑話に長夜のつれ〳〵に、時により話柄をとらへて話すやうにしたなら昔噺以外又一つの家庭知識を得らるゝでしよう。

試に例を擧げてみませう――南部鐵瓶について

――まあこんな工合にやつて見てはどうでしよう。

柱時計も巳に三時を報じて間もなく小供輩は學校から歸つて來ました、やがて火鉢の周圍は雜談の會となりました。

母ちやん家の鐵瓶は大層錆が出たね、お隣のやうに磨き立てるといい僕一寸手傳はうか？



突然に言ひ出した今年十歳の長男正雄である。

さうね、これは磨かないでも宜しいの、南部鐵瓶には「磨き」といふ白くみがき上げた物と又「錆」といふ家にある様な物との二種あります、磨きは多く勝手向に使ひ「さび」は大抵茶の湯に使はれます此鐵瓶などは別に美しい飾りもなく丁度男子の武骨者のやうですね、そしてよく〳〵見ますと地に凹凸があつて高い所は黒く、低い處は赤

褐色をしてるでせう、是れが南部鐵瓶の持前だから時に湯をかけて布巾でぬぐつておけば、それで宜しいの。

母さん、それぢや南部といふ所はどこですか？

南部は岩手縣の盛岡で日本鐵道奥州線の筋ですよ

正雄は鐵瓶を撫でながら又問ひました。

母さん此鐵瓶は南瓜のやうだね、南部の鐵瓶はみんなこんな形なの？

イヽエいろ〳〵ありますよ、そろばん形もあれば平ぐも形もあり茄子形、富士形など大そう多くあります、それで長いのより扁平のが徳用でありますから宅では父さんがかぼちや形をお買ひになつたのさ、そうして茶の湯に使う茶釜は釣がつかないで餘程おかしな形をしてゐますよ、それで夕顔とか老の松とか鹽屋とか鶴首などやさしい名前をつけて呼ぶのです、マア皆なでは彼是百七十種もあるでせう。

姉の千代子は此時まで默つて聞て居ましたがやがて言葉を挾みました。

お鐵瓶の模様に馬がをどつて居ますが、母さん南部の鐵瓶は皆な馬がついて居ますね？

さうですよ、南部馬だの、南部富士だの(岩手山)五葉の松などは南部に由緒のある物として殊更珍重されますが、中にはまつたく模様のない物もあります、又山水花鳥、網の目など一面にちらし模様のある物もあります。

母は猶も言葉をついで、

もう少し鐵瓶のお話をしましようか？

正雄　謹聽々々

鐵瓶の大小は容れる水量の多少によつて計算るので、例へば一升容り、二升容りといふやうに、ですが實際は幾分か餘分に數へて正味六七合容りを一升容り二升に充たないものを三升容りといふ例もあります、唯南部ばかりは割合にかけ直が少いから買ふのに都合がよろしい、此は普通の鐵瓶で云つたのでありますが茶の湯に使ふ品は口徑胴徑

高さの寸尺でいふのであります、蓋も胴と同じ鐵質で同じ色を以てゐますこれを共蓋といひます共蓋は南部の特色です、銅の蓋は衛生上不適當ですから御氣を附けなさい。

ヤア鐵瓶が鳴る！

と正雄は叫んだ母は靜に言をつぎ、

それは俗に蓋鳴りといひますが實は蓋が鳴るのではなく煮鳴りといふのです、鐵瓶の内部の底に鳴金といふ方形な小さい鐵片が、四ッ五ッついてゐて、湯のたぎるときそれが、うつくしい音を發します、その鳴り方で松蟲、鈴蟲、濱の松風などゝ風流人がにつかはしい名で呼ぶのであります。

今では諸國で鑄物も大層出來ますが、南部鐵瓶は使ひ初めから鐵氣が出ないから直ぐ茶の湯に使はれるのと、火災に遇つても鐵の性質が變らないといふので昔から珍重されるのであります。

時に大兵肥滿の女中がおかめの様な顏をして茶受を持て來ました。



暗黒界に落ちんとする人々の様々の徑路

典獄　藤澤正啓



△兩極端の弊

不良少年といふと皆貧民の子弟と思ふが其實は反對で、寧ろ相當の地位、財産、教育ある家の子に多いのが事實であります。先頃新聞にも頻りに書き立てたパクリ連などいふのは、十八人組で、其内貧乏人の子は唯一人、餘は皆相應な地位あるもの〻子で、官吏で課長を務めてゐる者、醫者、軍人、會社員などいふのです。總べて此の輩の罪名は、竊盜、詐欺、賭博、(毆打創傷)などで、主に金が欲しさの犯罪です。それを何に消費するかといふと皆酒と女子で、つまり恁ういふ處へ注ぎ込み初めたら幾干有つても足りない。月に五圓の小使を持つてる者は十圓が羨ましく、十圓の者は二十圓、三十圓が羨ましい。これが爲に不覺墮落を重ねる樣になつて行くので、當人共の惡い事は無論ですが、然し私は其の原因や責任の六分までは家庭にあると思ふ。

家庭の不注意も種々あるが、中には大いに此の事に注意した積りで、然も大層失敗つてゐるのがあります。それは兎角極端に過ぎる事です。

これも其の一例ですが、甞て入監した少年の父を呼んで、其の平生を尋ねて見た事があります。(私は少年學生に關しては、始終其の父母を呼んで從來の樣子を聽き將來の注意を與へる樣にしてをります)。處が其の家では子供の錢遣ひを嚴重に制し、最う此の少年も中學の上級であつたが、一切餘分の金錢を渡さず。何處へ行くにも、一々電車賃を下さいと言つてそれだけ

持つてゆく樣にしてゐたとの事。「さういふ譯ゆゑ決して不品行など働く筈がありません」と父親が言ひます。處がナニ既う遊廓にまで踏込んでる樣子。けれども父親は「決して其麼事はない筈」と言ひ張る。「まあ篤と家の方を調べて御覽なさい」と言つて返した處、其翌日やつて來て、「實に申譯ありません」といふ。聽いて見ると、實は毎月母親の賄ひ方の金が失くなつてゐたので、多い月は十五圓にも上つたとの事。其處は母親の情愛でまあ



見ぬ振をしてゐたのであつた。あまりなる嚴格主義は却つて内部から破れて了ふものです。

又或る母親の話を聽いた處が、「何時ぞやなどはお友達と何かの催しをするとかで、其の要品を人力に二車買つてやつた事があります。其の位にしておくのに。

まあ何が不足で盗みなぞを……」と言つて泣くのです。「イエ、その二車が不可のです、それが御子息を過つたのです」と言つた事です。これも極端で、寧ろ寛大以上の寛大放任以上の放任とも言はうか。實にこの寛嚴の兼合が難しいものです。

△誘惑の巷

誘惑の巷は外でもない都會其物で、少年は都會の爲に誤られると言つてもいゝ、地方では、中學生が入監するなどといふ事實は殆どありません。東京などになると其れが續々出る。都會其物が實に危險地なのです。

けれども都會に居る以上は、前の樣な極端な嚴格主義は不可と思ふ。總ての人の生活狀態が田舍とは違ふのだから、少年者獨り一文も持たずに居れなどといつても到底行はれない。中學時代とすれば、上野へ友達と行く、歸りに蕎麥屋や汁粉屋へ入るのは仕方はない。稀に寄席へ行く位は仕方はない。それを一々其の都度貰つて行く樣な窮屈な事だと、自然却つて反動を起す事になる。尤も其の少年の氣質次第ではあるが…………。兎も角も多少金錢上の自由も與へて置いて、唯く傍から監督してゆくより外はありますまい。それにもう中學時代になれば、親の財產、收入が幾干といふ事もチャンと知つてゐるのだから。

處が又隨分不注意な親が多いので困る。例へば以前よくあつたものだが、料理屋へ上つて、其家の盃を袂へ入れて持つて歸る。そして平氣で子供の前で取出して話してゐる。今も此類の不注意が尠なくないであらう。敎育あり身分ある家庭で、隨分藝妓買話が子供の前で行はれる。櫻が咲く、藤が美い。すると兩親が先づ贅澤心を起して浮かれ出す。そして往々公德外れの擧動をする。細かく注意したら親の示す惡例が夥しい事でせう。

△片親の不幸

けれども大體から申せば、單に此の兩親の揃つてゐるといふ事、これが最う無上の幸福です。敎育の有無

などは擱き、單に兩親が、子女の十八九歳から廿歳位まで揃つてゐるといふ事が、その現在の幸福のみならず、子女の將來までの光明である。惡に染まる事の最大の豫防藥は實に兩親の揃つてゐる事です、父親の無いのも不幸ですが、殊に母親を早く失ふのが墮落の源になる。母親が失くなる、從つて繼母が出來る。よし繼母が出來ないにしても、それならば又家庭の治めをする者が無くなつて自由放任になる。不良少年の大部分は母を失つたものと言つ



てよいのです。地方から子供を手放して都へ遣すのも同じ理由で全く子供を棄てる様なものです。父母の手を放れた上に都の華美な風に染みて來るとなれば、女學生などの過ちの起るのは寧ろ當然です。殊に年齢は青春期であるもの、男學生の失敗ふのも殆ど中學四五年頃、即ち女子に關係し初める頃からである。又女子

の重罪犯といふものは、皆痴情から起るもの計りです。放火、殺人、嬰兒壓殺など、底を探れば、悉く男女の關係である。これになると皆夢中になつて了ふから困る。

△憐れむべきもの

中には恁ういふ例もあります。品川の方の荒物屋で、可成賑やかにやつてゐたらしい者の娘で、十二歳の時に母に分れ、其の後又父に分れ、後は兄一人であつた處が、兄が又此の春死んで了つた。娘は今年十七歳で一人ぼつちとなつた處が親戚も無いので仕方なく、前に其家にゐた者で今は別に荒物屋をしてゐる者の處へ厄介になつた。無論不自由勝ちで苦しい。遂に惡い——と言へば惡いに違ひないが、鰻屋へ行つて、其處らの家の名を騙つて丼を注文して、それを途中で待つてゐて、「これは私が持つてゆきますから大急ぎで最う一つ」と巧に欺いて、鰻丼を二つ持逃をした。空腹で苦しかつた餘りでせう。最う一度同じ策で蕎麥を盜つた。これが露顯して二ヶ月の入獄。それも濟んで先日出獄となつたから、私がまあいろ〳〵話してやつて、「出てから何處へ行くか」と言ふと、仕方ないから又前の荒物屋へ歸ると言ふ事でした。處が二三日すると役所へ來て、「どうかお助け下さい」といふ。聽いて見ると其の荒物屋が女郎になれと無理無體に勸めるのださうです。實に可哀相なものですから、原胤昭氏の處へ賴んでやつて、同君の手で保護して貰ふ事にしました。かういふのも盜みは盜みであるが、いろ〳〵の事情を聽いて見れば實に可哀相なものです。

△敎育者の不親切

子女の墮落について家庭が半の責任を負はねばならぬ如く、學生の墮落については敎育者が半の責任を負はねばならぬと思ふ。今の中學校といふものは學生に對する注意が、隨分疎かなものゝ樣です。外の事は知らないが、不良學生の入監した時、某中學生だといふので電話などで問合はすと、「イヤあれは最う退校濟で

す」といふ答。此方では在學中の様子などを聽きたいと思ふのだが、「もう退校濟です」と言ふだけで成るべく關係を避けたがる樣子。私は是れ一つで略中學の樣子が知れると思ふ。人の子を預つて教育してゐる内は、もし其麼事が起つたならば、校長は驚いて飛んで來る筈。「どうした譯だか？　まあ一つ樣子を伺ひたい」と聽いた上で、父兄と相談して、出來るものなら無罪にと、辯護士依賴などに盡力し、愈々仕方がないとしたら、我々の方へ先方から出て來て、其の少年の平生を話して後來を頼んで然るべきものである。それを「退校濟です」で、逃げる算段ばかり、退校などは輕卒にすべきものではない。それによつて其の少年の一生は塞がつて了ふ事にもなる。それを有罪か無罪かもまだ分らぬ内、檢擧されたと聽くが早いか、狼狽て退校させて了ふ。不親切なものではありませんか。これによつて考へれば平生の不注意さも思ひやられると思ふ。

△注意の一例

人間の心ほど微妙なものはありません。善くなるも惡くなるも、ホンの少しの呼吸の間にあります。例へば出獄して猶監視中の者は、始終我々の方で注意してゐますが、何か呼んで話してやりたい事があつて、さて呼出狀をやるのに、フッと役所の鼠色の狀袋など使つたら最うお終ひです。「ア、監獄の狀袋を遣した。お蔭で最う邊近所の人に知れて了つた！」と當人は言ふに言はれぬ厭な心持を起す。其の實はナニ近所の人が其の手紙を見はしない。郵便屋などは格別氣にも留めず覺えてもゐないが、當人の心持になると然う思ふ。で、私は必ず普通の狀袋で、自分の名前も單に何區何町何番地何某」と一私人としての書方をする。これだとア、注意してくれたと窃に喜ぶ。この喜ぶ心が資本になつて、大層善い方へ進む助けになります。

在監者は殊に僻が強い。無理も無い、全く我々の手の内に制せられてゐると思ふから、神經過敏に我々の一顰一笑を氣にしてゐる。何の心もなく一瞥しても直ぐ呪んだと思ふ。「どうも彼の監守は己れを惡んでゐ

る」と僻む。處へ鳥渡叱言でもいふと、「ソラ來た」と思つて惡く聽く。實に難かしいものである。隣室の者と低聲に話しでもしたら直ぐ不可。「隣りの奴は旨くやつてゐる」と氣を廻す。翌朝は最う食物の分量にまで厚薄がある樣に疑ふ。當方で餘程細心の注意をせぬと、思ひもよらぬ惡影響を及ぼして了ふ。

淺草あたり漫歩いてゐる時、偶然前の在監者に逢ふ。無論知らぬ顏をして通り過ぎる。又先方から物言ひたげに見える時は、素知らぬ振して人のゐない方へ行つてやる。すると跟いて來て挨拶する。其時若し顏を忘れてゐても「誰だつたね」などと言つてはお終ひ。すぐ冷淡だ！と僻んで了ふ。で、出獄の年月、出て直ぐ何處へ落着いたかなどを、話の間に聽いておいて、歸つてから調べて見る。其時はよく知つてゐる樣に操縱して、「辛棒しなさいよ」などと、言つてやると、僅かの違ひで非常に喜ぶ。恰ど繼子を取扱ふと同じ呼吸です。まあ這麽風の處をよく注意したら、繼母が子供を失敗ふ事は無さそうなものに思はれますが。

△酒の大害

先に男女の關係の事を申しましたが、青年に對しては酒が又大有害物で、これが墮落の緒となり媒となる。女に夢中になるといふのも亦酒が初めであります。私は出獄者に必ず酒の害を説いて止める事を切に勸めます。よく遺傳で性來嗜むものだからと言ふを聽くが私は寧ろ遺傳よりも習慣的だと思ふ。然も其の習慣は父親が付けるのである。大抵父が飲まぬのに子が飲むといふ例は無い。父が常に飲むものだから、何時の間にか追々子供に其の習慣を付けて了ふ。中には一つ飲まないかなどと言つて子供に勸める親がある。宛で毒を飲ませる樣なものであらうと思ふ。

△呆れたる一例

某學校に廿年來書記を勤續してをる人の子が浮浪罪で入監した。新聞にも出された男で始末に行かなくなつてゐる。親も勘當してゐたが徴兵適齡となつたので、

何うか眞面目に應募する樣に諭して下さいと言つて來た。善い機會だと思つて父親に逢つて漸々聽くと勸當も無理はない。兎も角もと本人に別席で話し、いろいろ言うた末に私が恁う言つた。「何うだね、日露戰爭中の今日、一つ應募して潔く滿洲の土となる積りはないか。親として子の死ぬを喜ぶ者は無からうが、從來の樣にして勸當されてゐるよりも、潔く國の爲に死んだならば、親も知己も泣いてくれるであらう。愈さうと決心するならば、私が勸當も赦して貰ひ、目出度家から立てる樣にしてやるが何うか！」と言つた處が、年も若いし、大いに乘氣になつて、「死にます！　何分お願ひ申します」といふ。其處で親子久潤の對面をさせて、悴も詫びる、私からも詫びてやる。目出度勸當も赦されて出立の打合せも出來た。夜の十二時を打つと共に出してやるから、機嫌よく立たせて下さいと親にもよく／＼頼んでおき、さて十二時に私も態々起きて行つて送り出し、決して心得違ひのない樣にと言うてやつた。



　けれども途中から逃げはせぬかとの疑も起る。其朝六時に上野から仙臺へ向けて立たせる筈なので、七時頃には最う電話でも懸つて來さうなものと待つてゐるが音沙汰がない。八時になり九時になり既に十時になつた。愈々堪らないから父親のゐる學校へ電話を懸けて見ると、「御心配をかけましたが今朝無事に立ちました」といふ簡單な輕調子な挨拶。これで私も成程と思つた。あの人の子が惡くなつたの

は無理はないが、本來ならば役所まで來て挨拶してもよい譯。然なくば一寸電話でも直く話は辨ずるではないか。何も當方から尋ねられて初めていふには當らないのだ。

處が其の青年は籤で外れて了つた。落膽して私の處へ來たから、其時も種々慰めてやつたが、遂其の後二度まで入監する樣になつて了つた。最つと親が注意して梶を取つたら、あの時を境に治り得たものかも知れぬと今は殘念に思ふ。

△方法は必ず有るもの也

一番手に負へないのは女の極端になつたものです。稻妻強盜でも然う困りはしませんが、女の莫連者こそは始末にゆきません。私の今まで弱らされたのが三人。何れも名だゝる女豪傑でしたが、其の一人が新聞にも出たお金といふ女。これは父母を早く失つて、十三歳から四十歳まで墮落の生涯を續けたもの。北海道へ押渡つて道中の茶屋料理屋を廻り歩き、散々に押廻つた末、三十歳の時に東京へ流れ込み、相變らず茶屋廻りをしてゐたが、容色も追々衰へて來たので止むを得ず私窩子となり、柳原の堤に始終出たので土手のお金の名を取つた。まづ一年の三分の二は監獄で送るので、それは幾度となく出たり入つたりして一向平氣なものです。

其の都度懇々と說くけれども聊かも通じない。其麼事は百も二百も承知してゐる、と言つた風で濟してゐる。或時餘り殘念だから最う一度と思つて、放免の朝未だ明けぬ内に出て行つてお金を呼ばせた。いろ〳〵言ふけれども相變らずの調子。で、少し策略に類するとは思つたが、蝦蟇口を開けて見ると五十錢銀貨があつたから、それを白紙に包んで封をして、「お前はどうも平氣でゐるが、私が思ふにお前はまだ親の墓參りをした事があるまい。よし自分の身は何うでも、一生に親の墓參をしないと言ふは不孝の至り。そこで物は種がないと不可から、五十錢だが之を種にやる。日に一錢でも二錢でもいゝから、之に足して行きなさい。貴

く掛れば十圓にもなる時があらう、さうしたら一遍親の墓参りをするがいゝ」。かう言つた處がさすがのお金始めて其處へお辭儀をして、「私が惡うございました。これから決と改めます」といふのです。

で、「それは善い！　それならば紹介してやる處がある」といふので、原胤昭氏の處へやつた。ナニあの五十錢で桝酒でも飲んで了ふかも知れぬと思つてゐると。不思議に原君の所へ行たといふ。で、まあ二日三日で逃げるにしても、其の間だけも人間の生活が出來るのだと思つてゐた處、一週間經つても十日經つても逃げない。一月計りして行つて見たら「此處へ來て確かに十年生き延びた樣な心持がします。もうもう彼麼厭な思ひは決してしません」と殊勝に大變よく働いてゐます。其儘ずつと堅氣になつて今は夫を持つて共に北海道に暮してをります。これによつても導く方



法は必ずあるものと思ひます。況してや親が子を導くのだから、注意して梶を取りさへすれば、決と旨くいくものに違ひありません。何うか家庭、殊に母親が十分の注意をされん事を望むのであります。（芙蓉生筆記）

海水浴の栞

▲避暑に行くと言へば多數の方は海邊へ行かれるやうですが、此事は熟考しなければなりませぬ。殊に幼い小供を伴れては一層注意を要する。一體海邊は場所によると温度は僅かに東京よりは高い。只海上から吹來る風のために涼しく感じるので若しも其風を遮つたならば、餘程暑いのである。つまり、暑氣が軟かで無くして、風故に堪え易すく感ずるのです。故に夜分雨戸なんぞを閉めると、室内は隨分堪えられぬ程暑い。斯う云ふ處へ小供の強弱、性質、年齡を擇ばずして、只海邊が空氣が好いからと云つて伴れて行くのは、不當です。其邊は、充分に醫者に尋れて、研究することが必要です。

▲或は海邊が最も好いと云ふ場合と、或は海邊よりも山の冷氣のある所が遙かに身體を益する場合とあります。或は小供の體質に依つては、海邊は全く不適當な事もあります。一槪に空氣が佳いと云ふのみで海邊に行くと云ふとは宜しくない。只空氣の好いと云ふ點から云ふと、山も決して劣りは無い。毎年九月頃に成ると、人々はそろ〱海邊から小供を伴れて歸つて來るが、その小供を見ると全身に「アセモ」、又は「チブ」なんどを拵へて居ます。夫等はつまり小供の身體に不適當なところへ行つた爲めです。又日本では昔から湯治と云ふものは、身體に利益に成ると云ふことを唱へて來たものですが、これも強ち誰れにも善いと云ふ譯には參りませぬ。矢張り人々に依つて適不適があるから、其邊は能く考へて、取捨しなければ成りませぬ。

▲次に年齡十歳位に達した子供であると、大槪は游泳を好みます。これをさせるのは身體に宜しい。夫れ故游泳と云ふ目的で行くのなら無論海邊で無くては成らんが、之も人に依つて適不適があつて、稀には天性水に這入ることが出來ない人がある。例之ば、海の中に這入ると不快の感じが起つて動悸が打つて堪えられんと云ふやうな人がそれである。斯う云ふ人を無理やりに海に入れるのは、宜しくない。從來海邊が宜しいと云ふ事を一般に言ひ出したものから、中には天性這入れない者までも無理に入れようとする人があるが、之れは牛乳は利益に成るものだと云つて居るが、中には牛乳を飲むと必ず腸に異狀を起して堪えられんと云ふ人があると同じであるから十分注意を要する。（弘田博士）

暑中の要愼

◎便所に近き井水

人間の生活中最も必要であつて、且つ最も危險なものは水である、赤痢、コレラ、腸チブスなど皆これから發生する、故に水の性質は最も純粹でなくてはならぬ、溝に近い處ろの井戸水は惡水であるから飲用してはならぬ、殊に便所に近い井戸の水は危險と言はればならぬ。

◎沸し冷しを用ふる法

夏季に生水を用ひてはならぬ必らず沸し冷しを用ゆべし、尤も沸せば味が惡くなるといふが、それは沸して其器物を密閉するからである、故に沸した水は一旦よく攪き廻して空氣に觸れしめるか又は栓をせずに瓶に入れて振れば空氣と混合して其味がよくなるものである。

◎麥湯の効能

支那人は槪して不潔な人種であるけれども彼等が滅多に傳染病に罹らぬのは生來生水を飲ます、必らず沸すからである、であるから夏は水が飲みたくば麥湯にして飲むがよい、麥湯は滋養にもなつて且つ安全である。

◎ラムネの害

ラムネは夏の飲料としてよいものではあるが、中に入れる酒石酸の代りに硫酸を使ふたのがあるから、度々飲んでは齒牙を損する恐れがあるから偶に用ふる丈にして置かればならぬ。

◎夏の刺身

刺身は至つて消化のよいもので、病人にも差支ない食物であるけれども只夏は生水との緣が切れないから注意せればならぬ、詳しくいへば、魚の肉も、爼も庖丁も皆一旦沸した水で洗ひ、そして拵らへたものならば流行病の最中でもまづ差支ないわけであるけれどもこれは到底言ふべくして行ふべからざる事であるから流行病のある時にはまづ見合せた方が安全である、殊に新鮮の時期を經過した魚では猶更の事である。

世界中に刺身を食ふのは日本ばかりである、西洋人は勿論、支那韓國の人は決して刺身は食はない、食へば膾である、或は牛豚の肉を生食する樣に思ふけれども、夫は鹽漬、若しくは燻製にして食ふのである。

◎果實の適否

果實は夏のよい食物である。但し未熟のものや、日を經たものはよろしくない、殊に胃腸の弱い子供には下痢を起し易いものであるから過食は禁じなければならぬ、又西瓜、甜瓜なども同じく胃腸の弱い者にはよろしくない、殊に赤痢の流行時には最も注意せればならぬ果物の多くは砂糖を入れて煮食すればよい。

◎豆腐の用ひ方

豆腐は滋養物である、けれどあまり煮つめては不消化であるから、ざつと湯を透した位がよい、併し湯豆腐は冬のものであるから夏は冷し豆腐にせればならぬが、それには是非沸し冷しの水で流さればならぬ、そして宵越のものは腐敗の恐れがある、其外氷水、雪氷、心太など生水の混じる恐あるものはなるべく用ひぬがよい。



よしなし言

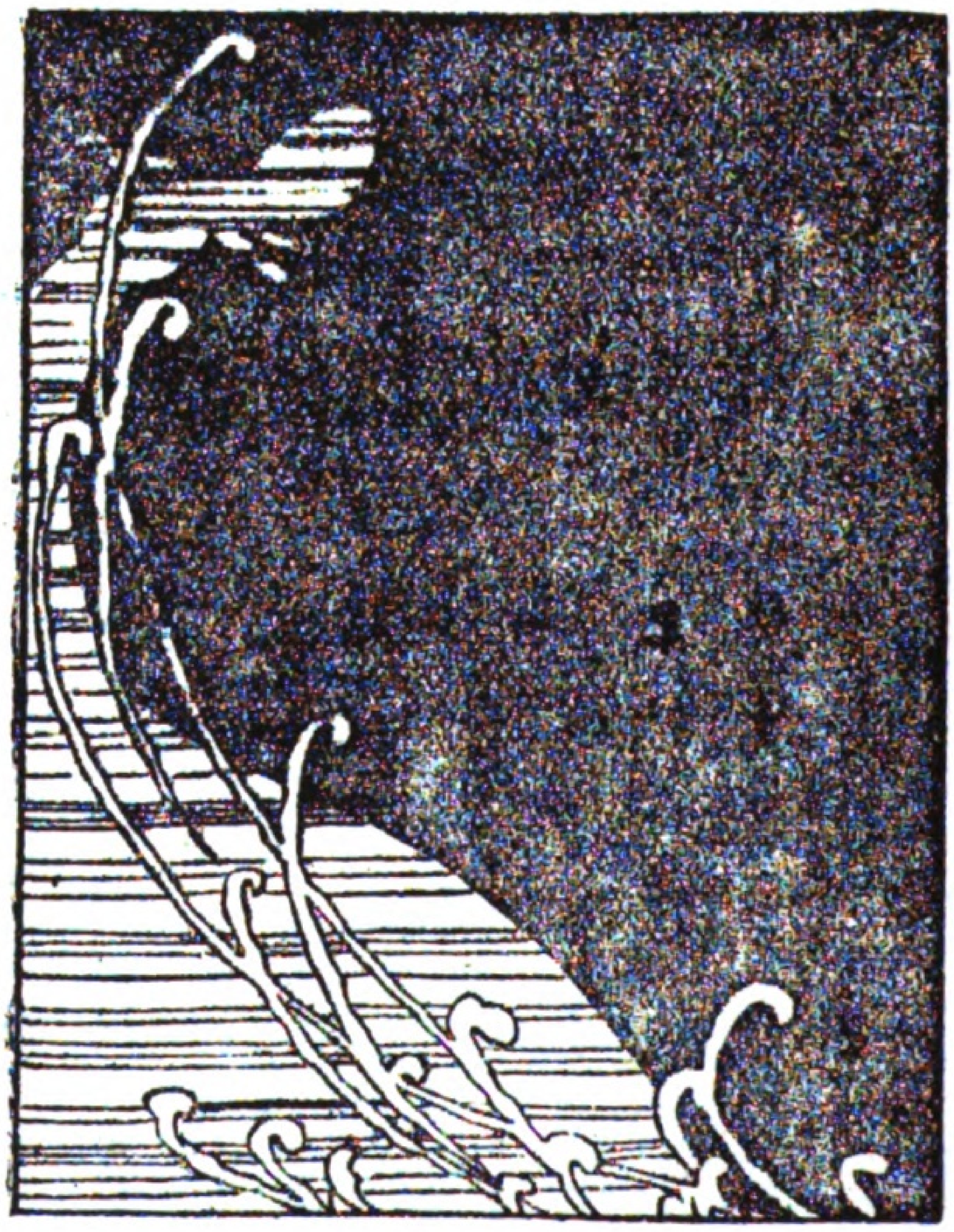
静子

◎榊原蕉園女史

敎師生徒も、諸共に始業の前の三十分ばかり、講堂に集りて、その日一日の神恩を祈り出席をしらべて後ピアノに合せて各々の敎室に別れ行く例なれば入學の初めは、右に先生方の熟視、左は上級生の批評、眼に何となう身體すくみて、僅の間の歩みも、もつれ勝に、首も得上げず、講堂の入口を出でゝ心伸び行く樣なる經驗持し我の、早や恥かし氣もなく窓の外打見て歩み行く樣になりたる頃の事なりけるよ、首斜に傾げて、いつも莞爾やかに足許見つめて出で行かるゝ方ありけり、あの御方は誰？と傍の友にさゝやけば「あれですか、あれはね榊原とか被仰るんでせう、」「さう、いつも下を向ひてる方ね、」「然うよあの方は身體の樣子やあ行風に特徴のある方ですわね、」と言ひぬ、かくて一年とは經たざる間に畫界に響く御名とは思ひもかけず、唯、首垂れて、氣取りて歩み給ふ方とのみ、かすかなる印象を殘せしものを、春秋の展覽會に、幾度か賞を得給ひ、雜誌の口繪、挿畫に、鮮やかなる御筆拜して今更の樣に驚き、あの御年にてこの才筆と怖ろしうも覺えぬ「道理で樣子から畫家らしかつたのね、怎うしても畫なんぞかく人は一寸風姿が違つてるわ、」と以前の友も驚きぬ。在校の折の御姿、目前に浮び、畫家と作物とを比べて見るも興深し。御家族擧りて、この道に趣味を持ち給ふと聞けば、君の畫才は天性にや、花鳥山水は知らず、人物こそ得意のものと思はるれ、若き乙女等畫き給ふに何とは知らず御筆に潤ひありて、若く生々したる樣の見ゆるは嬉し、君は、故年方の門弟にて在はすときゝしが、筆致は年方にはあらで一種特別、蕉園風とも言はんか、毛髮のかきぶりなど、細

き筆を使はず只大様に書き流したらん様に、衣服の線の細からねども優しくなだらかに澁りなき様に覺ゆ、京都の松園女史は古風美人畫に妙を得、君は當世式令孃のかきぶりに特技を有ち給ふとや言はむか。二年ばかり前の展覽會に春の夜？とやらん作品の前に佇みて、艶やかなる色調に見惚れ居たる後より、「君之なんざ畫と云ふよりも模樣ですな、なつてやしませんよ」と或青年畫家の批評を傍聞きせしも衆目の見る處、さして、我が目と相違なかりしか又は若き女の筆てふ爲にや、我が知れる限りの人は皆、才筆と稱へぬ、今の儘にて進み給はゞ、この道の幕の中に數へられ給ふも近き内なるべし。

裾模樣。竹生島（謠曲）



實技は如何に達するとも構想の高く新らしきにあらねば、見る人も何の感應なく興味なく、美術の名も空しとや、明治式の敎育うけ給ひし君が頭腦もて、消化されたる破天荒の作、出し給ひては如何にや。

◎安藤幸子女史

世の人には幸田孃とこそなか〳〵に知る人も多かる可し、僞か眞か知らねど、露伴氏の君に向ひて、嫁入しては如何にとおほせられし時「だつて結婚なんぞよりバイオリン彈いてる方が面白いでせう、」と御答へなされしとか、君が逸話として讀みぬ、結婚を樂しきものとさとり給ひしか、其とも孤獨の寂しみを感じ給ひしか、安藤幸子となられしは、二年あまり前、我は蔭ながら君の幸福を喜びぬ。一家

に名を成し給ひし兄妹四人までとは、げに〳〵惠まれたる一家なるよ。露伴氏の文學上の頭腦、延子、幸子兩女史の音樂の才、母上は三度迄、ミューズの息吹を吸ふと夢みて生ませ給ひしにや、まだ幼くて、母上の膝下に人形遊びなし給ふ頃より三味ひく模似等し給ひしと言へば君が今の成功は自己を知りて其才を發揮せし効果とぞ覺ゆ。御髮は丸たぼの廂に、上部に結ひたる束髮、先生の好み生徒にうつりて之で音樂學校風とや呼ばんか、瘠地の御肌にきつちりと吸ひつきたらん樣なる衣服の着つけ、三枚重ねの厚き裾も輕氣の歩みさら〳〵と壇に立ちて弓とり給ふ御姿は、流石獨逸仕込み、正眞まがひなしのハイカラと御見うけ申ぬ、一度び弓の絲にふるゝや浮きつ、沈みつ、流れつ、止みつ、千變萬化、技術の妙にも打たるれど、まして、袂の振の色美くしう、腕の動く度每にひら〳〵と何たる艶ぞ、日本服改良論者に見せ度き程なり。

◎北村初子女史

女學世界、手にし給ふ方は折々の口繪寫眞に、さつき會とて、花の樣なる處女の集會見られしならん、その會の先生こそ初子女史にて、バイオリンは幸田女史に次ぎての名手とやら聞きぬ、御實家の性は天野、我が記憶に殘るは本郷弓町の住居に在はす頃なり、美くしの君と云ふ程にはあらねど、斯る藝術家の常として一寸人目をひく御樣子なり、近視のせいか、夢みたらん樣なる眼、餘り愛嬌なき御口許、すら〳〵と早き御言葉等は君の特徵か、北村氏へ嫁ぎ給ひて後は一度も御目に懸りし事はなけれど、その前の御樣子は君、戀境に立ち居給ひし頃なればにや、あるは、然思ひて見る我が心からにや何となう陰欝に御見受申ぬ、御初緣は御子樣迄、まうけ給へる中の御別れ、如何なる事情ありしかは知らねど、いとし子の爲に泣きも、恨みもし給ひけむ、今の御良人は同じ樂界の人、露營の夢、離れ小島等皆比びなき好評を以て迎へられぬ、人の噂は實としも思はれねど、東北の一地方に教職もち給ふ頃は御身のまはり何處迄も男らしからず御召物は紅秩父の裏ちらほらと見せて醉ふては三味等、手にし給ふ

●月經時は如何に過すべきか　村井弦齋

月經時の衛生法は私が申上げずとも、醫師の訓戒をお守りになればそれに越した事はありませんたゞ一つ私どもの家族が用ゐて居ります「月の帶」と云ふ物がありますこれは産婆で有名な山田逸子が歐羅巴へ行て西洋婦人の用ゐる月經帶を調査し日本婦人に適する樣に改良を施し新に拵へたるものであります此の「月の帶」は至極輕く腰の工合も自由で大層都合が宜いさうです

右は村井弦齋先生が「婦人日常生活法」に紹介されたる一節にして現に本品の効用は

月經時に使用すれば如何程强い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動、起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品で有ます赤白帶下の强き人、局部の惡臭を發する人、子宮病を惱める人等にも最も妙也

初めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を温め子宮病を豫防するの効があります

各地に取次店あり發賣元へ直接の御注文は特別製（冬季專門用）一圓二十九錢甲種は八十九錢乙種は五十七錢（何れも送料共）郵便爲替又は三錢切手代用一割增で注文早速送ります發賣元は東京神田猿樂町二丁目の資生堂藥局です

釀造元　千葉縣野田町　茂木佐平治

天下一品
最上醬油

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

女（その一）

女(その二)

實業に志す明治少年の大好評繪入雜誌



毎月一回一日發行 四六二倍大判紙數七十二頁上等紙刷

正價一册金十錢 郵税一册金壹錢

第二卷第一號 十一月一日發行

身上相談欄あり 投書大氣燄欄あり 活氣紙上に溢つ

修養世界

▲乾度昇進する丁稚小僧 小川甦韶取締

▲常に口あいてる小兒の馬鹿なわけ 榊田大學教授

▲洋服屋の見たる日本人の體格 一讀姿勢を正すべし

娯樂世界

毎號懸賞電報文募集考物 俳句川柳等文藝

奮鬪世界

▲小僧より勤め上げし藤村常務取締の大成功

▲一起一倒予の最も惡戰苦鬪せし商業の經驗 商界魔將軍

口繪(最珍)

▲麥稈帽子製造工場の實況 ▲五十年勤續の藤村喜七氏と三越呉服店の今昔 ▲佛國巴里大道商珍畫數葉 ▲日本第一建物くらべ

獨習世界

▲紙幣に價あるわけ(商家必要) 富澤學士

▲眼の誤視と予の失敗(工作奇聞) 秋保校長

▲簡易蠶體解剖法(丁寧の手引) 菊地教授

▲習字手本 ▲英語會話

智識世界

▲夏帽製造パノラマ 寫眞數多文章長大 實場を觀るに同じ 石井研堂

▲米國に夏無し人造氷の氷滑遊戯 吉岡農商務技師

▲日本酒を夏日釀造する實驗 佐藤大藏省技師

▲魚の年齢を知る最新發見法 ▲予が暹羅國の實業事情 カチヨーン

郵便振替貯金口座弐四〇番 東京本町 博文館 賣捌 全國各地書店にあり

女(その四)

世界第一の壮快雑誌

毎月一回五日發行

冒險世界

大判(菊二倍大)紙數百廿八頁

七月五日發行 **第壹卷第七號** 正價一冊十五錢 郵税一冊二錢

● **日本武士道團結成る！**
愈よ本號にて發表す。愛國の志士は來れ！慨世の烈士は加盟せよ！

((寫眞版))

● 油繪三色版 地底の魔海 小杉未醒
● 努髪天を衝く
● 樹上の美人と俠士
● 亡魂の船
● 探檢家猛虎林に眠る

△壮絶快絶の讀物大要▽

▲ 英雄小説 俠血士官 押川春浪
▲ 冒險小説 怪人鐵塔(怪塔の卷) 押川春浪
▲ 炎天戰地旅行 坪谷水哉
▲ 遠洋航海記 阿武海軍少尉
▲ 海軍壯烈奇談 電風生
▲ 熱帶旅行 睡眠中に猛虎來 中村直吉
▲ 支那大蠻風 支那漫遊家
▲ 拳銃射撃秘談 荒木嘯羽

● 冒險世界 **天幕旅行運動會**
本誌を見よ！七月下旬開催、眞に破天荒の快擧、健兒諸君の參集を望む！

▲ 前代未聞 地底世界旅行 三島霜川
▲ 奇絶悽絶 怪死人船 虎髯大尉
▲ 驍勇化身 長髪賊巨魁 河岡潮風
▲ 冒險譎話 骸骨船長 細川風谷
▲ 武勇奇譚 探檢家近藤重藏 伊藤痴遊
▲ 大蛇と猛虎の決闘 植村事務長

▲ 布哇遠征野球軍 怪電庵
▲ 五大法津學校評判記 潮風生
▲ 最近渡米船中日記 清家眞一
▲ 初夏運動家雜評 運動記者
▲ 萬國奇聞珍聞 ▲ 氣焔萬丈その他壯快記事山の如し一讀三嘆！

● 第六回付懸賞問題 「可笑しく腹立しき事」發表

● 現代 **日本十二英傑** 發表

● 第七回目 **金牌銀牌懸賞問題**

女(なの七)

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 **博文館**

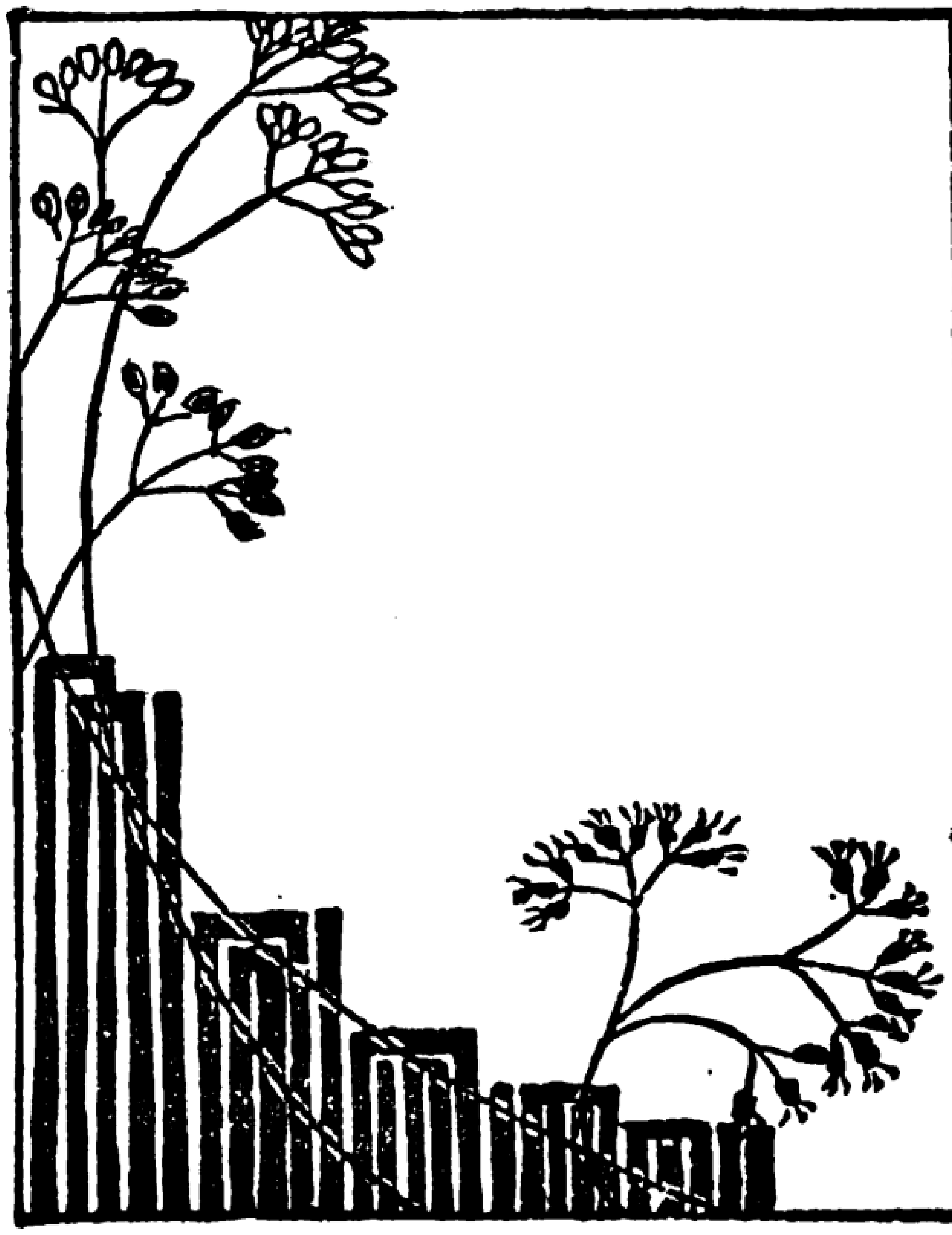
女（その八）

と聞きしが、之も天才は普通の定規もて律す可らずてふ中に、入る可き御方にや、もし異なりせばその樣な御氣風の急に御變りもあるまじ、折々は藝術家らしき行爲もある可けれど、初子樣とて其をとやかうおほせらるゝ方にてもあるまじ他の女にもてる樣な良人でなければ、もつ甲斐も御ざいませんと其處迄ひらけ給ふやいかに。讀賣紙上に天野初子とて折々拜せし新體詩は君の御作にや飽ず讀み返したるもの二三ありしも今は覺えず。

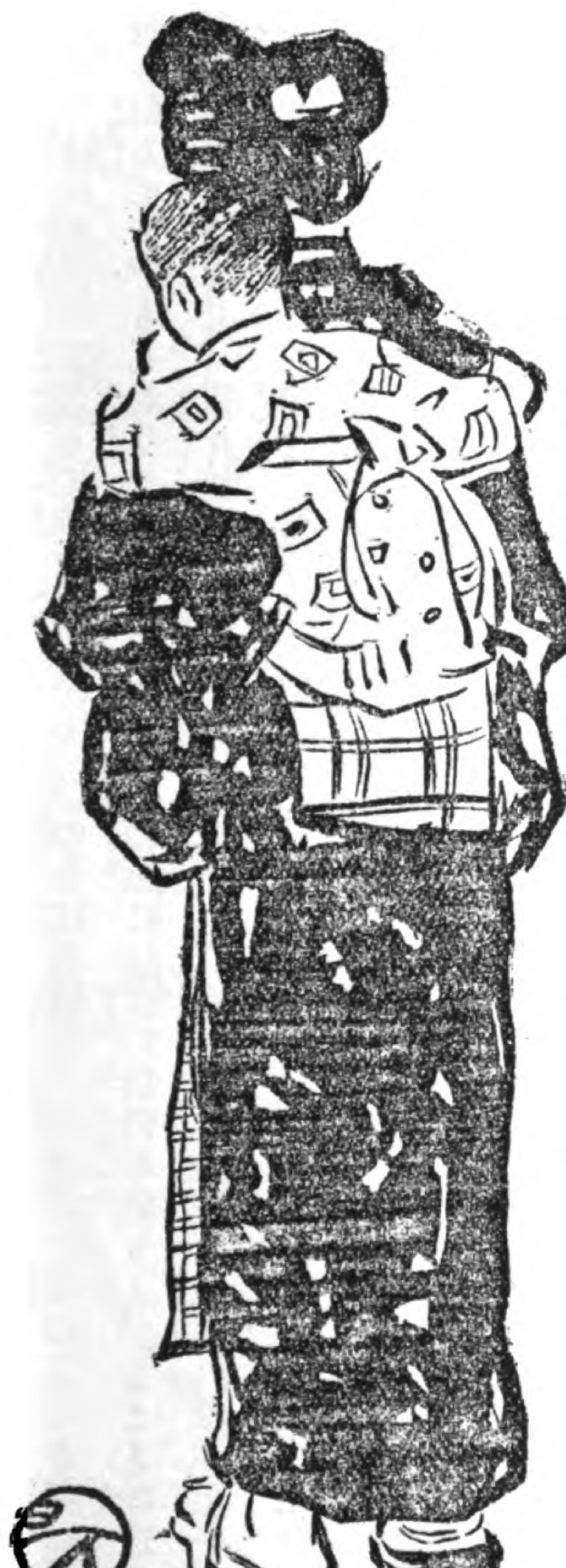
◎藤井たまき女史

東京の地をふみて三日目叔母に連れられて上野への途上、天神坂にさしかゝりし自轉車の女學生、坂の中程にて、ひらりと飛び下り、ハンドル手に悠々と、袴のさばき輕く、引き行く樣のさても馴れたり、田舎娘の眼には女の自轉車乗りよ、まこと物珍らしく思はれて、いつ迄もその後かげ見送れば、「あの方が自轉車美人とて名高い、音樂學校の生徒なんだとさ」と叔母の説明に何しろ思いきつたハイカラの御方と奇しくも、思ひぬ。其より二年目上野の樂堂に初めて君の美音を聽きぬ。右はバイオリン、フルート、オーガン、左はビヲラ、セロ、其他幾種の樂器を奏づる名手、奏樂堂に滿ちアルト、サプラノ、テナ、ベース、の隊を控へて、ユンケル師の熱誠込めたる、カウントを見守り、數百の聽衆何のそのと平然として歌ひ出でらるゝ態度は强き自信なくて出來ぬ技なり、滿場の若き血潮をとりて

裾模樣。藤　袴（源氏物語）



男は美貌美音にあこがれ、女は榮えたる様に醉ふ、主ある花とは知らで、あはれ幾多の頭をかき亂しけむ、新紙の、はがき集に。悶々の情に堪へず等と言ひ表したるもありし様なり、良人様は海軍士官とも言ひ、只の船員とも云ひ奥様の御えらきにすぎてや、さまではきこえず、野口小蘋女史に良人在はす事をきゝて驚く類ひならむか、惜しき事は演奏場に御立ちなされし時、何となう御身柄小さう見えて、音量弱く、底知れぬ泉より湧く御聲ならず、之限りの聲ときかるゝ事なり、然れど美くしき御聲には相違なし、悲しき折、わびしき時、あの御聲にて沈みたる或は浮かれたる御好みの歌うたひ給はゞ如何計り慰籍とならむ、天もし我に君の御聲を貸さば、人には狂と言はれ變り者と呼ばるゝとも、涙催す時の己が慰めとして聲帶破れて血を吐く迄聲の限りに歌はんものを、天與の美音は神の恩典と感謝して、ます／＼美くしう養ひ給へや。音樂、繪畫、文學、何れも實世間的のものにあらず、その技、妙に至らば眞も善も美も、その中にありとぞ思ふ、世は倫理よりも宗教よりも、詩によりて、歌によりて、力ある結果のをさめ得らるゝ事あるを。





生理衛生上より觀たる標準娘に達する法

糸左近

注意　前號に予の理想標準を述べておきましたから、始めて之を讀まるゝ方は前號を是非々々御參考下されたい。

▲第一法（身長體重）（身體各部の釣合）

我が國の婦人は何故頭部が長くて、腹が大きい割合に、胸廓が小さくて、四肢が短いかの理由を、色々の方面から研究して見ると、それには種々の原因が有るけれど、第一に運動が足らぬからである。幼少の折は無邪氣に、飛んだり跳ねたりして遊んで歩くけれど、十二三歳にもなれば「お前は女の子だぞ、お轉婆な眞似するものではありませぬ」と親は我が昔の躾方を我が兒にも應用する。所が「活潑は兒童の天性なり」であるから、まだ〳〵飛んで歩きたいのを澁々畏まつて了ふ。それが爲に十四五歳までは同年の西洋婦人と、左程の相違はないが、十五六歳にもなると、日本の娘はその發育が止つて、心までがマセ〳〵と大人ぶるに引換へ、西洋ではまだ子供らしく跳ねてゐて、發育は尚止ます、二十歳頃には少くも三四寸は追越すやうになる。これは人種にも依るとは言ひながら、一は運動の如何にも依るのだ。抑々程善き運動は言ふまでも無く、筋骨の發育を盛にし、其の上硬く緻密にし、その他精神を無邪氣にし、食物の消化を助けるなど、偉大の效力あるものである。故に我が國の娘達が、これより大に運動を勵行せられたならば、四肢が長くなつて

胸廓も大きくなり、頭と腹との釣合を宜くし、前號に述べた標準の通り、體重十三貫以上、身長は五尺以上になつて、而もデブ〳〵太りや、又は反對に痩せこけた醜い恰好の人が無くなるだらうと、余は信ずるのである。然らば、

◎如何なる運動法が宜きか　運動法は種々あるが、一口に言へば面白くて野卑ならず、身體中何れの部分も、平均に悉く運動するといふ方法が宜い。それには體操游泳、郊外散歩、登山、ローンテニス、鞦韆、薙刀の稽古、自轉車乘馬の稽古、柔術の形、舞、踊などその種類は數へられぬ程ある。されど此等の運動には、一長一短があるから、そこを取捨選擇して、行かねばなりませぬ。今一々批評して見ると、學校で行る體操は斯道の學者が案出したもので、身體各部を平均に運動し、且つ姿容を正し、室外でも、室內でも、晝でも、夜でも、行ふことが出來る、長所は有るが、興味は實に少く、爲に家庭で行つて見る心の起らぬのが短所である。游泳は之を覺えると實に愉快なもので炎々たる夏の日、渺々たる海原或は淸き河や湖水の鳧鷗の如く身を浮べて、波に抵抗しながら四肢を動かすのは筋骨の發育を促がすばかりでなく、皮膚や心肺を强壯にする持て來いの運動だ、海國の婦人たる者は、是非共娘盛りに覺えておいて、まさかの助けにせねばならぬ。さりながら、これは七、八、九の三ヶ月、而も晴天の日より外は行はれぬが短所である。郊外散歩は日光に觸れ天然の景色に接し、心身の保養にはなれど矢張雨天の日は行はれ難いのみならず、下肢だけの運動に過ぎぬ。登山は郊外散歩よりも、より多くの運動にはなるけれど、靑山到る所に無いから仕方がない。ローンテニスも天氣だけ、鞦韆は屋根を蔽へば雨天の日とても行られぬことはないが、左程面白いものではない。併し之を練習してあると、船醉せぬ。爾來我が國の婦人は海國に住んでるにも拘らず、中には渡船甚しきは電車にさへ醉ふ人がある、斯る人は是非共鞦韆を練習して頂きたい。嘗て余は船醉する婦人に之を勸めた所が、四五日經つてから大に不平を述べて來た。曰く「あ

れを行ると眩暈がして、一日臥つてゐました、これでは船酔の素養を作るやうなものです」予答へて曰く「其處です〳〵、それを少しづゝ一歩一歩に進めて辛抱しなさい、必ず成功します」と、それより彼女は又練習し始めたが、一年の後には非常に上手になつて、夫と共に支那へ渡つた時も、船中で酔はずに濟んだ一人であつた。薙刀は昔武家の婦人達が、運動といふ目的よりも、正當防衛の爲に稽古したものだが、今は此よりも宜い運動が幾らもある。自轉車乘馬の稽古は、自動的でなくて、他動的であるが、必要上覺えておくも宜からう。柔術は斯道の大家嘉納治五郎氏の説に依ると、「女でも習ふが宜い、筋骨の發達を助けるは言ふまでもなく、柔弱なる嫋けた精神を除り、且つ之に熟達すれば、正當防衛の助けとなる」斯う主張して居られる。余は之に賛成せぬのではなけれど、「亂取」は婦人の身に、餘り過激ではなからうかと思ふ。されば柔術の「形」だけを稽古するが丁度宜い所



であらう。舞踊は衛生一點張から言ふと、女性の運動として申分は無いが、我が國に行はれてるのは大抵猥褻めきてゐて、宜しくない。「カッポレ〳〵」と來られた日には、イヤハヤ鼻持がならぬ。右の通りであるから、四季折々に伴れて、或は晝夜晴雨に從ひ、臨機應變の運動を怠らぬやうにして、立派な體格を作られたいものである。序に申しておきますが、如何に數多の僕婢を使ふ家にても、拭掃除は申すに及ばず、庭園の手入、野菜物の培養などにも手傳して、運動の助け、又他日内政を掌られる時の爲にして頂きたいものである。

▲第二法（第一法の續き）

適度な運動を怠らずに行つて居りさへすれば、それで標準の體重標準の身長に達し、身體各部の釣合が良くならうか、否々それはかりでは目的を遂げられぬ。抑々運動なるものは、之を爲せば爲す程筋骨及びその他の組織が消耗するものであるから、之を償ふだけの滋養食物を取らねばならぬ。

◎滋養食物とは如何　これには色々の議論が有る。今その大要を列擧すれば、

（一）人の身體は重に蛋白質より成つてるから、食物は蛋白質の多少を以て滋養の價値を定むがる宜いと。この說に從へば牛肉、鷄卵、馬肉、鮑の如きは最上の滋養品となる。

（二）人の活力は體溫に依て生じ體溫の薪炭となるべき物は含水炭素の食物である。故に米、麥の如きは最上の滋養物であると。

（三）象牛馬の如き草食動物は健康で長命するけれど虎狼の如き肉食動物は猛烈ではあるが短命である。故に人も植物性の食物を以て最上の滋養品とせねばならぬと。

（四）滋養品の價値は動植何れに拘らず、消化吸收の多少を以て論ずるが宜い。分析上如何なる滋養物にもせよ身體に消化吸收しないで、徒に糞便となつて了ふやうでは何等の効能は無い。故に糞便を檢査して徒費

量の少い食物は、最上の滋養品であると。この說に從へば豆腐米牛肉は最上の滋養品で香の物、數の子、昆布の類は劣等に屬するものと謂はねばならぬ。

(五)滋養品の高下は人の情欲に從ふが可い。牛肉を好む人には牛肉は滋養品なれど、見ただけでも嘔吐する人には劣等の食物となる云云。

(六)滋養品不滋養品なる名目は甚だ不可なるのみならず、斯る食品が天下に有るべき道理は無い。若し肉類を滋養品なりとし、之をのみ食はんか、決して生活する能はず、若し野菜類を以て不滋養品なりとし、更に之を取らぬとせんか、是亦生活する能はず、要はその量を超えざる程度に於て食すれば普通の食物は皆夫々の効があつて皆滋養品となる。若し量を超えて暴食せんか、如何なる食物も皆害となる。故に天下の物、何物か滋養品ならざらん、天下の食物何物か不滋養品ならざらんと。



先づ大體は右の六說であるが、此等は皆何れも一方に僻するを免れぬ。故に余は六說を悉く折衷し、而も視感、嗅感、味感、觸感皆之を好むものでなくては、眞の滋養とすることが出來ぬと決論するのだ、平たく言へば動物性

の食物植物性の食物を皆混食し、而してその中で、消化吸收し易いものを選び、之を上手に料理して、眼で視ても、鼻で嗅いでも、口中の粘膜に觸れても、又舌で味つても、悉く己に快感を與ふる物が眞の滋養品となるのである。然るに我が國の婦人達は前號にも述べた通り、含水炭素の食物のみに偏り、而も間食を多く爲さる風習がある爲に、胃は何時も之を消化することに汲々と働き、暫時も休憩の暇が無い。されば幼少の時から腹ばかりが一番大きくなつて、四肢や胸廓が之に伴はぬやうになるのだ。故に適度なる運動を怠らざると同時に、含水炭素の食物を從來よりも今少し減し、代りに蛋白質の食物を交へ、食事と食事との間を少くも五時間隔て、その間に煎餅一枚たりとも、手に取らぬ習慣を養はれたら、筋骨は大は發育し、腹ばかり大きい樣な不釣合を矯正せられるのである。世には禁煙禁酒の説はあれど、禁間食の論は出ぬ。何うか本誌の愛讀者諸姉は、率先して禁間食會を一つ起して下さい。

▲第三法（表情法）（美顏策）

前號に述べた標準の顏に達せんとするには、色々の方法もあるけれど、第一に、表情法を心得てかゝらねばならぬ。表情法を心得て居らぬと如何に美しい顏もその割合に美しく見えぬ。さればこれに就て聊か左に述べよう。

◎表情は波の如し　表情の狀態を卑近なる例で述べると、恰も水中に石を投ずれば波紋を生ずるやうなものだ。次第に擴がつてその範圍を增す、故にその範圍の廣さに依てその情の强さを測ることが出來る。重言すれば始め一小部の筋肉に表はれ、次第に擴がりたる筋肉に及び、甚しきは全身に亘ることがある。例へば可笑しいと感ずればその始めオホ、と僅に口元の筋肉を動かすに過ぎぬが、次第にアハ、と顏面全體の筋肉に擴がり、尋で呼吸筋腹筋に及び、尙手を動かす、膝を振る、果は絶倒するに至るものなれど、全身の表情は姑く省き、顏面筋だけの事を簡單に述べておきませう。

◎顏面の表情　は眼、口、鼻の周圍に在る筋肉の動き方が主要であつて、耳で表情することは到底出來ぬ。

乃で人の感情は色々あるけれど、大別すれば愉快、憤怒、悲哀の三つに歸するもので、愉快に感ずれば環口筋即ち口元の筋肉を收縮させ、眼を開き、又鼻孔をも開くものである。悲哀を感ずれば鼻翼は下り、鼻孔は半ば閉ぢ皺眉筋(眉と眉との間にある筋)を縮める。次に大に憤怒すれば大に眼を開き、同じく皺眉筋を縮め、環口筋を堅く閉ぢ、口角を下げるは人の熟く知る所であらう。倘その他滿足、恐怖、驚愕、輕蔑、滑稽など色々樣々の表情は有るけれど、兎に角右三感情の錯綜したものである。所がこの、

◎表情は惰性になる＝もので、何時も悲んで居れば、その筋肉が癖になり、時偶に愉快を感じても容易にその情を表はさぬやうになる。故に眼を程よく開かせ鼻の形を醜くからしめず口元を愛らしく締めて居らうといふには、愉快なる感情を常に懷いて居らねばなりませぬ。これが何よりの美顏策である。斯う申すと心配事や腹が立つべきことが出來して、悲しくなり、怒りたくなるを奈何せんやと、言はれるかも知れぬ。けれど、

◎表情は忍べば消へる＝ものである。例へば憤怒に堪えぬ時でも、成るべく我慢して微笑を漏し、悲しくても愉快な顏付をしてゐると、その感情は次第に衰へて、遂に消滅する心的作用が有るものだと、先輩學者は結論して居られる。されば讀者諸姉よ、宜しく快活なる言語動作を取つて、眼鼻口を愛らしく美くしくして頂きたいものだ。倘鼻を高くし、齒を奇麗にするには專門の醫師に就て手術を受けられよ。僅の時間で鼻の恰好が宜くなり、齒は眞白になる。余は無骨な男なれど、年に一度づゝ齒科醫に就て齒の掃除をして貰ふ。その時の齒の色は純白雪の如しである。

▲第四法(皮膚及び毛髮)

標準の皮膚即ち艶々として滑かにしようと思はゞ、言ふまでもなく皮膚の衞生を實行せねばなりませぬ。皮膚の衞生とは如何、曰く(一)清潔にする事(二)摩擦する事(三)空氣に觸れしむる事。この三箇條より外に

何等の秘法は無い。されば毎度言ふことながら、冷水溫湯の二つを以て垢を落し、何れにしても摩擦をすることが肝要である。詳しく言へば早朝に冷水摩擦をなし晩に溫湯摩擦をなし、而して時々帶を解き、皮膚上に溜れる惡瓦斯を拂ひ、外界の空氣を新陳代謝せしめるものである。斯の如く每日實行すれば、色の白い黑いに拘らず、艶があつて滑らかになることは受合である。

予は一昨年來皮膚に關することを研究してゐるが、何うしても皮膚の色素を薄くして、色を白くする確實な方法のなきのみならず、藥的の物を塗つて艶を美しくしたり、理を細かくしたりする法は殆ど無いものだと確信したのである。尙近々の中に皮膚だけに關する大部の書物を世に公にする積りであります。次に、

◎髮=もその衞生に依つて、前號に述べた通り、標準に達することが出來る。然るに何の手入もせず自然のまゝに投棄つておくと、毛の色艶が段々惡くなり、遂に元の毛は自然に脫けて容易に生え難くなるのみならず、縮毛、赤毛乃至は白髮になることがある。元來毛髮はその毛根を傷めぬ以上は、縱ひ脫けても又新しく發生するものではあるが、垢が溜るとか身體一般が衰弱すれば、毛根に充分の榮養を與ふることが出來ぬ爲に前述の如く毛が惡くなるのだ。故に少くとも一週間に一度は刷子を以て垢や雲脂を掻落し、石鹼をつけて水或は微溫湯を注ぎ十分に洗ひ、乾いてから少し許の油を塗けて然る後束髮なり島田なりに結ふが宜い。又時々毛の尖を少しばかり切つておくと新陳代謝を促し發育を盛んにするものである。次に健康なる皮膚からは容易に藥物を吸收せぬもので、彼の所謂毛生藥も、之を毛根に泌み渡らせんとするには、幾十週幾百日の時日を費し、初めて幾分の功を奏するものなることを知つて居らねばならぬ。その他の衞生法は間接で、即ち精神を爽快にし、滋養食物を適度に取り、相當なる運動法を講じ、身體一般の營養を盛にするのだ。身體一般の營養が盛んになれば、從て皮膚も美しくなり、毛髮の發育も宜い道理である。殊に十五六歲から二十歲までの間に、右の通り守れば最もその標準に達し易

いものである。

▲第五法（遊藝）（感情）（意志）（智力）

標準の娘にならうといふには遊藝を程にして下さい。中流以上の娘達は學校へ通はれる外に尙必ず裁縫料理を習ひ、それでも未だ足らないで抹茶、活花、琴、三味線乃至は踊までも一通り稽古なさる慣習になつてゐる。予の知つてる某家の令孃十七歲は早朝に琴の師匠へ行き、歸つて朝飯を了るや高等女學校へ通ひ、午后歸宅するや直に裁縫に出かけ、その又歸りがけに、三八の日は活花、一六の日は抹茶、日曜は和歌、五十の日は三味線の稽古、その忙しいことは一通りでない。されど學校の成績を優等にせんが爲、夜は又燈下に眼を曝して御座る。斯く凡てに熱心であるから、學校の先生には賞められ、方々の師匠には可愛がられ、親達には樂しがられ、本人は益々得意になつて、その位置を落さじものと、少々の頭痛位は物ともせず、寸陰を輕んぜず奮鬪してゐる。實に感心



なものだ。けれども退いて其人の心身を觀察すると、既に病的になつてゐる。即ち眼は幾分近視に傾き、顏は蒼ざめて血色を失ひ、脊柱は稍々前屈し、月經は常に不順、便通は常に秘結勝、從つて精神は感情鋭く少し憐れな話を聞けば、直に涙ボロ〳〵、少し腹が立てばはや襦袢の袖口を嚙んでゐる。西洋の諺に「學科過重の學校は人を秩序的に馬鹿にする」といふが、日本の令孃は學校の學課過重なるのみならず、琴責、茶責、花責等に逢ふのであるから、上流に至れば至る程、殘酷な目に遭つてゐる。故に日本婦人には、ヒステリーが通有性になつてゐると言つても可い位である。返す返すも慨かはしいことだ。されば令孃方よ、遊藝は結婚してからでも習ふことにして、學校から歸つたら不必要なる學科は、そこ〳〵にしておいて、知力に關する科學の復習を主に爲し、その餘は家庭の手傳をなしたり、前述の如き運動をなして、無邪氣に日を送つて頂きたい。斯の如くなれば、感情は冷靜に、知力は進み、意志は强くなるのである。又常に家庭的の仕事を手傳して、あれば結婚してから副食物を煮燒するのに、ノートブックを出して見るやうな滑稽も無く、姑と新舊思想の衝突を來す憂も幾分減るであらう。

▲結　論

十五六歲から二十歲頃までの娘達は、大に運動して筋骨その他の組織を發達させ、食物は從來より含水炭素の品を減して、蛋白質即ち魚鳥獸の肉類を殖し、間食を絕對的に止め、每朝の冷浴、每晩の溫浴以て皮膚を淸潔强壯にすれば、心肺二臟その他の部分も丈夫になり、便通月經の不齊も治り、聲は自ら良くなり、次に髮も一週に一度づゝ手入をなし、その發育を促がせば、自然と濃くて且つ黑くなる。次に遊藝を大に減して實用的の科學に注意し、家政の手傳をなして、妻君たるの素養を作りおけば、意志の弱い感情の鋭い婦人とはならず、品性大に氣高くなり、我が國固有の貞操を全うせらるゝものだと結論するのである。（完）

豫告．次號には「銷夏二十法」

乳呑兒を持てる母親へ

◎哺乳はあまり長くさするな

小兒が生れて八九ヶ月位すると齒が生えはじめて、唾液の分泌を增し胃液、膵汁、腸液等の分泌も又次第に增して來るもので、隨つて腸胃の働らきが盛んになり、消化力は益々强くなるものであります、十ヶ月後になれば、子供の腸胃は乳汁の外、ソツプや、オモ湯や、葛湯又は薄い粥のやうなもの又は輕い魚の肉、或は半熟の鷄卵などを漸次に消化するやうになるものですから母親の健康狀態に依つては隨分兒を離してもよいのであります、西洋の習慣は八九ヶ月乃至滿一年に達すれば全く授乳を止めますが、日本では永い間哺乳をつゞけて漸次に止めさせる習慣です、子供生育の爲めには急に止めさせるよりは滿二歲位になるまで矢張り少しづゝ授乳して居た方がよいけれども、あまり永く哺乳させて置くと母親の健康を損ふばかりでなく、自然子供に依賴心が起きて、成長の後の獨立心を妨げるものであるから大槪にして離乳させればならぬ。

◎離乳の準備にはどうするか

右の如く生後一ヶ年にも達すれば母體の乳汁は次第に分泌の度を減じて來るものであるから、隨つて子供は滋養の不足を來す樣になる、故に生後八九ヶ月に達すれば漸次離乳の準備をせればならぬ、それには乳の外ミルク、ソツプ、おも湯、葛湯などを與へ、滿一年位に達すれば漸次半熟の鷄卵、粥、輕き魚肉の刺身、煮つけ又は牛乳やソツプで粥をつくり、少しづゝ與へるやうになし、そして漸次に母乳を減じ、滿二ヶ年位には全く離乳させるやうにせればならぬ、牛乳とミルク、おも湯などは此の離乳期に於ける適當の營養物である。

◎離乳を見合はすべき場合

乳呑兒が生後八九ヶ月を經過し、既に乳離れの時期に達して居ても若し其時期が夏季に當れば、暫時離乳を見合せて延期する方がよい、何故かといふに、夏は子供も大人と同じく腸胃の機能が弛緩して僅かの原因から、腸胃の疾病に犯され易いもので、これまで乳に慣れて居た腸胃は僅かの食物の變換で害はれるものである。又子供が虛弱であるか、或は離乳期に際して何か病氣でも罹るやうな事があれば乳の外他の營養品を消化する事が困難なものであるから、斯る際には暫時離乳を見合せる方がよいのである。

◎離乳時に注意すべき要件

離乳後の小兒は食慾が著るしく亢進するもので、目に觸るゝ食物は何でも構はず口に入れるものである、斯樣な時期にはなるべく、家族の食事する處ろなどを見せてはならぬ、食事の樣を見せては他人の食物を欲しがつて泣き喚くから家人がそれを拒むことが出來ずして自然不消化物と知りつゝ與へる爲めに、腸胃をこわし、吐き瀉しをするやうになる。

又此際子供の口中へ物を噛んで與へる事は嚴禁せねばならぬ、斯る不注意からして小兒に黴毒や、結核等を移した例は澤山にあるから大に注意せねばならぬ。

◎食物は頻回に與ふべし

又離乳後ばかりでなく、小兒が凡て身體の發育するに隨つて比較的多量の滋養分を取らればならぬものであるから、一日に數回の食物は子供に必要である、けれど子供の胃は大人の如く、抵抗力が強くないから一度に多量の食物を與へるのは消化器の爲めによろしくないから。少量づゝ頻回に與ふるのがよい併し時間の制限もなく不しだらに與ふるのはよろしくない故に離乳期後は菓子、果物、硬き食物纖維の多いもの、脂肪の多いものは決して與へてはならぬ。

◎歯の生える時の徴候

乳歯の生える時は乳呑兒の身體に異狀を來して著るしく過敏となるものであります、僅かの物音にも驚いたり、目を覚したり、機嫌が悪くなつたり。時としては發熱することもあり、又乳を吐くこともあり下痢することもあり、咳嗽が出づることもあり、一般に涎を流して自分の指で口の中を探りまわし、又は手當次第に玩具を噛つたり、泡を吹き出したり、母親の乳房を噛むなど平常と全く異つた狀態になるものであります。

◎生歯期の注意

生歯期には得て腸胃を害し易く、又腸胃の疾病に罹り易いもので、殊に恐ろしいのは腦膜炎になるのも多くは此際にあるものですから、生歯期に少しでも熱が出たり、機嫌が悪かつたりすると放任ては置かれませぬ。

乳歯は通例生後六月目乃至は八九ヶ月目に發生するものですが、それも榮養の良否に因つて遲速があります、榮養の佳良な子供は發生が早いのみならず、其順序も又正確であります、即ち

生後六ヶ月乃至九ヶ月	門歯
十二ヶ月乃至十五ヶ月	第一小臼歯
十八ヶ月乃至二十ヶ月	犬歯
二十ヶ月乃至二十五ヶ月	第二小臼歯

といふ順序で發生し、滿二ヶ年には二十枚の乳歯が出揃ふものであります。

榮養の十分ならぬ子供又は體質の弱い子供は乳歯の發生が自然遲くれるものですが、併しあまり遲くなるのは尋常ではないから健康診斷を受ければなりませぬ。

又歯の色の變つたもの、又は齲歯の多いものは概して體質の不良から來るものですから速かに專門家の診斷を受けてそれぐ\適當の攝養をせねばなりません。

◎脱け換り時の注意

子供が六七歳になれば乳歯の下から新らしい歯を發生して乳歯はこれと、生え換るものです、此新らしい歯を永久歯といつて、その生え換る時永久歯が下から生えるも其上にある乳歯が容易に脱け落ちない時は、永久歯は或は斜めに、或は横に生えて歯並が不整になり、一生醜い形を殘すものですから六七歳に至つた乳歯の動き始めた頃、これを抜き去らればなりませぬ。

次に歯の健康と不健康とは直接に腸胃に影響してその爲め全身の健康を損ふものですから歯はいつも健全に保存せればなりませぬ。

◎小兒と歯の攝生

歯を保護するには第一口の内を清潔にすることです、乳呑兒の時分から日々數回殊に哺乳の時は必らず柔らかな布片にぬるま湯か、又は五十倍の硼酸水を浸して歯齦のまわりを掃除し、乳の殘渣を拭取るやうにし又子供が成長して物事を覺える樣になつたならば、食事の後に必らずぬるま湯で含嗽をさせる習慣をつけさせ、寢る前に甘味の物などを食べさせる事は勿論夜分食物を與へて口中を其儘にして置くなどは最も歯の爲めによろしくない事である。

又歯みがき、楊子を使ふにも、それが出來ない位の子供ならば少くとも一日一回柔かい毛の楊枝に歯磨粉をつけて丁寧に歯の裏表を磨かればならぬ。

◎口中の掃除

口内の掃除を怠る時は歯の間に附着した食物の滓にいろ〳〵の黴菌が繁殖して、段々これが他へ擴がつて歯の根を腐らすものである、即ち齲歯になるのはそれである、故に食後は必らず含嗽して口内の殘渣を除られればならぬ一般に甘味の强いものや、又酸味の多いもの或は熱過ぎるもの、又冷いものはなるべく與へぬ樣にせればならぬ、夫からあまり硬い食物は子供の歯を損傷することがあれば與へぬ樣にせればならぬ。

▲女子この花會の富士登山計畫

野中千代子夫人を會長にせる、女子の登山奬勵の目的を以つて設立せられたる同會は、昨年風雨中の登山に際しても、登山者一同元氣よく、誠に好成績なりしを以つて、本年も女子教育家千葉秀胤氏に主幹を囑託し、左の規則によりて登山者の便宜を計る由。

一、登山は御殿場口とし、往復三日間を豫定す。

一、登山期日は七月下旬より八月廿六日の間に於て天候を見計らひて決行す。

一、本會に參加せんとする者は、滿十二歳以上にして、父兄家長の承諾ある婦人に限る。

一、約十人宛を(一組として登山し)其行動は野中會長の指導に待つ。

一、入會金を五拾錢、其他の費用を一人六圓五拾錢と定む。

一、委細を知らんとする人は芝公園第十四號二番なる同會本部に問合さるべし。

此月のお總菜は

◎隠元と生麩の煮しめ

生麩を程よく切り、鰹節にて煮汁をつくり、砂糖を入れ、醤油をさし甘からく煮るなり、隠元はあと先の筋を取去り、一旦湯でゝ、麩を煮たる煮汁に更らに醤油砂糖をたし加へて煮るべし。

◎茄子の龜甲燒

皮のまゝ二つ切にし、切目を粗く横たてに庖刀を入れ、鍋に胡麻の油を引きて煎り燒にし、生姜醤油をかけて食す。

◎茄子の胡麻びたし

茄子を湯でゝ薄く切りて胡麻醤油につけるなり、胡麻醤油は黒胡麻を炒りて砂糖と醤油にてほどよくませるなり。

◎鱸のなます

夏は黒鯛、すゝきなどよし、鱸を三枚におろし、皮付のまゝ刺身に作り、また板にならべ、布巾をかけその上より沸湯をかけ、後冷水をかけて布巾を去り、茄子の皮をむき、竪に二つ割にして湯でゝ、又竪に二分位の厚さに切り、少ししぼりて皿に盛わけ、酢味噌を片わきへ付べし。蓼味噌の作り方は蓼の葉に水にてよく洗ひ、細かに剉み擂鉢にてよく擂り、味噌を入れて又よく擂り、酢と白砂糖を入れて後裏ごしにするなり。

◎素麵の清し

まづ素麵をゆがき(湯を煮立てその中へ素麵を入れ、一吹吹きたる時少し水をさし、暫時蓋をなして又吹かし、都合三回吹かせて湯でるなり)後水に晒らし汁に入れて煮るなり、あしらひには、葱と油揚を入れ、又は鯛を燒きて入るれば之を鯛麵ともいふ。

◎鮑の水貝

生の鮑を四分ほどの角に切り、鹽をふりかけて暫時置き、さて之を丼に入れ冷水に浮かし、あしらひには海松をよしとす、あわびを貝より離すには鹽を貝と身との間より入れて其周圍を撫で廻し置き又其上面の平の處にも鹽を擂りつけて滑りを去り、さて後その貝と身との間よりわさび卸の柄をさし入れて之を離すなり。



憂愁の人

侶松女史

その一、旅衣

京に歸りて、はや、四日を過し申候、ゆくりなく、御閑居を驚かし〻、旅路の夢を思ふにも、そゞろ床しきは、御令弟の無邪氣なる御物語り、姉上の溫かなる御もてなし、いづれ忘れ難き感興を、心の奥に留め申候、實に、御地にありし三日の程は、面白かりしと言はんよりは、宛ら、醉ひたるが如くに候ひき、これ至く、かの海邊の空氣の爽かなるによる事と存候が、若しも、計らず、御目に懸りし、彼の姉妹の君達の魔力によりてなど申さば、失禮にや渡り候ふべき、有體に申さば、小生事、御地へは、是迄、度々參りしにも關はらず、此度程、愉快に感じたる事は無之、由來、樂しき夢は醒め易きものと承り候へ共、此度のもの〻みは、永く〱見まほしき願に候こそ、我ローマンチツクなる本性と御承知下被度、只、姉上よ、樂しき夢の片影には、何やらん、言ひしらぬ悲しみの跟跡の殘るものなるをさとり給ひてよ。

いよ〱、出立の日、彼の小松原にて、皆樣に御別れ申候時！、雨ふる中に、ションボリと、互に別を告げし其折よ！！、猶豫なく我俥の進み行く其刹那に、たとしへなき悲しみの、我心に溢る〻を感じ候ひし、そは、如何なる故ぞと問ひ給ふか、實の所、小弟は姉上の病み衰へ給へる面輪をみて、悲める譯にても無之、小弟は、小弟自身の理由を持てるにて候、……始めて御目に懸りし、彼の姉妹の君達の御言葉は、小弟に、一種のインスピレーションを與へ申候、今斯く筆に走らせ居る中にも、彼の君達の優しき聲音が聞ゆる樣に覺え申候、オ、姉上よ、願くは一喝を加へ給ふ勿れ。

さはいへ、いつまで、旅路の悦樂に醉ふべき身にも

候はねば、少しは精進の境に立ち歸り候はん、机上のノート、ブックは、塵と共に堆かく、書架の數十の書籍も、背の金文字を耀かして誡め顏に有之候。

昨夜は暫く自然に親しみたる心を以て、友人を訪問致し候に、潮風に吹かれ候ためか、少々色が黒くなりて、大變丈夫らしく見ゆると賞められ申候、……小生は口を極めて東海の美觀を說き、春の景色の鮮かなるを語り申候。

あこがれの、翅もがなや、さらばかけむ、
　雲皆光る、夕ばえの空。
草かけの、すみれの花よ、戀ありや、
　色はゆかりの、紫あはき。

くだらぬ事のみ書きつけ候へ共、しかし、一字一句些のいつはりは無之候、先は御禮ながら、早々。

四　月　十　日

その二、寂しさ

御書面拜見、處々苦笑を禁じがたく候ひしも、兎に角、嬉しく拜讀致し候、實に、世の中は三日見ぬ間の櫻とかや、御別れ申てより、最早、廿日とも相成申候而も、此廿日の間の小生は、全く煩悶の人と成り果て申候、新なる樂みは、我魂を擒に致し候、由來、才子は多病と承り候へ共、才なきものゝ病こそ、至つて哀に候はずや、只今は、畏友△△君と同宿にて、親み居り候へ共、彼は活動の人、我は憂愁の人、彼は曉の光、我は夕日の影、彼はかしこに、我はこゝに、隔てたる心には非らざれど、及ばぬ才の恥かしく、口惜しく、我と我身を歎ち居候、姉上は、小弟に、種々の望を、御囑し被成候趣、難有事と存じ候、果して、御望を全うし得るや否や、今は我ながら疑はしく被存候如仰、いかに讀書萬卷、博學の人と相成候とも、信念なく、安住なく、理想なく、自覺なくば、何の價値もなからん事は、小生も萬々承知に候へ共、小生目下の大苦痛は、自己生存の意義を、自から悟り得ざる事に候、何事を爲すとも、味氣なく、つまらぬ心地のみして、更に愉快を感じ不申候、アゝ、如何なれば斯か

る悶えの人とはなれる？、小弟も、亦、姉上の如くに佛陀の慈悲に憧れて、歡喜と平和の充ち滿てる、寂光世界を慕ふの念慮はありながら、心脆く、力足らずして、向上の一路、遂に我事に非ざるかの歎聲を洩すばかりに候、姉上よ、願くは、疲れたる旅人に、憩の汀を敎へ給へ、今は、只小弟は何物かによりて、心の渴を醫したく、切に／＼祈願するのみに候、か丶る折、思ひ出づるは、過ぎし日の夢路に候、ゆくりなく、彼君達と相知りて、睦み交はり候其折よ、宛ら新らしき生命の湧き出でたらん心地なりしも、これも、今は幻の影と消えて、限りなき、寂しさの國にさまよひ居候。

寂しさよ、寂しさよ、寂しさよ、
我ひとり、我ひとり、我ひとり、
我ひとり、寂しさと、
共に棲み、共にいね、
春いくつ、夢いくつ、
ア丶こ丶に、二十三。
此心地、如何ならん、オー姉上よ。

釋尊も、晩年に至りて、眞實の禪定に入らせ給ひきとか、小弟の、か丶る事言はんは、あまりに、口ひろきわざながら、光あり、微笑あり、大に悟らん前には必ず迷なかるべからずと覺悟いたし居候。あまり、要なき事など書きしるし、いかに姉上なればとて、汗顏千萬に奉存候。

猶一つ、御願有之候、もし、過日大勢にて撮りし寫眞、御手許に有之候はゞ、是非、一葉御惠與のほど願上候。……敬愛する人々の面影を以て、光なき書齋を飾らんは、小弟にとりて、此上なき喜びに御座候。頓首

逢ひしうらみ、逢はぬなげきを、つ丶みつ丶、
落つる淚や、いかに急なる！

四月二十五日夜半認む

その三、ありし面影

姉上よ、此頃のふる雨を、いかに眺め給ふぞ。
過日は、はかなき夢の跡を、憚りもなく申上しを、如何ばかり驚き給ひつらむ、許し給へ、實に、小弟は

彼君の魔力に魅せられしなり、姉上よ、もしも、姉上が、小弟がまだ郷里に在りし頃、幼なき心に刻みたりし思の、今日までも、忘れぬ紀念となりて、殘れるを知り給はゞ、容易に、今の小弟が心の奥をも、解し給ふならむ、姉上も、その面影のみは知り給ふ、我從妹の直ちやんをば、忘れ給はぬならむ、さるにても、過ぎし日、彼の姉妹の君達と逢ひて、その幼き君の面影の、フト、我なき直ちやんと、似通へるを、思出し時の、我驚きよ、我戀は、古き愁の花草の、新に萠え初めし者に候、不憫とも、思召し候へかし。

御承知の通り、小弟が母を失へるは、小弟が十三の歳に候ひき、勿論、父とても、我を慈しみ給はぬには非ざれど、謹み深き母の性質を受けて、寧ろ、臆病なりし小弟は、嚴格なる父に接するよりは、慈愛に富める叔母君に近づくを好み候らひき、もとより、其理由の一は、小さき直ちやんの、友愛の力の、我を牽きたりしも明かに御座候、されど、其頃、我等は、唯、心あひたる友だちなりと思ふの外、別に、ませたる心を持つべき年齡には候はざりき、されど、心の奥底に、ゆかしの人、なつかしの少女と、思ひそめたるは、確に候らひき。

直ちやんには、一人の兄と、幼き弟とありたれど、弟君は、我等が友たるには、あまりに小さく、兄さんは、元氣よき粗暴なる少年に候ひしまゝ、直ちやんは小弟にとりては、唯一の友達に候ひき、遊ぶ時も、學ぶ時も、互に相離るゝはまれにて、彼女は、宛ら、天使の如く、我眼に映じ候ひき。

何時なりけむ、一年の夏休みに、直ちやんや、小弟等も共に叔母上に伴はれて、越後へ海水浴に行きし事候ひしが、二人があどけなき遊びは、今も尙、なつかしく思ひ出でられ候、こゝの磯、かしこの濱に、四つの小さき足跡を記さぬ限もなく、野徑に草花を、爭ひ採りしも此時！、小川を助け合ひつゝ渡りしも此時！アヽ、この時こそ、之の周圍には、天國てふ者の面影も見えたらむ、戀とは言はねど、甘き嬉しき心地にこそ候ひしが。

潮の音に、夢またゆめを、たどりつゝ、
夢路のはてをいかに夢みし。

然れども、さめては、夫も遂に夢なりし、相愛したる二つの魂は、永へに別れ〳〵となりて、直ちやんははかなくも彼の世の人となり、小弟も、亦、病にかゝりて、幼き愁に痩せ衰へ候が、肉の病は、やゝに癒えて、魂なき軀は、かくて存らへ、青年何事ぞ、傷心の人として、光なき命を保ち居り候、直江津の濱、郷津の磯、憶ひ出づれば、潮の音も、海の香も、いづれ涙の種に候よ。

かゝる思ひに、明かし暮して、胸の傷は、復た癒ゆべくも覺え候はざりしに、計らざりき、去りにし人の面影を、端なくも、彼の日、彼君と見てしより、愁は新に湧き返りて、今は殆んど、堪えがたく候、アヽ、此愁を癒すは誰ぞ！、靈はたゞ、靈に依て救はるゝとか、此後は、神佛の温かき慈愛の光を浴みて、悟達の人となる外、せんすべもなくや候はん。

望みは高く、心は弱し、姉上の厳なる御訓誡は、此身此心に耐え兼ね候、如何にせむ！、如何にせむ！、オヽ、姉上よ。

六月六日雨をきゝつゝ書窓の下にて

その四、脆き心

御令弟の御上京に托し、御手紙下され、確かに落手致候、久方ぶりにて、御令弟にも御目に懸り候ひしに微笑と、光に輝き給ふ、御顔色の羨しさよ、例の如く快活なる調子にて、無邪氣なる話をせられ、我等もいつしか活き返りたる心地いたし候、解脱の福音、愛の福音を、計らずも、御令弟の口より聞きて、心すがすがしう覺え申候、されど、其喜びと、微笑とは、瞬間に候ひき、げに、そは、我魂の奥底には、満ち充てる黒影を、遂に拂ふべくも候はざりき、御令弟と入違ひに、同國の友人來り、やがて〇〇先生も訪ひ來ませるまゝ、御手紙を懐にしつゝ、氣をもみ〳〵、やつと、夕方になりて拝見致候。

賜りし、玉章花の、香もなうて、

冷たき人の、言の葉ぞうき。

嬉しき御便りとおもひきや、いや〳〵、いやみやら、御小言やら、讀み行くまゝに、心から恨めしく存じ候、さりとは、あんまり御なさけなき仰せならずや、姉上なればこそ、我ハートの、愁も、惱も、殘りなく打ちあけて語りまゐらせしを、小弟が、神經中樞に異狀ありて、將に、巣鴨行の前段なりなど、判じ給ふとは、餘りに冷淡に候はずや。殘酷に候はずや。姉上の御住居に、集ひ來るものは、男にてもあれ、女にてもあれ、只、兄弟の愛もて交はれ、一切の秘密は許さずとの、兼ての御諭しを忘れしにはあらねど、迷ひそめにし我心を今更いかにかすべき、もとより、彼君達は、容易に、我等の近よるべき際の御方にはあらずと存じ、且は、彼の幼き君にも、すでに〳〵定まれる婚約の夫君ありとは、いつかの御話にて、おぼろげながら、知り候ものゝ、あまりに、亡き人に似通ひし面影に接し、奇しき思に打たれ候ては、如何でか、此塲合に、冷たき理性の判斷力を容るゝの餘地あるべき、知識の前に、我は已に酔ひたり、されど、アヽ、今は萬事休す、我胸は、只張り裂けむばかりに候、あじきなき此身なり、ながらへて何にかせん、死の神よ、疾く〳〵我上に來れ、今は我願は、たゞ〳〵、是れ一つにて足り申候。

ゆくりなく、若き愁に、なやむ子の、
　脆き心を、人しるらめや。
夢とのみ、強ゐて笑みつゝ、生きむより、
　永劫の眠よ、我に幸あれ。

姉上が、小弟の拙き歌屑に同情をよせ給ふとも、いたく打ちこらし給ふとも、そは、わが關する所に無之候、小弟は、唯、おもひに湧きかへる時、溢るゝ太息を、我しらず、心の奥より、みぢかき歌に、もらす計りに候、小弟が今の最後の隠れ家は、全くこの太息のみに候、アヽ、我は天地に只一人、星に語り、花に泣いて、悲哀の苦味を嘗め盡さんか、アヽ、我胸は痛むオヽ、姉上よ、さらばよ、おゝさらば！。

六月十二日



夢のあと

藤葉女史

夏艸やつはものどもの夢の跡と芭蕉翁を氣取りてにはあらねど、今の我が身の境遇はいさゝか古戰塲を吊ふに相應しきものとおもひて斯くは題しぬ。

草深き鄙の里も住めば都と聞くものからは東京より外に見し事なき私の身には餘りにも情なく島流しにても逢ふ心地してまゐり候此土地も、昨日とすぎ今日と暮して、いつしかに送り迎ふる春秋の數早や二つとかぞふる此頃は流石に此處の古株となりてチャンとも心易くなり、馬車に乗りても法外の無心云はれぬ迄に落付きては今更に立ち去る事の悲しく、怪しう胸の亂れ候よ元より行手定めぬ旅の身なれば明日は何處の空に又新世帶を張りなほす事やら、人世僅五十年と申候へども猶私の身には半生を餘し候、短しとも此間にさすらふ里の數々、後の思出にかきのこさばやとおもひ立ち候程にまづ手初めに此土地の事まはらぬ筆もてかきつらね申べく候。

八景と云ふ事何時の時代、如何なる人の初めてとなへ申候ひけむ、近江八景を初めとして所々に八景と名のつくもの御座候が此處にも亦其名ゆかしき旅順八景と云ふが御座候、之れも遠征の人が古郷を忘れぬやさしき心に呼びなされしものか、さるにてもくわしき事知りたきものよとおもひ居り候折から一日白玉山に詣で申候、此白玉山とは舊市街と新市街との間にある山にて旅順戰死者の遺骨を祭る處、都督府が多くの財を費して去る三十九年の頃より工事を起して岩を割り地をならし三百五十尺の頂にいかめしく石疊み上げて納骨堂と云ふもの出來上りしは四十年の五月にて候ひき、猶今も工事は引つゞきて忠魂碑設立の計畫あり

其高さ百五十尺なりと聞けば之れの出來上りし曉には如何に莊嚴なるものにて候はむ。

此處には番兵常に居て許可なきものゝみだりに堂内に入るを許さず、堂と雖も内地の神社とは全く其趣を異にして、砲壘の如く石積み上げて廻りをかこひ入口に石段あり此處を一旦登りて又下る石段あり此中に石もて丸天井をつくり其中に遺骨を納めある事にて候へば之れに詣づる人々は貴しと云ふ外に何となく戰爭當時の事忍ばれて悲愴の感に打たれ申候。

門は宛も旅順水道に面したり、境内は砂礫一面にしきつめて有志の寄附したる植木、草花此處彼處にありベンチ三ツ四ツ置かれて四方の眺望得も云はれず。

門の側に八角の太き白ペンキ塗りたる柱に何か書き付けあり、何心なく讀み下せば之れは彼の八景の名を記したるものにて候ひき、さてこそ何人が此山に登りて四方をながめつゝいみじき景色に愛でゝ名づけ候ひけむ今其一々を記せば、

彌靈の夕照、西港の浮鷗、老鐵の殘雪、水營の朝霧白銀の秋月、模珠礁の遠帆、龍河の烟雨、虎島の晴嵐いでや、これより例の好奇心にかられて其一々を探り見候あらましを述べ候はむ。

△彌靈の夕照

彌靈山とは乃木大將の初めて名附けられしものとかや其詩に、

彌靈山險豈難攀、男子功名期克難、鐵血覆山々形改、萬人齊仰彌靈山

と實に勇ましくも亦悲しき詩にては候はずや、三千の死屍を埋むる處其脂肪にじみ出でゝ土の色異なり、今は幾年の雨風に白く曝されて此處、彼處に落ち散れる骨のかず〳〵、太く長きは共に斃れたる軍馬の骨にてや候はん、細く弓なりにまがりたるはあはれ貴き戰死者の肋の骨にてや候はんなど一々眼に入るもの皆涙の種ならざるはなく長靴や、帽のはしくれの並はづれて大きなるは露助の用ゐしものにてや候はん、彼等とても同じく血あり、涙ある人の身の、古郷には妻もあらん子も有らん、御國の爲に討死せる彼等は此上な

き名譽とは云へ、古戰場の跡吊ふは實に悲しきものにて候よ、麓には支那人の家屋處々に御座候へども夕日の斜にさびしく頂を照せる樣只哀れなる感のみ起り申候。

△西港の浮鷗

旅順港灣の入口より老虎尾半島と申候が細長く灣内につき入りて自ら灣は東西の二つに分れ居候其西なるを西港と呼び候、新市街は此灣に沿うてあり。

砲のひゞき、雄たけびの音すごかりし跡としも覺えず此處には水を隔てゝ老虎尾の山々屛風の如くにひかへたれば荒き風さへ立たず、軍港内の銃獵禁じられたれば波穩に浮ぶ水鳥の夢も圓にて、宏大なる白壁の洋館水にうつりて、繪や、寫眞にてのみ見る泰西の景色其まゝに、後には大陸的の地勢限りなくつゞきて廣く悠然たる樣、内地の箱庭的なる處にのみ住みなれたる人々には夢にも思ひ浮ばぬ眺にて候、御存じの如く新市街は露人のみの市にせんとて建て初められたるものにて候へばいと壯大なる建物のみにて今は此處に都督府あり、民政廳あり、之れに屬する官吏共皆其立派なる家に住みて何不自由も無けれど商人の家には不向なるを以て此處に商賣を營むもの少なく便利の點はとても舊市街に及び申さず。

哀れなるは今も猶殘れる半製の寺院にて、市街中最見はらしよき丘に驚くばかり廣く、丸く疊み上げたる礎のみとりくづしもせず其まゝに殘りあり、一段高き處とていづれよりも丸見えにて敵國が不甲斐なき最後見よと云はぬばかりなるも一ッの話の種子と相成り候礎のみにてもあれ程に候へば彼の上に黃金まばゆき聖堂の幾棟立ち上りたる曉には如何に此土地に異彩をはなつべきかと想像致され候。

此灣内は冬に至れば外海に居候鰡悉く入り來り候由にて、時々此處に魚漁會催され候が多き時には一網に四千餘尾もかゝり候由此が又一ッの見物となり居候其翌日は例の市場に持ち出されて何れの店も鰡を以て充され候。

△老鐵山の殘雪

老鐵山とは旅順附近にて最も險しく、高き山なれば却々纖弱き女性の身には登らるべくも有らず候へども折角此處迄來り候ものがと例の負惜み根性を起して終に其志を遂げ申候。

市街より望み見れば夏は紫に、冬は絶えず雪を頂ける樣他の山と異なるを見ても、如何に他にぬきんでゝ高きかを思はしめ候がさて麓に來て見れば今更に見上る峰の遙けくして、而も今にも頭上に落ち來らんばかり眞直なるに驚かれ申候。

麓に木造の小さき番小屋あり、此處には砲兵隊より一週間交代にて此山を守る兵士四五人居り申候、一週間分の兵糧をもらひて此山を朝夕二回づゝ見廻るものなりとか、つとめとは云へ人里はなれし番小屋に何の樂しみもなく斯る險しき山坂を登り、下りして暮す人人のいとも氣の毒に感じ申候、私のまゐり候は丁度日曜日にて他に兵士四五人見物にまゐり此處にて午飯をとゝのへんと致居り候を側に何心なく見てあれば其内の一人一塊の牛肉を持ち來り候も此家には一挺の庖刀も無きにやナイフは無きか、ナイフは無きかと私共に迄尋ね候へどもあひにくに持ち合せもなくて當惑せる内に他の一人もどかしくや思ひけむ、矢庭に腰なる軍刀引ぬきて、ぶきような手つきにて終に引切り申候、側に眺め居たる私共顏見合せて流石は異國を守る強兵よと其無邪氣なるに思はず打ほゝ笑まれ申候。

遙に空高く大きなる鳥の群をなして啼き渡るを見何鳥なるかと尋ね候處、夫れは鍋鶴のよし、歌や、詩に又は繪畫にこそ鶴と云ふものゝ多く群れ居ると見聞き致候事は有れど斯く眼のあたり見るは初めてにていといと珍らしく覺え申候、此あたりは大きなる木とては無けれども草むらに鶉、ひばりの類多く又いづれを見ても岩角に鷹の二三羽とまり居らざる時は無かりし程なりしも此頃は銃獵の盛なる爲今は其影をすら止めずなり候とか。

いよ／＼山路にさしかゝれば思ひしよりは更に險しくする／＼と辷りて足ごたへも出來ぬ樣の處のみにてさらでも遲き女の足の息せきあへず、あへぎ／＼僅の

處に一時間たらずもかゝりて漸く頂きに達し申候、露兵の造りたるものにや候はん所々に梯子の如きもの之れあり候へども其他は道らしき處もなく、袷の衣しばる計りに汗出で申候。

さて頂きに上り候へば流石は高き山とて氷の如き風に今迄の暑さも何處へやら唇の色さへ怪しう變りて、皆がたく〳〵と震へ出し候、見渡せば、眼下に黄海の波砕け遙にチーフーの陸模糊の間に見え、後を向けば音に名高き彌靈山高地も、新市街も、舊市街も遙に一眼に見下され候、斯る高山に重き大



砲を如何にして引上げて据え付けしかは誠に不思議なる事にて人々の話によれば、嘗つて日露戰爭の折我日進、春日の二艦が此山に大砲なきを奇貨として近く進み寄り新市街に向つて盛に間接射擊を試みて多くの家屋を破壊致候爲露人は其苦痛に堪えずして此處に急造の砲臺を設けて我艦を老鐵山沖に近付かざらしめんとし事を秘密にして支那の人夫をさへ用ゐず自國の兵士のみにて此工事をなしたるなりとか、何にしても險しき坂に道も付けずして無理やりに引き上げた

る事なれば兵士の多く此處に損はれたりとぞ、而も斯く苦辛慘憺して僅に築き上げたるは宜しけれども高山の事とて霧深くかゝりて我艦の近付くも充分に之れを認むる事を得ず、効力は至つて薄きものなりし由誠に笑止の事にて御座候。

白銀山、黄金山、老鐵山と海岸にならびて嘗ては我に刄を向けたるもの、今は猶小さけれども松の梢に宿る月もまどかに、田鶴さへ啼き渡るとは實に目出度き御代の御惠みとや申候べき。

△水營の朝霧

水師營は旅順を去る二里程の北にあたれる一の村落に御座候、此處は新市街などゝは全く反對にて支那家屋のみ、遠くより望めば只白壁のみ幾重にも山の麓に重なりて又一種趣深く朝霧の間見え隱るゝ處斷りたる眺に御座候。

三十七八年の役我軍は此村の周圍より旅順に迫りて盛に砲火をあびせかけ候程に壁壞れ、窓破れて滿足なる家とては一ッも無かりしが今日にては全く舊に復し候此處に彼の兩軍の將が會見したる家屋御座候、主人は皆逃げ去り家屋は荒れに荒れていとも不潔なる小屋なりしが會見の前にあたり我兵士をして急に掃除をなさしめ煙に煤けたる周圍の壁に紙もて張り急造の机の上に毛布をかけて、此處に彼有名なる開城談判は開かれしなりと、今も其家屋は殘りて此處に杖を引く旅客に當時の有樣語り顏に御座候。

△白銀の秋月

石山寺の秋の月に比べては餘りにも武骨なる、餘りにもの凄き景色にて候よ、優しき雁のなき聲に引代へて之れは又恐ろしき狼の夜な〳〵人里近き處迄きて遠吼しては人の膽を寒からしむるとかや。

つわものゝ靈迷ふらしものすごき
　　白銀山のこがらしのおと

おもはずも野分の夕、口ずさみし程に候へば秋の眺めも只もの凄くて觀月のすゞろあるきは夢にも出來申さず、此あたり嘗ては血を以て洗はれしかと思へばあはれに咲く秋の千草も人の恨みの宿るかと風流なる心も

失せて、古戰場の秋の月は只淋しくすごきものにて御座候、露人の置土產に植のこしたる松柏の類年を追ふて成長致候へども之れとても猶林と名付くる程にもならず例の赤はげの處露出してまづはげ山と申すべきか麓にも人家至つて少なく昔のまゝのさびしさにて御座候。

△模珠礁の遠帆

白銀山の西に老律嘴と云ふ處あり高く海につき出でゝ其上に砲臺あり、此あたりの海は遠淺にて大小の岩幾何となく波間に散在し岩かげにチーフーより來る舟いつも碇泊致居候、風のなぎたる日には漁船白帆を上げておちおちに浮べる樣一寸內地に歸りたる心地致し候之れ等の船も春のくれより、秋の半頃迄にて冬は漁も殆ど御座なくて大かたは鯛つり船に御座候去る三十八年の頃とか、旅順が開城せられて多くの人々一時に入り込み來りし折利にさとき奸商共何時の間にか淫賣婦を船に乘せて此浦に來たり、ひそかに客



を引き入れて意外の利をしぼりとり候とかや、斯る魔性のものと知るや、知らずや久しく女性に渇したる壯年の男子共は爭ひて此濱にあつまり船を呼ぶ聲あさましくも夜な夜な聞え候とか、斯る事を書きては折角趣味深き景色もおしまひに御座候へども今は去るいまはしきものもなく、清淨なる水と、岩と、其間に白帆のかげ二つ三つさてこそ八景の内に入れられたるものと覺え候。

△龍河の煙雨

今でこそ水源地と云へば知らぬ人もなく不思議とも思ひ申さず候へども之れはもと露人が此あたりを經營したる折に發見せられ候ものゝよし、上から見ては少しも知れ申さず候へども多くの山と山との谷間に流れ集まりたる水を一所に寄せて地下に水道を掘りたるものに御座候、我第三軍が此邊を攻擊したる時如何にもして城内の水道を斷たんと苦心致し候へども此工事は極く秘密に經營せられたるものにて支那の人夫もわざわざチーフーより呼び寄せて使ひ其落成と共に亦悉くチーフーに追ひ歸したれば誰とて其場所を知るものなく此處か、彼處かとさがし居り候内幸にも我軍の間諜として使ひ居たる支那人がもと此工事にあづかれる事を聞き出し之れの案内によりて所々掘り試みたる結果漸くにして本流をさがし出し目的を達し候よし。

此本流は地下に立派なる石を以て築き上げたるものにして如何なる暑さの時も水常に絕ゆる事なく實に旅順市の人々の命に御座候、此水の一部が龍河となりて灣內に注ぎ申候、河巾は可成に廣く御座候へども水は大方水道の方に取られ候まゝ此處は常に水かれがちに御座候、白玉山よりは西にあたりてすぐ眼下に見下るれ春雨のおぼろに水の面かすむる頃は定めしよき景色ならんと想像致候。

△虎島の晴嵐

老虎尾半島一帶を略して斯くは申候ひけむ。流石に近く水を以て圍まれたればにや松柏の類ものび〳〵と他よりは茂りたる、夏は又なき眺に御座候、されど戰の跡の事とて露國が自ら沈めたる船や、沈められ

たる船の引揚げて支那苦力のがや〳〵とさわげるあり磯には引揚げられたる鐵の赤く錆びたる棒や、大きなる板の無數が横はりて釘を拔く音、まがりたるをなほす音などかん〳〵と聞えて半島の先きの方は趣も何も御座なく候へども灣に沿ふて磯傳ひに奥に行き候へば支那家屋の彼方、此方に立てるのみにて野ばなしになせる驢馬の悠々たる啼聲と共にのそり〳〵と草を食みつゝ歩める支那人の子供の赤き股引穿たる五つ六つのが私共の通るを珍らしげに眺めつゝ、あはてゝ小屋の内に走り入るなど鄙びたる中にも悠長なる所見えて床しく候人家の附近には少しづゝ畑なども有りて多くは高粱を作りあり候、高粱は此邊の人の常食にて風なき折には家の外に直徑五尺もありと覺しき丸き石臼を驢馬にまわさして高粱を粉に挽き居候、驢馬は眼かくしをさせられて終日臼の周圍をまはり時々人が行きて出來たる粉を取り新しきものを入るゝのみにて宛も機械の如くにぐる〳〵と運轉致居候、誠に重寶なる動物に御座候、此邊は谷川も處々にあり、松柏の外に柳、栗などの雜木もありて、入江隔てたる新市街より見れば實に心地よく御座候。

八景の講釋は右にて終り申候而も下手の長談議の常とて猶書き度事は山々御座候へども此あたりは一般に要塞地帶とかにて他聞を憚り候節も多く御座候よしなれば遺憾ながらもたりぬ處をこらへて之れにて筆とめ申候草々。



よそゆきの顔拜見記

夢人



よそゆきの顔とは何ぞや。曰く。と、ちよつと、註を入れます。總て男女を問はず、天の成せる顔面造作に對し、猥りに干渉を入れることで、換言すれば、實用上毫も差支へなきも、審美上除り、ありがたからずと感じ。配置よろしからざる眼鼻口を、適意に延ばしたり、縮めたりするのです。但し其の結果の効力は知らず。そこで、如何なる人、如何なる場合、如何なる場所で、發表されるかと云ふに、少、青、壯、老の中、青くさいと云ふ、臭味のある人間同士が相對し、一種不可思議な、エレキが發生する場合で、最も電車中に見聞すること多し、と結論することが出來ます。……なんでもちやかましく、まくし立てたが、書いてる自身、ウンザリして終つた位ですから、御覧下さる方はまして、と御察し申上げて、すぐ「よそゆきの顔拜見記」にうつる。

まづ土橋の停留所へ來た。電車が來る、乘る、出る私は早速きよろ〳〵と、兩側を眺めたが、今丁度七時十分前。五錢が九錢に變る、瀨戸際であるから、車掌臺までぎつしり。うらなり瓢簞のやうに、氣のぬけた顔が、いくつも、力皮のわきにぶらさがつて居る。品類をして見ると、小使にあらず、との御斷りして、削り殘した御髯の腰辨閣下三分に、ベランメー兄さんが四分、殘りは學校といふ所へ時間をつぶしに行く方方。さて、私の一番槍に懸つたのは、さし古した溢蛇の目に似た色の御袴で、ヘゲ猫のやうな御顔の女學生さん、おつう下眼使ひの口そぼめと來て、御當人が大よそゆきだけで、一しほのみものである。

私はふと妙なことを考へ初めた。即ち、よそゆき面

哲學。隨分妙な哲學ですが、これは星菫哲學、ニキビ哲學から分派したもので、御自分樣が先づ御自分に惚れると云ふ事から起つたものと、解釋をいたします。その形式に色々ある。シエチーとかビユーとかの贊辭(?)に味を占めたり。又一つ乃公……オツト孃樣なれば自らといふ所……の權式のほどを見てくれとばかりに、今朝丼へ首を突込み、煮豆を掻込んだ、御口のはたを、するりと



拭ひ、御門を出ると忽ちよそゆきの御顏になりすまされる方もあれば、さうでなくて、對象に出會ふと忽ち御骨相ピンとなる御連中も少くない。で前者は孃樣方に、後者は殿方に多く、一つは故意で一つは出來心である。さて、其のよそゆき最中の當事者の御胸に入つて見ると、頗る珍妙で、御兩人とも原則通り、御自分樣で御自分へ參つて居るのであるから、よそゆきになるのは朝飯前。偶然にでも視線が會へば、忽ち、奴、

乃公に來て居るな、と大得意で口のまはりの筋肉を延ばし、出齒を大急ぎで包み、愈々そりかへり、內々英語の雜誌を忘れて來たのを悔む。孃樣の方も勿論、先が愈々つゝばるにつけ、かうと知つたら、前髪の割れ目へ、緋ばりでも挿して來たものを、と大分神經過敏になつて來る。とにかく可憐さうにうつむく。御當人汚れ色の下襦袢が坊主襟の下から首を出してるとは神ならぬ身の、露知り給はず。……オヤいやに氣障なことをいつて終つた。……、なにしろ、うつむく。と指の付根に殘つた御白粉が眼につく。これは失敗つた、とそつと包の下に手を入れる。なんて却々の御心勞であるが。また、一方にかゝるが故に、英語の下讀みよりは、御化粧や、よそゆきの顏が必要な所以である、と斷定する。……とさ私は考へた。

更にまた考へる、誰でもが若い間に、恐らくは、このよそゆき面哲學の、系統內を通つてこぬものは蓋し稀であらう。ちつとにせよ、そつとにせよ、かく申す私も若い頃、一度や二度、よそゆきの顏をしたことがあると、白狀します。然し、大氣取りの最中、机の下に食べ殘した御薩を思ひ出したり、きのふ數學で先生に叱られたことなんか眼の前に、浮んで來たりなんかすると、折角のよそゆきも破れて終ふ。其の上「何故」と考へ初めてつくづく當事者がいやになり、第三者に轉籍した。

これまた「何故」、と考へた以上恐らくは有頂天のよそゆき顏をつゝけては居られまいとはいふものゝ、電車の中、巾着切の居らぬ日はあるが、よそゆきの御顏を拜見せぬ日はなし、といへる位であるから、私等のやうな、淺學者流のはかり知られぬ、高尙なる趣味があるのかも知れぬ。否、かも知れぬなんて、失禮な詞でした。あるのだと考へますから、もう、幼稚な想像はやめて、第三者の義務を果すため、よそゆきの御顏を、わきから拜見いたさうと、氣がついた時、もう遲かつた。車はだらだら下り、本村町を過ぎて、次は市ケ谷、市ケ谷は私の下る所だから、殘念ながら腰掛を立つ、猶は未練で兩側を見ると隅の窓際、サンダラボ

ツチに蝸牛の晝寝したやうな御髮の孃樣、御鼻の隅、眉毛の根元、御白粉がよりあいをつけて居る御顔を、まつすぐにして居られる。御對象はと見る間に、チンと留る。「御早く御下り下さい。」なんて頂戴するのは、あんまりよい圖でなし、と其の儘下りた。電車はシユーッと行つて終ふ。さて、これで、「よそゆきの顔拝見記」、は大尾なのです。

　これで御終いとは、なあんだ、と御思し召す方もあるでしようが、書いてる當人は猶はさら。筆をもつたまゝ、氣のぬけたビーヤのやうな顔をして、なあんだといふたばかり。けれど、どうも仕方がありませんから、先づ、これで終り。



雲の峯

朝川しづ子

◎鹽原の塲

鹽原の奥、新湯の溫泉たゞひとつの外湯に、貉の湯といふのがございます。

案内されて、みると隨分お粗末な浴塲で、浴槽は中央から二つに男と女を劃り、奥は大きく刳れた巖が、まるで窟のやうに、おのづと屋根を形造つて居て、其また周りの板圍ひには樂書が、隙間も無くまア澤山な!

乳白色の微溫い、その硫黄泉に獨り淋しく浸つて居ました姿は、振り仰いで、それ等の落書の中から、一の無名の風來山人を發見しました。

戀しくば尋ね來て見ろ下野の
　あら湯のおくの貉浴塲

なかしさにほゝえまれて、漸次に見もてゆく中、フト左の沈痛な數行の文字をみいだして、思はずつよく胸を撲たれました。

世の中に學問はげんだ人よりも
　なんにも知らない苦勞した人

書はきはめて拙く、金釘流とやら申さるゝもの、そして確かに女性の筆のあと。

ある歲、信州更科在の八幡といふ所を過ぎし時、古風な宿屋の懸行燈に、金客爲來としるしたのを見て、世の中は、金辛爲苦ならむと、そゞろ微笑まれしが。

◎雷霆の瀑

底は綠玉の大塊を疊むで、ざつと三間四方、臥た牛や背延びをした巨象に似た巖むらが、そツちこツちに轉び立ち、踞つて、雪山崩れ、花團頽れ、溪風ゆらめくごとに樹影參差。水は絶えず靜かに落込み、また斷えず徑かに流れ去る。しかはあれど、周圍の巖むら、みだりに其奔逸を肯んぜざるさま、ながく天の眞名井の水をこゝにゆたかに湛えて、下界に流し去るを惜めるがごと。

玲瓏洞徹、一面の明鏡とたとふるも古けれど、雲も映り、山花も映り、老樹の幹も畫かれ、溪谷の天を翅る飛鳥の影も印しづけらる。

彳むまゝに見るまゝに、流動とゞまらぬ水の表面の染いひつくし難し、深き吐息のみ口に漏らされて。

ところは鹽原塩股川の奥、雷霆てふ恐ろしき名を持てる瀑の、第二の潭。

◎名なし瀧

あしもとには伊豆の戸田、放れて三保の松原、清見潟をわたる初秋の風清く。興津あたりの白堊ちら／＼と、駿州の山、遠州の山、一重々々に、遠く、淡く。

背後には達磨山の最高峯。

修善寺峠を逃れて、思はずこの山の唯有る一峯の背をよぢし妾、榛荻といへる茨の鋭い刺に、袴の裾は裂かれ袂は奪られて、暫し當惑の折から、この大きな灣駿河の眺望に耽る。

フト幽かな風の音に目覺めて、振顧へると、鋭尖な達摩の高峯の中腹から、山の襞に添つて、簇々と繁茂して垂直に下る一つの澤林があつて、常磐樹を交ぜた可憐らしい紅楓、目もあやなる眺めのあひだ、一瀑幽に懸るを發見した。

葉がくれに、だん／＼に、白く、ほそく、無聲に懸かる瀧の高尚さ、かへつて雷霆の響きをおこすものにまさる。妾はこれを「峯の瀧」と呼びたく思ひました。この地に弘法大師のあと留め給ひしことなど想起して、拙なければ、

峯にあるを示現の瀧と申しけり

辛く樵路をみいでゝ、炭焼く夫婦に逢ひ、戸田の澤の方へ下る。大師が草庵ひき結びしあとゝいふ、弘法平のかみの深溪にまた一瀑、俯瞰すと、たけ三丈、巾三尺ほどの格好のいゝ優しい瀧。これは「麓の瀧」と呼ばれたくまた拙なけれど、

麓なるを女人の瀧と註さまく

◎峠の灯

蝶鳥の姿あわたゞしい暮春、花に遅れて、初瀬から山越しに。多武の峯へ多武の峯から吉野へ越えた。

途中リウサイといふ所で、かたばかりの晝餐をしたゝめ、薄紫の霞に沈むで折りかさなつて吉野郡の連山、飽かず見渡されたのでしたが。

たど／＼しい女の脚はかどらず、長い春の日もとつぷりと美くしく黄昏れて、石楠の花薄暗を染めぬくころ、目的の吉野へ着いて、最早名殘なく葉櫻に成つた下の千本から、越え來し方を振り返ると、艶な紺青の天を劃つて、暗く／＼横はる四方の山々、リウサイのあたりにちらりと涼しい灯が、宛然こゝろの暗を覗く魂のやうに。

◎沼の灯

赫とした夕陽に照り榮えて、斜めに蓆帆を上げた菱採り船が、さわ〳〵と晩風に打靡く背鹽の間に傾いて、總て一むら蓊欝と榛の木や、楊の生茂つた辨天島の蔭に消え去つた。

とみると、ざつと瓢形をした周圍三里の沼の彼方の丘に、眞夏の太陽は名殘なく沈むだので。

丘の麓から弓形に延びて水に沿つた村落の中は、もう夢みるごとき夕靄に包まれ、ちらり〳〵、涼しい灯の影が殖えて行く。と、程近い汀に白い浮藻の花を攪亂してはま〳〵と遠い渚を指して飛ぶのは、まぎれも無く小魚を漁る鶚であらう。

沼はもう一面に漣だつて、すゐ〳〵と吹く風の光りが仄かな暗のあひだに――此靜寂の全界を調へむために溶く顔料でもするかのごとく――劃いたやうに顯はれる。

同時にその微風に倶はれて、幽かに〳〵潤い水面を傳はつて來る微妙な響。おそらく、村の若い男などが吹き荒む横笛か何かであらう。その響きが、いかにも淋しさの底から搖れ出しも爲たかのやうに聽き澄まれる。

あゝ夏い晩だこと！

獨くつぶやいてフト氣が附けば、先刻菱採り船が傾いて驅つた邊りの背鹽の空には、點々數片の灯がともされて居ました。

星か！？

あらず、こゝなる菱沼の螢であつた。

◎磯づり

一家族うち連れて、葉山沖にならべる名島に釣る。瀬は一たいに灰色の波泡だち、淡翠の霧ちぎれ飛ぶ、皐月中、日毎の籠り居に飽いて、風雅かな機會を舟浮けて、島より島に、移り、とゞまり、親子放れ、姉妹袂をわかち、思ひ〳〵に好みの場所を占めて、はては妾も倶寬僧都！

ひとりイむで、岩礁のあひだに綸を垂れると、うち寄せる波は、瀧を成し、早瀬を成して、潮の滿干いちじるしく、紫、青、黃の海草ゆら〳〵と打靡いて、融ける水は、折ふし冷艷なる綠青色に榮えつ。銀の光り白く波を切つて上るベラ、躍つて空に輪を描くカサゴ、メレの類ひ、妾の小桶には須臾十數尾。

向ふの磯では麗らやんか河豚を釣つて大騷ぎをして居る、こッちの側面の小磯へ舟を寄せかけて、妾達のおつきあひをして居た漁師の倅の竿には、大きな章魚が懸つて、水上一尺ばかりで落ちる。愈々しまうに。

「畜生奴ッ―」聲が高かつたもんですから、皆さんが一齊に此方を顧みる。麗ちやんが袂を抱へて、轉げさうに成つて可笑しがる、――遠くの方からも笑ひ聲。

糠雨さらさら、陸岸一帶に微茫と煙さゆたかに、メオルを冠り、透明の潮をすかして默して佇めば、言はず語らず妙味その中に、

暫くして、ガツチヤツが一艘、二艘、鱸釣る舟も、また。

葉山の寺鐘波に響くころ、七本の竿、百二十尾あまりの鱚魚を數へ、離れ離れの家族はふたゝびもとの一つの舟に。

◎大東岬

砂山を越えて、半里、濡れた眞砂路を波と一緒に走つてまた半里。

九十九里一灣の風光を掻き抱いて、遠く銚子の岬に對ひ合ふ、こゝは大東岬。

ゆふぐれの色はまづ潮の色から初まつて、雲が染まり砂が染まり、弓形の山脈が染まり、その山脈に沿つた松林が染まつて、うら悲しい秋風は、松林のところどころに散らばる部落から、蓬々と夕餉のけぶりを漂はして居る。

帆をあげた釣舟や、鯛を滿載したあぐり船が見透かされる磯むらに、その磯むらの陸なる礒に、連つてみゆる梁杭―

あれは、おもに石首魚などを釣る所。

渦巻く波に揉まれて、松葉を植えならべたかと、遠見に細くゆる丸太の連亘――さても構造の簡短な。

暗ふかき夜、潮鳴つて海若狂ふとき、竿とれる手もわなゝき、あしぶみ覺束なく滑り落ちて、妻の名呼び、兒の名呼び、荒波に浚はれてゆく者もありと。

危さは生活の常なれど……。

◎黒生の宵

藍色したゝる天際漸く濃紫に、うへの一段は橙色、海はおひおひほの暗く成つて來た。六七羽の鷗が、どこともなく飛揚り、舞ひ下つて消え去つた後には、二三艘の漁船、僅に十艘ばかり増えた、と思ふと忽ち數十艘、數百艘となつて、點々たる眞帆片帆。

近いのは、今咲いたばかりの朝顏のやうに、明劃と白く、遠いのは、その花の萎るゝままに、淡々として沙煙りに籠められて。

しかし、いづれも鈍い船脚で、つぎつぎに並むださま

は、美くして、賑々して、いかにも幽艶な沈靜な景色。

かくて湊る漁船の川口指して朧ろげに霞むで行く頃は、あじか島あたりの磯屋から立騰る夕げふり、かすかに笠上の方へ靡いて、そこいらの松原は早くも月の世界に成りすまして居る。薄絹を漏れて來たやうな光線は到るところに漂渺して、そして、すべてのものを包み隱して仕舞ふ。

凪の海！　その面に皎々とした白銀を溶かすのは、波打際の亂礁へ來ると、フイに騷ぎ出す波がしらで、荒い〳〵銚子の海も、今宵ばかりは極めて穩當しく睡つて居る。否、沈みきつて居る。あゝ、こゝの間にも潮は油斷なく滿ちて來る。――妾は然う思つて、黑生の磯を辿つて居ましたの！

なが月中の秋のある宵。

眠られぬまゝ、窓と戸を押して枝折戸を拔け、斜めに松原を横斷り、波打際をあじか島へ。

體は微汗み、しつとりと濕つた寢卷の裾も、袂も、草原の露に濡れ、まるで潮からでも出た容子。

素足に冷かな眞砂を踏み、歩むとはなしに歩めば、また佇まれて何とはなしに海の面の眺めらるゝ。

その暗碧のうみの面は、一たいに濃い靄。



この漂渺模糊とした闇からは、折々高まる波濤のうれりが、颯と白銀の矢を射出す。

さうかとすれば、女夫が鼻の掻き消されて更に見えないのとは、反對に、遙かに突出た犬吠が岬の海上遠く、あまたゝび銀蛇の閃めくのは燈臺の所爲。

活々した鮮かな潮の香に息づいて、ふりさけみれば、天の河の邊りから落して來る爽涼の風、身にしみ〳〵と妾はぼんやりそこいらの景色の幽妙な、おほきやかな、沈むだ、艷なるものに見惚れて居ました。が、美加保丸の供養塔に眼を轉して、思はず寒く戰慄しました。

おなじ月の一日隔てし夜。



配合の美

村さめ

ある時ふと釣合といふことに思ひ至りしが、それかそれと不思議に興湧きて、あの釣合此の釣合と考へ始むれば際限なく世にあらゆる者は皆釣合より成り、釣合で持つて居る樣である。釣合をはづれし者はいかに美しく共見る目醜く、釣合に叶ひし者は左までになき者もいかにも心地よく見ゆるが如し。

茅葺屋根の軒下に、白梅かほる村の家で、鷄が二三羽チヨコ〳〵と小走りに歩いて居ると傍には子守が無邪氣な顏して立つて居る。やがて其よごれた顏を天上へ向けてうたひ出す鄙唄の、ふしは閑雅に面白ろく、いはゆる一とつの野趣を作つていはんかたなき美しさにうつとりと立ちつくす目先きへ、何處より來にけむ綺羅盛粧したる廂髮の婦人が出た。

襟よりは金ぐさり重やかに垂れ、指には寶石幾個となく輝く、場合がゆるさば斯の如き美人の一笑は實に傾國千金ともて囃れて、錦も寶石も衆目を惹く價値はあらうが、惜しむべし今この靜かな村の風情、炊烟おもむろに棚引き渡りて左ながら神代の氣に觸れた樣な中に在つては其美却て子守に不及、及ばざるのみかこの調和を破て目障り甚しく、かほは夜叉の如く見え飾りは焰の如く見え折角の淨土に惡魔の降りしかと恨みなりき。

衣裝

若き人の老人を連れてそゞろ歩きするは他目美くしく見ゆるものなり、殊に學生などの祖母か母か霜いただける年寄をひきて靜かな路を親切にいたはり、指さしなどして景色ををしゆる有樣はいかにも溫情豐かに美しく知らぬ人ながら其學生の行儀、品性、學問の成

績など定めて有爲の人なるべくと推し量られて他人ながらも嬉しき心地す。若き男女の用もなげに胸張り出して笑談しつゝ傍若無人にねり歩るく見苦るしさとは、實に天地の差ありといふべし。

老人と共に歩く時衣裝の老人の方勝りたるは釣合よし。

夫妻共に歩るく時は衣服は同じ程度なるべし、妻の衣服良人に勝らば其良人は妻孝行に見ゆべく良人の服裝妻に勝らば其妻良人孝行に見ゆべく、併しこの孝行は親孝行の如く芳ばしき者ならず。



衣を改むれば心自ら爽快になりて、樣子氣高く見ゆ、人を訪ふ時に衣を換ふるも只飾りのみにはならず人に對する禮なるべければ行く先き〳〵の場合に依りて釣合を失はざる樣注意するは先方を敬ふ行儀なると同時にまた我が人格を保つ大切なるたしなみなり。

病の人、殊に重病の人を見舞ふ時に、厚々と紅粉を粧ひ目立つて派手なる衣裝を用ゐ髮つや〳〵と結ひ立てゝ時間、おくれて來る人ならば病む人の肉親の憂苦極まる者の眼よりは此の風情をいかに見るらむ、何となく眞心薄き樣思はれて興さむる心地はせずや。物に猥狽て、見苦しき振舞は素よりつゝしむべし、されど斯る場合は誠實と溫和

を専らとして愼重の態度を取るべき者なり。

花見などの折こそはけふぞ成る可く華麗なる衣服をまとひ、はなやかなる髪に結ひて念入りの化粧に晴れ晴れとして花かんざしにビラ／＼のつきたるなど前がみのあたりに見せ、満面笑みかたむけつゝ緋や紫の裾もホラ／＼走り廻れば其形ち活き／＼と春の天地によく映りて調子さながら美しければ傍の見る目も樂しくて共に浮き立つ心も湧き、春か霞か人か花か、釣合全くとゝのひて爰に始めて觀櫻といふ春の快樂の有樣を作る。

ひとゝせ夏の日鎌倉に遊びし時、八幡前より左りに折れて建長寺へとたどる途中、二三間離れて先きへ中年の僧一人、墨染の法衣に世を捨て、何のおもひもなささうに歩みゆく後ろ姿が此の强よい照る日の鎌倉道をおのづからなる照應を示してこのあたり精舎の靜けさも思ひやられ我心さへ全く鎌倉化したるおもひありき。

斯くて物の釣合の不思議に面白ろく、人をも身をも宇宙萬物をも美化して其間限りなき風趣をふくめば可成くはこれを調和をはかり、眼のつけ處を定めて人世一代、いかなる場合にも必ず伴ふべき形容の美しさをいつまでも不滅にあらはすべきものなり。

▲困難は一種の醱酵作用なり酢となるか酒となるかは其原料たる我々の品質如何によるなり。

▲友の悲みの聲に耳を傾くべし己の悲みを友に語りて煩はす勿れ。

▲婦人は其美徳を讚へらるゝよりも衣裝の好みを褒めらるゝこと多し。

▲婦人は二種の模範たらざるべからず一は人の妻となるべき娘の爲に一はその子の嫁の爲めに。

▲男子が一婦人に會し從順、謹愼、謙遜、勤儉、智能の化身にして眞に理想の妻なりと思ひし時は既に踵を轉じて去りつゝあり。

▲己が子の泣聲は音樂の如く他人の子の泣聲は耳を劈く噪音と聞ゆるは大抵の婦人の常なり是人生の祕密なり。

▲教育は婦人の胃腑に停滯せり男子は浩澣なる百科全書を恐れざるに女子は單純なる一事を學ぶにさへ疲る。

▲婦人は吳服店に行きて始めて意志の弱く誘惑に打勝ち難きを悟るべし。

▲謙遜の人は共に住むによけれども何事をも爲す能はず人は能ふと信ずる事は何にても爲し得べし。



蝶に就ての種々の研究

鶴枝子

夏になると、種々様々な蟲が、出て來ますが、就中最も人に持囃さるゝのは、蝶類でせう。蝶は、翅が廣くて、美しい上、常に花間に飛び廻はり、其飛ぶ姿が如何にも活潑で、そうして雅でありますから、雅俗を問はず、皆之を愛賞してゐます。蝶類には、種類も少くないが、世間では、往々蛾類と蝶類とを混同して、共にテフ〳〵と呼んでるから、先づ其區別をする必要があります。

◎蝶と蛾の區別

蝶類とは、黄蝶、紛蝶、鳳蝶の如きもので、蛾類とは、蠶蛾、天蠶蛾、巴蛾、燈蛾、天　蛾の如きものである。そして此二種類は、容易に區別することが出來ます。第一蝶類の觸角は棍棒狀とて、糸の如き鬚の端が玉の樣に膨らんでる。蛾類の觸角は、羽狀か、或は絲狀である。蝶類の翅は、表面が美しくて、裏面が美しくなく、止まる時には、左右の翅を合はせ、直立させる。然るに蛾類の翅は、表面よりも、却つて裏面の方が、美しく、止つてる時は、左右の翅を屋根の如くに伏せて置く習慣である。それから蝶類は、晝間活潑に飛廻つてゝ夜になると、草木の葉などに休息してるが、蛾類は晝間潜んでゝ、夜になると、此所彼所と飛び廻はるのである。尚ほ詳しく言へば、蝶類の體は、細くて、一個づゝ卵を産むのに、蛾類の體は、太くて卵は、蠶蛾や天蠶蛾で見る如く、多くの卵を一ヶ所に産み付けます。

◎蝶の幼虫と蛹

蝶類は、完全變態とて、卵から孵えると、必ず幼蟲、蛹、成蟲と、三期の變態を經過するのである。幼蟲は

十六本の足を具へ、概ね草木の葉を餌とし、數回脫皮して成熟すると、蛹となり、往々粗末なる繭の内に居るのがある。一文字挵蝶の幼蟲は、稻の葉を卷て巣としてる、鳳蝶類の幼蟲は、綠色を呈して、葉の色に擬らし、之に觸れると、二本の赤き角を突出し、烈しき臭氣を放つ其蛹は繭を造ることなく、體の表面に突出物あり、草木の枝などに附着し、一本の絹糸で、體を支へて居るが、其姿態が番町皿屋敷のお菊に似てるといふので、俗に縊蟲と呼んでゐる。



◎蝶の觸角と口

蝶の觸角は、棍棒狀で、靜止してる時は、左右の觸角をそろへて、前の方へ向けてゐる。此觸角には、無數の小孔がある、これを感覺孔といひ、多くの神經が通じてゐて觸感を司るの外、物の香を嗅ぐ作用がある、つまり鼻も此觸角の上にあるわけです蝶類が樫や楢の汁液に集つてるのは、概ね觸角の上に

あるる嗅覺器の力によるのである。

蝶は、花の中の蜜汁や、樹幹から滴る汁液を吸ふてるので、口は、他の昆蟲と異り、上下兩唇は勿論、大顎は退縮してしまつた。其代り小顎は、頗る延長して、管の狀となり、餌を取らぬ時は、いつもゼンマイの如くに卷いてゐる。

◎蝶の翅

蝶類の翅には、一面に細かな鱗が密生し、其鱗の色が、光線の具合で、綠色に見えたり、黃色に見えたり、紫色に見えたりするので、同じ一匹の蝶でも、光線の方面によつて色々に變化するのがある。そうして此鱗は、粉の如きもので、頗る剝がれ易い、手の指などで握むと、直き剝れてしまふ。蝶類の身にとつては、甚だ困るだらうと思はれるが、これは却つて蝶の爲めに利益になることである。何故なれば、若し他の動物に捕えられたとき、或は黐などの粘液が着したときなどは、粉の如き鱗を捨てゝ、體だけ脫出することが出來る。恰度石龍子が尾を切り、蟹が螯を落して逃げるのと同じ理屈である。

◎蝶の食物

蝶類は專ら植物の甘き液汁を吸つて、生活してるけれども、幼蟲時代にありては、槪ね草木の葉を餌として居る、そうしてそれ〳〵好む所の植物がある或は蔬菜の葉を食ひ木の葉を食ひ其他稻の葉を食ひ、柳の葉を食ふのがある。

◎蝶と植物

蝶類の幼蟲は、殆んど草木の葉を食害してるので、いづれも害蟲であつて、常に農業家を困らせて居るけれども成蟲となつて、翩々と花間に舞ひ戲るゝに至れば、蜜汁を吸ふと同時に、花粉の媒介を爲すにより、今度は害蟲でなくて、益蟲となるのである。蝶類の生命は、實に花の中にあるといふべく、此世界に若し花といふものなかつたならば、恐らくは今日の如き蝶類

を見ること出來ないであらう。けれども花は、蝶類がなくとも、絶滅するやうな憂ひはない、何んとなれば花を尋ねるものは、蝶類の外、數多の蜂類が居るからである。

◎蝶の種類

日本は、蝶の種類に富んでる國といはれてゐる、數年前の研究によると、日本内地産の蝶は、略ぼ百六十種であつたが、これに臺灣産や北海道産を加へると、實に二百種以上には達してゐる。そうして通例これを八種類に分類してある。

(一)鳳蝶類　此類に屬する蝶は、概ね大きくて、普通なるは、鳳蝶、黄鳳蝶、黒鳳蝶、麝香鳳蝶などである。麝香鳳蝶は雄の翅は黒色で、雌の翅は灰色である。此蝶は、佳い香氣を發するといふので麝香鳳蝶と名けられたのである。

青筋鳳蝶は、活潑であるから、容易に捕えられないカラスバアゲハは、翅が黒いけれども、美しい青緑色があるから、黒鳳蝶と直き區別がつく。ミカドテフは青筋鳳蝶に似たる蝶で、日本にては、最も珍らしき蝶である。日光白蝶は、他の鳳蝶類より小さくて、翅は半透明である。

(二)粉蝶類　此類に屬する蝶は、いづれも中大な形で、白蝶、黄蝶など普通である。

(三)蛇目蝶類　翅に蛇目の如き紋あり、そうして、日蔭を好むから、俗にヒカゲテフと呼び、餘り美しいものはない。

(四)蛺蝶類　此類に屬する蝶は、やゝ大くて、美しいのがある。孔雀蝶、小紫蝶、大紫蝶、一文字蝶、三線蝶、木葉蝶など此種類である。就中小紫蝶の雄は、翅の色が茶褐色であるのに、光線の來る方向により、紫色を呈し、甚だ美しい。木葉蝶は、日本内地には産しないが、琉球諸島には居る。此蝶の翅は、表面は美しいが、裏面は木の葉に似てるので、樹の枝に止まると容易に見出すことが出來ない、故に動物學上保護色や擬態の適例として有名である。

(五)阿檀蝶類　此類に屬するものは、概ね大くて、主に熱帶地方に產し。我邦に產するものは、僅か四種しかない。

(六)天狗蝶類　此類に屬する蝶は、口の部分が突出して、恰も天狗の鼻の樣であるから名けられ。日本には、僅かに一種しかない。

(七)小灰蝶類　此類に屬するものは、皆小形である。

(八)挵蝶類　皆小形で、終日花から花へと、せゝり廻つて居る。

◎蝶の保護色

蝶類の幼蟲は、大概棲むところの草木の色に似てるから、容易に見分けがつかない。殊に鳳蝶の幼蟲は、初めのうちは恰るで、鳥の糞の如き、狀態であるから蟲類と思ふものがない。それから成蟲にも保護色のあるものが多い。菜の花の間に居る黃蝶は、菜の花と同じく黃色で、大根の花を尋ぬる白蝶は、同じく白色であるから、ちよつと見分けがつかない。ヒカゲテフの如きは、枯葉の如き色をなし。木葉蝶は、たゞに翅色のみならず、其形狀までが、木の葉の形に似、併かも葉脉に似たる線まであるので、一たん止まられたら最後、容易に見出すことが出來ない。一たい蝶類は、靜止する時は、左右の翅を合せて、直立させ、裏面の燻んだ方を見せる故、他の動物の目に入り難いのである。

蝶類には、雌と雄とでは、大に翅色の異つてるのがある。そうして鳥類と同じく、雄の翅色が、雌の翅色よりも美しい、けれども體は雌の方が大きい、これは卵を產むからである。

◎蝶の群集

日本では餘り聞かない事であるが、外國には往々群集することがある。嘗て或る所に無數の蝶が群集して汽車の線路を覆ふた、すると汽車は、一向頓着なく、非常の勢を以て猛進したが、餘り多くの蝶類を摺り潰ぶしたので、其液汁の爲めに脫線したといふ話がある近くは佛蘭西の西海岸に近き海上に、一種の白蝶が雲

の如くに群集して、時ならぬ雪を降らせたといふことである。

◎蝶の價

世界中最も珍らしい蝶は、瓜哇島に產する紫蝶で、一匹の價は、實に二千圓にも當るといふ。日本產で最も珍重されるのは、鳳蝶類の一種、ミカドテフで、一匹の價、三圓もするさうであるが、之を捕えたものは、未だ幾人もない。次ぎに木葉蝶、瓜紅蝶などが各一圓である、日本で最も大きい蝶が八十錢。大紫蝶が二十五錢、孔雀蝶が十二錢、小紫蝶が八錢で、其他は、大抵二三錢から五六錢で、これは標本店の定價である。



◎蝶と迷信

支那の古書には蝶は、樹の葉の化したものであるといひ、或は菜の花の化したものといひ、或は百合の花の化したものといひ。恰も螢が、腐つた草から變化したものであると同じ樣な考へを持つてゐたのである。

鳳蝶の幼蟲が成熟すると、草木の莖や垣根などに攀

ち登り、靜止して蛹に變化するものであるが、身を支へんが爲め、一本の絹糸を出して、胴をくゝつて置くところが、其形狀が、彼の番町皿屋敷のお菊が、繩でくゝられてる姿に似てるので、俗に縊女と呼び、お菊の亡魂であるかの如くに思つてるものがあつた。

昔佐國といふ者があつて、非常に花を愛し、六十餘年も觀賞してゐたが、尙ほ飽くことを知らず、とう〳〵命數盡きたので、花に名殘りを惜むといふ詩を作つて死んでしまつた。然るに、或夜友人へ、死んでから蝶となつて、毎日花を尋ねてると、夢知らせをした。そこで其子が之を聞き、毎朝花に蜜汁を灌ぎかけて、蝶に吸はせて居つたといふ話がある。

これ等のことは、いづれも科學思想の乏しい時代のこと、今日では說明するまでもなく、讀者は旣に迷信に過ぎんことを了解するであらう。

◎蝶と文學

蝶の異名には、呼花翁、米花叟、粉叟、傳粉郞、春駁、香甁、飛錢、玉腰奴などの稱あり、これ等の意義は略ぼ其文字によつて解される。其中飛錢とは、唐の穆宗の時、夜々數萬の蝶が宮中の花に飛んで來るので不思議に思ひ、捕えて見たら、豈圖らん、金庫中の錢が、飛び出たのであつたといふ傳說から、名けられたのである。

蝶の出るのは、主に夏期であるが、往々春早く發生するものがある。特にヒオドシチフの如きは、蝶になつたまゝ、寒冷なる冬を凌ぎ越すものである。故に蝶とても梅花を訪ふことがないとも限らない。夫木集に

たづね來るはかなき羽にも匂ふらん　家隆卿
軒端の梅の花の初蝶

蝶類の舞ひ戲るゝ姿は、雅人等には餘程樂しいものと見えます。

面白や花にむつるゝから蝶の　源仲正
なれはや我も思ふあたりに

とこなつのあたりは風ものどかにて　寂蓮法師
散かふものは蝶のいろ〳〵

我やどの春の花園みるたびに　後京極攝政
とびかふ蝶の人なれにけり

秋になると氣候の冷かなるに隨ひ、蝶類の氣力も衰えて、見るからに哀れな感じがする。

はかなくもまねぐ尾花に戯れて
　くれゆく秋を知らぬ蝶かな　源仲正

秋の野となりゆく庭にとぶ蝶も
　ねをこそたてね物や悲しき　家隆卿

菊かれて飛びかふ蝶のみえぬかな
　さきちる花や命なりけん　定家卿

蝶舞ふや千尋の海を渡りへて　葛三

蝶の羽に浪ふりたゝけ二見潟　樗良

志賀浦や蝶に別れて蝶にあふ　壺山

おもしろの岩間くゞりて蝶一ツ　石毛

杉の香に高飛したる胡蝶かな　其翼

山遠し蝶にはじめてあふ處　太笻

吹浦にたのむ草あり秋の蝶　宇考

松による心はないか秋の蝶　素月尼

秋の蝶たゝんだ夜具にとまりけり　魚文





洋服の保存法

東京勸業協會染色部主任　倉辻要藏

何品によらず取扱の上手下手によつて、品物の保が異ふものですが取分け洋服などの毛織物は取扱が第一です、若し日常手入もせずに放抛かしておいては、どんな上等品でも新調して間もなく斑點が出來たり黴びたり、蠹蟲がついたりして折角の地質を損じ晴衣を臺無しにして了ふ事があります、ですからその取扱法の一通りは心得て置かねばなりませぬそれには着用の都度ドライクリーニング(乾燥洗濯)をするに限るのですが、此器械は洋服屋以外普通の家庭では一寸行はれ難い事ですから、先づブラシをかける事が專一です洋服は着放しといふ事が一番よろしくないのです。

▲ブラシの掛け方

西洋人は、毎朝衣服にブラシをかけなければ外出せぬといふ程ですから、至つて清潔ですが、日本人はまだそこまで行屆きませぬ、終日塵埃の中を歩いて來て碌に拂ひもせずに折釘なぞへ掛けておいて、翌朝又それを被て出かけるといふ風ですから、偶に刷毛をあてて見ると塵埃が黄色くなつて落ちます、それを關はずに置きますと今度は地質の中へ埃が深く密着いて容易に取れませぬ、殊にそうなつたものを其儘簞笥の中へ仕舞込んでは塵埃の中の有機物は忽ち腐敗して黴菌となり、遂には衣服の色が變つたり、斑點が出たり、蟲蝨がついたりします、のみならず往々その爲に病毒を感染すやうな事がありますから、設令埃が眼に見えないまでも、一度着た服は必ずブラシをかけることに定めた方が宜しいです、尤も之は怠り勝になるものですから、毎朝靴を磨く時にきつと洋服にもブラシを當てる習慣をつければよろしいです。で表面の光澤のある羅紗地には成るべく毛の軟いブラシを用ひ、メルトンのやうな品なら硬い毛の刷毛で摩り、セル地なら草箒のやうな物で輕く叩いてもよろしい、又縫目の所は餘計に塵埃が溜るものですから、格別叮寧に刷毛をかけなくてはなりません。

▲襟垢を去る法

洋服の襟はカラーがつきますから和服ほど垢は附かないやうなものゝ、それで一番汚れ易い所は襟の折目で、他の部分に較べて幾分其處が變色して居ますのは、既に穢れた證據ですから餘り目立たぬ中に掃除しなくてはなりませぬ、一番良いのはベトリユームヘンジンと云ふ藥液を用ゐるのですが、若し手に入りませんでしたら揮發油でもよろしい、それを齒磨揚子に含ませて垢のついた所に塗つけ、後二三回摩擦て、それから輕く指先で摘んで揉みますと、汚垢の中に含まれた脂肪分は揮發油の爲めに分解し、其他の埃は悉く粉狀になつて綺麗に除れます。

それから前にも述べましたが、毛織類は別して黴菌や蠹の害を受け易いものですから、洋服は必ず他の衣服と容器を別にして蔵つて置かねばなりません。さう

しないと他の絹物などに汚點や蝨がついて、意外の害を招く事があります、そしてフロックコートや燕尾服の見返しの絹の所へは、特に糊の無い紙をあて、麝香又は龍腦を入れて置く必要があります。

▲洋服専用の容物

次に洋服の容器ですが、どうも普通の箪笥や行李に藏つて置きましては、兎角皺が出來たり格好が崩れたりするのみならず空氣が通りません爲に黴菌の生ずる虞れがありますから、之は是非とも洋服専用の容器を備へたいものです、尤も箪笥屋に出來合の洋服箪笥はありますが、餘り感心した物ではございません、洋服を容れる器物は第一左の三點を備へて居らなくてなりません。

(一)皺を生せず格好の崩れざる様にする事。

(二)空隙を有して空氣の流通を良くする事。

(三)濕氣を受けざるやうに工風すること。

凡そ右の三件を主として作つたならば完全な物が出來るでせうが、一寸費用のかゝるものです、併し從來の箪笥や行李に納める場合には、決して幾枚も〱積重ねては可けません、殊にコートは一番上部において肩の形狀のくづれないやうに注意しなくてはなりませぬ。

▲入梅と土用干の注意

梅雨時には空氣が非常に濕つて居ますから何品によらず多少濕氣を受けぬ物はありませぬが、就中箪笥に納つた衣類などは最も其影響を受けるもので、汗や垢で汚れた部分に黴の生えるのは此時期ですから、入梅前には一度空氣の乾燥した日を擇んで日光に曝し、そして高價でもあるが、麝香か龍腦左もなくば蕃椒の粉末を少しづゝ紙に包んで、一つの抽斗に五六個づゝ入れて置くやうにせねばなりませぬ、それに衣服の蟲は印刷用のインキの臭ひを嫌ふものですから、容器の底に新聞紙を二三枚敷き、上にも一二枚被せておくと蝨の害を防ぐ幾分の助けとなります、それから梅雨時を過ぎて夏の土用に入りますと矢張り日本服と同樣に土用干をして充分乾燥せしめる必要があります、そして

日光に曝した後は半日ほど蔭干にして濕氣を除かねばなりませぬ、でないと筐中で蒸る虞れがありますから其邊の注意が大切です。

▲害蟲の驅除法

和服でも洋服でも總て害蟲の發た恐のある時は、速く點檢て撲滅を計るのは勿論ですが、一體この蟲は非常に感覺が鋭敏て光線を見ると直に姿を匿して、却々捕へ難いものですから、左の驅除法を施すのが必要です。

（一）蟲の發た衣服を密閉した筐の中に入れ、其中に硫化炭素若しくは殺菌の効力ある揮發性の藥品を瓶のまゝ栓を拔いて入れ置く事。併し取扱を丁寧にしなくてはなりません。

（二）油紙のやうな空氣の透らぬもので袋をこしらへ、それに蟲のついた衣服を納れ、口元から右の藥品を撒布し、袋口を括つて置けば蟲は忽ち蒸殺されて了ひます。

（三）衣服を日光に曝して乾燥かせた後簞笥に入れ其處へ多量の除蟲劑（前記藥品の外に龍腦樟腦にてもよし）を入れ置く事。

害蟲の種類は松魚蟲、衣蛾、毛氈蛾等數種ありますが、何れも六月から八九月頃へかけて最も多く蕃殖するものですから、其時候には特に豫防法をやらねばなりませぬ。

▲火熨斗のかけ方

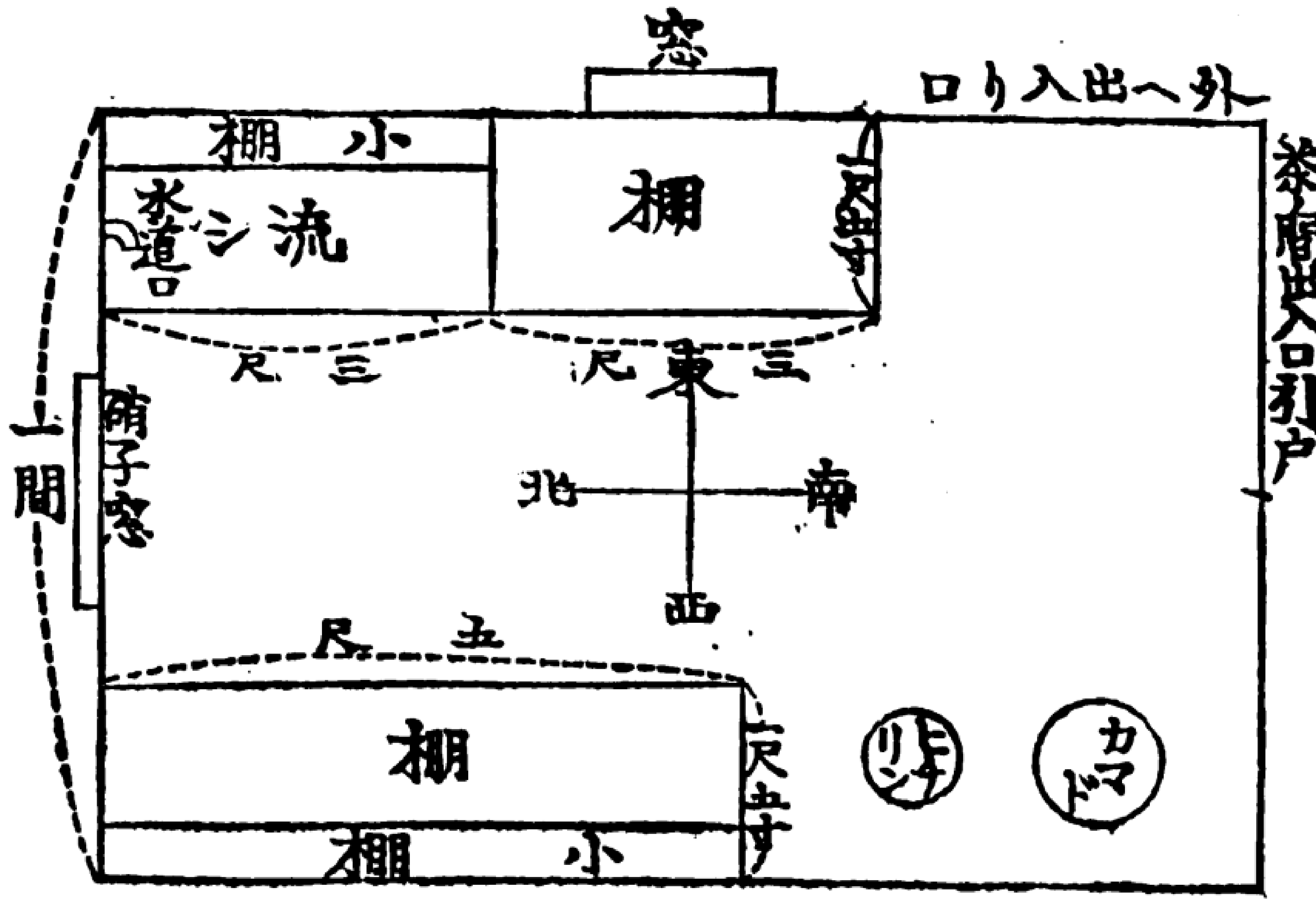
一週間に一度位火熨斗をかける必要があります、若し自宅で出來ませんでしたら洋服屋に特約してさせるか、又はコート、チヨッキを脱ぐ毎に洋服掛を用ひて皺の寄らぬようにしてせめてヅボンだけでも隔日位に火熨斗をかけるようにしたらよいでせう、それには先づ毛布か布團の上にヅボンを疊んで伸し、その上に濕手拭を被て、上から靜かに火熨斗をかけるので、決して直接に觸てはなりません、又膝の所は引伸ばさずに眞上から下へ壓つける樣にすると、地が縮んで突出たのを直す事が出來ます。

便利を考へた臺所

櫻井ちか子

臺所は家の中で一番大切な所で、健康も經濟も家内の調和も一切之れに依つて保たれる事は、皆さん御存じで御座いますが、此頃は誰方も特に之れに御注意なさる樣になつて、如何樣に臺所を作つたら宜しいかと云ふ事を屢々聞きますから、茲に私が米國旅行中に見ましたものゝ中、最も輕便と思ふたものに依つて工夫した和洋折衷の考案を申上げて御參考に供します。

臺所全體は一間に一間半で、僅か一坪半で出來ます。日本の家では茶の間は普通臺所の南にあるから、其の間の出入口は矢張り南に附けます。窓は硝子張りの西洋窓とし、圖の如く北向にして、四尺位の高さに作ります。此の窓框の幅は成るべく廣くして置く。さすれば夏分食物を載せて置く等色々便利があります。



東側の窓近くに流し、其次に棚、各々一尺五寸に三尺のものを二尺三寸位の高さの處に設けます。此棚は流しで洗つた物や、或は茶の間から下げる汚れ物を載せるのに用ゐます。孰れも其下を戸棚に作り、其内部に更に一段の棚を設けて、其れへ桶や鍋を入れて置きます。尚は流しの上方一尺五寸位の處にも幅五寸位の棚を二段附け、其下には數本かの釘を打ち、小道具を載せたり懸けたりするに用ゐます。

又其の反對の西側にも高さ三尺位の處に幅一尺五寸長さ五尺の棚を設けて、其上でお料理を爲る事とし、其下は矢張り戸棚にして、內を三段に仕切り、其れへ皿や鉢などを入れて置きます。此の棚の上方にも流しの上と同じく五寸幅位の小棚を二段位附けます。

西側茶の間近くに竈を据え、其の次に七りんを置いて煮炊きを爲し、其れと相對した東側には外への出入口があつて、八百屋、肴屋等が御用きゝにまゐる所です。

設備を斯樣に致せば、臺所は整然と締りがつく上に、中央の立働らく處は幅三尺位で、一つ所に立つて居ながら總ての事ができますから、誠に便利で、十人前位の賄ならば和洋孰れでも一人で十分爲す事ができます。



最も進歩した夫婦の倫理

スタンフォード大學教授　進藤道太郎

▲先づ寃罪を雪ぐ

此頃中央新聞に「ハイカラ女學生」とかいふ題で、アメリカ婦人の評が出てゐますが、あれが先づ世界一般のアメリカ婦人に對する印象でせう。歐洲人もまづ如彼いふ風に見て居ります。即ち一口に言へば、お俠な、お撥ねな、飛上り者だといふのです。けれどこれは皮相な觀察で、歐洲人が倫敦や巴里へ豪遊に來る米國婦人を――即ち金には有り飽きて教育に足りないと言ふ樣な、言はゞ成金的富豪の夫人や孃達が、憚りもなく舉動ふのを見て、米國婦人は皆あんなものだと評するのです。さもなければ一時の旅行者の評、日本人なども多くは數年の留學者の觀察です。其實米國婦人の精髓は上流や富豪や成金社會にあるのではなくて中流家庭の夫人令孃にあるのです。然も眞正の事は其の家庭に深く入つて見なければ分らないのに、其の家庭に入る事が容易に出來ないので、多くの人の觀察が皮相に流れて了ひます。私は二十年間米國に居りましたので、隨分家庭にも入つて見、又スタンフォード大學では、同窓時代及び終り二年の助教授時代を通じて澤山の令孃とも交際して見ました。其の二十年間の觀察から、どうも世評が皮相の樣に思はれます。津田梅子さんなどは米國婦人を褒めるさうですが、眞正に分れば褒めねばならぬ筈と思ひます。英國の婦人こそは上品で優雅で、米國婦人は下品で粗暴なものゝ樣に日本へは傳へられて、その先入が主となつてゐるので、米國婦人は飛上りの手に終へない者に言はねば通りが惡いのです。これは米國婦人――上流下流は別問題と

して――中流婦人に取つては實に寃罪至極です。別段贔負するのではないが、其の濡衣は干してやるべきだと思ふのです。

▲米國を保つは中流婦人の力

元來米國は中央政府の權力が必ずしも強大な譯でもなく、却つて州の政府に權力があつたりして、言はゞ統一の惡い――と言ふよりは眞個の共和政治なのです。佛蘭西も共和政治ですが實は巴里の政治、巴里の少數政治家の政治。南米の諸共和國などもやはり首府の少數權力者の政治ですのに、北米合衆國だけは眞の共和政治です。ですか



ら兎角自由で、不羈で、危險が起り易く、動搖し易い性質の國だのに、何うしてあのやうに旨く治つてゆくかと言へば全く――と言つては過ぎませうが、主に中流社會の婦人の力で、妻として夫を、母として子を、女として男を、旨く制へて操つて慰め和らげて行くからです。

一つはアングロサクソン(即ち英國民)に源を發した米國人ですから、アングロサクソン特色の常識が働いて、それで社會が維持される意味もありませうが、然し最う今日では自から亞米利加人としての特質が出來てゐて、純亞米利加氣質といふものは、ア

ングロサクソンとは違つて、隨分激し易く極端になり易く、夢中になり易いのです。其處を旨く操つて感情を和らげてゆくのは全く中流婦人の力、又或は慈善事業とか救濟事業とか、然ういふ事が旨く運んで行つてそれが社會全體の調和を破らぬ爲の油になつて行くなども、これ亦婦人が奔走斡旋の力によるのです。然ういふ緩和劑、油が無いならば、如彼いふ國柄では社會の安寧は一日も保たれますまい。亞米利加婦人が男子操縱に妙を得て居るといふ事によつて、亞米利加社會は維持されてゐるのであります。

假に如彼いふ共和組織の國柄で、然も動もすれば極端に流れ易い性質の人民が集まつてゐて、それで彼の通り旨く滯りなく、社會が維持され進歩して行く事を考へれば、何か其處に理由が無ければならぬ筈です。して見れば米國の中流婦人の勢力、その男子を惹付けて動かして行く技倆が思ひ當られるでありませう。

▲操縱者としての妻の妙技

米國婦人の操縱の妙技を話すには、その表情、態度應對振、話し振までも總べて言ふべき事が多くありますが、それは末段に申すとして、茲に一事に擧げると其れは教育で、米國の中流の婦人といふ者は實に教育の廣いものです。深いよりは廣い。實に趣味が廣く智識が廣い。そして其れが皆男を喜ばせる爲に、夫を慰める爲に使ふ。それに又亞米利加の男子といふ者は實に智識の狹い者で、最う職業以外の事は殆ど知らない、又顧みない。唯最う專心一意に職業にのみ努力してゐる。それが世間の事、職業以外の事を知るのは全く細君から聽いて知るので、これが細君の務め、又夫の唯一の樂みであります。

即ち夫が唯一の樂みは晩餐の時で、それが家庭の調和點になつてをる。まづ疲れて歸つて來る。妻は晩餐の準備をして待つて居る。西洋の習で衣服も着換へて清麗にしてゐる。そして食事をしながら種々の話を妻がして聽かせる。夫は之を聽くのが何よりも愉快。で、晩餐こそは水不入的なものの秘密的なものとしてあるの

で、「新婚の夫婦の處へは、決して飯時に行くな。」といふ位です。晩餐は實に米國の男子に取つて蜜の如く甘く嬉しいものである。

で、例の廣い知識や趣味で、いろ〳〵の話をして夫を樂しませる。無論新聞の二面記事に屬する事でも何でも話す。又時事問題などで夫が外で聽いて分らなかつた事などを妻に聽く。之をよく說明するのが妻の喜びである。例へば日露の關係が何う發展したとか、どうも戰爭になりさうだとか、クロパトキンが何うしたとか、リチウイツチが何うとか。或は三國の干涉が何うとか。夫は之を聽いて初めて日露戰爭の樣子も知るといふ有樣。實際米國の男子は新聞さへも讀まない。總て職業以外の事は女房に任せてある、トランスバールの事件が何うとか、支那の問題が何うとか。さては又歐米に於ける三面記事的の出來事。或は姦男の話も出るであらう。ストライキの話も出るであらう……

食事が又日本の樣に總べて一度に並べられて、早く吸はないと汁が冷めて了ふといふ風でないから具合がい〻。一品づ〻出るのだから話しながら悠如やれる、尠なくとも一時間は懸る。隨分二時間以上に及ぶ事もある。

無論子供の話も出よう。友人知己の話も出よう。ヴアイオリンでも鳴らして夫を慰める事もあらう。かと思ふと又無線電話の發明が噂される時ならば其の話も出よう。それを何ういふ經過で何うして發明されたか或は恁ういふ理屈で出來るものださうですよとか言つて、說明するのが細君の役であります。

この蜜の如く甘い晩餐の味によつて、米國の男子は慰められ和らげられ勵まされて、そして米國の社會は維持されてゆくのです。又恁く夫を喜ばさんが爲に米國中流の婦人は實によく勉強します。

▲ホーム、クラブ

家庭倶樂部などは即ち其の機關で、都會にも地方にも――大小は種々ですが、所在にこれが設けられてあります。そしてお互に智識や趣味の交換をして、お互

に廣くなつて、男子を慰め家庭を樂しくしようと言ふのです。

茲に日本の習慣と一つ變つてをるのは、然ういふ會合には絕えて老少の區別を置かぬ事です。日本だと娘さんは娘さん、老婆さんは老婆さんと固まつて了ふのですが、米國にはそれがありません。從つて若い婦人は老婦人の經驗や老實な考が聽けますし、老婆さんは又花のやうな若い女子によつて生新の氣を加ふる事が出來ます。老少に拘はらず話し合ふのでお互に利益が得られるのです。

そして又日本と違ふのは、敎育のある女が一番幅が利くのです。年齡にも關はらず身分にも關はらない。つまり研究の會ですから智識の廣い者が幅が利く。得意な事のある婦人には、他の人が分らぬ事を賴んで調べて貰ふ事もある。お互に手分けをして研究する事もある。醫者の細君は衞生上の事を話す、畫家の細君は配色の話をする、辯護士の細君は法律上の時事問題を話す。つまり廣く智識。趣味のある者が持てるので、この邊からも中流婦人の研究心が起るのです。

其の他雜誌書籍も備はつたものです。雜誌――米國の婦人雜誌ほど進步した婦人雜誌は世界にありません又科學の智識を通俗的に書いた著書なども續々出て、其の工夫して面白く書かれてある事、米國に並ぶ國はありません。米國の中流の婦人は是等を注意して讀んで、皆それが夫を喜ばす爲に用ひられるのです。

一つは經濟事情の好いにもよります。上流、富豪社會ほどに有り餘つて怠けるでもなく、又下層社會の樣に苦しくもない、食物の調理などは大體は監督しても先づ雇人にさせる事が出來、其他すべて時間的に極めて規則正しいから、朝起きるから食事から掃除から譯もなく整理いて了ふ。來客とてもチヤンと定つた時刻日取が槪ねあるから、隙は相應に得られる。敎育の素地はある。足らぬでもなく餘るでもない生活で、夫婦それ〴〵の活動を樂しんで務めるのです。

▲日本婦人の下手なわけ

これは一種の社會問題、道德問題にも渉る事でせうが、日本では幼時から餘り男女を區別し過ると思ふ。爲に男女互に其間の交際の何たるかを知らない。唯お互に懸絶れてゐるから男は女珍らしく女は男珍らしい。珍らしいから稀に接近する機會があると直ぐ妙な交際になる。却つて弊が多いと思ひます。米國では青年男女互に少しも珍らしくない。幼時から互に相携へ相睦んで交際して滿足してゐる。ですから少しも妙な關係にはならぬ。其麼氣は頭から起らない。單に淸らかな交際を何の不思議な事とも思はずにしてゐるだけである。七歳席を同じうせず的の却つて有害な事は、米國の

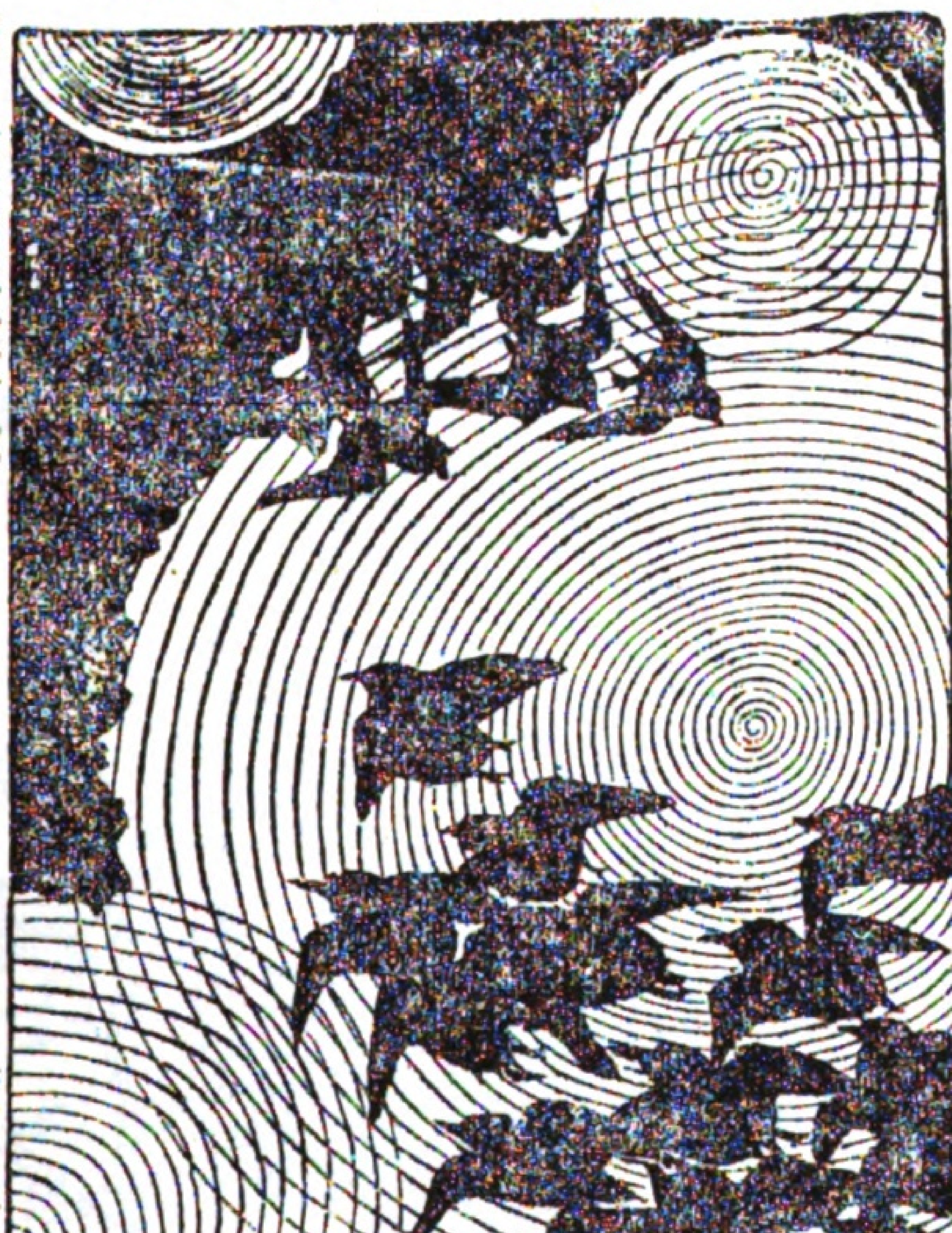


例で分ります。それは例の成金の富豪などが、歐洲貴族の眞似をして、孃を特殊の學校――女子ばかりを收容する學校で學ばせて、さて大學となると然ういかぬから男女混合の大學へ入れて來る。さあ其の結果が大概佳くない或は宗教學校から來たお孃さん。然ういふのは男子に立交つて萎縮けて了はねば、反對に男珍らしく夢中に逆上せて了ふ。他の青年男女の樣に平靜な態度でゐる事が出來ぬのです。

日本では非常に變だと思ひます公會の席、若しくは講堂のやうな嚴肅な席では六つかしく男女の區別をして、そして講堂以外は放任、下宿屋は放任です。取締り方が逆樣

ではないでせうか。米國では、例へば私の居つたスタンフォード大學にしても、寄宿舍は男女全然隔離されてゐて、要談があれば許を得て女子寄宿舍の正式應接室で、監督者の前で要談だけして歸るといふ風。男女學生手を引き合つて割烹店へ入るとか觀劇に行つたとか言へば、醜行と目さるゝのです。潔白な精神の交際ならば、實際然ういふ處へ立入る必要がないのです。他に幾干も公明正大な處で話す事が出來るのですから……。講堂でも混合。そして用事があれば講堂の廊下や庭で鳥渡話しても濟む。又校內の基督教青年會などでは無論入り交つて話す。それに會長が男で副會長が女で、書記長が女で、評議員が男女混合といふ樣な事は何でもありません。つまり私ある隱事は不可が、明かなる場處で明かなる意味で談話し交際する事は何でもないのです。

友禪羽二重地。波に千鳥（三越立案）



つまり日本の御婦人方が男子との交際に巧みでない第一の原因は、幼時から隔離されてゐて、女が男を知らず男が女を知らないからでせう。男女を斯う隔離するが實に不自然な事です。決して妙な關係でなくて、男といふものは何うしても女の優しい味に觸れねばならず、女は又男といふ異性と交際する事が必要で、これは心理的の必然の要求です。決して妙な事を申すのではありません。單に「男」といふ氣質性情の者と「女」といふ氣質性情の者との交際が、心理的に必要だと申すのです。從來日本では强ひて之を引放してゐたので今後は眞の男女交際に最つと馴れて、そして男子を最

つと巧みに操縱する樣にならねば不可と思ひます。

▲操縱術の稽古

夫を樂ませ、延いては總べて男子を和らげ制へて、それで亞米利加人に十二分の活動をさせ、米國の家庭、社會を保つて操つてゆくのは、實に米國中流婦人の力である、これは彼等の大いなる道德、大いなる倫理と思ひますが、それを自覺してかゝらぬか。兎も角も子女に男子操縱術を仕込む事は却々注意周到なものです。

現に私の學校にも會話課といふのがあつて、話術の練習をさせて居りました。無論婦人の敎師があるので例へば繪畫展覧會に級全體を連れて觀に行く。歸つてから一室に集まつて其の話をさせて見る。敎師が「誰さん」と話すべき人を指名するのです。で、觀察なり感想なり批評なりを話させて見て、敎師が直してやる。「其處は最つと力を入れて言はないと注意を惹ない」とか、「其處は一口にして置いて彼處を最つと詳しく話さねば眼に浮んで來ません」とか、「何處は話の順序を何う直したがいい」とか、或は「何の語が不適當」とか「無作法」とか「さういふ事は人の前で言ふものぢやない」とか、「かう言へば婉しく聞える」とか……

裾模様。松風（謡曲）



發音や抑揚は勿論、態度、科介、表情までも練習させるのです。其處へ行けば宛乎俳優です、劇術です。堂々たるスタンフォード大學で這麼事を女に行ら

せるかと驚く方があるかも知れませんが、これに依つても操縦術が進む譯だとお分りになりませう。寧ろ此點を言へば、妙な比較ですが日本の藝妓と同じ事、或は藝妓以上に巧な者です。藝妓十貞潔、若くは貞潔十藝妓、是が米國の中堅的、理想的、中流婦人であります。

實際又これが理想であらうかと思ひます。固より米國婦人にも世評の如くお轉婆一方、飛上り一方の、若しくは墮落して始末に行かない女子もありますが、大體を見渡した處實際羞かしからぬ中流婦人が最も多くそして前申した樣に教育廣く智識廣く趣味廣く、さて其上に藝妓的の巧妙なる應對、操縦の術を持つてをるのですから、其の優れた人を見ると全く理想的だと思ひます。單に藝妓と申すと直ぐ卑しまれるでせうが、貞潔十分で、そして愛嬌十二分なのですから、惡い事はありますまい。論より證據、日本の婦人で藝妓と夫の取競をして勝てる人は果してありませうか。米國にも藝妓樣の者がありますが、彼等は到底中流婦人が操縦術の足許へも寄り付けません。男を樂ませる事の上手さは殆ど感心の外はありません。

斯ういふ嗜は幼時から最う家庭で母が始終仕込みます。男の子にさへも、知合の家庭を訪問して其の父母や令孃と、樂しく打融けて遊んで來られる樣にと、それの出來ない子息には、母が勸めて令孃ある家庭を訪問させる、勸め立てゝ出してやります。まして孃さんには表情なり話振りなり、始終注意を與へるのです。其の上に猶學校で前申した樣に練習する。ですから實に巧いものです。男子を何時か恍惚と魅して了ふのです。中流家庭の妻たる婦人が即ち此の修練を經たものです。そして米國の中堅たる中等國民即ち夫を動かしてゐるのです。さすれば操縦術は實に一の倫理ではありますまいか。

要するに彼等婦人は男子を解し男子の心理を知り抜いてゐる。これが巧みに操なし得る基です。日本では青年男女が互に男を解せず女を解せず、それで結婚すると新に亭主といふ奇なる動物を研究する譯になる。其麼風ですから夫の機嫌が取れず家庭が面白くなくて夫は外出勝ちといふ樣にもなるでせう。大いに男子操縦の倫理を修めて戴きたいと思ふのであります。

（談話筆記）

◎醫藥にて治せざる病は如何にすれば全治するか!!

登錄商標



サンデン電氣帶

主治効能

●神經衰弱諸症●神經痛諸症●中風●リヨーマチス●脚氣●脊髓炎●糖尿病●遺尿●胃擴張●胃下垂●消化不良●常習便秘●慢性腎臟炎●男女生殖器虛弱●不眠症●遺精●夢精●早漏●手淫の諸害●貧血●憂鬱●ヒステリー●月經不順……其他男女共各病後の衰弱

(說明書無代進呈)

登錄商標



アクチナ

主治効能◎眼●耳●鼻●咽喉●船暈●汽車暈に苦む人は本具のあるを知らぬ人なり

●本具一個を備へ置けば家族應用の便あり●本具は携帶至便なれば何れの場所にても用ひらる

變光電燈球

本電球は一燭と八燭、一燭と十燭、一燭と十六燭の三種あります明るくしたり暗くしたりするに左右に捻りさへすれば誰にも容易く出來ます在來の電球に覆を附けて暗くするのは熱の爲に火災の出來る恐れが有りますが本電球はそんな事はありません極めて安全で便利であります本電球は病院、旅館、待合等は勿論一般寢室用として極めて便利で且つ最も經濟的のものです

●金錢登錄器

金錢の出納を即時に記錄し厘毛の違算を爲さゞる出納保護器にして帳付の煩雜を避け顧客へ對し一々印刷せる領收切符を差出し得る最も文明的利器なり

●營業品目

●電燈●電話●電鈴●表示機●電球●避雷針●探檢電燈●懷中電燈●電池類●其他一式●醫療器械●製糖分析機具一式●電球は各種共製造致居候間特約販賣仕候

本店 東京京橋區尾張町二丁目(銀座通東側)電話新橋四一二二番
支店 大阪市心齋橋筋一丁目西側
支店 橫濱市相生町四丁目六十三番地 電話橫濱一九三一番

サンデン電氣商會

女(わの一)

學藝叢書

菊判洋裝美本各紙數二百十頁正價各金四拾錢郵税六錢

人類學叢話
理學博士 坪井正五郎先生著

要目
▲事物變遷研究に對する人類學的方法▲石器時代遺跡の實踐は人類學上如何なる利益ありや▲如何にせば人類學を自修し得べきか▲ミイラの話▲玉飾の起原▲何なか人種の別と云ふ▲外十數項

植物學叢話
理學博士 三好學先生著

要目
▲植物と美術四項▲天然紀念物保存の必要並に其保存策に就て八項▲園藝と學理▲植物體に於ける氷雪の影響▲植物と降雨▲紅葉の話▲梅の生態

水産叢話
理學博士 岡村金太郎先生著

要目
▲本邦養魚沿革事蹟▲海外養魚沿革▲海中に於ける窒素の淵源▲鼈の性質と飼育▲水産學の範圍▲海苔篊▲篊と日比谷公園▲神馬藻と昆布▲寒天の用途▲寒天の製法▲ところてん寒天の歴史外數項

動物學叢話
理學博士 石川千代松先生著

要目
▲進化論▲精蟲の話▲生物の生活は自愛か他愛か▲動物の子守▲動物卵の大小及び數▲遺傳は父から多く來るか母から來るか▲蠶の夫婦▲昆蟲の變態と露國の刺客▲蝙蝠の話▲サルに就ての學問外數項

歴史叢話
文學博士 箕作元八先生著

要目
▲國民の發展と海事との關係▲歴史上より見たる道德の危機▲西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革▲國民將來の覺悟▲日露戰争の史的意義と國民將來の理想▲ナポレオン一夕話外數項

植物雜話
理學博士 松村任三先生著

要目
▲植物を學術的に調べ▲我國の園藝と公園▲紅雪▲皆▲樺太の植物▲水仙の話▲蠟梅の話▲紅葉▲蕣の話▲百合の種類▲木芙蓉の種類外數項◎附錄▲花菖蒲▲顯微鏡の話▲少年と植物

國語學叢話
文學博士 上田萬年先生著

要目
▲廿世紀に於ける國語の地位▲桓武帝の話▲演劇上の言語▲戯曲に現はれたる武士道と大和魂▲現今の作文教授法に就て▲予の好める人物▲內地雜居後に於ける語學問題▲教育上の雜觀▲外數項

天文學叢話
理學博士 横山又次郎先生著

要目
▲世界の創造▲原始創造說▲神託創造說▲進化創造說▲外十五項▲海豹島▲總記▲地質▲外六項▲何故に土地により人口に疎密あるか▲科學雜談▲金華山沖の怪火▲外二項

地理學叢話
理學博士 神保小虎先生講述

要目
▲外國語速通術▲地理學者にアイヌ語の勸め▲ローマ字變革論▲探檢旅行者の經驗▲二日間に箱根の遠足▲信濃旅行の雜記▲支那巡りの俗話▲ボルネオ外二島巡見雜話▲ボルネオ島蠻王の家▲ジャバ島の話

續刊

◉物理學叢話 理學博士 鶴田賢次先生講述

◉農業叢話 農學博士 横井時敬先生講述

振替貯金口座 第二百四十番

東京 博文館 本町

販賣用電話 本局二六二〇番

女（その二）

女(わの三)

女(わの五)

巖谷小波君著

宮川春汀君
岡野榮君 畫

改訂袖珍 日本昔噺

袖珍總クロース函入美本●正價七拾錢
紙數四五〇頁挿畫廿四頁▲郵稅八錢

日本昔噺の初めて世に出でしは、遠く十有五年の昔にあり、之を今日お伽文學の隆盛時代より見る時は、當年編者の苦心の如き、亦一場の昔噺の觀あり、然るに幸にも滿天下の兒童家庭は、爭つて本書を歡迎せられしに依り、爾來版を重ぬる幾十、原型磨滅して殆ど重版の策なく、爲に讀者の厚顧に背くこと多大なりしが、今回世界お伽噺の完成を機として、編者は更に之が改訂を企て、繁を省き要を加へ、假名遣を改め、且つ携帶の便を主とし、袖珍の美本となし面目一新し、再び讀者に見ゆる事とはなせり、されば學校、家庭の當事者は常に之を座邊に備ふべく、殊に散歩旅行の際にも之を携帶し、機に臨み變に應じて、兒童品性に陶冶美心の涵養上得る所決して尠少ならざるべし、眞個日本家庭の良友、父兄教師の珍寶たり。

發兌元 東京本町 **博文館**

巖谷小波君作

春汀君畫

（既刊）

幼年畫報臨時增刊



學生諸氏！弟妹の爲め
一本を求められんことを望む。

全一冊
洋裝菊判
美麗口繪澤山
正價金拾錢
郵稅（本號限り）貳錢

東京 博文館 本町

驟雨錄

秋雨

◎胸の閊は夕立に洗へよ

三日持ち越しの胸のつかへを、樟腦水含ませた大刷毛でサッと撫で下ろされた氣持ち、それは驟雨の過ぎたあとである、無論七八の猛夏を相手に戰かうのであるが、露を命の朝顏が金色の征矢に中つて殘骸を籬の蔓に晒すとき、奮然として何處からともなく雲を起し電の襷を綾取つて、見事復讐を遣つて往く所は、如何にも飛將軍の慨があるのみならず、乾燥き切つた下界の人間に活を入れる、やりかたが如何にもデカダン式である。

これを平和に誇る新綠の初夏の雨に比べると歲が十ばかり異ふ樣に思ふ。驟雨はどう見ても二十前後の血氣盛な青年だ。分別もへちまもかれ等には風馬牛である。かうと決めたらすぐやつ付ける。しかるに初夏の雨はしどゝとふる、降り方が女性的である。紅顏二八の少年といへばいはれる。と同時に少しく危險である黴を生ぜしめる、人の氣をくさらせる、雨それ自身も不安な音で降る。がこれこそやがて秋の收獲を豫言するのであるから、大切にはちがひない。即ち第二の國民の萠芽はこゝにあるのだからつまんでとる譯にも行かない。

◎忘られぬものは故鄕の味

都下幾萬の學生は此の驟雨の來たる頃、行李を携へて故山の人となるのである。一年の間、堪え〳〵た夢の住家に、身正しく這入つて行くのであるからなるほど嬉しいにちがひない。此の情念を强いて押へて都下に殘る學生の氣がしれない。特殊の事情のある人は、思ふ樣になる可き筈がない、しかし其の他のものはまづ故鄕に歸る可きであらう。親は一年間の修養の結果を知り度いと用もないのに何氣なく停車場をうろついて、やがての日手を執つてくれる娘、息子の俤を微笑むのではないか、身體の上から云ふても能ふかぎり土

地を變へて英氣をやしなふのは人間の務である。

いくつになつても忘られぬのは故鄕である。年が經れば經るほど故鄕と云ふ觀念は濃厚になる相な。故鄕と云ふ音が自分を引しめる樣なのも無理はない。況て鄕關を出でゝ年既に三旬、なほ未だ志を得ずと云つた樣な場合にもし故鄕の古驛をすぎることでもあらうとしたら、そもどんな感慨に打たれるであらう、想像しただけでも眼がうるむ。殊に昔し遊むだ野原に家が建ち、蓮華摘んだ古城の堤が植木屋の庭と變じ、蟹を叩きつぶした小川の橋がすでに朽ちて、通る途もなくなつたのを實際に目撃するほど胸のいたい事はない故人高山樗牛は、故鄕は「インスピレーション」だと云つたが自分も胸にこの聲を絶つた事がないのである陶淵明が最後の詩は故鄕に歸るのそれであつた。

來る七日は七夕だ。天上のことは知らぬが、下界にあつて行なはれる雅事が年々にすたれゆくのは情けない。まだ都をはなれた田舍にはこの美くしい催しが繼續せられてゐる。急がしいのを循に取つて歌のよめないのをてれかくしして居る都人はとかく佛樣を粗末にするものだ。無理もない需用もせぬ處ろに國旗を立てゝ提灯を釣るすといふおめでたい連中だもの、文明の裏面は悲觀す可きかなだ、いやに風流がるのもうるさいが、家庭の趣味のと、やかましくいふ時世に、些細なことを面倒臭がる人の度量もたのもしくない。

◎決斷力の鈍い女は用の欠ける女

凡そ世の中に愛嬌のない女ほど打ち壞しなものはあるまい。また粋の利かない女ほどもてあましものはあるまい。見えすいた樣な愛嬌をふりまく女も度し難いが、相手が何を言つても氣のない、つやけしな目付きをして、忘れる樣な時分にゴムの樣な返事をする。意味あつてなすの外、こんな女は澤山はあるまい。序でに粋の利かない、これは俗にいふ煮え切らない、いはゞ決斷力のにぶい女をいふ。するんでもなし、しないんでもなし、かと言つて人に相談するんでもなし、結句蠟燭を湯につけた樣な女。これが女性の常かも知れぬが、時間のつぶれること用の欠けること夥だしい。故

にこれからの女に哲學の頭が出來なくつちや迚も發展する見込がない。その癖哲學といふと教育家自身が本で讀んだそんなものばかりだと考へて居る。そんなのに教へられたのがとかく死にたがるのだ。こんな女は雨にでもうたれて結ひ立ての頭をめちや〳〵に濡らして見なくつちや無爲だと思ふ。

◎海に遊ばんか山に遊ばんか

どちらに氣が向くか山と海と、と聞かれたら。成るほど山もよい。太古の俤を梢にならし幽玄なる韻は人を魅する趣があるしかしどうも海がよい、山はなんだか狹い氣もちがする、そして何だか消極的な、俗に山國根性



と云つた樣な一種厭な癖がある樣に思ふ。人海に對つて快を叫ばぬものはあるまい。習慣に因て海がきらひと云ふ人でも、さすがに海そのものにむかつて横をむくものはあるまい。ことに日本は海の國だ、すかぬと言ふた所で仕方がない。が到底この兩者を離しては畫にならぬ、山のある所にかならず水あり、水のある處ろに山があつてはじめて完全なる繪として無言に人を滿足せしむるのだ。此の點に於て理想的勝地をあげるなら、東海の濱砂白きあたりであらう。岳南の風光は、日本中での繪だと思ふ、部分的に勝れた景色は、他にいくらでも求め得るであらうが、延長の渚で

かくまでそなはつた所ろはあるまい。ことに清見潟一帶の翠りと藍はこれに夕陽が加はつたら恐らく世界の絶品といふに言を惜しまぬ。

◎土地と人物

土地の國民性情に非常なる關係のあることは、言ふまでもないが、かゝる山水の完全美なる處から出る人物はどうも小才子が多い樣におもふ、でなければ、美的思想に富んだ人がおほい。これを西洋の例に比べると、美術に於けるミケルアンゼロ、ラフハイエル、ヒユーマニズムの先覺者たるダンテのコメヂア、何れも古今獨歩の大天才であつたことはもとよりだが、かゝる人をさめた土地は歐洲諸國に粹を拔く風光明媚なベニスの町であつた。で自分の最ものぞむ處ろはこれ等繪の樣な國にすむ人が、文明に伴ふ分業的偏見の弊を融和する美術の本領に向つて發展した人物を出してほしいと思ふてやまぬ。

◎愛讀書を得るは天才を得るがごとし

世に愛讀書を得るは極端かも知れぬが、天才を得るのと同じ時を要するだらうと思ふ。愛讀書と云へば只あれは好きですよぢやいけない、それなら澤山出來るが、今云ふ愛讀書は、基教徒のバイブルに相當する其れを言ふのである。隨分よんでよんで讀みぬいて居る人に聞いても意味ある解釋の愛讀書をきくと、さうですねえと首をひねる、それが觸れて居ない證據だ、いやしくも愛讀書といふからには、すくなくとも信ずる慰藉者であり、兄妹でなければならぬ、自分の經驗からいふてもつい近頃まで夫を有して居らなかつた。

◎手紙はお務に書くものではない

種々なる方面にその人の人格は表出されるものであるが普通の交際法から考へて見て最もよくわかるのは手紙だ。字の巧拙は言ふた處で仕方がないとして、中の文句のそれなのだ。まづBusiness likeなものゝそれは別として、普通の手紙で其の人の誠實を以て書いたか否かはすぐ判る、よしや平凡なる「一と筆示しり〳〵」にもまことのある人が書いたのは身にしみる。之に反してえらい叮寧くさい、媚びる樣な、お務めに只、字を

ならべてあるのを見ると其の日一日氣もちがわるい。と共に。やつぱり自分もこんなかきかたをして居るのでないかと出したさきを繰つて見る位だ形容詞の陳列會の様な文面もちと閉口であるが、これはまだしも愛嬌がある、言文一致でおつとめ式の手紙ちや高利貸の證書より亂れて居る。ことに一家の主婦ともある人は、無駄な口ひとつを儉約してすこし眞面目に考がへたらよいと思ふ。

◎忙がしいとは筆不性者の遁辭

世に筆不性と自覺して居る人の眞の心を尋ねて見たらどんなであらう。



「世事、家事に忙がしくて、また子女の教育に夢中になつてつい筆不性になる」

こんなのは少なくあるまい、またよいにげ口上だから、この一言で「何故」と問ふたものは大概僻易する。しかしほんとうに急がしい人なら必らず手紙をかく人だ。自分の知つて居る豪商の奥様で、家庭はもとよりせはしい〳〵位置にある、子供も三人ある、それで居てめつたに禮を缺いたり、返事を忘れたり、とんまなことは滅多にしない。それで手紙かくことばかりして居られるのかと思ふと決してさうちやない、總てが趣味ある整理をしてある。

この奥様は必らず頭の中で時間をうまく使ふて居られるのだ、裁縫のいとま、料理の暇なあき時間に文意を考がへて置かれるからいざ筆下ろすといふ時に狼狽しない。こんなのをこれ學ぶ可きことだらうとおもふ。代筆に人の時間を貰ふて、おまけに氣がきかぬなぞと尊大ぶつて居る樣では、女ならまづだめだとおもふ。男にしても意氣地なしな沙汰だ。併し「釋迦も方便」といふから一槪に斷定せられぬが、要するに書かぬのは書けないからだ、書けないのは、書かないからだ、試ろみることの出來ないものは何しても出來る見込がない。

◎自然は元氣を振ひ起す

凡そ不自然ほど元氣のないものはあるまい。ことに小說などで其れをおもふ、男子が寫した女性も不自然だし、女子が描く男子も淺薄極まるものだ。これだからどつちもが活躍しない。もうすこしお互の天地を研究して、そこに確たる自信を摑いて、それからかゝつてもおそくはあるまい。過度の時代はあまりに兩者の自信をさまたげてゐる。だから元氣がない。

そこにゆくと夏は好い驟雨がある、これほど元氣なものはない、食氣ばかり殘つて居る婆さん爺さんでも驟雨がすると生きかへりますといふ。

▲大日本高等女學會の發展

同會の事は曾て本誌に報道せしが、其後會頭二條公爵夫人を始め、多數貴婦人の熱心なる盡力により、事業は益々發展しつゝあり、其の目的は女子教育の普及を計る爲め高等女學講義及び雜誌大家庭を發行する事、女藝教習所を附設して諸種の女藝を教習し就職の途を得せしむる事等にして、既に幾千の會員を有して之を實行しつゝあるが、特に注意すべきは、普通は少しの會費を要すれ共、學資に乏しき篤學の女子にして、其他の小學校長又は町村長の推撰ある時は、無料にて講義録を送り、或は教習を爲すと云ふにあり、斯る申込の多からむ事は、本會の最も希望する所なれば、窮境にある女子に對し非常の便益を與ふべきなり。本號口繪に揭げたるは、右教習所の一部補綴工教場にて、此他に裁縫、生花、割烹等の教室を設けあるが、尙は行く〳〵は女學校をも設けて、入會者の教育を完ふすべしと云ふ、所在は牛込區白銀町十九番地。

學ぶべき母の慈愛

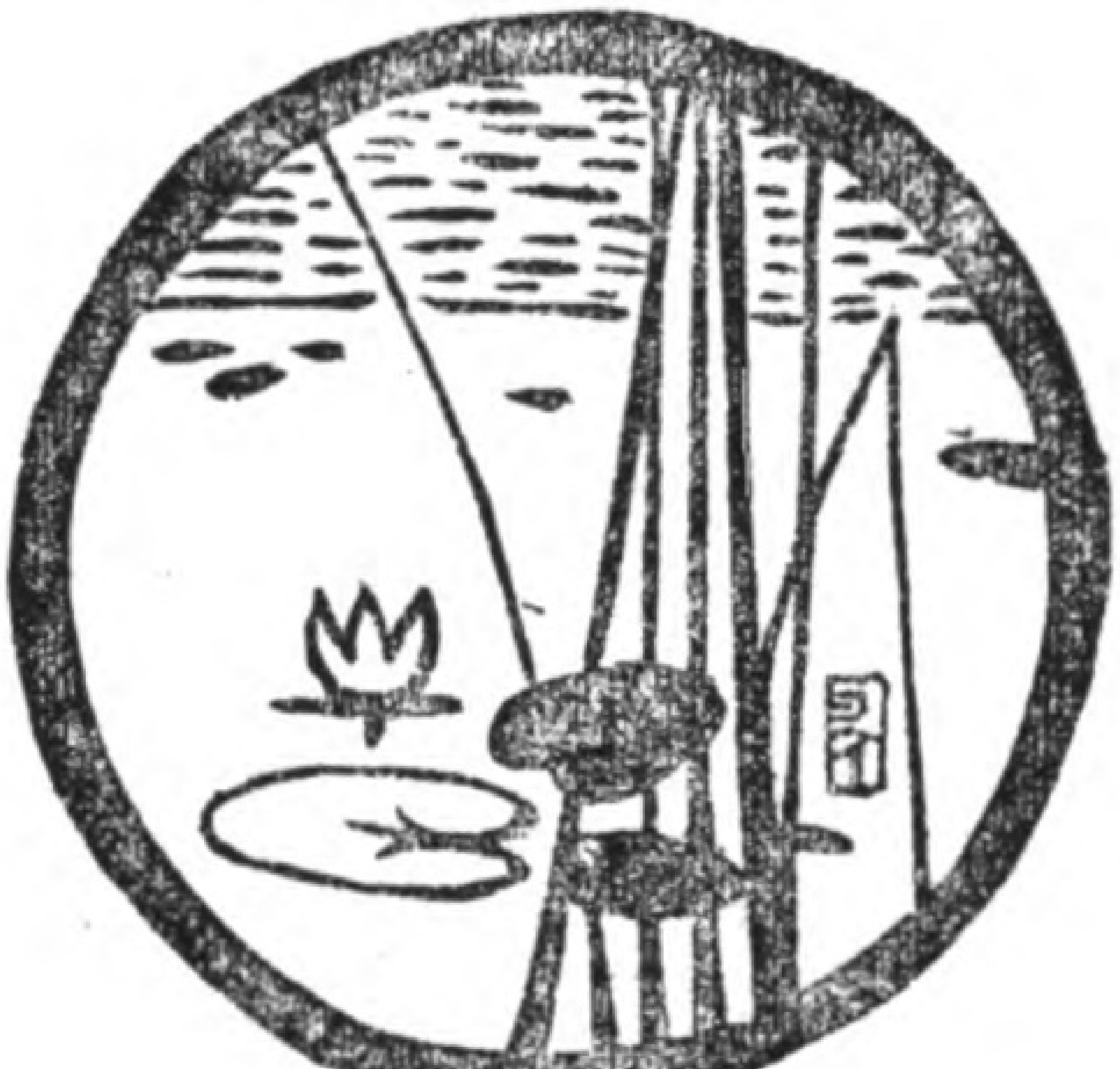
鳥類は卵生たる點に至ては魚類、兩棲類、爬蟲類と同一であるが、孵化哺育の方法に至ては全く異つて居る、而かも孵化哺育の任務は殆んど雌の一手に取扱はれ、或る種屬の雄が僅かに産所である所の巣を作る助けをするとか、或は食餌を搬へて來るとか、或は外敵の襲來を見張る位に過ぎない、是れとても果して雌や雛を擁護する積りであるかどうかは明白でないのがある。

歐洲の北海に鴨に似た鳥が居て、其胸腹の毛が非常に柔軟である、其處で産所が略出來上がると此の柔軟な毛を胸腹から拔き取つて其の中に敷き詰めるから、全然蒲團を敷いた狀態となるが、其の邊の獵師共はこの巣の出來上る頃を見計つて右の蒲團を奪ひ去り、斯くて人間の蒲團に作る爲めに高價に賣捌く、其れで鳥は止むを得ず更に殘餘の羽毛を拔取るから胸腹は赤裸となつて仕舞ふ、斯樣な殘酷なをなする獵師共の振舞は惡む可く、鳥の慈愛たる寔に憫む可きではない歟。

諸君の日々目擊して居られる鷄の孵化哺育の情態は能く以上の關係を說明して居る、即ち鷄が一定の産卵を終ると孵化の爲に就巣をする、就巣して孵へる迄五百四時間と云ふものは半ば食を斷つて夢中で卵を抱いてゐる、其時犬猫の襲擊に逢ふと常時ならば一も二もなく逃げ出すのであるが愈羽根を立てゝ向て行く、實に一生懸命である、斯くて二十一日間の産期滿ちて雛共は卵殼を破つて產れ出づるまでの母鷄の辛勞は實に可愛想な位である。

其れから孵へると、今度は雛の哺育に苦勞するのであるが、生後凡そ四五十日間は分秒時の間と雖も決して雛の傍らを離れることなく、晝間は食餌を漁りて之を養ひ、夜間は羽下に抱いて之を暖め、平生は風雨寒暑の天候にも注意して其の時折の加減に怠ることなく又たあらゆる外敵に對しても警戒おさ〳〵緩むことなく、即ち犬猫に捕はれはしまいか、鷲鳥に攫れはしまいかなど云ふ氣苦勞は決して並み大抵ではなからう、母雞が一つの食餌を獲る毎に必ずコッコッと鳴いて雛共を其身邊に呼び集め、大きい物や長い物をば其嘴で以て細かにして與ふる狀況は、其の間に無量の慈愛が籠つて如何にも可憐に見える、自分の家に飼つて居いた雛を屠るに忍びないと云ふのは畢竟は是等の事情から起る惻隱の情である。

次に一段上級の獸類も略鳥類と同じで、牛馬にせよ、犬猫にせよ、哺育のことは牝雌の手一つで引き受け、牡雄などは一切知らぬ振りである、鳥獸でさへ斯の通り己れの腹を痛めた子の哺育には及ぶ限りの辛勞を盡くすのに、やれ慈善觀劇ぢや、やれ社交ぢや夜會ぢやと云ふて自分の產んだ大切な子女を下女や仲働きの手許に放棄つて顧みない令夫人ありとせば、是れは大變な了簡違である。（大澤謙學博士談片）



科學上より見たる海水浴

醫學博士　栗本東明

◎海水浴に適する國

近來追々海水浴が盛になつて來たのは結構な事ですが、然し我國では何れの浴場も其設備が充分でない。若し之を西洋のやうに凡ての裝置を完全にしたならば、この位海水浴に適した國は恐らく世界中になからうと考へる。何故日本はそれに適するかと申すに、勿論いろ〳〵の理由がありますが、第一に氣候が良いからです。元來歐羅巴とか亞細亞とかいふ大陸の氣候は、寒暖の差が一定しないで變化の度が甚だしい。例へば支那や露西亞の如き大きな土地では、寒い時には非常に寒く、暑い時にはヒドく暑い。ところが島國になると冬もさう寒くなければ、夏も餘り暑くない。我日本などは即ちこの島嶼の氣候を代表したもので、海水浴場としては最も潮流の工合がよろしい。けれども惜い事には大磯でも鎌倉でも未だ設備が不充分で、殆んど男女混浴といふ有樣ですから、風儀上兎角の非難がある。西洋では男女の區別は勿論、老人は老人、若い者は若い者相當に、それ〴〵泳ぐ場所が異つて、少しも危險の無い樣にしてあるから、何人も極めて愉快に行ふ事が出來ます。

◎簡易なる海水浴

西洋人は大抵平常儉約して居て、夏季になると海水浴だの避暑だのに出かけます。行かないと肩身か狹いといふ風で、下宿屋の婆さんでも、職人の娘でも、誰でも參ります。之は一般の風習で、實際攝養を主とし

て行くのでないかも知れぬが、兎に角海水浴は衛生上必要のことですから、日本人も夏になつたら續々出掛けて心身を養ふやうにして欲しい。どうも我國では海水浴などは餘程贅澤な人がやるものと考へてゐる傾きがあるけれど、元々身體を壯健にするのが目的なのだから、決して贅澤をする必要はない。質素にしてやれば家内中で行つても、左程費用のかゝるものでない。といふ事は私が經驗上から保證いたします。尤も旅館住居ではさうはゆかぬが、先づ普通の民家か寺院の室を借受けて、



細君の手料理でやれば、東京に居るよりも遙に安く上ります。殊に身體の弱い人は熱苦しい都會に居て藥餌に親しむよりも、海濱の自然療法の方が何の位効があるか知れません。

◎海水浴は何處が好いか

そこで、海水浴をするに就ては、第一に場所を擇ばねばならぬ。最も好いのは成べく陸を距れた海の中にある島ですが、然しさう云ふ所は不便で船で通はねばならぬから、一寸やり難い。歐羅巴では大陸を離るゝ百里も沖にある島

で海水浴の設備をした處が隨分少くない。現に獨逸ではノルデルネーといふ島があつて、汽船で十時間もかかる所ですが、其處には立派な浴場が設けられてある。日本でもセメて伊豆の大島附近に一ヶ所位あつて欲しいものです。兎に角遠い沖にポッチリある佐渡のやうな離れ島が一番良いのです。其理由は空氣がよくて、鹽分に富み、海氣が強く、浪があつて、總ての點が衞生的だからです。が東京の内海——品川や大森のやうな所は、鹽分も少なければ、波動も弱くて、充分な効能がない。東京附近では先づ銚子邊か九十九里濱邊りが最も浴場に適して居ります。次には鎌倉か大磯で、此處は海の淺い割合に波動があつて、身體を揉むには充分です。それから小田原も惡くはないが、唯だ足場の良くないのが難である。其他沼津興津邊もよろしい。關西では住吉、濱寺、須磨、舞子等が有名であるが、此邊は一帶に海が急に深くて、其割に波動が弱いから東海道の海濱には及びません。又日本海では能登の岬、越後の鯨波、寺泊等が屈指の場所です。すべて避暑でも海水浴でも、都會に近い所は人が多く入込んで段々空氣が惡くなるから、成るべく都を離れた遠い所ほど効能があります。

◎海水浴の効能

一體海の水には何んな成分が含むかと申すに、勿論他の分子もあるけれど、其主なるものは食鹽で、普通百分の三位含んで居る。最も大きな川の出口、例へば信濃川や石狩川などの出口には、眞水が混じるから、鹽分が少ない。隨つて海水浴場としては不適當ですが、其他は何處でも同じ事です。そこで海水浴の効能はいろ〳〵ある中に主なる點は三つほどあります。第一は海水の波動で、この浪が人の身體に太層効がある。先づ海の中へ飛込むと、知らず〳〵運動をするやうになつて、潮に打たれては皮膚を强固にし、浪に揺られては手足を動かす。それから右の鹽の氣が細かい分子となつて、呼吸する毎に腹の中へ入るから、肺が强壯になる。又水泳はあらゆる運動中で之に越すものはない。

他の體操のやうなものは一局部を動かすに止まるけれど、遊泳は手でも足でも片方を休めると沈んで了ふから、イヤでも應でも身體中を平均に運動せしめねばならぬ。隨つて呼吸は十分に深くなつて、總ての筋肉が一緒に働くから、最も健康を增進するのです。

◎空氣と海水の溫度

第二の効能は空氣の良いことです。總じて海濱の空氣は、清淨で、濃厚で、而も溫度に劇變がなく、殆んど一定してゐるから、肺病患者などには殊に宜しい。尙委しく言へば海濱の空



氣中には酸素が餘計にあつて、有害なる炭酸瓦斯が少いのです。又海水の溫かくなるのは六月頃から九月までの間ですから、海水浴をやるには七、八、九と此の三月位が最も適します。

第三の効能は、空氣よりも海水の溫度が低い所にある。例へば陸の溫度が華氏の八十五度とすれば、海中は七十度位しかない恁ういふ冷い水で皮膚を刺戟すると、身體の働きが非常に良くなつて、食慾が俄かに增進する。勿論此際欲するに任せて無暗と食べては、忽ち胃を害する

から、特に注意せねばならぬ。以上は直接の効能を述べたのですが、其他に尚ほ間接の効驗ある事は申すまでもありません。

◎海浴の時間と度數

海水浴の季節は、前に申す通り、七、八、九月頃に限りますが、さて時間は何なものかと云ふに、始めての人は決して永く入つては可けません。弱い人なら三分、壯健な者で七分位が精々です。慣れない人が動もすると十分以上二十分も海に浸つてゐるのを見受けますが、そんなに無理をすると、或は眩暈がしたり、嘔氣を催したり、貧血を起して卒倒したりする事があるから、婦人や小兒は殊に注意が肝腎です。一週間と經ち十日と慣れたら、十分以上二十分位まで差支えないけれど、それも身體の强弱によります。度數は一日に二回が標準で、天氣の惡い日は見合せ、晴天の時に限ります。時刻は朝と晩が最も良く、午前は六時より九時まで、夕方は四時から六時頃迄です。次に入浴者の年齡は、五歲以下の小兒や、七十歲以上の老人は危險です。西洋では三歲位の小供を入れる處もありますが、之は考へものでせう。それから海水の溫度は七十度內外が適當で、それより餘り度が違つてはよろしくない。又海から出た時には、粗い麻の布のやうなもので全身を摩擦すると、皮膚が極めて强壯になります。

◎病人と海浴の注意

そこで病人には如何かと申すに、第一に腺病といつて生れ落から身體の弱い人があるが、この種の貧血者には最もよろしい。次に神經衰弱、慢性の僂麻質斯、粘膜加答兒、胃弱、氣管支諸病、神經痛、ヒステリー、月經不順の人等には、海水浴ほど養生になるものはありません。其他日常精神を過度に勞する人、運動不足の人、不眠症の人などにも効がある。けれども之に反して海水浴をすると害になる病氣も少くない。第一に心臟病、脚氣、僂麻質斯の初期、腦充血を起し易い人等には大の禁物です。だから一應醫者に相談して出掛

けるのが肝腎で、何人にも好いといふ譯ではない。

それから特に注意を要するのは、海水浴を初める前に胃を丈夫にして置く事です。少しでも酒を飲んだり食過ぎしたりして海へ這入ると、直ぐ頭痛がするか嘔吐を催して來て、折角の養生が却て不養生に了ります。又熱い砂の上へ肚這へになつたりすると、腸を害する原因となるから、之も充分氣を注けねばならぬ。

◎飲料水と携帯品

海水浴に行つて一番困るのは飲料水です。凡て海岸には質の良い水が少くて、少々濁つてる位は未だしも可い方で、私が葉山に居た時、二十ヶ所も井戸を探つて見たけれど、何れも鹽分を含んでゐるか、左もなければ異臭を放つものばかりで、平常水道の水を飲慣れた人の身體には迚も適しない。若し腸でも惡い人ですと忽ち下痢を起します。そこでこの惡水を補ふには砂濾しにすると一番良いのですが、若し急の間に合はなかつたら、沸騰せしめて用ゐる外はありません。

それから宿屋に泊らうといふ人は、少々荷になつても、自分の枕の被布と、布團に敷く「シーツ」と、掛夜具の襟を被ふべき白布とを携帯した方がよい。でないとどんな傳染病患者の着た寢具をあてがはれるか解らない。其の襟と枕の被ひは、二尺位の金巾か又は大形のタオルでも間に合ひます。

◎旅中の携帯藥

次に一寸した事ですが、害蟲の豫防藥として、ピックとアンモニヤを携帯する必要がある。アンモニヤは海水中で水母其他の水蟲に刺された時に附ければ、直に痛みや痒みを止めますし、又ピックは小供達の爲に是非無くてはなりません。元來小兒の皮膚は非常に弱くて、其上腫物などの出來易いところへ、海水に入つては砂の上へ寢ころんで炎天に照されるから、少しの爪傷でもあると、忽ち膿をもつて來る。其處へピックを貼つて遣る。一日に二回位新らしいのを取かへると、大抵な腫物なら切らないでも癒ります。



洗濯に就ての一般の智識

梅雨のあがり時は年中の黴の始末をする時で、わけても衣類の洗濯ものはいづれの家屋でも此の季節に多いものですから、こゝに洗濯についての一般の心得を述べませう、洗濯をするには餘り汚れのひどくならない中に爲ねばなりませぬ、又汚れたものを其まゝ長く捨てゝ置くのもよろしくない、あまり汚れに染みたり長く捨てゝおいたりすると、地質を惡るくし其上洗濯に多くの時と力とを要するやうになります、凡そ洗濯をするには、第一石鹸、ソーダのやうな入用の品をよく揃へ、盥や桶などの破損の有無を調べておくことが必要です。

其次には洗濯すべき品物をよく撰り分けることです、白いものは白いもの、色物は色物と、夫々區別して別々に洗はなければなりませぬ、又甚しく汚れた部分とさほどでない部分とを見分けて、袂の中の塵などは先によく拂て置くことが必要です。

次に垢を落すに入用な材料は、普通は水と石鹸と曹達灰汁等であります、水には石鹸の一部の固まつてしまふのと、二種があります、即ち軟水と硬水との別で石鹸のよく溶けた水で洗へば、垢がよく落ちるのです、それであるから硬水も、或方法を用ゐて石鹸をよく溶かすやうにしなければなりませぬ、其方法の極めて簡單なのは、之を沸騰させることです、而し硬水の或種類に因つては、わかしただけではまだ十分に石鹸を溶かすことは出來ませぬ、此樣な水には曹達を入るゝことが必要です、若硬水のまゝ用ゐたならば、垢も落ちず凝りたる石鹸は全く無益に廢物となつて仕舞ふのであります、それ故少しの手間で沸して用ゐたならば、却つて大きな經濟になります、又此樣な考へのない人

は水の中へ直に品物を入れて、後から石鹸をつけたりソーダを加へたりしますが、これでは垢が先へ地質へ浸み込んで、なほ落ちなくなります、故に洗濯をするのには、先づ石鹸なり曹達なりを溶かした水を作りて、偖後其中に品物を入れなければなりませぬ。石鹸は物によつては軟石鹸を用ゐますが、普通には先づ例の洗濯石鹸でよし灰汁は平常から用意をしておくべきです。次に品物を入るゝには、無暗に盥に一杯に入れぬ樣十分洗ふべき場所を殘し、又水の温度は始から終まで餘り變りのなき樣注意せねばなりませぬ、夫故熱い湯では、仕舞まで同温度を保ち難いから寧ぬるい方がよろしい、序に洗濯物を前の晩から浸け



てお く事は、極汚れたものは格別其他は大抵は浸けぬ方がよい樣です。

是から各々地質や汚れ具合に就ても洗濯の仕方を、一々述べることゝ致しませう。

◎絹と木綿の洗ひ方

絹布は白色の石鹼三、蜂蜜三、燒酎二十の割合に混じて、切を張板か何かの上にのせて、柔かなブラシに此液を付けて、そく／＼と表裏兩面共摩擦りて、其後で清水の中に一時間計浸けておいて微溫湯で濯ぐのであります、それから絞らずに乾し生乾きの時に、餘り強くない火熨斗をかけますと、全で新らしい物の樣になります、若材料のない時には豆腐の汁でもよし。

綿布、麻布の類は石鹼を溶かした溫湯で、よく洗ひ能く濯いで乾すのです、若色の出るものならば明礬か酢を少し加へて、餘り揉まぬ樣に洗ふのがよろしい、そして乾す時には陰乾にすれば、色の褪るのを防ぐ事が出來ます。

◎濯ぎ方の心得

凡べて洗濯は濯ぎが肝心で、これにはやたらに水ばかり多く使つて、ざぶ／＼やつても決して落ちるものではありませぬ、例へば彼の艦中の水夫が洗濯をするには、三のバケツを用ゐて卅分間に十五人分百枚餘りのシャツやヅボン下を洗ふのです、其洗ひ方は先づ最初一つのバケツにて悉皆洗ひて、第二のバケツでゆすいで、第三のバケツで濯ぎ上るといふことです、其乾してあるのを見ますと、誠にまつしろで清潔に洗へてあります、實に其分量を一枚に割りあてると、僅に三合位にしか當りませぬ、其故洗濯といふものは强ち水ばかり、澤山用ゐたとて落ちるものではありませぬ。

◎フランネルとレース

フランネルは微溫の石鹼水を作りて、之にソーダ少許を入れて振り出すのが宜しい、板の上で摩擦てはいけませぬ、こすると纎維を損ずる洗ひ上げた後はやはり絞らずに乾して、稍濡れて居る内に火熨斗をかけます、其時白き物ならば白木綿を上にあてゝかけねばなりませぬ、小切ならば他の切の間に入れて濕氣をとり

てほします、若色物であつたならば、よしや色は出ずとも白色の物と共に洗つてはいけませぬ、それは抜けて水中に浮いて居る纎毛が附着するからです。

天鵞絨はバタ或は胡麻油かアンモニャ水を切に浸して、すりて後テレビン油の中に入るゝのです、次に湯氣を通して毛を立たせます、此時には下に木綿をしき、ブラッシで毛をおこすことを助けると早くよくなります。

レースは德利にまきつけ、其上から又白い麻の切をまき、糸で結び石鹼を水でといた液に、一日一夜ぐらゐつけて上から切で德利を押すやうにし、其上から又石鹼水をとりかへ、其後冷水の中に入れて石鹼をふり出し、次にアラビヤゴムと藍粉とをませて浸して置いて、後巻いたのを解き、切の間に挾みて弱い火熨斗を掛けるのです。

手袋は牛乳に炭酸曹達を交へ、フランチルに此液を浸し手袋を手に嵌めて、それにて擦りて洗ひ生乾の時に竪横をよく伸ばすのです。

物によりては必しも水の中へ入れずとも、塵芥のつきし時などは、ブラッシ或は絲瓜天鵞羅紗などにて擦ればよろし殊に毛のものに垢の付いた時などは、温飩粉を付けて擦りて拂ひ落すのも一つの方法です。

◎乾し方の心得

次に洗濯物を乾す時に注意すべきは、必竿をよく拭ひて悉皆皺を伸して、仇皺のつかぬ樣氣を付けて、特別の物の外は日向を撰んで、早く乾すのがよろしい、白い物は殊に日向でないと眞白になりませぬ、又糊を付けるには白地には米糊（或は之に白玉粉を加ふるもよし）黒地には鹿角菜をよく溶いて、裏からむらのない樣に付けるのです。

乾いた後で取りこみて、後は霧を吹いて能く皺を伸して、物によりては弱くない火熨斗を掛けて、疊みつけ押しておくのです。

◎疊み方の心得

凡べて衣服の類を疊む時には泥や塵をよく見て、絹物等は天鵞絨、羅紗にて取り、洋服等はブラッシにて

擦り、和服は振ひて後疊み付ける事が肝要です、紋や襟等は必紙を充て翌年迄仕舞ふものは、殊に注意し度度用ゐた物は、必洗濯してしまはなければなりませぬ、又全體を洗ふに及ばぬ物はかけ襟だけ洗つて置くことです。

◎汚點ぬきの心得

凡そ汚點を拔かうとする時には、第一何によりて汚點ができたかといふことを、よく調べて其原因に應じた處置をしなければなりませぬ、大抵は直に洗へば落ちますが、さう行かぬのもありますから、左に其拔き方を申しませう。

汗　はアンモニア水で洗ふがよろしく、もし古くなりたらば蓚酸がよろしい、併しこれは一寸間にあひませぬから、簡便な法は石鹼を其部分へぬりて、暫らく日陽へ出しておいて後で洗ふのです。

水　の汚點は其布の糊の一部分が、落ちた爲に出來るので其周圍の糊氣をも程よく取り去れば目立ぬやうになります、されば汚點のところと其周圍とを少しぬらし、西洋紙を其上にのせ火熨斗をかけるがよろしく。

血　は冷水で石鹼をつけて洗ふのがよろしい、又はふくみ水で洗ふのも宜し。

墨　は飯粒をすりつけて洗ふ。

インキ　はなるべく早く御洗ひなさい、直ぐならば石鹼水で落ちます、さうでなくば稀鹽酸で御洗ひなさい、或はレモンの汁をつけて其上に鹽をふり、日陽におき二三遍くり返へせばおちます。

ペンキ　は牛の脂をこすりつけ、揮發油で洗へばよろしい、又はイーセルでもよろしい。

泥　は澤山つきて居たら先づそれをとり去り、水で洗へばよし、もし其で落ちなかつたならば、卵の黃味で洗へば落ます。

油類　は凡べて揮發油で洗ふがよろし、若落ちぬ時はアンモニア水で洗へば落ちます、車の油ならばテレピン油で洗ひ、揮發油と卵の黃味をませて上にぬります。

果物液汁　は盥の上に切れを張り、汚點の部分へ熱

湯を薬鑵の口から注ぎます、汗も直ならば此仕方でとれます。

酒　はぬれて居る中に、灰をかけ乾いた後でとればよろしい、又は烟草の烟を吹きかけるともあります、汚點になつてしまつたならば、豆の煮汁で御洗ひなさい。

錆のついたのは、蓚酸を水に溶いて御洗ひなさい。

煤煙　は揮發油の中にひたし海綿でこすり、其後に揮發油と卵の黄味とをまぜて、温めたものをぬります。

尿　はアンモニアにて又は古くなりたらば、蓚酸で洗へばよろし。



黐　は大根のしぼり汁でおちます。

蠟　はあつ灰でとれます。

◎張物についての心得

絹布或は多くの他の布を張る時には、籡を用ゐますが、通例は板張にします、張板は初めによく拭ひて、切の布目の曲らぬ樣竪横十分伸して張るのです、之に用ゐる糊は生麩、布海苔、米糊等でありますが、此糊を用ゐるのは、能く天氣を見計らひ、何れもよく漉して、糊糟の付かぬ程にし、布の裏より付けるのであります。

手軽に出來る 子供の洋服

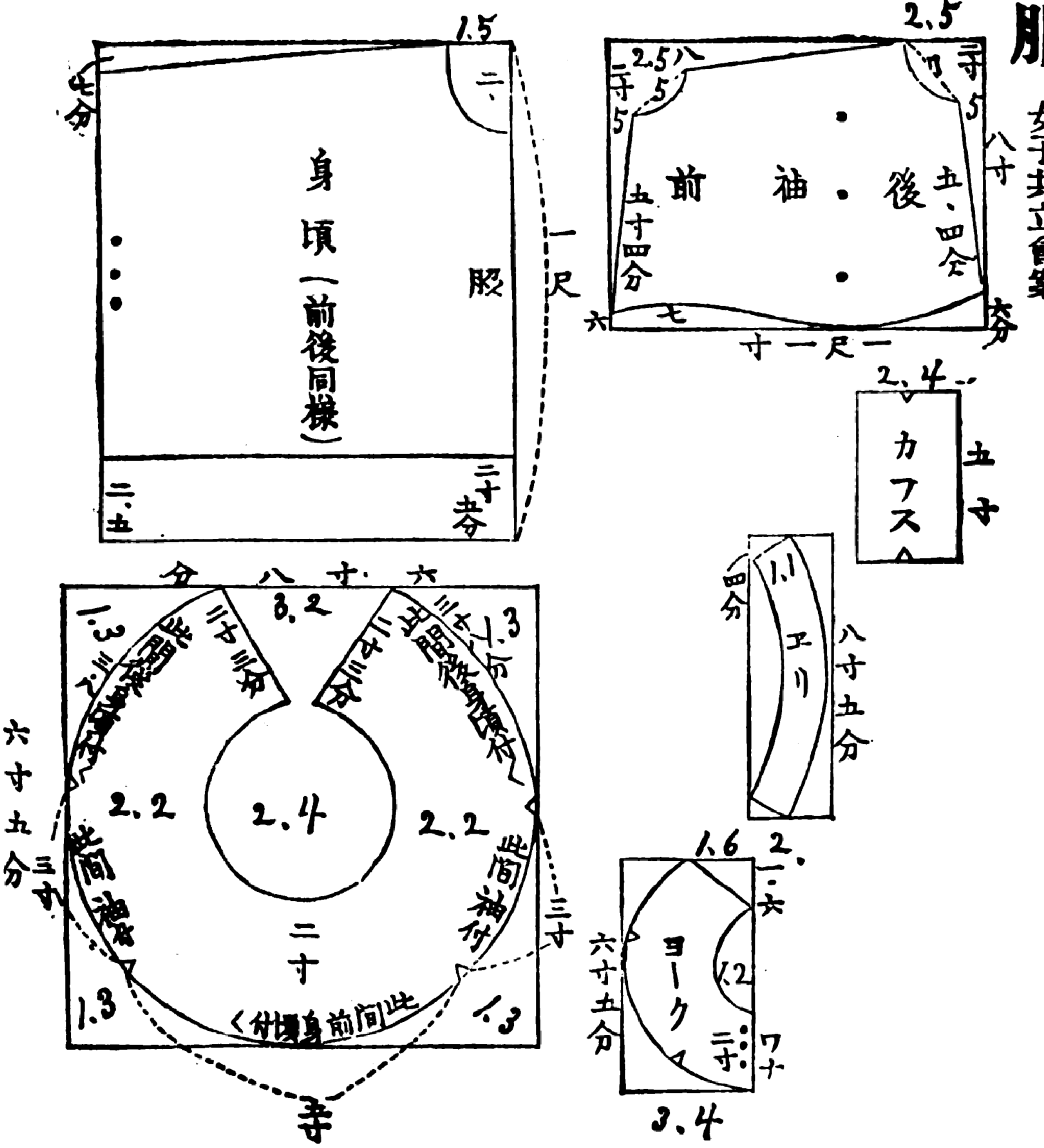
女子共立會案

少女用くりぬき丸ヨーク

此形は、當歳から五六歳までの女兒に用ふる上着で御座います。此服は、袖及び身頃にギャザの多いのが一ツの飾りとなつて居ますから他の服よりも、片地が多く要ります。地質は、普通、モスリン、ケンドン、麻、縮緬、更紗、冬ならば、ネル、セル、カシミヤ等を用ゐます。用布は四五歳兒のために、二尺巾六尺を要し、二歳増しに四五寸づゝ加減致します。

△四五歳用形紙の拵へ方

此形紙を拵へるには、先づ左の通りの寸法で、正しい四角の紙を五枚拵へます。



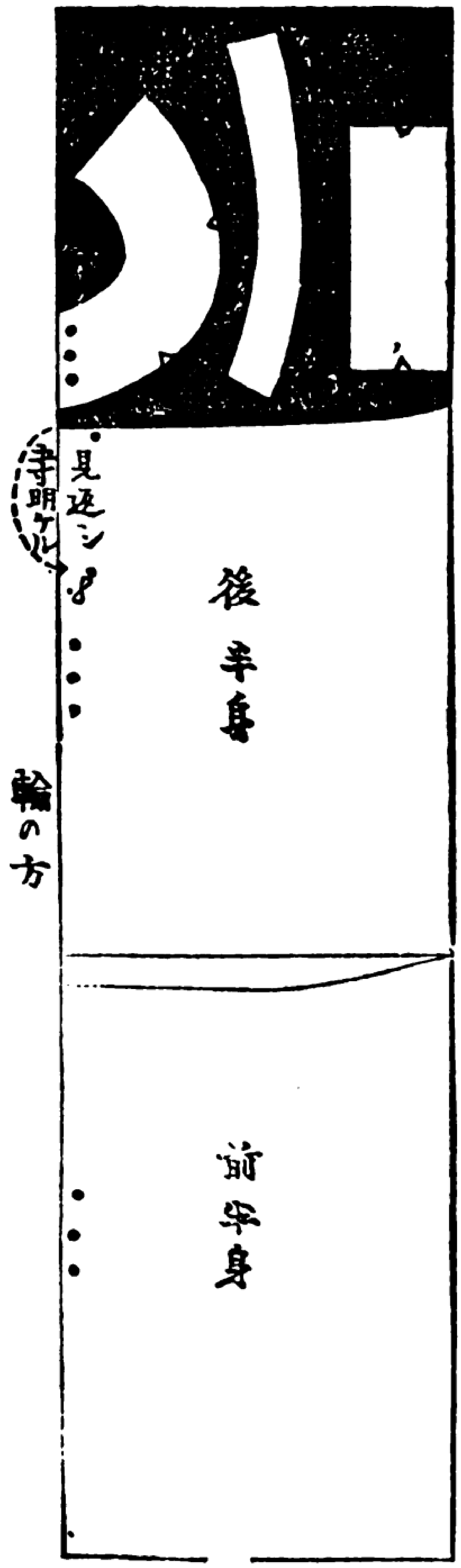
夫より、各所々々を右の寸法によつて正しく裁ち切り、各所の印は落ちのないやうに添く穴をあけて置きます。此印の説明は前號に致して置きましたから、本號には書きます。

△切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

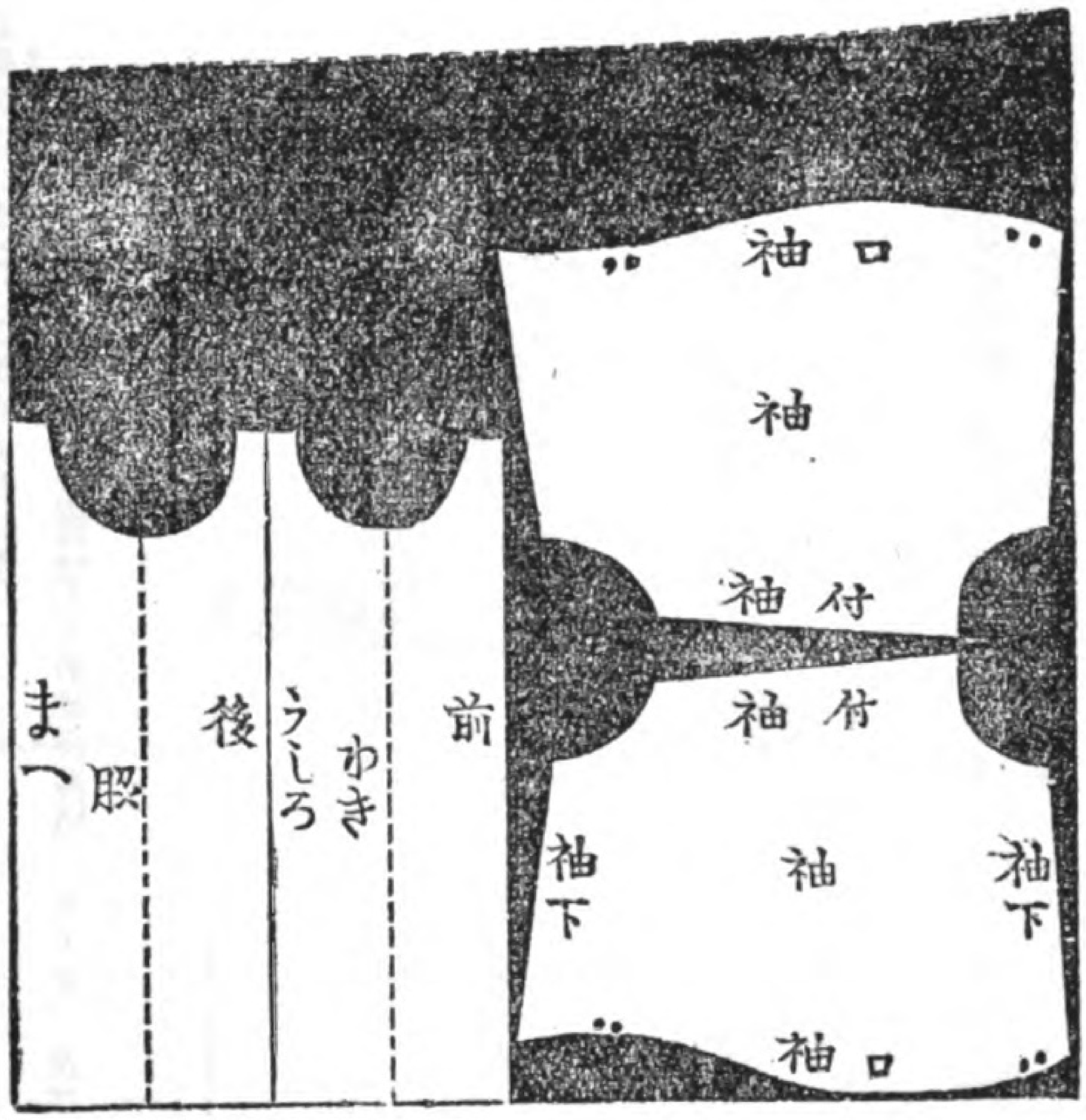
さて形紙が出來ましたら、先づ左の通り切れを二ツ折にして、其のワナの方へ形紙のワナの印のある所を宛て、正しく針をさして裁ちます。

此身頃は前後同様ですから、形紙には一ツだけ拵へて置きましたが、切れで裁つ時にはワナで二枚裁ちます。但し二尺巾では巾が足りませんから、此の場合には必ず兩脇で巾をはぐ事に致します。(足し切れは後で裁つ事)。倘左圖の通り衿及びカフスを裁ちます。

二尺巾を二ツ折にして前後の身頃、ヨーク、及び小物を裁つ圖



斯様にして、前後身頃、及びヨークを裁ちましたなら、切れを擴げて左の通り兩袖を取り、其巾の殘りで身頃の足し切れを裁ちます。但し此服は他の服と違ひ脇が眞直ぐですから、脇をワナにして、丁度襦袢の様なものを拵へます。



△縫方の順序

先づ第一に袖を縫ひます。此れは、袖の口先きに印から印までギャダ縫ひをなし、カフスの丈に合して縮め、此れと縫合し、此の縫代はカフスの方に向けて表から飾ミシンをかけ、最後に袖下を袋縫ひに致します。

夫より後身頃の見返しを折り、見返しの分だけ重れて正しくとめミシンをかけ、次に前後の巾をはぎ、袖を付けます。此時袖下の縫目は脇より七分位前へずらして付けます。夫より後ヨークに眞直の見返しを付けて置きます。次に、後身頃の見返しから見返しまで、袖も身頃も打通しにギャダ縫ひをなし、此のギャダ糸はヨークの廻りに合して絞り、直ちにヨークと縫合します。此時は十分注意して、袖付の縫目とヨークにある切り込みの印とをよく合し、前後の間違ひの無い様に致さなければなりません。夫より衿を付けます。此れは、先づ衿の裏表を合して其の短かき方を縫ひ、折りは表の方へ向けて飾ミシンをかけます次に此の衿



の表一枚をヨークの衿廻りに縫つけ、縫代は衿の方に向けて飾りミシンをかけ、裏衿はまつり付けます。夫れより裾の平縫けを致します。着丈は各自の膝頭までの寸法に致し、其の殘りを折込んで置きます。但し此の裾の折込みは、是非共二寸以上なければ見苦しう御座います。若し切れの短かい場合には、裏をつけて矢張り其れだけ折込みのある様にして置きます。

最後にボタンを付けます。此れは衿に一ツ、ヨークに二ツ、身頃に一ツ、都合四ツ付けます。

猶記事に就て御質問の方は左の處へ御照會被下度候

本郷區湯島天神町一丁目一番地
女子共立會

尙來る七月廿五日から向ふ二週間、右女子共立會内で子供洋服の講習會を催します。

お伽祭を見る

秋の雨
夢の人

二人で東京座のお伽祭りを見に行く。開場は三時だと云ふ。空が曇る。降る。光る。鳴る。と木戸が開く。終に二人は這入つた。幕は三越からのが。人は土間に少しと。棧敷にちらほら。柄にもなく棧敷に坐つて、二人はをかしくない顔になつた。

何處かの小父さんの説明がすんで幕が開いた。壹番目は兄弟星。青柳館の奥庭の體。

あ「本式だわ、肩が凝らなくていゝ。」ゆ「苺を食べるやうだ。」會話はとぎれて舞臺に眼が向く。

ゆ「隨分亂暴れ、生れたばかりの赤ん坊を、生き埋めにするなんて。」

あ「どつちにも、額に星がある人ですれ。」ゆ「だから魔性ですと。」

あ「殺せつて命令けたのは誰れ?」ゆ「御婆さんだつて。」あ「ぢや鬼婆れ—。」ゆ「どうだか、見て居よう。」

二子の埋められた柳の根から二つの珠が飛び出して天上する夢の人吃驚して。

ゆ「何うするんだらう?」あ「あッ、これだ。きのふ妹が買つたお伽噺で筋を見てよ。」ゆ「何んなの?」あ「何んでもれ。」と秋の雨は簡單にさゝやく。

青柳家に祟りがある鬼女が、後室の朽葉に乘り移つて青柳家の二人の嗣子朝星太郎、夕星次郎を殺さうとした。一度は埋られた、が、もと／＼この子達は星の精なので、現實を越してとある海に落ちた。それを網にかけたのが漁師の鮎藏父子。金の魚を掬つたと喜んで柳の露で育てる、所が朝日に照されて人間に直る。これからこの子達は艱難の末とう／＼青柳家に乘り込み、鬼女を退治する……。

ゆ「それで目出度々々々の寸法れ。」あ「ちよつと、あの床浄るりをお聞きなさい。」ゆ「何處までもお伽式れ。」

つゞいて、「鬼だまし。」「龍宮の御使。」金太と花ちやんが、可愛いかつた。海月の六法には、見て居る者まで、骨をぬかれて、笑ひ崩れた。

ばつと三階の窓が開く。

あ「雹も意地が惡いれ。」ゆ「科白がまるで聞えなかつた。」あ「あれぢや三越や博文館の賣場もれ。」

行つて見ると雨漏りが夥しい。店はすつかり御終いだ。巖谷の小父さんは、先刻から頻りに奔走して居られた。が、ばつたり廊下で行き會ふ。なんだか、小父さんと呼んで見たかつた。

入りはきのふ一昨日の三分の一と、いふ人もあつたが、自分等の眼から見ると、十分の入りと鑑定する。小供四分の大供六分。この大供さん達の白髪はきつと染められたらう。とにかく、自分達の年もたしかに五つは逆戻りしたと受合ふことが出來る。

最後に番外の餘興、桃太郎の除幕式が初まつた。背景は日比谷らしい。廣告やに假裝した竹貫の小父さんのよく饒舌つたこと、巖谷の小父さんが反身になつて氣取つたこと、桃太郎さんの可愛いかつたこと。細い聲、黄色い聲、銅羅聲、飛び入り聲、とりまぜての、「桃から生れた、桃太郎は」頗る愛嬌であつた。

ゆ「巖谷の小父さんは、踊つてくれないの。」あ「骨惜しみかしら。がつかりだ。」ゆ「先刻の雹も私等の涙よ。小父さんが踊つてくれぬから。」あ「愚痴はやめて、この記も打出しとしよう。然し小供方の爲めに祝福する。」ゆ「小波の小父さん萬歳!!!。」あ「少年少女讀者萬歳!!!」時に午後九時。

▲日本音樂協會夏期講習會　神田區錦町三丁目十一番地日本音樂協會にて來る八月一日より向ふ二週間第六回夏期講習會を開く、音樂科教員、該教員志望者、並に東京音樂學校入學志望者、其他音樂研究志望者は男女を問はず入學を許す、科目は、唱歌、樂理、ピアノ、オルガン、ヴアイオリン、和聲學等、講習料は一科目壹圓五十錢、二科目以上兼修者は一科目を增す每に壹圓を加ふ、但し申込の際三分の一以上の講習料を前納すべし、講師は山田源一郎、陶糸子、中田章、澤田柳吉、坂本その子、田中いち子、村松秀子、吉澤重夫の諸氏なり。

▲育兒日記 親ごゝろ（小原賴之著）　著者は前宮內省侍醫にして、小兒科に於て名高く、而して極めて子煩惱の人なり、本書は老母が年齡の異れる孫十餘兒の平生と、其の病める時の出來事とを、日記體に記せるものなるが、其の多年の經驗、最新の學理を經とし、子を思ふ親の眞心を緯とし、最も平易に記述せられたれば、育兒に注意せらるゝ人々の好き參考書たると共に趣味もなか／＼に盡きざるものなり。定價金壹圓五十錢、神田區美土代町三丁目文陽堂發行。

▲日本昔噺（巖谷小波編）　編者が日本昔噺の編纂に着手せしは今より十七八年前の事なり、爾來編を重ぬる事廿有餘、版を重ぬる事各編二十版內外、茲に更に改訂を加へ、之を袖珍の合本として本書が出でたるなり、內容は例の桃太郞、舌切雀、文福茶釜等、子供の最も面白がるもの二十四をおさめ、從來の單行本に比して讀む上にも、扱ふ上にも簡便な謀りあれば、單に子供用に止らず、家庭用、學校用、乃至旅行用として舊來のものに優る事言ふ迄もなし、定價金八拾錢、博文館發行。

▲特許 衣裳色あはせ（大原鉦一郎考案）　衣服の縞柄の撰擇又は色の配合がよく其當を得ると否とは、直ちに其人の品位をトし、趣味の高下を窺ひ得る程のものなれば、其の新調に際しては、羽織と着物、着物と襟、或は帶表地と裾裏などの配合には深く留意する事を要すれ共之を一々布帛の現品に就て試むるは實際上困難なり、本色あはせは此の必要に應じて案されたるものにして之を用ふれば容易に色彩配合の可否を試驗し得べし、卽ち裾或は襟に擬らひたる紙の切形三十枚許（之れは後には追々增加する由）を各々別種の色に染めたるものなるが、今或る表地に如何なる裾が適當はしきか、或は此の着物には如何なる襟が好きか、を見んと思はゞ、其の表地なり着物なりに相當する、色札を取り、又別に裾或は襟にせんと思ふ色札を取りて其れに當てがひて、裾廻はし或は襟の形を造つて見るなり、此の切形はたゞ裾と襟との形の出來る樣造られたれども、其他羽織と着物、或は帶、羽織紐、ショール等の配色を試みる事も難事にあらず、否更に之を學校に於て裁縫、圖畫、手工科の配色教授に用ふるとしても却々妙なり色札には一々裏面に名稱を附しあれば是又頗る便利なり、此の名稱は人によりまちまちなるが、本色あはせは三越吳服店に用ふるものに依りたりと云ふ、定價金拾五錢、日本橋區駿河町三越吳服店發賣。

▲新案特許 村島式裁縫用掛針　從來、裁縫に用ゐらるゝ掛針は通常の縫針に糸の輪を掛るものなるが之れでは甚だ不便なるのみならず、仕事を急ぐ時などやゝもすれば手を傷つけ或は掛け忘れて危險を釀す事あり、此の新案掛針は右樣の心配は無く、其上待針を兼ねて、絎方返し縫、一針ぬき、折目の付方、衣服の裏表合せ等誰れにでも造作なく使用し得られ、手數を省き最も輕便なる所あり、新案者は本所區長岡町四十三番地村島英子、針店、糸店、雜貨店にては何處にても販賣す、定價金八錢。



和歌

三宅花圃女史選

（天）夏海邊　四日市　水谷靜子

汐あまむためにつくりしやとならむ　はま風すゝしみはらしの庭

評、かゝる宿にこそ夏を過さまほしけれ。

（天）首夏殘花　金澤　壯登子

珍らしく夏のはじめに匂ふかな　青葉のかげの花の一もと

評、趣向珍らしげなきもよし。

（地）歸省　伊勢　佐々木らく子

すこやかにあり經しのみを苞にせむ　かざる錦もまだき我身は

評、こは何の歌の一と日こそ。

（地）杜若　神戸　足立ゐい子

かきつばた咲し澤邊にけふよりは　家鴨へだつる垣を結ひけり

評、さながらのさまなるべし。

（地）雨中新樹　本郷　準子

雨すぎむしばしの宿を瑞枝さす　木の下かげにもとめけるかな

評、これも耳なれたれど無理なる趣なきがよろしうて。

（人）舊友におくる　本郷　平井美代子

文まなぶ机の島の友ちどり　つばさならべし昔こひしも

評、うまくよまれたり。

（人）避暑　河内　田中八須子

あつき日もいつしかよそにくれ竹の　しけれるやとのふしよかりけれ

評、よくある趣向なれどこれも手練の妙なるべし。

（人）五月雨　神戸　足立あさ子

川添の柳の枝に水越えて　玉藻かと見るさみたれの頃

評、さる氣色もあるべし。

（人）折にふれ　長岡　小坂都眞子

つばくらの今年まうけしひなのかず
一羽おほきもうれしかりけり

評、幼なめきたるがすてがたし。

選てもまたし侍りつれど古歌あるひは前號の選歌を全くそのまゝにかきておくらるゝ人々の多きは如何なる御心かとまどはれ侍り草野集桂園集の中のあるひは近世の物をしかも水くきのあと見事にしたゝめ給へるにはふとはからるゝも多けれどかくまで手跡の美はしきにはひが心もてしつべくもあらぬ心ざまのやうに思はれてまどひくくえりにしも侍るなれど中にも古今百人一首などに其のまゝなるはあまりなるべしいかでみづからかへりみ給ひてよ。

花圃しるす

佳調

姫百合　前橋　宮内りき子
のきはふく風に匂ひぬ君か家をめくりてさけるひめゆりの花

夜田舍　紀伊　河村いく子
かすかにはうすの音たかくきこゑけりひらののあたりほたるとびつゝ

藤　千葉　白井ふみ子
朝風に心地涼しき山路の思はぬかけに藤咲きにけり

女學生　靜岡　中村しか子
たくひなく咲出にけり大御代の數の庭のやまとなでし子

水鷄　豐前　賀來文子
少女子が小扇をふりて螢追ふいさゝ川べに水鷄なくなり

折にふれ　山口　倉光よれ子
見かへれは手向の花のほの白うほの立つ香のけふりゆらきぬ

思はじと　陸前　今野三千世
思はじと口にこそいへ筆とれば先づ書かるゝは君が名にして

胡蝶　相模　柳川すゞ子
ひらひらと風に舞へるは雪ならて花を尋ぬる胡蝶なりけり

山里の花を見て　肥後　熊野松子
立ならぶ松にならびて山櫻花の盛りを千年までみむ

我子小學校に入學の日よめる　福岡　内野ひさた
今日よりは敎の庭に咲きいでゝ外國までもにほへなでしこ

常宮竹田宮の御婚儀を祝き
奉りてよめりける　筑前　吉田雪子
つるかめのよはひも添ひて榮え行く千代田のおくの竹のみその生

山吹　島根　櫻井利久子
蛙なく池の汀の春雨にぬれてやうつらふ山吹の花

櫻　本鄕　若子
山の井に閼伽の水くむわか僧の衣の袖に散るさくらかな

殘鶯　大和　三谷歌枝
水くむと卯の花に踏わけ行けは聲も淋しく鶯のなく

鶯　香川　さくら
再ひは聽しと患ふなさゝ生にまたふしなれぬ鶯の聲

友別　山梨　田邊喜美子
わかるゝは道のはしめと行く君をなくさめつゝも袖しほるかな

九十五の老婆みまかりけるを　長門　岩倉律子

もゝの花咲くを待ちえで今こゝに消ゆるも惜しき庭のあは雪

失題　下總　紫鶴羽

青葉かげつり床の上の花持ちて夢に笑む子に笑みさそはれぬ

山寺の鐘の音をきゝて　群馬　桂木秀子

ちる花のはかなき身とは知りつゝもいとゞさびしき山寺の鐘

待郭公　京都　渡邊ふさ子

卯の花は今さかりなりほとゝぎす初れまたるゝあかつきのそら

折にふれて　岩代　横田孝子

山高み登らんすべもあらなくに只いたつらにあせる思かさ

露踏み分けて折りしにやあらん、菜の花の一もとを髷にさせる大原女が後を、二つ三つ胡蝶が追ひ來る樣を畫ける圖を見てよめる　下野　吉村美根子

足なれし京へ三里の路なから粗朶いと重き菜の花の道

失題　岩代　横田愛子

まとゐして語らふ間さへ樂しきを窓には梅のかをる夜半かな

藤の花　赤阪　田中常子

天の川たぎり落つると眺めしは松にかゝれる藤波の花

離別　赤阪　伊藤靜江

何となく胸には思ひの燃ゆれとも無言に泣きて別れ行く後

螢　豐前　賀來ふみ子

世のさまのけがらはしさにみそらなる月の涙と散る螢かな

蛙　神田　西村直子

賤の男がかへすあらたのにごり水いつよりすみてかはつなくらむ

舊交を懷ひて　千葉　大野愛子

折にふれなつかしの君しのばれてそゞろたのしき夕月の窓

蛙の聲を聞きて　新潟　古澤ふさ

小田に歌ふ蛙の節のいと可笑し田植の人の歌を眞似てか

折にふれて　河内　西村千代子

ながめやる西の端山に日は落ちて歸路てらす夕月の影

貧より榮　茨城　石田あさ子

もの思ひせしも昔とはやなりてやすく世をふる事ぞたのしき

金魚　京都　石谷眞貴

うちつけに涼しく見えてすきとほる玻璃の小瓶のにしき魚かな

郭公　京城　みどり

古さとに渡せる夢のうき橋も中絶てなく山ほとゝぎす

獨旅路　和泉　津田濱子

さらぬだに一人旅路の淋しきを何處ともなく猿のなく

夕ぐれ　小石川　小笹千代子

花うりてかへる少女が草笛のみそらにひゞく野路の夕ぐれ

洋邊時鳥　靜岡　むらさき

嵐山を月に越えむか時鳥濤のとまやのあけがたの聲

螢　信濃　光子

夏衣かろき袂をあさ澤にぬらしてかへる螢狩かな

初夏　京城　大津加紅

朝風に露ぞこぼるゝ廣庭の若葉のにほひ窓にみちくる

木蓮花　信州　常盤蔦子

東の空に初雷とゞろきてぱつと開きし木蓮の花

失題　遠江　清子
田舍路の小雨そぼ降る夕まぐれ小田に蛙の聲聞ゆなり

島　埼玉　大熊嘉壽子
わたの原さしてゆくへは遠けれとなり〳〵島の見ゆる嬉しさ

失題　北海道　久保雪子
かへり來る船の櫓の音の近くなりて夕煙たつ磯の村かな

霞　臺灣　篠原壽惠子
かこめて吹きなばとばんちぎれ雲西に東に追ひぬ追はれぬ

失題　神田　矢島とみ子
うつくしき人とならびて青葉かげ物語り來れば風も涼しき

若鮎　千葉　ゆり子
行く水の流れ涼しき玉川の卯の花がくれ若鮎群れ行く

偶成　信濃　平林むつゑ
君が宿此水上にありてふを聞きてなつかし水のながれも

名所新樹　茨城　榊八重子
ほとゝぎすその一聲に忍ぶかな青葉しげれる櫻井のさと

暮春　水戸　榊いち子
消し間にあはれ今年も春ふけて散りゆく花に思ひみだるゝ

行く春　遠江　石野豐子
ほとゝぎす二聲三聲おとづれて梅雨の夜は早更にけり

節句　名古屋　中島とみへ
吹く風にまはりたゆまぬ矢車もあるしまふけの一つなりけり

螢狩　肥後　野口芳子
櫻咲く頃より待ちし螢狩りいさや行てみん里の小川に

水鷄　愛知　榊原愛子
月すめるいさゝ小川のおもだかにこゑもにほひてくひな鳴くなり

稚子　備後　黒木於才
としとへはかたてひろげて指二つ折りてしめしぬ顏まろき稚子

夏季の休暇に田舍へ旅しける折よめる歌の中に　京都　佐久間りつ
千町田の稻葉をわけて露をふくみ吹き來る風の今朝の涼しさ

亡き姉君を思ひて　神奈川　岡部あい子
姉君とともに蒔きにし朝顏のはなのさかりをひとり見るかな

汽車にて濱寺をよこぎりし時　津の國　濱花
こゝのみはゆるく車のうごけかし眺めなかしき濱寺の里

日和山に遊びて　城崎　くみ子
あら波に眺めなかしき日和山ゑにも歌にもつくされずして

失題　讃岐　大川松榮
湖添ひの小村涼しく黄昏れて夢さながらの月ぞ清けき

失題　香川　森久野
沖遠きはなれ小島の松の上に影うすれ行く有明の月

瀧　長野　清水あや子
卯の花のかげもせかるゝ瀧つ瀬の水煙り立つ音ぞ涼しき

夕立雲　岩代　丹治いう子
雨の音を外山の松にのこしおきて尾上すぎゆく夕立の雲

螢　竹原　堂面幸子
そゞろあるき川添小道日はくれて蘆の枯葉に螢とぶなり

五月雨　長野　あやめ子
淋しさにいもとせつれて門に立ち父まつ夕べ五月雨のふる

折にふれて　神奈川　小川房子
なき父をしのぶのきばにはからずも音づれ來たる時鳥かな

田上螢　武藏　荻野くに子
居ながらに小田を飛びかふ螢みえて夕涼しき川添のやど

田舍の夕　豐前　玉漁吹碣
竹笛の聲する方にわけ行けば牛にひかれて歸るわらんべ

琴のしらべ　同　同
徒然に小琴しらぶる折しもあれ垣根の外に誰か笛ふく

失題　四日市　石野秋子
涼しさに瀧のほとりに休らへば水音破ぶる蟬の諸聲

蜘蛛の巣にかゝりたる薔薇の花を見て　豐前　賀來作
さゝがたは蛛かとや見ん花いばら糸にかゝりて風にゆらぐを

水鷄　埼玉　宮倉歌子
我門のいさゝ小川の柳かげひるもをくらく水雞鳴くなり

蟬　埼玉　宮倉仙子
朝露に日影匂へる楢かしはしくろゝ蟬のこえそ涼しき

初夏　水戶　榊八重子
信濃路は青葉の雨に人たえて雲のみわたる木曾のかけ橋

螢　信濃　小島みちえ子
五月雨の名殘も晴れて浦澤にほたるとぶなり夏の夕暮

郭公　靜岡　河合象子
蠶かひしてまぶしもるよのあけかたにいれぬ友とやなくほとゝきす

失題　姬路　尾田三三子
ゆく春は花時過ぎて嫁ぎゆく女の如し人の身なれば

待子規　長野　荻原吉子
短かしと人はいへとも子規待つ身は長し水無月の夜も

古寺　近江　中川はな
榮えにしはちすの池の水あせてすゝき波よるのへのふる寺

紫蘇　小石川　のぶ子
棒枯れし鉢に生ひたる花紫蘇の若葉は日々に廣ごりて行く

折にふれて　神奈川　飯田白露子
うらふれの身をは語らむ友もなし家はいつしか畑となりつゝ

百合　大阪　富永かをる
ゆく水にすがたうつしてさく百合の花を慕ひて蝶やきつらむ

連日早苗　下谷　田代糸子
ふしたつと睫の少女かいそきつゝ日をかされてもとるさなへかな

他鄕の姉を思ひて　大阪　財前千とせ
すきまもる琴のしらべをきくだにもそゞろに君のなつかしきかな

失題　牛込　章子
くれなゐのいばら一花返り咲きてはり物すなる乙女やさしき

藤　山口　岩倉梅子
行く春を惜しみてかゝれ藤のはないとなかき日のなくさめにみん

舊友の尋れくれしにつきて　橫濱　宇佐美文子
年ふれどかはらぬものは交りも親しき友の心なりけり

留守なる友の許にて　大分　南山喜代子
道すがらつみ來しげんげ一つ／＼きみまつひまにたばね了へけり

鈴蟲　大阪　財前千とせ
鈴蟲のちいさき身にも何や思ふなが／＼し夜をなきあかすかな

亡き友をしのびて　麻布　安井とし子

紅そうび咲けど散らむ君はわらす春の名ごりの風吹きくすせ

夏月　肥前　南　しな子

行水のながれてはやき水のおもにうつろも涼し夏の月影

失題　信濃　松尾節子

さらぬたにむかなしきこの夕心して啼け山ほとゝぎす

五月雨　豐後　加納豐子

書にうみ手業しはてゝ琴とれは糸の音さえぬさみだれのころ

梅雨　秋田　佐々木齋子

賤の女のときあらひ衣名のみしてほすひまもなし梅雨のそら

道邊柳　駿河　大瀧梅子

道の邊の風になびける青柳の姿を人の心ともかな

喜びの花　上總　芳子

いとのどに生ひし戀草み情の春の光に日を經ぬるかな

手紙のはしに　千葉　御園清子

おむ文とかたみの袖を緋き緒の箱にとどめて釘うたせけり

失題　上總　濱子

縫ふ針の一針毎に涙ある衣ともしらで君着ますらむ

夏月涼　近江　龜них富美

夏の夜の涼しき月にさそはれておもはす來つる岡の松原

初夏の池邊　岡山　貴志操

ため池のみきはの松のかげにより里のうなゐらつりあそびする

故郷菫　赤坂　矢澤民子

友はみな行方もしらぬふるさとにひとりすみれの花そ咲きける

失題　清國　小金井藤枝子

里の子か置む川瀨に來たれて若鮎釣るなり花の下蔭

山里　韓國　山里の白ゆり

さひしともつらきうき世のそれよりは心やすしや深山邊の里

逝く春　美作　香本公子

行く春のゆくへやいつく奈良の都春日のあたり月あはくして

失題　京都　四辻清子

ゆかしくて何とはなしにたちよりぬ琴の音もるゝうの花のやど

失題　下野　岡萩枝

水吹きし軒の窓に風見えて端居涼しき夏の夕ぐれ

さる夜　奥　齋藤紫古女

おほろ夜の野とふりくる花のもとに物思ふ袖のぬれにぬれつゝ

月　美作　松尾まき

なつかしき君と別れし葉櫻のその夜のかけに似たる月かな

山鳩　仙臺　小山田秋子

里川の小流ゆるく暮れそめて夕さびしく山鳩のなく

馬　大阪　水郡久の子

大君の御車引きて大路ゆく馬の幸ちこそうらやましけれ

琴　信濃　青木薫

わがおもひまぎれやすると琴とれば百合の露ちる燈火の前

早苗　紀伊　松島千枝

折々はうきたる苗もみゆるなりまだ植ゑなれぬならやましれる

失題　和歌山　松島百枝

村楢の辻そにきはしき夕まぐれ螢追ふ子らより鳥ふらし

藤　埼玉　香取うめ

街ありて下は賑はふ懸崖の崖ふき松に藤の花咲く

誰が聲（濱邊に立ちて）　横濱　荒井とく

松ヶ枝に羽衣ぬきし天つ乙女の御歌の聲かさゝ濱の音

初夏山遊び　　　備後　正木とら子

山深く辿り歩めばかなたより夏を知する時鳥かな

折りにふれて　　　備中　饗庭恋代

たらちねの眞白きみ手にいだかれて見し夜の夢の昔戀しき

奈良に宿りして　　　兵庫　性全峯子

春日野の淡き月見て母君とふるき都の夢がたりしぬ

夢　　　大阪　瀧子

おもほへずうれひさまよひたぎつ世のむかしの夢をゆめに見るかな

螢　　　千葉　壽々子

夕やみに影をうつしてひとつ飛ぶほたるに水のありと知らるゝ

山時鳥　　　青森　三浦愛子

笠はれて山ほとゝぎす仰ぐなり青葉に暗き山寺の門

夏曙　　　同　同

涼風にせゝらぎ細き小流れの淸水に消けし朝月の影

失題　　　小石川　千代子

ふりに降る梅雨晴れし大空に月をのこして雲の過行く

夢　　　京都　美智子

なつかしきわかふるさとの夢見しとかたれる友のはえしおもはよ

失題　　　廣島　加藤芳子

別れきて夜風身にしむ並木道楢にあはき片破れの月

水鷄　　　廣島　加藤しすい

水きよき小澤に月の影すみて聲もさやかに水鷄なくなり

失題　　　大阪　梅村波奈子

雨晴れて樹立涼しき夕まぐれ帆出多き海を見るかな

夏夜　　　尾張　氷室けい子

楢もる月影すゝし小夜ふけて蛙なくなり小山田の里

行路梅雨　　　神田　兒玉清子

朝またき大路呼ひゆく苗賣の聲もさひしきさみたれの空

藤　　　香川　森君江

川をおほふ松にあやふき岩角をめぐりて咲ける藤濱の花

失題　　　播磨　森蔭子

田植歌口誦みつゝ歸る子の赤き襷に夕さめほそき

失題　　　福井　吉田歌子

美くしきあまつ乙女や渡るらんくもゐに消さ虹のかけはし

失題　　　豊後　吉良靜子

野の川に細き雨降る夕ぐれもほたる狩する里の乙女子

折にふれて　　　青森　佐藤喜代

海山を遠くはなれて兄君のつゝがなかれと日ごといのりぬ

岩燕　　　牛込　とみ子

世のうきもつらきもつれと眠ふらむ荒磯に生えし岩つはくらめ

失題　　　遠江　鈴木みゑ

東繪圖や嬉し笑みして眺めては留守もる窓に春の夜たけぬ

旅にありて　　　磐城　猪股とし子

ふる里をいでゝぞおもひ知られけり海より深き父母のめくみを

ある夜　　　青山　鈴木はつ子

かなつればつめたき琴の糸きれて雲井ほのかにほとゝぎすなく

螢　　　香川　森君江

病む母の面やつれにし枕邊を照す螢の光さびしも

短文

〔甲賞〕

初夏

姫路　鈴木ふじ子

柿の木の下で洗濯をする。

バケツから清水を盥に入れると、白い泡が消えて、上の柿の青葉が鏡の様に寫る、後ろにはポプラの葉が風に動いて、キラ〳〵と輝いてゐる。

頭の手拭を一寸なほす、それから赤い小さな着物を靜かに押へて浸けると、妾の手が水に白く透く、其時の心持は何とも言へない、しばしいゝ心地だと思つて浸けてゐると、突然がサ〳〵と頭上に大きな音がする、と、青葉が二枚盥の中へ散つた、驚いて上を見ると、柿の葉越し眞鯉緋鯉が、一ぱい風をふくんで、右に左に揺れてゐる、か強く當ると、其度にガサ〳〵と鳴る。

〔甲賞〕

通ひ路

和歌山　松島千枝

朝露いとひ、袴の裾かゝげながら、日毎通ひなれし此の新川づゝみ、今日は少し時の早ければにや、いつも出遇ふ牛乳配りの影は見えず。

野薔薇白うにほへる彼方にふと妙なる聲の聞えし様なるに、時鳥もやと立ちとゞまりて耳すませば、道のかたへの苗代小田に、雨をや知らする、聲うちそろへてなく蛙のみいとかしまし、かなた板橋打渡りて右に折れし老女の三人連、心あへるどちの三井寺詣ならん足許輕く過ぎて行く、今としも褒美をもらひて、と打かたらふは孫の上か、風吹きいでゝ、さと立ちのぼる土けぶり、今ゆく人の後をかすめて。

〔乙賞〕

一ツ星

みどり

机によつて復習をする、ふと顔を上ると何時のまにと思ふ程梅の梢がこんもりと淺緑が美しい、目をそらして暮かゝる御納戸色の空を美しいとみつめる、と、キラ〳〵とダイヤの様に輝く星が一つ目に入る、私はいつも書に勞れた目でみるが、星はいつも必ず見える、星の光、淺綠、御納戸色、美しい配合だ、然し私は星の中から誰かが私の書に對する態度を見てゐるのではないかと思はれて、しかたがない、夜のとばりが下りて、空が紺青色になると、私の見る一つ星はよりよくキラ〳〵と輝く。

〔乙賞〕

結婚の前日

本郷　佐藤さち子



夫の日記帳を繙いて左の文字を見出しました。結婚の準備はすつかり出來た、只心はいそ〳〵として少しも落付かない、十五日と云へば明日である、招待狀も一日の朝早く手づから出して置いたし、着物も先月廿五日に三越から屆けてくれた、疊の表がへも立派に出來た外に是と云ふて忙はしい事もないのに、矢張り心が忙はしい、夫れでも、にこ〳〵せずには居られない、誰も櫟りはしないけれども、櫟られる樣だ、彼女は明日から僕を何と呼ぶだらう、僕は彼女をどう呼ばうかしら、お清！、清さん！　夫れとも、子ー清！、と思はず聲を出したのでそばに居た猫はニャンと泣いてかけだした。

乙賞

牧羊者

小石川　平塚彌重子

クローヴアーやチモセーなどで見渡す限り眞靑で、大坊主小坊主のちぎれ雲が遠い山の彼方に見える、今日は特別に氣持がよい、牧羊者の重ちやんは相變らず羊をそつちのけにして、小川に雜魚とりをしていたが、やがて水を掬んでやはらかい草の上に眠つてしまつた、とあつちこつちと呑氣さうに遊でゐた六疋の小羊は、重ちやんの傍に來て、皆まれをしてあたりをかこんで橫になつた、二羽の小蝶は花を忘れて皆の上をヒラ〳〵飛びまはつてゐる平和の氣は全く野をおふてゐる。

丙賞

園藝の趣味

前橋　渡邊松子

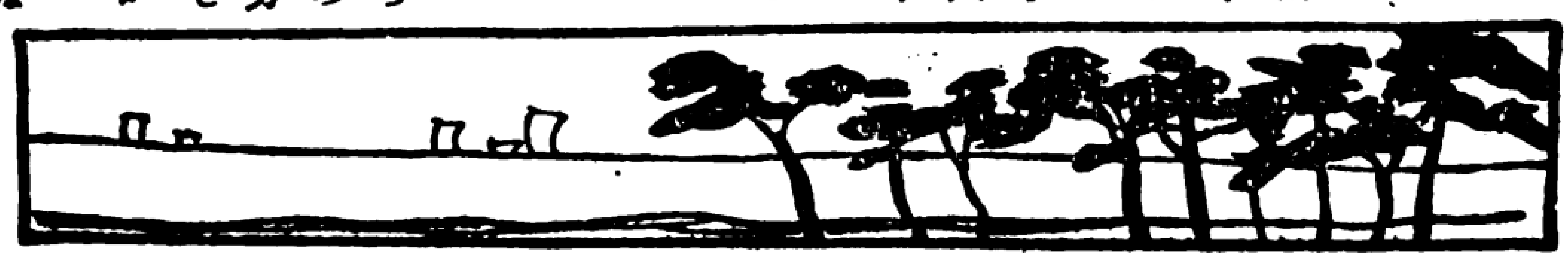
下女相手ではとてもやりきれぬから、近所の爺さんを賴んて色々植付けをして貰つた、今はいんげん豆も三四寸位になり、じやが芋は珠子の親玉位な根さへ出來て來た茄子も胡瓜も生々して日ましに生育が見ゆる、朝起きると一番先に畑に出て見れば、朝露を左も嬉しさうに大事さうに麗々しく生々した其葉に宿して居る樣や、廿日大根の眞赤なのが土の中から珊瑚の玉をならべた樣に見ゆるなどは、何とも云へぬ趣きが有る、自分は田園生活の樂しさを感ずると共に、自然の恩惠程嬉しい樂しいものはあるまいと何時も沁み〳〵眺め入つてゐる。

丙賞

あによめ

韓國　光枝

今日は日曜だから散歩に行かうと、兄さんが言つたから化粧もそこ〳〵に義姉さんと三人で出掛た、片田舍の事とて、物の中町も行くともう家は一軒もない、左の方を見渡すと。向ふに漢口が白く見える、川向に靑々として山がニウツと立つて居る、實にいゝ景色だ、氣がすがすがする、ふと後向くとお二人は話しながら來られる、義姉は元私より二級上で、私の大切な學友であつた、な





どゝ昔の事を思つて歩く、わざと、兄さん等の後になつて二人を見くらべる、義姉の丸髷が今更のやうに可笑しい、やがて山の麓へ來ると一寸した水だまりがある、姉さんは其れをとぶにも才、恐いと言ふ、自分はずいぶん大きな谷をピヨイと裾をひるがへす。

丙賞

梅子樣

鎌倉なの花

あゝ私はほんとうに捨てられたのかしら、あんまり打明て申上たので却て嫌におなりになつたのかしら、嬉しい事も悲い事も、打明て語る人とてはなく、冷たい／＼臥床に熱い涙をしのび、夕暮淋しい窓に空を仰いでは深い溜息をもらし、每々世のつれなさを感じて淋く其日／＼を送りて居る此身、梅子樣と末の末まで變るまじと誓ひ只一つのたのみとして今日まで過して來たものを……今日までは永らへて來たものを……、あゝ梅子樣はほんとうに私をお捨になつたのかしら、お捨てになつたのだたしかにお捨てになつたのだ！、幾度文まゐらせても御返しとては更にない、今は御住所さへ明らかでない、睦じかつた頃の御文やお寫眞みる度、此少さい胸には悲ひの靄がたちひろがつて、あゝ切ない苦い！、明治三十八年の五月三日に誓ひしお言葉お忘れになつたのかしら、未だ五年とたゝないうちにおわすれになつたのかしら、梅子樣はおわすれ遊したとて、私はどうしてわすれられやう、末の末まで私の親友だ！

丙賞

別れ

本郷なゝしぐさ

友のたつ日、大急ぎでステーションにかけつけると、もうお見送りの方が大勢見えて居て、友はおじぎにいそがしさう、靜さんと呼ぶと、ばた／＼とかけて來て、まあよくゐらしつて下さつたのね、とうるんだお目がひかる私はもう胸がせまつて、いよ／＼お別れね、とのみ、後は言へなくなつてたゞひしとその手をとつた、發車を知らすベルの音と共に皆樣についてプラットホームに出る最後のかたき握手をした時、二人の手にハラ／＼とふりかゝつた熱きもの、友か我か！、いつの間にか友は早汽車の窓から顏を出して居る、とピーと尾を長くひいた情けない笛のひゞきに、列車はきしり始めた。

さよなら！、と言つた靜さんのなつかしい聲が、いつまでも耳に殘つてゐる。

丙賞

夕暮の調べ

佐賀長野さつき

こんもりとした若葉の梅の影が、月の光でまつ暗に障子に映つて居る、腰かけの上で遊んで居る清子と富雄の影法師が、きえたりあらはれたりする、富雄の銀笛は、と





もすれば妙な調子になるが、清子の美しい聲は、亂れずさわがす、高く、低く、かすかに調子をつないで行く、そつと障子を開けて見た、美しい宵である。

晝寢

和歌山　中錦幾子

昨夜は何だか變な音がして、賊でもはいるんでないかと思つたら、例の神經質の自分は夜ぴつと寢られなかつた其の故か今日は身體が變にだろい、丁度午後一時頃から坊やも寢むんだから、皆の留守を幸ひ、いでや氣樂に自分も一寢せんものと、枕とり出し坊やの側に身を横へたが、さても罪なき子供の寢顔、此ほうの柔かい事、瞳は長い、今少し鼻が高かつたら、此手は少さけれどよくいたづらをする、何處でつけたか墨がついてゐるなどと撫でついぢりつする内、とう〳〵坊やは起きてしまつた、そして泣き出した、自分は寢る處か機嫌を取るにやきもきした。

靜かな村

牛込　平塚白百合

底も見えすく砂川の葉櫻かげを、スイ〳〵と雜魚が二つ三つのぼつてゆく。つゝみにそふて茅家か五六軒、しづかな村である。

どこからともなく水車のねむさうな音がギーンとひゞくもう梅雨に入るのであらう、橋ぎわの家の柿が時々ホロ〳〵と散る。

消きかほり

京都　里村かけ子

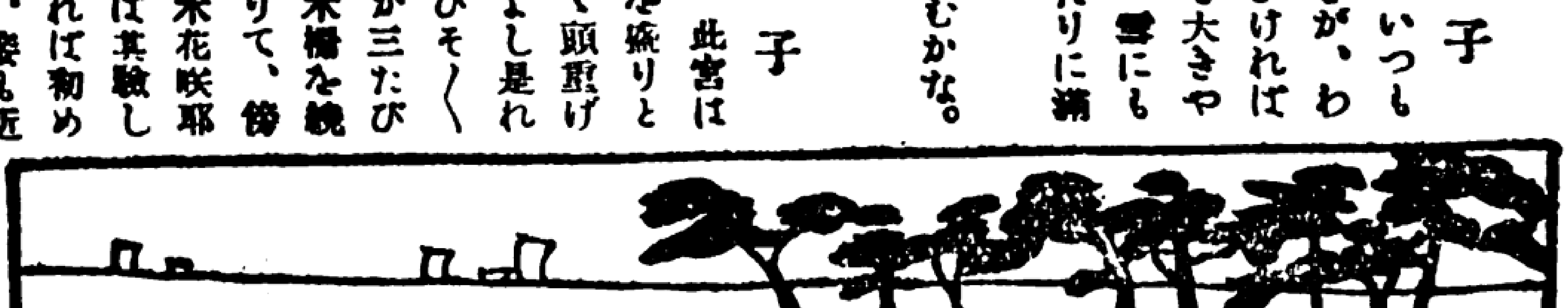
ひろ圃は、たゞの獨居の、つれ〴〵なるまゝに、いつもやさしき矢瀬の花賣り、名は知られど、愛らしきが、わがこゝに住ふを覺えてや、けふも門よりおとなひければ時にはうれしと、花のせし頭見るに、珍らしくも大きやかなる百合の二つ三つ、あがなひて床にさしぬ、雪にもまがふ花の色、そよふく風に消きかほりは、あたりに滿ちぬ。

夕ぐれ近し、いざ、砂糖水に冷して、夫の歸り待たむかな。

腭ぎ石

京都　河原治子

身も輕くそゞろ歩きのつい〳〵梅の宮に來りぬ、此宮は近年多くの株を移し植ゑしとかにて、杜若の今を盛りと競ひ咲き、白に、紫、薄紅に、絞り、大輪ものゝ頭擡げに頂ける樣など、風情なか〳〵にゆかし、彼れよし是れめづらなりと池の汀を繞る折、年若き新夫婦のひそ〳〵談らひ香らに氣紛ながら樹下に行けるが、何者か三たびばかり腭きて出で往きぬ、近皆り看れば、僅に木柵を繞せる内に、兒頭大の青き滑らなる石二つ並べありて、傍らにまたき石の立札あり、掛ひ出でし、此宮は木花咲耶姫命を齊きまつり、子無き者此石を腭ぎて祈れば其驗しいやちこなるよし兼て聞きけるも、見し事なければ初め心付かず、新夫婦の心を苦しめしこそ罪深けれ、妻も近





き將來に勝ぐや否や。

二人連れ

千葉　山口秋子

夕日は早や西に落ちて、青葉を渡る涼風のいとも心地よい田舍道を、肩もすれ／＼に寄添ひ乍ら歸り行く二人づれ、手にせる品の數ず／＼にても新世帶の夫婦とうなづかれた、如何なる事を語らふか、折々さゞめく聲が聞える、やがて我が下駄の音を聞き付けてか、美しい人は紅珠の燦めく白い手で若い男の肩を輕くたゝくと、男はつと立止つてこちらを向く、私は顔見られじとかざせる洋傘をかたむけた。

茨

本郷　平井喜代子

月淡き夜、そゞろあるきして、小川のへりを行けば、堤の横合より野趣に富める茨は斜めに川を掩ひ、其白き花がはら／＼とこぼると見れば、暗き處に波動きて、魚飛び上る。「花茨故鄕の道に似たる哉」げに我家の背戸にもかゝるところありけり。

別れ

大阪　磯部勝子

愈々今日は武坊の養子に行く日なり、朝九時と云ふに同行さるべき伯父樣は見えたり、下女の運ぶ酒肴に一同打揃ひ別れの盃最中、四郞坊は嫣然して兄さん私にあの六頸頂戴なと言へば、武坊は一寸思案して、僕が歸つた時にお返しよと應ふ、……皆顔見合せて笑ひぬ、母上は目を紅うして始終武夫の顔のみ打守り給ふ、やがて伯父君は二時の列車に後れてはと武坊を回顧み「お父さんお母さん長々御恩に成りましたもうお暇致しますと御挨拶なさい」と宣給へば、俄に打萎れしが「お父さんお母さん長々御恩に成りましたもうお暇致します」とくり返す、伯父君は「まるで蓄音器だれ〳〵、、、」「ホ、、、」誰も目に露もちて……、車は急ぎ横町へ廻りぬ。

愛鳥の死

長野　牛山菊枝子

弟が學校から歸つて來ると、勉强室の窓先きへ吊してある鳥籠を一番先きに覗く、もう二年も養ふたのでよく人の言葉が分る、弟が學校の歸りがけ蜘蛛や蜻蜓を取つて來てはやるので、「只今」の聲がするとすぐ籠の緣を愛らしい嘴でコツ／＼と叩く、放してやる事もあるが、自分で又籠へはいる。

今日も晝後から勉强室へ放して置いて一寸用事に出た、歸つて見ると弟が帽子を被つたまゝ疊に頭を付けて泣き伏して居る、びつくりして、まー何したのときくと、弟は眞赤になつた目を擦り乍ら、姉さん鳥が、見れば放して置いた鳥が、無慘や傍へに有つた火鉢の火の中に、全身の美しい毛は燒け、愛らしい嘴を苦しげに開いて、目をつぶつて居る、わたしはワツト泣き伏した。





あはれ螢

岡山　高谷かね子

螢を螢をと、今にも絶えなんとする、さゝがにの糸より細き息の下より、戀ひ慕ひし螢を、昨夜乳母と共に取り來りやりしを嬉しげに見入りしまゝ、遂に歸らぬ方へと旅立ちし漸く五歳の弟が野邊の送りも濟ませし今宵、せめてもの手向けにと取り來し螢を庭前にはなしぬ、一つ飛び、二つ飛び、いつしか幾十の螢彼方の木、此方の草葉に高く低く青白き光を夜陰に引きて飛びこふ様池の水にうつりて、日頃なれば美しと見るを、今夜は何となく淋しく思ひぬ。

父上初め母様乳母までも椽側に立ちて涙の目にて眺めさせ給ふ、月なき夕なれば螢も可憐の弟が死出の行方を照さんとにや、寄せてはかへす漣の數も讀み得るまでに光りをはなちぬ。

○

京都　藤田靜枝

或日二人の子供を連れて御苑内の九條池（九條公舊邸趾）に行つた、水は左まで澄んでは居ないが、折柄の新緑を暎して、青々と小波を立てゝ居る、子供が燒麩のカケを投込むと、始の内は二三の小魚が、それをあさつて居たが、追々增えて大分大きなのも交つて來た、五六寸から七八寸のも來る、尺餘のも來る、終には二尺許りなのも來た、多くは黑い鯉であるが、たまには赤いのもゐる、餌の奪ひ合に混亂を極めて、水面は黑くなつて來た、小さいのは誠にミヂメなもので、投込つた燒麩の多くは大抵大きなのに分捕られて、僅かに其破片をせゝつて居るに過ぎぬ、姉は子供心にも、それを不憫と思つたのか、細かく碎いて違つて居るが、弟は頻に丸の儘投げて居る大方其分捕りが面白いのであらう。

なき友

越後　貞子

月はくもれど又照りぬ花は散れども又咲きぬ、思ひ出せば二年前のこと、樂しかつた寄宿舍のホームを打ち捨てて、明日は互に袂を西と東とに分たればならんと云ふ其夜、三十二名のクラスメートが寄り集つて、此歌を歌つて合奏したが、實に一夜の夢と過ぎ去り、最愛なる寧子樣は別れて間もなく亡き人となられた。

姉の居間

和歌山　田中文子

姉樣か亡くなつてから丁度三週間だ、生前お居間であつた六疊を母樣は片付けようと被仰たが、せめて四十九日經つまでとお願ひをして、其儘にして置く、床には探幽の山水の掛物、壁には在英國の伯父樣から送つて下さつた聖母マリアの肖像、柱には無二の親友百合子樣からの繪はがき、違ひ棚には遺愛のバイオリン、箱のふたを取ると三の糸が未だ新しいのに切れて居る、吁姉樣は四人兄弟の三番目であつた。





綠陰

青山　酒井、哲子

あゝ向ふのお山も、何時もぬーと立つてゐる杏樹も、朝霞のためにちつとも見えない。お日様は未だお出にならない、下の谷川もあたりの木でもまだ薄暗い、ずつと向ふの峠道を、小さな〳〵お爺さんが鍬をかついで通る、涼しい風がそよ〳〵と吹いてきた、どこから飛んできたのだらう、此杏樹の一葉は、今吹いた風が私たちの處へもつときてくれたのかも知れない、プツクのしほりにしておかう、あゝもう大分霧も晴れてきた、あの杏樹もすつかり見えてきた、今日も又此綠の蔭であのお山と杏樹と谷川とにお友達になつてもらふのだ。

家庭日記

牛込　大島壽子

田舍の姉上に送るのに手柄を編んで居たら、珍らしく椽野さんが居らして、庭に咲いたからとて菖蒲を下すつた何時もながらやさしい御心掛、お歸りの後ちやんの處へもあげて早速活けた、午後俊ちやんが遊びに來て、母さんに人形を買つて頂いたから着物を縫つて頂戴つて言ふから縫つて上げたら、私今日は抱つこして寢るのよと言ふ、あまりの愛らしさに思はず抱き上げた。

ひとりごと

京都　美智子

うちの御祖母様は、齒くさくつてほんとにいやになるわ一週間に一度の日曜を充分面白く遊ばうと思つて居るのに、七日の間にたつた一度しか休みはないんだから、よくお料理やお裁縫をなさい、それからお琴のけいこをれーつて、ヴアイオリンの時には、いつも八釜しいやかましいと顔をしかめるくせに。この間も御召の單衣を買つて戴くのに、それが當世風なのか知らないが、年齢よりはぢみなのを着るのが上品なのだつて、ほんとにあきれるわ。ふだんいつてる束髪を、何だばら〳〵と、それでもお前は女かつて位は、優しいの、いつも御小言のしまひには一體今の女は……つてが御定まりの文句。私はそのたびに、一入亡くなられたお母様が慕はしくて、御寫眞を出しては泣いてゐるの。

朝顔

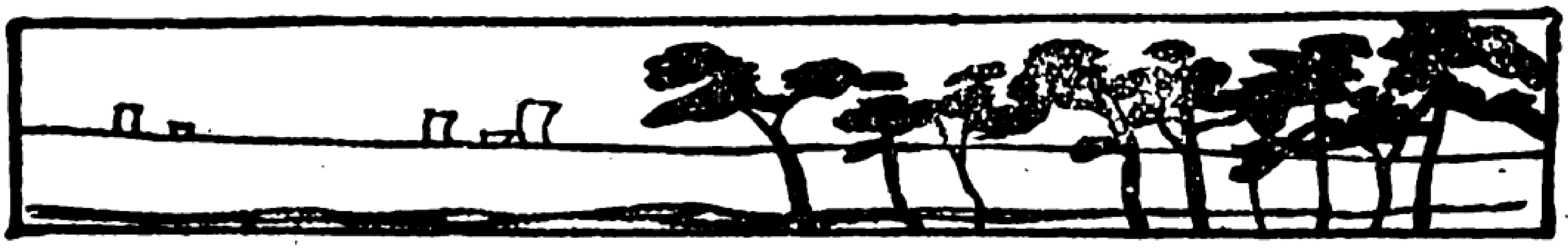
讃岐　大川松榮

千代女は水を隣に乞ふも釣瓶に纒へる蔓を播はざりき、洋人は摘んで之を玻璃皿に浮べ終日賞翫す、雖の花は午を待たざれども、皿中のそれは夕に至つて凋まず、乙は一日の美なれども、甲は來年の實を結ぶ、知らず何れが眞に花を愛するものぞ。

旅の風情

岡山　中島あさ子

旅舍生活は實に面白い、この海邊に移つてからは特に面白くなつた、暑いと思ふ心は消え去り、眠むいと云ふ氣





は出すして、そして漁夫の歌や、波の音、白帆の走る樣など何とも云へぬ風情である。今日は霧が一面晴れ渡つて島が見える、海鳥も飛んで居る。

夏の夜

香川　森　君　江

夕立の名殘を止めて見るから靜しげな庭の青葉がくれに、自然の涼み臺なる飛石に湯上りの身ももたせ、靜かに暮れ行く空を眺めて居ると、何處から舞ふて來たか、夜の氣は見る間に庭を掩ふて仕舞つた、と何時か滿天に銀砂子をまいたやうな星が忙はしげに瞬いて居る、折から露を含んだ冷たい風が颯と吹いて、木々の若葉から綠の雫がハラ／＼と溢れる、我が頸へも冷やりと一滴が落ちた、あゝ何といふ氣持だらう、塵の悶えは綺麗に洗ひさられて、自分は今しミューズの神に手を引かれて中空を逍遙つて居る心地である。

恐しき壯觀

豊後　加　納　豊　子

初夏の日永にうむで何だか頭がボーツとしてゐる、と午後三時頃、突然耳許でヂャン／＼カン／＼亂打する、半鐘、ワーツと云ふ人聲、椽に飛び出すと、畑に出て居つた下女が火事です／＼とかけ込んで來る、見ればすぐ道を隔てた向側の奥の方の家から黑煙濛々とわき出る、うづまき昇る白煙の中から大きな赤い火がペロ／＼と空までなめ盡さんず勢、私はこんな恐しい又花やかな壯觀は生れて初めてゞある、すぐ下の往來は、人が右往左往飛び散り亂せより、泣く者、叫ぶ者、わめく者、働く人、一時は何が何だか只もう夢中、殆んど小一時間で漸く鎭火した、此中で一番憐れだつたのは飼つてあつた數羽の鷄が猛火の中に出場を失つて悲鳴を上げ乍ら燒死した一事で、燒鳥が出來たなどいふ氣さん者もあつたが、私は何とも言へぬ感じがした。

兄樣の寫眞

越後　田　畚　笑　花

二週間許り前に寫した兄樣などの寫眞が漸く出來て來たから、急いで御祖母樣の御居間へ持つて來て、皆が寄つて拜見したが、どうしても和田は上手の樣だ、殊に兄樣やお孝樣がよく出來た、御祖母樣は眼鏡をかけてよく見て居なすつたが、「どう見ても内の榮坊が一番よく出來た樣だ、マー御覽なさい、無邪氣な事、帽子を目深かにかむつて、椅子に寄つて居る樣子がほんとうに可愛いらしい」とて餘念なく見て居なさる、「御祖母樣、兄樣もよく出來ましたがお孝樣もきれいに出來ました事」と云へば「孝もよく出來ましたれー　だが子供の内に親に別れるのだから何となく面さしが淋しげな處がありますよ、マー死んだ母の顏と瓜二つにした樣だ、今頃迄生きて居つたらさぞ喜ぶだらうに」と御祖母樣は死なれた叔母を思ひ出して、哀れな孫の寫樣を見つめて居られる。





朝風

京都　米田ちざと

朝風は青葉若葉を撫でゝ一入涼しい、夜はまだ十分あけぬらしい、遠くで日を迎ふ雛が元氣よく啼く、甚兵衛の渡小屋はまだ靄に包まれて茫然浮上たまゝ、靜な景色である。

浴衣の裾をかるく端して小川の邊へ出た時は、裾は葉末の露でビッショリ濡れた、青々とした堤の上に、純白の百合の花が唯一輪生々と咲ている、美しくも、また儚れに見える。

郷關

佐賀　宇都宮八重子

サア急がれば汽船は出て仕舞ふぞ、見送つてくださる父樣も、出て行く妾も共に涙である、妾は幾度となくふりかへつて見たが、やつぱり父樣はこちらを見ていらつしやる、妾は悲しさが胸にこみあげて、湧き出る涙を拭ひつゝ、又ふりかへると、あもういつしか道は曲つて、父樣のお姿は見られぬ、妾は泣きたいだけ泣いた。

夏の朝

駿河　天野ふじ子

夜來の雨は晴れて、園は洗つたやう、出て見ると朝顔が一輪白く綻びてゐる、後には葉卷のやうな蕾が幾つも出てゐる、籬には眼醒むる樣な山百合が、恥しとてや、地に向つてうつむいてゐる、實にいゝ香りである。

螢籠

香川　武田花子

やり水のあと涼しげに、其影宿せる熊笹の露は、丁度螢と見まがふ許り、庭を前に、お母さんと妾が團扇を使つて居る所へ、妹の美代ちやんが駈けて來て、『さつき取てきた螢を見せて上げましよう』、と云ふ手を引かれる儘行けば、六疊へ釣つてある蚊張の中に、二三疋フヮリ〳〵と飛んでゐる、大きな籠でまことに具合がよい、中には弟が他愛もなく眠つて居る。

麥刈り

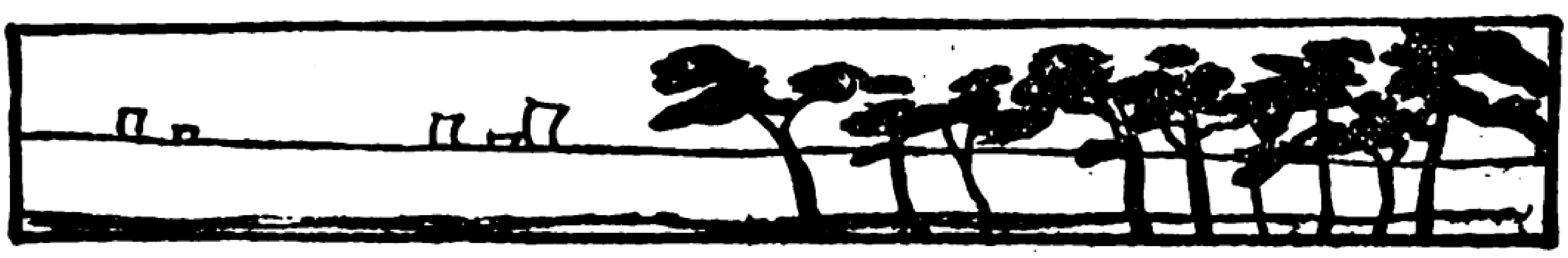
德島　蜂須賀千代子

若葉は茂り、時鳥はないて、早や田植時も近づいたに、今年は苗代もたてず、此麥を刈つてしまふと、田も畑も人手に渡るのだ、と思へば鎌持つ手もひとしほたゆう、一もと刈るたびに身をそぐ樣で我知らす涙がこぼれる、去年の夏は人手も多く、お父樣も共に歌面白く田植をしたが、あはれ、今年からはいづくのたれに作られるか。

新夫婦

京都　小林すゑ子

先々月お隣へ引越された若夫婦は、幼なゝぢみとやら學校友達とやら、時折、美いちやん健ちやんと、又しても子供時代の名が出ては、ホヽヽ、ハヽヽの笑聲、此の間も『出て行け、出て行け、そんなら私が出て行く』と出られた夫の跡を見て、奥樣は京都訛りの言葉可愛やう、『所天、





チョと、衣服のお襟が折れてござんすへ」とちよこ〳〵走り寄つて直しにかゝり、莞爾笑つた顔と顔、今まで言ひ合つて居た事はどこへやら、てもお浦山しいお仲の好さ、村中の評判高砂や。

乳母車

京都　米田ふく子

堤に添ふた大きな柳の樹陰に、奇麗な乳母車をすえて、子守は側に頻りと毛糸を編でいる、フックリ肥つた、色の白い乳呑兒は、仰向に寐たまゝ何を夢見てゐるか時々頰笑を見せる、涼しい風が襟を撫でゝ、雀が一羽向の叢陰へ落ちた、「梅や、お待遠うさま!」學校戻であらう、紫フクリンの包に毛糸編の小さい辨當袋を提げた、八つ許の可愛い女の兒が、柳の樹陰から現れた、子守は莞爾會釋しながら、日和傘を擴げると、靜に二人は板橋を渡てゆく。

愛兒の入學

美濃　桂川たか子

花代が今年學齡に達したから、今日初めて學校へ上るので、とく起き出で、まづお湯を使はせ、分髮にして、叔母樣から頂いた巾廣のみどりのリボンをかけ、學校着にとて、昨日縫ひ上げたすみれ色に裾に黑筋を入れて袖口と襟元へエンブレードをつけた洋服を着せ、お靴をはかせて、どうぞと夫につけて送り出した、行つて參りますとお辭儀して、父樣に手を引かれて、にこ〳〵と笑つて出で行く姿のいぢらしさ、夫もさぞうれしくておはさん。

初夏の田舍

山梨　笹波

雲が動くと見る間もなく、糸の樣な雨が降つて來た、冷い野石もしつとり濡れて逃きがある、青い欄んぼか音なく落ちて、窓による私の肩先を打つた、前の畑で麥草を取つてる作り爺爺の姿が、くつきり浮び出て畫の樣である、笠の上を燕がかすめて飛んだ。

初夏の田舍は靜かである。

向ふの若葉の家から梭の音に混つて潤みをふくんだ歌の聲が聞える。

歸り路

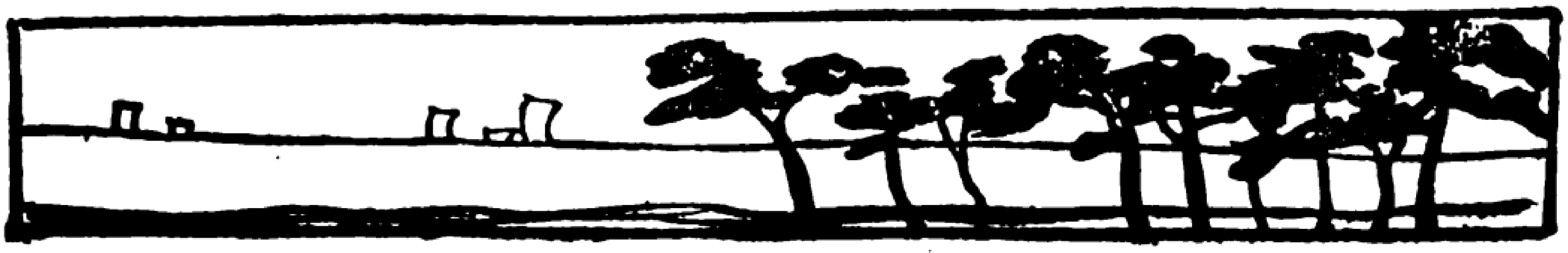
紀伊　松島双葉

雨があがつたが、手にもつものと身につけたかつぱがおもくるしい、はなをの少しゆるんだ高あしだをあやうくふみしめながら、四つ角をまがると、パツタリ出遇つた中學生連、例の調子の冷評、今日は除計に腹がたつ。

ゆうちやん

肥前　宇都宮やへ子

勇ちやんは今年五ツだ、夕方お月樣が後の山から顏出す頃には、きつと妾におぶされて外に行きたがる、そしてまんまるなお月樣を見ては、其小いさな手を上げて「取つておくれ」と云ふ、「お月樣とつて何にするの」と聞けば「妙ちやんを呼んで乳呑ましてやる」と云ふ、妙ちやん



はお月樣とだつこしてれんれしてゐると何時も言ひ聞かせてゐるからだ。

雛仕舞

盛岡　吉田梅尾

今日で雛節句は終りである、十疊間ににお雛さんが泣て居る、涙が頰に流れて小さな蝶々髷が搖れてゐる、其傍に阿母さんと、お雛さんの姉さんとが片端から雛を片付けてゐる、「また來年ね！」と謂つて阿母さんは五人雛を箱に入れた、今夜はお雛さんは寢られないであらう。

ほとゝぎす

徳島　ゆかり子

受驗の準備なと夜毎燈火かきたてつゝたゆむ心をふり起しては勉むれど、はげしき畫のつかれに、ともすれば讀む文字の、たゞ黑點となりて、遂には夢心地となるを、言ひがひなしと自ら勵ましつる折しも、杜鵑一聲いとさやかに聞ゆ、窓おしひらけば、それと思ふかげだになくて、青葉を洩るゝ月の影のみいとさやかに。

晴れ間

神奈川　みち子

三日も雨に降り續かれて、氣もくしや〳〵して居たが、今日は夫れでも十時頃から雨もやみだん〳〵明るくなつて來た、洗濯でも仕樣と思つて緣側へ出ると、曲り途の床場へ客が來たか、チヤキ〳〵と鋏の音が聞える、泉水の中の岩の上で、ギヤク〳〵と雨蛙が鳴く、と間も無なく又蛙の目玉のやうな雨が天からポツリ〳〵。

ひめつゝじ

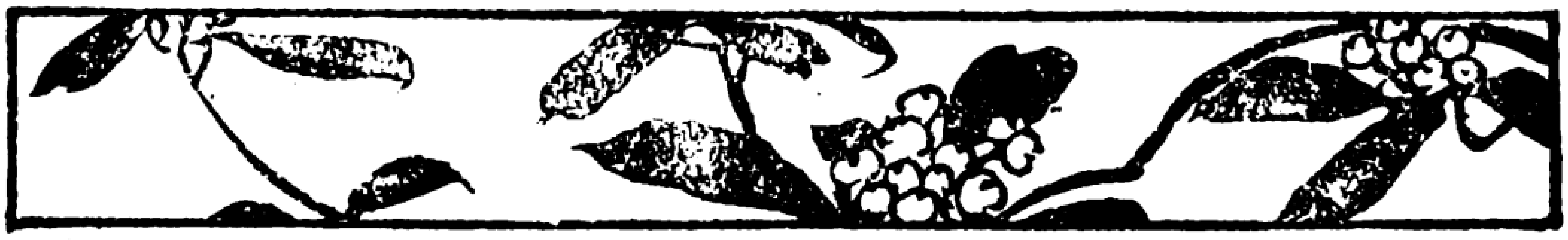
神戸　登與子

廻らした垣根に添うて四五株の桑が植込んである、其隙間から藁屋根の亭が見える、友はさぞ私の來るのを待つてゐるであらう、と少し歩を早めて行く、差延べた松の枝をくゞると、姫躑躅が時を得顏に咲いて居る。

病める姉

和歌山　信子

御母さんからの御便には、いつも〳〵姉君の御いたつきは追々宜き方なれば決して心配なく養父母を大切にせよとのみ云ひ越されしに、今日半年ぶりにて見れば、快い方とのみ思ひし姉君は、何事ぞ、いつもうらやんだ櫻色の御顏はすごい程青白く、すゞしかりし目はおそろしきまでにくぼみ、骨と云ふ骨は皆あらわれ、只かはりなきは三つ組にして垂れたる黑髮のみ、あゝ斯くまでやつれたまひしか、知らざりし、知らざりし、許させたまへ姉君と、うと〳〵れむる姉君のまくらべにすわりて、よよと泣きぬ。



一口噺 ◎印入賞

◎ 熊本 丸屋とく子

小供「祖母樣あなたのお腰は、必然伸びますよ」祖母「何故！」小供「でも屈するは伸びんが爲なりと言ますから」

◎ 大阪 木村布

下男「旦那樣、庭の松が皆枯れてしまひました」旦那「ソレは枝葉がないチエ」

◎ 京都 藤田靜枝

妹「男はナゼ女よりも強いのでせう」兄「そりやー男には字にでも力があるからサ」

肥前 宇都宮やへ子

涙「郵便を出そうと思ひますが、どこのポストにいれたが早くとゞきませうか」母「それはお前ステーションの側のにいれると今度の汽車で積んでゆきますよ」

伊勢 荒木殿子

妻「あなた顔に何か澤山出來ました子」夫「思はれニキビー！」妻「アラ誰にです？」夫「おまへに！」

芝 酒井すみえ

六歳になる妙ちやん「母さん私はどうして姉さんの妹なの？」母「どうしてつて、年が少ないからよ」妙ちやん「さう！ぢや姉さんは母さんの妹なのね」

滋賀 野崎あい子

主婦「竹、其んなにお鉢やお茶碗を破して呉れては困るぢやないか」竹（下女）「ハイ、妾は此れで親孝行をして居りますの……」主婦「まあ、面白い何故？」竹「何を隱しませう、妾の親は燒接屋で御座ります」

大阪 木村のぶ

旅行家曰く「大沙漠中の旅行でも此の駱駝が居るから實に駱駝！」

横濱 城野秋子

母「お隣の奥樣と今日三越へ行く約束だつたが、都合が惡いから斷つて來てお呉れな」令孃「斷るには及びませんわ、妾が參りますから」

麻布 池田百合子

奥樣「松かへ、オヤツ、御前びしよぬれになつて何うしたの笠を持つて行かなかつたのかえ」松「笠は持つてまゐりましたがさしてきませんの、だつて奥樣此の笠は私のお給金の内でかつたのですが着物や帯は奥樣のお買ひ下すつたのですもの」

京橋 高橋文子

夫「御前は悧巧で物が出來るから其上別嬪だつたら僕の理想通りだよ」妻君「ホヽヽそんなであつたらあなたへなんぞ來やしませんわ」

靜岡 鈴木さだ子

先生「お父さんやお母さんがあなた方を學校へよこしておゝきなさるのは何んの爲ですか」生徒「家に居るとうるさいからであります」

芝 山本喜代子

田舍物電話で話をしながら、「おい孫右衞門さん、好い香ひがするだんべー、今俺や清心丹を口へ入れた處だよー」



▲人事活斷▼

石龍子

▲横濱中村きん子へ＝幽谷の櫻　美しく開けども人之を知らざるの卦なり。この卦に依れば御身は心の優美なる所あるが故に、今や養子の來ること無きが如しと雖も、その優美なる心の知らるゝ曉は我もくと競うて眺めんとする時到るや必せり、妹御の如きは決して憂ふるに足らず。

▲京橋の深山埋木女へ＝滔々と流るゝ激流中へあはれ所持金を悉く落したるの卦なり。數多の人夫を傭うて之を拾はしめんか、その困難名狀すべからざるは言ふまでもなく、且つその金員を必ずしも拾ひ上げらるゝかは甚だ覺束なし、されば落したるは已が不德又は已が不運を諦め、將來働いで之を挽回するだけの貯金を爲すが上策なり。御身の不幸は即ち之と同じ道理、故に先夫の事などは斷然忘れて層一層德を積み、善行を重ね、他日を待たるべきなり必ずや今を昔に語る幸福なる時至るや疑ふべくもあらず。

▲愛媛の世界一貞女へ＝甲人が美しき花咲ける毒草を折らんとするを、乙人傍に在りて觀察しつゝある卦なり、この卦に依れば貴女は乙人にして良人は甲人ならずや、果して然らばその毒草の毒草たる所以を何處までも詳に說明して之を折らしめざるやうにするが乙人の赤誠なり。然るに折らば折れ、やがてその毒に中りし折、思知らるゝならんと、放棄するが如きは沒人情と謂はざるを得ず、又我之を說明しても信ぜざるが故に人をして、之を言はしめんなどの策を講ずるは、これ亦眞の誠に非ず。若し斯して甲人がその毒たるを知りたる曉は乙人が何故我にその毒を知らしめざりしかと怨むものなり。貴女よ貴女、刻一刻も早く妖女の手練手管を明白に素破拔かるべし、これ良人を惡むに非ずして愛するなり、嫉妬に非ずして赤誠なり、然れども斯して良人がその手練手管なるを悟り、眞心に立歸りたる曉には、貴女は良人が從來犯しゝ罪を更に怨むことなく、層一層優しく仕へらるべし。家運再び挽回して圓滿なる結果を得らるべきなり。

▲神戸の森糸子へ＝陰雲日光を鎖して草木凋落せんとする冬天の卦なり、この卦によれば貴女は此と非離すべき不德は無けれども、陰鬱にして、如何にも淋しき風あるが、何より缺點なり。故に俗な例を申すやうなれど、三味線でも彈いて「良人一つお謡ひなさいましな」といふが如き調子に出られたし、斯の如く賑かに優しく仕へられなば、決して今の如き事は無かりしならん。されど旣往は追ふべからず、今後は心機を一轉して優しく賑はしくといふ二事を悟られなば、再び良緣ありて幸運續々たり。

▲廣島縣田舍紳經質女へ＝駿馬が慈悲深き飼主を離れて原野に奔り出でんとする卦なり。この卦によれば貴女は駿馬な

り、慈悲深き飼主は父母なり、駿馬如何に千里の能あるも慈悲深き飼主を離れて獨立せらるゝものにあらず、されば貴女よ、何事も兩親に任せて今より二年間家庭的の學問即ち裁縫料理實地の經濟等を覺え、豫婚者と目出たく結婚せらるゝべし。返す〲も獨立獨步を越し給ふべからず。

▲東京迷女へ‖人あり遠き海上に顯はれたる蜃氣樓の景色を實在の物と思ひ見惚れ危險を忘れて之に行かんとする卦なり。この卦によれば親切を示したる大學生は蜃氣樓にして貴女は危險を忘れて行かんとする人なり、危い哉〱。貴女よ〱小鏡を砕かるべし、繪端書を裂かるべし、我が國には自由結婚未矣々々正々堂々たる媒妁を以て未知の人と結婚せられよ。而して後蜃氣樓を必ず忘れ給へ、若しそを忘るゝ能はずんば、後の良人が悉く蜃氣樓よりも見劣りして不平の心起り、圓滿なる家庭を作る能はず。忘れ給へ〱蜃氣樓の惡魔を。

▲香川縣山野春子へ‖御身が吉なりと思はるゝことは凶にして、凶なりと疑はるゝことは却つて吉なるの卦見ゆ。されば軍學校の生徒と結婚せらるゝことは御身の爲にも又先方の爲にも末必ず凶なり、然れども御身の心は春風駘蕩の趣あれば一年の中に良縁あること疑なし。故に其節は縱ひその縁を左程吉なりと思はざるも、急ぎて結婚し、軍學校の人を斷然忘れられよ。

▲春野すみれ子へ‖之を物に譬ふれば御身は梅にして妹御は櫻、而して先方は何れかを瓶中に挿さんとすれども今や事情ありて之を眺むるの暇なきが如し、然るに貴女にして今嫁がんか他日先方は櫻もがなと思ふ時來るの恐あり、故に御身は早々他家へ嫁し妹御を以て先方に對せしむると三方の爲に吉なり。

▲福井縣心配乙女へ‖御身は再び奉職して悠々良縁を求めらるべし良縁とは如何、曰く同職にして御身と共に終世の苦樂を共にする人なり。今一年後ならではその人なしと知り給へ。

▲福岡縣筑紫琴子へ‖有力なる人の手を借りて、良人より、御身の兩親へ、御身を渡し呉れと言はしむる策を以て最も吉なりとす、然るに御身は事茲に至らず、鬱々日を送らんか義理ある母は益々不快に感じ、御身は益々不幸に陷るや疑なし、言ふべき時に言はざれば言はぬに優る悔ありと知り給へ。服藥の事は衛生顧問の某氏に問はれよ。

▲東京松江子へ‖御身は正々堂々一點の疚しき所無きに引換へ良人や某未亡人の不義なるは實に言語道斷なり。而して良人及び某未亡人はその不義なることを自覺せざるには非ざれども獸慾の情緒纏綿として容易に離るゝ能はざるなり。然れども退いて事茲に至れる原因を考ふるに、正義の御身にも亦幾分の缺點ありて、不正義の某未亡人にも亦一點の長所無しとせず。即ち御身は老成的なる所あるに引換へ先方は飽くまでも小兒的なり、例を擧れば「鬼ごッこ」をして遊ばうぢやないかと良人が言はれたりとせんか、御身は「その樣な小供のする遊何が面白うござんせう」と否まるゝに拘らず、先方は「それは面白い

ですさア行りませう」と賛成するに相違なし。御身は『破れた茶碗を合せて見た所て仕方が無い』と手にも取つて見られぬに引換へ、先方は愚痴ッぽくも合せて見たり眺めて見たりして「嗚呼惜しいことをした」と歎くの風がある、この子供らしい所か普通の男子は氣に入るものなり、嗚呼人は長所が短所となり、短所が長所となるものにて、御身は子供らしき點なきが短所なる代りに意志强くて貞操を全うせらる某未亡人は子供然たる愛らしい點がある代りに、今や先夫が名譽の忠死も打忘れ、先夫の顔に泥を塗りつゝあるは豈慨歎の至ならずや。請ふ貴女よ益々德を積んで優しく、美しく、婉曲に、無邪氣に、相變らず良人に事へられよ。良人日ならず松の氣高くして、菫の愛するに足らざるを自覺せらるゝなり、御身はそれまで、心靜に二子を愛育せらるべし、必ず以て憂へ給ふべからず。

▲福岡縣の深山みどり女へ——神佛は正義を助くるものにして、不正義を助くるものにあらず、而して神佛とは何か、曰く自身なりと心得て可なり。實業の成功者雨宮氏曰く『余は毎朝自身に祈禱す、自身にして不正ならば如何なる神佛に祈るも何等の助なし、自身に祈つて自身が働けば、如何なる福運をも得らるゝものなり』と眞に然り、眞に然り、故に弘法樣が縁談の周旋をなされぬことは言ふまでもなし、貴女は高等女學校も卒業しながら、何故に斯る迷信に躊躇せらるゝや、良縁あらば直ちに結婚せらるべし。されば御身の言はるゝ如く近親結婚は不正義なり決して爲すべきに非ず。

▲越中の氣紛女へ——人に從へば吉、獨立すれば凶なるの卦あり、故に何事も姉上の言葉に從ひ給ふを得策とす。

▲大阪堺末のおたふく女へ——貴女は感情に冷靜にして、意志極めて强く、知力鋭敏にして一を聞き二を悟るの怜悧なる質なり。故に石龍子は媚びず、諂はず、貴女の不德なる點を列擧せんとす、怜悧なる貴女よ、感情に冷靜なる貴女よ、或は腹立つかも知られど、姑く心を沈めて余の言を大に考へ、大に味ひ、心機を一轉せられんことを、貴女將來の爲に切に請はんとす。されば貴女は何人も御し難き的の女なり貴女は所謂お轉婆的なり。貴女は所謂ハイカラ的なり、貴女は女性らしき點に乏し。貴女は何時も不平絶えぬ的の人なり。貴女は人に從ふを厭ふ的の女なり。貴女は男としては可ならんも女としては不可なる的なり。貴女は虛榮を尊ぶ的なり。貴女は西洋婦人の短所を學び、日本婦人の長所を解せざる的の人なり。貴女は安樂を共にすれども艱難を共にせぬ的の人なり。貴女は嫁となれば姑と折合はず、姑となれば嫁を惡む的なり。先づザッと右の如き次第なり。されば貴女よ、右の短所を悉く省み「嗚呼妾の如き者を斯うまで愛して下さる夫があるとは、何たる有難いことであらう、今まで腑甲斐ない夫と思うたは、までも勿體ないことである。縱ひこの夫が將來如何なる不運に陷らるゝとも、我身の不運と諦めて、夢露疎末には致しませぬ。偖ても我が身の心得違であつた」と斯の如くに心を優しく取直して良人の兵役中は良人の兩親に仕へ家事を助けつゝ兩親の快諾を得て、然る後貴女の好

める藝事を學ばるべし、この心になられなば、根が怜悧なる貴女の事なれば、將來必ず家庭圓満福運續々なるべきなり。貴女以て如何となす。

▲新潟縣在山許の再顧女へ‖貴女の心性は明月の圓満なるが如く、春風のそよ吹くが如く白玉の美しきが如く、櫻花の爛漫たるが如し。誠有つて優しく、優しくて、意志強く、同情に富んで人に媚びず、媚びざれども愛嬌自ら在り、實に日本婦人の長所を悉く具備せらるゝ婦人なり。夫に仕へられなば、如何なる鬼の如き夫も貴女を愛せぬ人はよもあらじ。唯惜い哉身體虚弱にして、思ふ通りを行ひ難き缺點なり、されば衛生顧問の口吻を眞似るやうなれど、母上と共に大氣光線に觸れて散歩をなし、朝は早く起き夜は早く寢れ、朝は冷水摩擦を爲し、夜は入湯し、滋養物を母上と共に多く取り、決して間食をなさず歐麵體操外掃除野菜物の培養等をなして、之を守られなば、御身も母上も共に健康になりて家運長久福壽圓満目出度々々々。

▲西海の不如歸女へ‖義兄の勸めらるゝ通り上京勉學せらるゝを吉とす。婚約の人は一時忘れ給ふべし。然れども今明兩年の中に、一大障礙起る兆あれば、道徳を堅固に履み、貞操を健全に守り、以てこの障礙を斥け給はゞ、婚約の人も亦業成り、改めて情交深密なる婚儀齊ひ、目出たきこと此上なし。

▲阪地の子を思ふ親へ‖我が子にして惡事に志さば、親たる者は飽くまでも干渉して善道に赴くやう導かざるべからず。我が子にして善に志さば、縱ひその善事が親の爲に不利益なる點あらんも、その善を遂げしむべし。これ親たる者の慈悲なり。そはともあれ、古來我が國には貞女兩夫に見えざる武士道あり、これが爲に唯許嫁のみしたる貞人に貞操を守り、剃髪以て一生空閨に過すものすら有りしなり。この風は洋行歸りのハイカラ連は或は批難するかも知られど、石龍子は千載動かすべからざる美風として保存したきなり。若しこの美風にして滅びんか、忠勇無雙の日本魂は消えんも圖られず、されば御身よ願御をして、我が利益の犠牲に供せしめず、その心を賞讃して、その貞操を全からしめよ。これ親たる人の慈悲なり、御國に對するの恩なり。

▲廣島縣桑木實子へ‖今は昔、印度の國王が、甚だ大切にし給へる白象の、子を生まんとするや、三日三晩の間呻り通して苦しめども産まれず、國王大に御憂慮あらせ。易者を呼んで、その處置法を問ひ給ふ。易者曰く「有夫の婦人にして貞操正しき者をお招きになり、その婦人をして白象の腹を撫でしむれば、直ちに安産致しまする」と國王即日に布令を出し給へば、集る婦女無慮數百人。順次に象の腹を撫で九十九人目に至りしが、依然として生れず、國王嘆息在して宣はく「貞操正しき婦人等に非ざるか、抑々易者の朕を欺くにや」易者對へて曰く「某最前より九十九人の相を觀するに、悉く我が夫の外に仇し男と交はりし者はあらざれども、その心中に於ては、或は我が夫を愛せざる者あり、或は他夫の情を喜ぶ者あり、或は我が夫よりも彼の男ならんにはと思ふものあり、或は我が夫の技量を卑しむる者あり、甚し

きは他夫の美貌を慕ひつゝある者すらあり。故にその行は貞操正しきに似たれども、その心中に於ては悉く邪淫戒を破れるが故にて候ふ、左候へば心も行も一點汚れたることなき婦人に非ずんば産れ候はず」之を聽いて、殘る數百人も、誰とて象の腰を撫づる者無かりしが、やがて後れ走に來りし一婦人進み出で「妾こそその任に當りませう」と徐ら纖手を伸べて之を撫づれば、見る〳〵生れ出たが、唯足一本だけ容易に出でざりしかば、その婦人喟然として天を仰ぎ、大に懺悔して曰く、「嗚呼々々今より八年前に、いとも美しき男の兒を抱き、我が夫の顔も斯くあらばやと思ひしことあり、許し給へ天地の神よ」言ひ終らぬ中に、足も難なく出で・目出たく象は安産を遂げたり云々。右は固より作り話ならんが、世の妻君方が、一刻も心に忘れてならぬ善き戒なり、然るに御身は先夫と別れて以來、膚を汚さぬとは言ひながら、繪葉書を交換して、心中には確に邪淫戒を破り給へり、濡衣を着るに至りしは理の當然なり、然れども既往は如何ともし難し、唯以前を懺悔して、之より將來一點疚しき心を有たず、東京の人も、官吏の人も一切斥け、始めより正々堂々たる式を以て申込む人に嫁がるべし、この心になられなば行末は幸運思の儘なり。

▲岡山縣朝顔女へ――妖は德に勝たず、邪滅び、正起るは天の理なり然るに世間往々濡衣を着るに至ることあるは、畢竟德の至らざる所あるが故なり、御身この理を悟り給はゞ今より一層正義を守りて、眞人の心を己に傾かしむるやう仕へらるべし。此より外に何等の術あることなし、かくして琴瑟和合する時至らば愛兒も自ら生まるべし。

▲東京くれなゐ女へ――御身の心掛は甚だ善なれども、奈何せん、事既に遲れたり、故に親兄弟の言はるゝが儘に、緣づき給ふべし。これ萬全の策なり。

▲大阪老孃へ――人を疑へば人亦己を疑ひ、人を信ずれば人亦己を信ずるものなり、然るに貴女は一旦婚約せし人が、何等貴女に對して惡感情を懷かざるにも拘らず、貴女は之を賴み少なく思ふはこれ他日先方も貴女を賴み少なきに思ふ原因となるなり、故に貴女は相變らず赤誠を籠めたる、音信をなし此人と一生の苦樂を共にせらるべし。何ぞ心細がるの必要あらん。

▲岡山縣山村悲子へ――何事も父母に從ふを孝とすれども、結婚のみは父母の犧牲に從ふ能はざる場合往々有り、故に貴女はこの際心を決し、明白に意中を語り、他日の悔なきやうなさるべし。叠の塵を捻るばかりが娘の美德にあらず、言ふべき時に言はざれば、却て後日親不孝の原因となるや明かなり、刻一刻も早く運ばるを吉とす。





小說

癇癪娘？

葉山しげ子

今日は一日だから起きて見やうかと思つたが、目が醒めるともう、茶の間では食事が始まつてゐる、茶碗や箸の戞々の音、人々の談笑の聲、給仕の小間使のおゝゝゝへゝら笑ひ。

八時？、九時？、數へても見なかつたが、柱時計がボーン〳〵と、いけすかない聲を出して、さも職務の忠實を誇る樣に鳴つてゐる。昨夜寢た時は確かに左を下にしてゐたのが、今見ると右が下になつて、緣側の障子を睨んでゐる。それは北向きの二間四枚で、去年の歲暮に張り替へて、紙は白いが所々小さく破れて、初夏ながら、靑葉に阻まれた弱い日光が、淡黃いろく射してゐる。

あゝやつぱり起きる氣にならない、まゝよ、病人に一日も晦日もあつたものぢやない、いつ迄でも寢てゐてやれ。

愉快さうな茶の間の會食が癪に障る、隣室に病人が寢てゐると思つたら、少しは遠慮してくれるがいゝ。が私も何だつて病氣なんぞするんだらう、病氣ももつと重ひ、熱でもあつて、何々炎とか名のある病氣ならいつそいゝが、かう何處がどうといふ事もなく、只食慾がなく、氣分が惡くて、毎日ぶら〳〵してゐるのはほんとに嫌だ。いかにも我儘のやうで、家の人の手前も極りが惡い。始めの中は肺病ぢやあるまいか、チフスの潜伏期でゞもありやしまいかと、隨分神經も起し

て見たが、かう長くなると神經の方が退屈して、先方からお暇をとつてしまふ。

全體神經なんていふものが、私は大嫌ひなんだ、お母さんなどに、「神經をお起しでない、お起しでない」といはれる幾度に、ぐつと不快な氣持になる、何も神經ぢやないけれども、鬱ぐのは仕方がなからうぢやないか。

ろくすつぽ物心も附かない時から、不圓滿な家庭で、不潔な空氣を、柔い頭腦へいやといふ程注ぎ込まれて、うきよといふもの丶形體を、朧げながら認めた私は、なべての子供のやうに、無邪氣に快濶ではなかつた。絶えずかう頭が重くて、笠でも被つてゐる樣な、薄暗い生活に、一段落着いて、いざ結婚となつた時は、やれ嬉しや、長々邪魔になつた笠も、是で脱がれる事かと悦んだのが、今から思ふと我ながら可愛想でたまらない。其また結婚といふのが、極めて不自然な、壓制の產物だつたんだもの。

頭上の笠は比較的輕くはなつたが、其代り、足に厚い厚い沓を穿かせられてしまつて、二進も三進も歩かれやしない。

お友達の多くが、褒めるんだか、嘲るんだか、よく「あなたは感心ねえ」といふ。全く感心には違ひない、歩かれもしない深沓を穿いて、三年といふ長い年月、ぢつと起つてゐたんだもの。しかし人間の忍耐力には限りがある、いくら堪えても、喰ひしばつても、長くなれば痛みは勝る、しびれは切れる。私は笠の不愉快な、暗さと重さとを忘れはしない、けれども現在の苦痛の餘り激しい爲、遂々また笠生活に復してしまつた。其笠は舊のより、より重い、より深い、深編笠とでもいひさうなものだ。

昔の浪人や何かゞ、結構な青天白日を態と避ける爲に被つたのが、深編笠だといふぢやないか、私も浪人の仲間かな?、さうだ!、一種の定業に放れて、果しもない、此廣い世界を、我から狹めねばならぬ意味に於て、確かに私も浪人なんだ、嫌になつてしまふ。

何一つ惡い事を爲やしまいし、法律だつて道德だつ

て、少しも咎める處はないのに、小つぽけな、家庭といふ奴が、みかけに寄らない強い力で、せつせと壓へつける、口惜しいや悲しいは、疾くの昔に通り越して今ぢやもう馬鹿〳〵しくなつちまふ。其中でもお母さんばかりは味方だ、生れてから今日が日迄、陰になり陽になり庇つて下さる、唯一の味方だ、が然し其味方があんまり頼り少ない。敵——といふのも餘り亂暴だけれども——の勢ひは、いかなる堅固な大城でも、陷しかねない處へ、病みさらばうた老武者が、一人位味方呼はりして、力んだつて却々追つつかない、まご〳〵すると却つて、掛替のない、大事な味方が、怪我を爲やしまいかと、私は毎日ひや〳〵してゐる、その事さへなけりや、こんな敗れ城に今迄ぐづ〳〵、立て籠つてゐるのぢやないんだ。



お午になると、また會食が始まる、しかし今度は兄さんがゐない爲に、幾分か靜かだ。

「何か喰べて見ないかい？」とお母さんが仰しやつたけれども、出かけていつて有造無造に睨まれるのが不快だから、「淨山」とすげなく云つて、緣側の方を向いてしまつた。實際食慾もない。

二時頃かしら、がら〳〵つと威勢のいゝ車が止まつて、玄關の格子が明く、女部屋では皆な居

眠りでもしてゐると見えて、誰も出て行くものがない。「取次があるよ」と嫂さんがいふ、まだ出て行かない「取次だよッ」と二言目にはもう直ぐ癇癪だ、驚いたと見えて、小間使のきよが飛んで出て來るとたんに「おや？」とお母さんの聲。「お一人？」といふのは嫂さんだ。「いゝえ、ほゝゝゝ」

あゝ妹の美いさんが來たんだ、一人でないといふから、正雄さんも同道なんだらう。

「此室は散らかつてゐるから、まあ座敷へ」とか、何とか、暫しさゞめいて、ぱた〳〵廊下を歩く、座敷の障子を明ける、あゝ頭に響く。正雄さんは、いつも大きな聲でよく笑ふ人だ、美いさんもよく笑ふ、嫂さんの笑ひ聲は、それらに比べて稍低いが、何だか特別頭に響く。

美いさんは幸福者だ、つひ此間結婚して直ぐ、茅ケ崎へ新婚旅行、松原の中の廣い別莊で、まゝ事的の新世帶などは、平常からハイカラがつてた程あつて、頗る理想的だ。私などの嫁きたてには、姑や夫に氣がねばかりして、門の外へもめつたに出なかつたものだが、あの子は嫁き〳〵早々、むやみと夫婦で出歩いて、東京へ來るのももう今度で三度目だ。

今日は風が少し出たけれど結局涼しくて、新夫婦が旅行などするには、どんなに樂しかつたらう。私の寢てゐる事は、此前も來て知つてゐるんだから、一寸座敷を外して來て、見舞ぐらゐ云つてくれさうなものだに。

實家にゐた時は、よく隙を見い〳〵、お菓子を持つて來てくれたり、新聞を置いていつてくれたり、氣の附く子だつたが、良人が出來ると、其方が姉よりは好いと見えて、傍にばつかり密接いてゐて、お得意談しに羽目を外してゐるんだらう。

私だつて彼女は肉身の妹だもの、妹が幸福なら嬉しいさ、決して、羨しいの、妬ましいのと、そんな下劣しい了見はないが、しかし刺激はされる。譬へば、今は捨てたが、嘗て一鉢の草花を栽培した事がある、それがどうしても思ふ樣に咲かないので、それで畢竟捨

てたのだ、それぎり似たやうな物を見なければ、忘れてゐられるが、そこへ別の人が、同種類で而も美事に咲いたのを、持つて來て見せたら如何だらう、さま〲苦心の甲斐もなかつた往事を思ひ出して、已に捨たものだから何等の疼痛もなささうなもんで、其實多大の苦痛なき能はざるものは、私ばかりぢやあるまい、それを捉へて「やれ意氣地がないの」「確固しろの」と、頭から責めるのは、餘り慘酷だと思ふ。

あゝ座敷の騷ぎが煩い、兎に角かう神經過敏になつちまつては爲樣がない。



枕邊の雜誌を引寄せて、文藝欄を繙いて見たが、どうも氣が散つて、文字の意味が頭腦に入らない、それを一生懸命に讀まうとすると、眼が疲れるばかりで矢張り分らない、二三頁ひら〱ひら捲つて次の記事を見たが、同じことだ

どうも座敷の談笑の方へ氣が傾く。

あゝ眼が疲れた、是は好い按排に眠られゝばいゝが……。

好い按排に眠られた。

正雄さんの大きな聲で目が覺めると、もう夕方だ。何處かの家で、忙がしさうな擂鉢の音がすると、崖の上の伯爵邸では、がら〱車の附

いた雨戸を閉めてゐる。

茶の間にはもう電燈が點て、中障子がオレンヂ色に染まつてゐる、臺所で肉を燒いたと見えて、殘香が此室へ迄泌み渡つて、まだ消えない。座敷は大變靜かになつた、歸つたのかしら？、と思ふと又聲が起る。あゝ食事が始まつてゐるんだ、兄さんは何時歸宅つたんだらう、ちつとも知らなかつた。家内中が座敷へ出てゐるお蔭で、茶の間は森としてゐる。

眠つた爲に幾分か神經が靜まると、夕暮の寂寥と、病床の無聊とがしみ〴〵味はれる。女中も皆給仕に召し上げられて、此室の電燈を點けるものがない、雜誌は見られず、稍體を起して縁側の障子を明けると、土がしつとり汗ばんで、楓の若葉、要冬青の新芽、松の綠總て柔い弱い色が暮雲の庭を彩つて、少しも疲れた樣子がなく、夜露を待つて明日の發達を樂しむかの樣にひし〳〵と囁き合つてゐる。細かい蘇枋色の楓の花は枝から振り落とされて爲ん方なく、それでも不平氣もなく、苔の上に餘命を托してゐる。座敷の談笑がなくて、笛の音でも聞えて來ればいゝなどゝ思ふ。

茶の間へ人が來た、急いで振り向いて呼んでみるときよがお茶を注してゐるんだ、「電燈を點けておくれな」と、いふと、「ハイ、御退屈でございましよう」と、通り一遍のお世辭を云ひながら、ネヂを捻つて去つてしまふ。中障子のオレンヂ色はぱつと白くなつて、緣側の方のは灰色になる、あゝ是でもう夜だ。二階も階下もがら〳〵がら〳〵雨戸を閉める。

座敷の先生達は、七時五十分の汽車で茅が崎へ歸るといふのに、あんなに悠々してゐて、間に逢ふのかしら、そうもう七時を打つ。あゝそろ〳〵歸り支度を始めた樣子だ。

お母さんが何か仰しやると、「え、え、え」といひながら美いさんが緣側を走けて來る、私の處へ來るんだらう、來たら「正雄さんに宜しく」と、いつてやらう、と思つて待つてゐるとおや〳〵、通り過して便所へ行くんだ。

座敷では姉さんが「新橋迄車だつたら廿分でいきま

しやう」と、いふと正雄さんが、「ナニ十五分ありや充分です」といふ。お母さんも廿分黨だ。美いさんが出て來て、せか〳〵手を洗ふ。

「それぢや」、「御機嫌よう」、「また何卒」、などの詞が交されて一同はどや〳〵起上る。「あ私肩掛を置いて來た」と、美いさんが飛ぶやうに茶の間へやつて來る。

「美いさん！」と呼んでやつた。

「えッ」と、始めて氣が附いた樣に、中障子を明けて二足ばかり入つて來て、

「あ今日は、いかゞ？」といふ、歸る間際になつて、「今日は」がいいぢやないか、暢氣な奥樣だ。

「え〻矢張り不快いの、死にさうよ」と、態と情ない聲で云つてやると、



「あらまあ、いけないわねえ」と、眞に受けて眉を寄せる。いつものやうに、「おやお葬式は何日？」とか何とかいつたら、大にむきになつてやらうと思つてゐたのが、當が外れて氣の毒になつた。

お納戸地のコートを着て立つた儘、伏目になつて、白い絹レースの肩掛のピンを止めてゐるのを無意味に見上げてゐると、やがて止め終つて突然に

「ほ〻〻、可笑しいでしやう？」と、笑ふ。

何だか分らないけれども、「い〻え」といふと、

「今日急いだもんだから、癖直しをよく爲なかつたのよ」と、髱を撫でる、髮の事をいつたのか。默つてゐるもんだから、少し照れ氣味で、「ほんとにいけないわねえ、私是でもお案じ申してゐるのよ」

「有がたう」

「少し快くおなりになつたら、いらつしやいな、そりや閑靜で、きつとお好きよ」

「有りがたう」

「それにね、事によると十日頃からあの……、出張するかもしれないのよ、ね、寂しくなるからいらつしやいな、きつと」

「美いさん、美いさん」と、嫂さんが呼ぶ。

「はい〳〵」と忙がしさうに、「ぢや又來るわ、お大事にッ」と、すた〳〵障子も閉めずに去つてしまふ。あ、「正雄さんに宜しく」を忘れた。いゝや、又直きに來るだらう。

玄關は一しきりざんざめいて、やがて車の音が門外へ消えると、一同がばつた〳〵入つて來る、お母さんと嫂さんは、茶の間の長火鉢の側へ、小間使は後片付に座敷へ、兄さんは二階へ昇つていつた。

「とよさん、お刺身の手の着かないのがあるが、あげようかえ」と、お母さんが仰しやる。

「さうねえ、餘り喰べ度もないけれど」

「でも何かおあがりな」

「それぢや下婢へ遣つてしまひましやうよ」と、嫂さんが立處に裁斷を下してしまふ。

間もなく兄さんも降りて來て、十時頃迄といふもの談話は美いさんと正雄さんの噂で持ち切りだ。

兄さんはさも、「お美代は怜悧だから好い緣を得た」といふ風に云ふけれども、誰だつて嫌な緣を得ようと望むものはありやしない。是ばかりは別物だらうぢやないか。

私のなどは兄さんが先へ立つて、あんな精神病者みた樣な男を褒めぬいて、無理に私を納得させたんぢやないか、馬鹿にしてゐる。

しかし妹の爲には佳いお手本だつた、自分でこりご

いりしたから、美いさんのを極る時は、充分穿鑿して、ならう事なら結婚前に少し交際もして、と願つてゐたのが稍理想通りに行つたのだらう。

正雄さんは眞個に好い人だ、「實家へ行きたい」と、いへば、「フンさうか」つて、用もないのに奥樣のお供して、茅が崎くんだりから出て來るんだもの、私は前にも云つた通り、決して羨みも妬みもしやしない、然し尠からず刺激はされる。

同じ世界に、そんな明るい家があるかと思ふと、此家が暗くて〳〵、もう堪



まらない様な氣がする、氣ちやない實際暗いんだ、暗くて而して空氣の流通が惡い、こんな家にゐるから病氣も出るんだ、涙も出るんだ、あゝ涙が出る、涙が出る涙などが出るから猶々馬鹿にされるんだ、馬鹿にされても出るものなら爲方がない。

茶の間の人達は未だ寢ないが、かう神經が高ぶると、話柄などは耳に入らない。

枕の覆布が濡れて冷たいから、ひつくり返さうと思つて頭を擡げると、髪の根が脱けて、小前髪ががつくりと釣れる、馬鹿に痛い。根元からぷつゝり斷つてしまつ

たら、嘸いゝ心持だらうと思ふ。

あゝ暗い室だ、あゝ蒸し暑い、身體中から汗がしいゝいしと出る。枕頭の壁も、簞笥も、破れ目の薄黒い障子も、悉く厚い鋼鐵で造つたものに違ひない、それだから空氣がちつとも流通しない、叩いたらぐわーんと音がするだらう、二度叩いても、三度叩いても、ぐわーん／＼と音ばかりして、凹みもしまい、果は我が拳が破れて、霧島躑躅のやうな鮮血が、だく／＼流れるであらう。

二三度續けて寢がへりをした。

茶の間の人達はまだ寢ない。

二階の燈火

秋雨

（上）

向ひの海老床の二階の貸間に燈火がついてからまだ三日目にかならぬ。

眞さんが毎日の課業を終はつて、黴臭い六疊の空氣に起伏すべく歸つて、型の如く帽を長押に懸けると南むきの障子をデカタン式に開いた時、理髪店の二階のかし間札を見るのが何より苦痛なのだ、と云つた處で先方ぢや別に他方から干渉される覺えはないといはむばかりに相かはらずかし間有りの斜札が大分黒くなつて貼られてあつた。

即ち燈火のついた日である。朝から陰々雨が、雲の命令に從つて、終日、車夫や腰辨を泣かせたのみならず見え坊の學生をして其の靴を氣配はしめた、本郷から千駄木の友人の病氣見舞に廻つて其の夕遲く歸つて來た眞さんは、何時もよりそゝつかしく、くゞりをしめる。宿の婆さんとお新造さんは丁度夕飯をゐたゝいて居た。

「オヤお歸んなさい、御飯は？」

「ヤ飯ならもう」

と何時になく元氣づいて、十三段のはしご段を一と息にかけ上る。

脱ぐ、懸ける、着る、兵兒帶を締めかけて例の南をからつとあける、かし間の二階に燈火がついてゐる人のこゑもせぬけれど。

「オヤ雨ふりに風抜きかしら！」

それとも雨でぬれて札がめくれたのかとも思ふ。お新造さんが洋燈をつけに來た。

「今日はどちらえ？」

一寸待つて欲しかつた其の質問は。

「今日は如何したんです向ふの二階」



「人が來ましたよ」

「どんな」

「見たけりや御自身でなさいましな」

やせた顔に寂しい笑くぼをふるはして下り様とする。

「そして男ですか」

「それや男か女ですわ、まさか石の地藏様でもないでせう」

美事一と矢參られた。そして今日は何故かう腰が弱いだらうと眞さんは考へ込む。相手を茶化して心地よげにほゝゑんだお新造さんは、誇りの分子が幾分か心の隅にあらは

れたのか、階子段の下り口の欄干に手をかけてまだ立つて眞さんの漆の樣な頭を見つめて居る。

とも知らず眞さんは夢中になつて、眼が据はつて、凝然として疊を見つめた。

遂にむかひの二階にあかりがついた、三月越しで、何とも云へず心丈夫になつた樣におもふ。我が住む部屋の障子をへだて、往來一つを間にして、自分には何の關係もない人の家の空二階であるが、何故か妙に寂しい氣がして堪らなかつた、外套を着て洋杖を忘れた趣きがして居た。處へ燈明が今日からついたなとおもふと、何だか溫かい樣な氣がする。三月程といふものを、あまりふさがらないで氣の毒だとおもふ理髮店への同情でもない、さりとて別にどうと云ふこともない只さびしゝといふ氣を以て呑まれて居たものがそれを救ふ、と云ふ意味の滿足を與へられたので、此處に好奇心が起らずには居られない。偶然に無意識に自分を寂しさから救ふた人は？と同時に燈火のぬしを知りたいといふ好奇心が起らずには居られない。

「どんな人だらう!!男か、女か、男なら、女なら」

と眞さんは今人間でなくて好奇心である。

相手がだまり込んだので、興の醒めたお新造さんは何時階下に下りたと見える。

（下）

其れから經つての今日は三日目にしかならぬ。が、其の間眞さんはいつもかけちがつて一度もまだ燈火の主を見たことがない。

眞さんが學校に行くのは割引だ。がそれまでにむかひの二階が開けてあつたことがない、女は一體早起きだときく、とすれば男かしら……にしては夜の燈火が早くきえる。

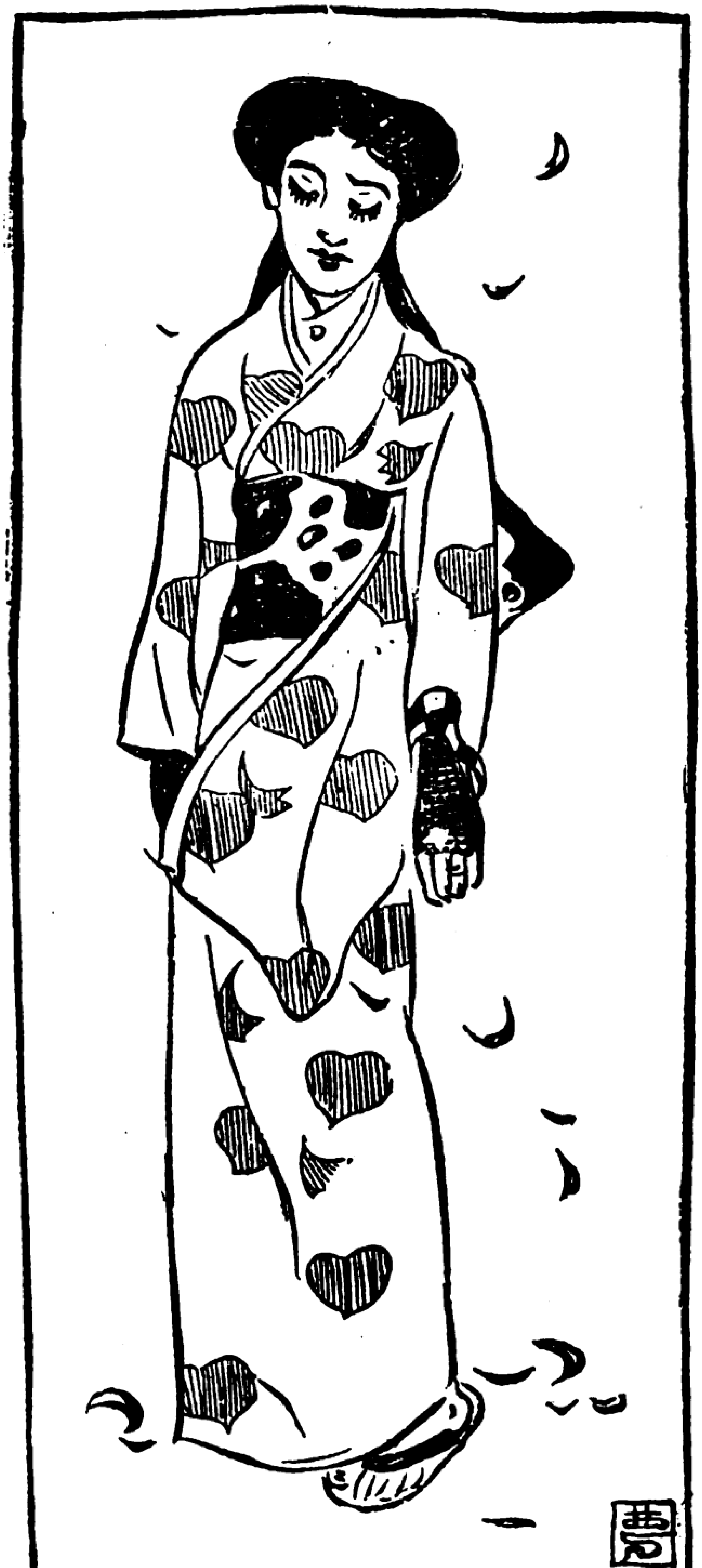
かゝる疑惑をくりかへして、眞さんは毎朝の電車の中の徒然を充塡てゐた。

それに如何したこと、今はもう七時だといふのにむかいの二階にはまだ燈火がついて居ぬ。外出をしてまだ歸へらないのかしら、今夜は馬鹿に月が好い、月に

うかれて燈火もつけず飛び出したのかしら、と頼まれもせぬ心配をしてゐたがその夜大分月が西にかたむいて宿題に何時もよりはおそくまで寢に就かなかつた眞さんが雨戸をしめる時までは遂にあかりの主はかへらなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

翌朝は日曜である、久々で朝ねをして大概九時頃眼をさました。さまして雨戸を開けて吃驚した。



三日にしかならぬむかいの家の二階には、またも新らしくかし間ありと斜札が貼つてあつた。

眞さんはこの時、おどろき、と云はんよりむしろ、かなしみが胸にこみあげた、うつぶしになつて泣きたい樣な氣がした。

「あゝ今度燈火がつくまではまた三月か！」と情けなくなつた。きけば燈火の主は海老床の遠い親戚から下女奉公にとて來た食客であつた相な。（をはり）

五月雨

皐月女

五月雨しきりに降りて夜は更け渡り、家人皆靜まりぬひとり燈を友として机に凭れば、小止みなく降る雨の音と靜思せる我が心とは、今全く調和を保ちて、沈みゆく如く浮き上る如く、光明ある如く、尊き如く、糸引く様にそれからそれと傳つて、日頃からのさま〲の思ひが畫の様になつて目の前に浮ぶ。

◎不斷衣

不斷着といふ事は何となく床しく思はるゝものなり、乙女の程能く不斷着つけて左のみつくらはず、小箱など出してかれ是れと無邪氣に立振舞ふさまは、まことに天眞のうるはしさをふくみて言はんかたなし、公會の席などにて盛粧せるを見たる後に用事ありて其人の家を訪ひし時、甲斐々々しくも其人の襷、前掛かけて些しもとりつくろはぬさつぱりとせる姿を見る時は、誰しも一種おだやかな尊敬の念を起すものである。

娘でし、妻君でも、母親でも、すべて婦人は盛粧した時の姿よりも常住の姿の動作に於て床しく懐しい類はしさを備へて居る。

◎墓前

春も半の日、切めては亡き人の墓を訪ふて、其わりし日を偲ばんとて夕ぐれより家を出でぬ、曇りて風立ちたる日なりしが谷中に入れる頃より止みて、しづ心なく散る花の、頭に觸れ袖にふれ果ては足元に落ちて地にかへりぬ。右方の花屋に入りて樒と線香を求め、桶に水を乞ひ兩手に持ちて歩むに線香より立つ煙りの淋しき匂ひ身に染みては亡き人生前のさま〲をはてもなく思ひ續けて我身も既に此世の人とも思はれぬ迄に佛化す。

空に聳えて物さびたる五重の塔に添ふて降るれば、はや其白々とせる墓標物陰より目立つに、嗚呼あそこよと胸迫れる心地す。さはれ線香のかほりと墓地のけしきとは我が好めるものゝ一なり。

たどりゆきて桶を傍に置き稍小高く土を盛りたるかこひを入ればまだふた七日のけふとて生花は墓標のまはり一ぱいに置かれて空地とては僅ばかり。櫻。桃。山吹夏水仙。其他さま〲の花々、送りし人々のこゝろざしを傳へて皆しほ〲とうつむける、茶碗の水を代へ替

なくゆらし樒を供へ仰いで墓標を眺むれば俗名を記されたる墨の色も新らしく只冷やかに立つばかり、兩側に白張りの提灯紙白々と底もはなれ、とぢ糸ふら／＼と下がりて左右に動ける、杉の木立二三本、卒塔婆をさゝへて眞直ぐに立ちたる。何といふ淋しき有様ぞや、十日程前にお家を訪ひし時はまた格別の事もなく晴れ／＼と笑顔して能く來られた。と言はれしが、いま斯くはろ／＼來りしも。能く來られたとも。のたまはず。香華を手向けたとて嬉しとものたまはず。味氣なくてハラ／＼と涙せきあへず。あの鏡の様な廻り椽も三方開らきの見晴らし佳かりし生前の書齋も今は要なく此の谷中の奥の淋しい地にひとり寂寞と眠り給ふ、想へば果敢なき人生の有様よ。富、名譽、位、いかに善美をつくす共、眞に暫時の玩弄物のみ、夕ぐも次第にとざして鐘の音尾を引き、あはれ靜に荒涼たるおもひに撲たれて暫らくは去りもやられず。蝶一羽何處よりか來りしがまた去りぬ。桃の花ひとつとりて手に載せて見ぬ、花は花なり。物いふ事もなし。去らば歸らんかな素と來し道へ、空桶下げて歩む。

○眼

毎週土曜日は家で肉鍋の會食日で其時は必ずポチ（犬）にも別に肉を買つてやる。眼といふのは即ち其肉を見る時のポチの眼付きである。何といはう、實に熱心な眼色である。人間がいかにほしい物や戀しい物を見る時でもあれ程に見つめて居る事はあるまじとおもふ。

弟が火箸で一片の肉をはさんで上の方へ擧げて居るとポチは精一ぱい上は向きになつてそれを取るべく、をどり上るやら廻るやら足を出すやら千態萬様、身をつくしてつとむる有様を見る度び、一種憐れな感じと一種尊い感じとに撲たれたのである、憐れとはいかに、あゝ犬である、さすが犬である、只肉ほしさに他は何にも知らぬのである。若しこれを危險な場所に置いたならかれは一片の肉のため其命をも落すであらう。

尊い感じとはいかに。學事にせよ望みにせよ人間に若しあれ丈けの熱心あらば必らず立派に成功するのであらう。」



讀者文藝投書歡迎（締切七月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以內）

▲小說（二十枚以內）

▲一口噺（一人一題）

▲小品文（十枚以內）

◎和歌、短文、一口噺は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲一口噺は入賞參拾錢
▲小說と小品文は詮考の上相當の謝禮を呈す

每月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊 增刊四回……一、五、九、十一月價格同一）	
郵稅 一冊	二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十三圓	四十五圓
一等	……	十九圓五十錢	三十八圓
二等	五十五錢	十六圓五十錢	三十二圓
三等	四十七錢	十三圓五十錢	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十二年七月一日發行 第八卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

藤井繁一譯（新刊）

マクスオーレル著

「女殿下」

東京神田區雉子町三十二番地
振替口座第七九九五番
玄黄社

●女性研究者の泰斗と仰がるゝ佛國の文豪マ氏の「ハー、ローヤル、ハイネス、ウーマン」は、其の觀察の機變にして深酷なる、諧謔の縱横なる、諷刺の奇抜なる、而して中に深遠なる敎訓の意を含み、又至るところ警句の應接に遑あらざる等、古今有數の名著と稱せらる、本書は明晰快暢なる言文一致體もて其全部を譯せる者也。

裝釘雅美四六判
本文三百四十八頁
正價七十錢
郵稅八錢
●賣捌各書林

—全編四十五章目次下の如し—

▲久遠の女性……▲女性の感化……▲戀する男子へ……▲結婚せる婦人へ……▲戀する人の恐るべき誘惑
▲良人操縱法……▲戀の手くだ……▲女嫌ひ……▲佛蘭西の細君氣質▲男子の戀と女子の戀……
▲英國細君氣質…▲大貌列顛刀自氣質▲亞米利加女……▲亞米利加の夫：▲佛蘭西の戀と英吉利の戀……
婦人政治……▲アングロ、サクソン女の自由……▲自分の嫌ひの女▲女は男の如何なる點を好むか
▲英米女性の相違▲自分の好きな女▲世界第一の美人▲姑氣質……▲感謝は愛情を生ずるか……
▲蓮葉女と街娼女▲圓滿なる貴女…▲母親氣質と祖母氣質▲結婚は男子を助くるか……
▲未亡人氣質……▲老處女氣質……▲看護婦氣質……▲佛國母親氣質……▲雌の鴛鳥と雄の鴛鳥……
▲女は夫の意を迎ふる爲に裝ふか……▲善き女の缺點……▲情界私言……▲嫉妬は眞愛より生ずるか……

●原書に對するデーリー、テレグラフ評　著者の機智と洞察とは眞に女性研究者のオーソリチーたる名に背かず……

●同リテラリー、ヲールド評　津々として盡きざる興味、應接に暇あらざる警句、時に深遠なる敎訓あり……

●同ウエスターン、マーキユリー評　諸君は女殿下を讀めるか、若し未だとならば諸君尚ほ爲に生くべき或物を有す……

笹川漁郎譯（四版）

社交談話法

價四十錢
郵稅四錢

窪田空穗著

新派短歌評釋 附作法

價四十五錢
郵稅六錢

女（後付の一）

女（後付の二）

巖谷小波君序
岡野知十君
伊藤松宇君編

新編 蕪村几董附合集

▲兩翁眞蹟寫眞版數葉挿入▲

今や俳諧の研究は初期の礫發句時代を去りて第二期の連句全盛時代とはなれり此連句研究に最も好適なる蕪村几董の附合集は編者が多年の渉獵と非常の苦心とを以て拾集したる一大模範的參考書にして苟も斯道に遊ぶの士は必ず座右に一本を供へ高雅なる連俳の妙趣を味ふべきなり

全一册洋裝四六判
紙數百八十六頁
正價金參拾錢
郵税六錢

第二高等學校教授
岡澤鉦次郎君著

教科參考 日本文典要義

全一册

此書は、日本語の特性と東西百家の語學書言語學書との研究によりて、最實用的にして、最科學的にして何人も爭ふべからざる、語の分類と文の分解法とを開示して、日本文典の要旨を明にし、古來日本語の研究に於いて動かすべからざるものと認められたる一切の障碍を、其根本より抜き、人をして晴天白日を睹るが如くならしめたるものにして一般の教師、や、進歩したる學生、及び、國語學に志ありて適當なる案内書なきに苦みたる一般人士の參考書として無上の價値を有する羅針盤たるべく、之を階梯として進まば挺身して深遠なる國語界に入るも望洋の歎きなかるべく、內外國語の比較研究に從ふも順風に帆懸くる思ひあるべし。時世に後れざらむと欲する者は、速にこの書を讀んで語學界前途の進運をトせらるべし。

洋製菊判上製
紙數約四百五十頁
正價一圓拾錢
小包料八錢

東京本町 博文館

女（後付の三）

ハリス博士　飯田三省君　吉岡哲夫君序文

英語發音綴字學

正價金參拾錢——郵稅金六錢

紙數百七十頁
全一冊洋裝四六判

實科高等女學校
岡山縣立工業學校講師
松田利七君著

英語を學ぶものゝ最も難しとするは發音也、然も母音に就ては概ね相當の注意を怠らずと雖も、子音に對しては頗る注意の嚴ならざるものあり、そは素より何れも輕重し得ざるや明白にして、相互その音錯綜して初めて全し、苟も歐米にありては綴字發音の如何は直ちに以てその人格品性をトすと稱さる、故にそが學校家庭に於ける用意の極めて嚴格なる、蓋し正確なる言語文字は子女敎育の一大要件なりとす、現今の時勢と雖も、未だ理論と實例をかねたる恰好の書を見當らず、著者玆に見るあり在米中の實驗に鑑み諸書を渉獵編譯し更らに多くの實例を增補し本書を完成せり庶幾くば斯學に志す士の指導たらん

近刊　博文館

數學遊戯

全一冊　洋裝菊判　紙數百廿八頁

正價金拾五錢——郵稅(本號に限)四錢

七月十日發行

數學世界（第二卷第八號）臨時增刊

我が數學世界は、來る七月十日を以つて臨時增刊を發市せんとす、書や題して『數學遊戯』と云ふ、卷中錄する處は讀んで文字の如く數學の遊戯也、然り遊戯書也、時漸く夏季に入つて、心身漫ろに倦まんとす、此時に當つて遊戯の書一卷を、我が愛讀者諸兄の机邊に呈し以て炎暑の清涼劑たらしむ又た頗る其機を得たるものと云ふべからんか。然りと雖も『數學遊戯』は數學世界の臨時增刊也、我が愛讀者に高覧に供ふる遊戯書也、豈、啻だ普通の遊戯書にて可ならんや、數乃ち記する處は悉く數學應用の新説、其如何に趣味ありて、而も斯學の研究に有益なるかは、乞ふ之を發市の曉に待て！

博文館

女(後付の五)

米國藥化學士
藥劑師川崎近雄君著



●全一册洋裝四六判紙數八〇頁
●正價金拾貳錢▲郵稅貳錢

——(第三版)——

夏の夕一家團欒の食卓に研究に依て得たる自製の清涼飲料劑を上さば如何に家庭の趣味を深からしめん。又炎暑灼くが如き日來客に接したるの時先づ一盞の清涼飲料を饗すれば如何に主婦の品位と注意の周到なるかを顯はさん。本書は久しく米國藥舖にありて清涼飲料劑製法に經驗を有し亦前に京都醫科大學醫院藥局にありて助手を拜命し製劑上に就きて多年の研究を積みたる川崎近雄君が家庭及製造業者の爲め新鮮美味なる清涼飲料劑を輕便實用的に製する方法を簡明に記述したるものにして。家庭に於ては主婦の良友又營業者には好指針たる樣編述したる者なれば。趣味と實益と衛生とを兼ねたる無二の良書は本書を措て他にあらざるなり。

日本游泳術研究會師範　石橋司君校閲
早稻田大學生加藤進君向井正治君合著

最新游泳術

▲附錄‖寫眞銅版游泳術實習圖▼

全一册
—★—
洋裝四六判美本
紙數二百五十頁
正價金參拾錢
郵稅四錢

近時游泳に關する著書鮮少ならざるも多くは疊上の水練に類する杜選の書にして、殊に體育に關聯すへき生理衛生の要項の如きは殆ど其影をも存せず、向井、加藤の兩氏茲に大に視る所ありて遂に本書を著はし、汎く世の青年に最新の水練術を傳習せんとし、多年の經驗によりて得たる智識と技術とを以て懇篤に、斯術習得の順序を説述せり、加るに精密なる數多の圖解を加へ、生理の應用及水練上の衛生を評論すること、實に本書の獨特とする所なり、初學者と得技者とに論なく、必らず一本を携へて夏期の好侶伴に供せられんことを希望す。

東京博文館本町

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱君著

歌學論叢

全一册 洋裝四六判總クロース 紙數約五百五十頁 近刊

歌學論叢は、佐々木信綱氏が、數年前より、帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講せらるゝ、其研究の餘材として成れるものなり。研究の深邃考證の精細は、これを『仙覺以前の萬葉研究』『戸田茂睡』等に見るべく、見識の卓拔はこれを『萬葉集私見』『人麿と赤人』『紀貫之』『香川景樹論』等に見るべく、趣味津々汲めども盡きざるものには、『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京太夫』等あり。又『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等、未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるものなり。其他、『時勢と和歌』『歌學に就て』『上世の和歌』『歌格の研究に就て』『山家集の後に』『金槐集の終に』『近世歌人雜話』『家集のいろ〳〵』『和歌の將來』等、すべて廿編。國文和歌に興味を有する人々にとりて、必讀の好著なり。

東京 博文館（本町）

女子高等師範學校教授 文學士 下田次郎君著

女子の修養

全一册 洋裝四六判並製美本 紙數約二百五十頁 正價金廿五錢 郵稅金四錢

今や古の女子の敎へ廢れて、新しき敎へ未だ確立せず女子は日常の生活及び修德の方法に於て、その適從する所を知らざるの有樣なり。本書は此動搖の時代に在りて、女子に其執るべき道と方法とを示したるものなり。著者は我が國女子敎育の專攻家にして本書はその多年の研究と敎育上の經驗とに基きて物せられたるものなり。其所說は奇矯に失せず因循に陷らず極めて穩健中正にして文章また平易に何人もたやすく會得するを得べししかも著者の豐富なる學識と旺盛なる元氣と湧くが如き機智頓才とは他の模倣を許さゞる著者獨得のものなり。されば一度此書を手にせば遂に卷をおくこと能はずその終るの早きを惜むや必せり。切に婦人の一讀を勸む。

發兌元 本町 博文館

女（後付の七）

女學世界
第八卷第九號
（明治四十一年七月一日發行 毎月一回一日發行）
（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）

（定價金貳拾錢●郵税貳錢）